古今和歌六帖　第四

恋
恋　かたこひ　ゆめ　おもかげ　うたゝね　なみだがは　うらみ　うらみは
ないがしろ　ざうの思
【異同】うらみは―うらみす（御・桂・大）

祝
いはひ　わかな　つゑ　かざし
【異同】ナシ

別
わかれ　ぬさ　たむけ　たび　かなしび
【異同】ナシ

ながうた　こなが歌　ふるきなが歌　せどうか
【異同】ナシ

こひ
一九七二　わがこひはゆくゑもしらずはてもなしあふをかぎりとおもふばかりぞ

【異同】ナシ
【現代語訳】私の恋はどうなるかわからず、行き着く果てもわからない。逢瀬をもつこと、それをこの恋の終着点と思うだけだ。
【語句】◎こひ　恋。本来は目の前にいない人や事物に特別の愛情を感じて求め慕うことであるが、平安期以降は特に異性に対する恋愛感情を指すようになった。古今集において四季と恋が二大部立となっているように、和歌では四季歌とともに恋歌が多く詠まれた。第四帖では、「恋」の大項目の中に、「こひ」「かたこひ」「ゆめ」と

いった小項目が置かれている。○ゆくゑもしらず　行方（ゆくへ）も知らず。どうなるかわからない。○はてもなし　行き着く果てがない。「思ひやる心のほどは果てもなし風のいたらぬくまは多かり」（忠岑集・一〇〇）。○あふをかぎりと　逢瀬をもつことが終着点であると。「かぎり」は時間・空間・程度における限界、極限をいう。「ものごとに秋ぞ悲しきもみぢつつうつろひゆくをかぎりと思へば」（古今集・一八七）。恋とは本来目の前にいない対象への思いであるから、逢瀬をもつことを行き着く果て、いわばゴールととらえたものか。

【所載】古今集・恋二・六一一／金玉集・四二／和漢朗詠集・七八七／躬恒集Ⅰ・二九九／躬恒集Ⅱ・一六四／躬恒集Ⅲ・三二三／三十人撰・二九／三十六人撰・二九／深窓秘抄・六三／古来風体抄・二七六／和歌色葉・三〇

一九七三　わがこひはむなしきそらにみちぬらしおもひやれども行かたもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】私の恋は虚空に充満してしまったようだ。苦しい思いを追いやっても、その思いのやり所がなく、心が晴れないのだもの。

【語句】○むなしきそら　虚空の訓読語と解した。「山びこの声のまにまにとひゆかばむなしきそらにゆきやかへらん」（後撰集・九六九）。○みちぬらし　充満してしまったようだ。「春過ぎて夏来たるらし白栲（しろたへ）の衣干したり天の香具山」（万葉集・二八）のように、「らし」は、根拠を示し、現実の状況を推定する助動詞。当該歌では下句が根拠となっており、苦しい思いを追いやろうとしてもできないことから、恋心が虚空全体に満ちてしまったと推定している。○おもひやれども　「おもひやる」は、重苦しい気持ちを追いやる意。「思ひやる方もしられず苦しきは心まどひのつねにやあるらむ」（後撰集・一二八六）。○行かたもなし　行く方もなし。やりどころがない、心の晴らしようがない。「夏草の上はしげれる沼水の行く方のなきわが心かな」（古今集・四六二）。

【所載】古今集・恋一・四八八／新撰和歌・二三〇／金玉集・四〇／俊頼髄脳・四三、一六七／古来風体抄・二七二／悦目抄・四八

【参考】恋する気持ちを、まるで実体があるかのように捉えた歌。

一九七四　いさやまだこひてふこともしらなくにこやそなるらむいこそねられね

【異同】ナシ
【現代語訳】さあ、どうしたことか。まだ恋ということも知らないのに、これがその恋というものなのだろうか。眠ることもできない。
【語句】〇いさや　「いさ」に終助詞「や」が付いた語。さあ、わからない。「いさやまだ人の心も白露のおくにもとにも袖のみぞひつ」（後撰集・九六四）。〇しらなくに　知らないのに。「わが宿の嘆きは春も知らなくに何にか花をくらべても見む」（後撰集・九三）。〇いこそねられね　眠ることができない。「寝（い）」は眠ることを表す名詞。眠る意を表す動詞「寝（ぬ）」とともに、「寝（い）を寝（ぬ）」という形で用いられることが多い。「思ふことありとはなしに久方の月夜となればいこそねられね」（貫之集・三八六）。
【所載】拾遺集・恋四・八九六

一九七五　わがこひはひとしりねとやとよめとやとよむらんとやしらばしれとや

【異同】ナシ
【現代語訳】私の恋は、人が知ってしまえというのだろうか、騒げというのだろうか、騒ぐだろうというのか、人が知るなら知れというのだろうか。
【語句】〇しりねとや　知りねとや。「ね」は完了の助動詞「ぬ」の命令形。「とや」は、……というのであろうか、の意。「恋ひしなば恋もしねとや玉梓の道ゆき人にことづてもなき」（拾遺集・九三七）。〇とよめとや　「とよめ」は、人が騒ぐ意の四段活用動詞「とよむ」の命令形。「秋なれば山とよむまで鳴く鹿に我おとらめやひとり寝る夜は」（古今集・五八二）。〇とよむらんとや　騒ぐだろうというのか。「らん」は現在推量と解した。〇しらばしれ　知るなら知れ。「知らば知れ何をまくらにたづぬらんあやなしひとよゆめなとはれそ」（輔親集・五九）。
【所載】ナシ
【参考】底本には傍記があるが、語義不明となるため現代語訳には反映させなかった。恋心が募るあまり、人に知られたり騒がれたりしてもいいのか、と自分に言い聞かせている歌か。

一九七六　こひしとはいはじと思ふきのふけふこゝろよはくもなりぬべきかな

【異同】いはしと思ふ―いはしと思ふに（御・桂・大）
【現代語訳】恋しいとは言うまいと思うのに、この頃は意志が弱くも、その決心を守りきれなくなってしまいそうなことだよ。
【語句】○いはじと思ふ　傍記「ヲ」をとり、「思ふを」と解した。「を」は逆接の接続助詞。言うまいと思うのに。○きのふけふ　昨日今日。近頃。「言ひそめぬほどはなかなかありにしをしづ心なき昨日今日かな」（信明集・一二三）。○こころよはくも　心弱くも。意志の弱いこと。具体的には「恋しいとは言うまい」という決心を守りきれないこと。「つれなきを今は恋ひじと思へども心弱くも落つる涙か」（古今集・八〇九）。○なりぬべきかな　なってしまいそうなことだよ。「ぬべき」は、いわゆる強意あるいは確述の助動詞「ぬ」終止形＋推量の助動詞「べし」の連体形。「つれなく侍りける人に／恋ひわびて死ぬてふことはまだなきを世のためしにもなりぬべきかな」（後撰集・一〇三六・ただみね）。
【所載】万代集・二二八六

〔以上五首担当　諸井彩子〕

一九七七　身をもかつおもふものからこひといへばもゆるなかにもいるこゝろかな

【異同】ナシ
【現代語訳】わが身をも一方では大事と思うものの、「恋」というと、燃える「火」の中にも飛び込むような心境でありますよ。
【語句】○身をもかつおもふものから　わが身をも一方では思うものの。「かつ」は、ある行為が他の行為と並んで存在することを表す語。一方では。「心をもかつはわりなしと思ふかないつのまにかは燃えはかへらむ」（元真集・二四八）。「ものから」は逆接の接続助詞。……ではあるものの、の意。○こひといへば　恋というと。「恋」の「ひ」に「火」を掛ける。○もゆるなかにもいるこゝろかな　燃える火の中にも飛び込むような心境であるよ。「おもひをばいかに知ればか夏虫の燃ゆる中にも入りまどふらん」（陽成院歌合・三）。「燃ゆる」は「火」の縁語。
【所載】興風集Ⅰ・三一／興風集Ⅱ・二六／亭子院歌合・五二

一九七八　こひてへばしらぬみちにもあらなくにあやしくまどふわがこゝろかな

【異同】ナシ
【現代語訳】恋、というと、知らない道でもないのに（まるで知らない道であるかのように）、不思議と迷う我が心であるよ。
【語句】〇こひてへば　恋、というと。「てへ」は「といふ」の已然形「といへ」の変化した語。「君てへば見まれ見ずまれ富士の嶺のめづらしげなくもゆるわが恋」（古今集・六八〇）。〇あらなくに　……ではないのに。「なく」は助動詞「ず」のいわゆるク語法。「なくに」は、『あゆひ抄』でいう「反（か）へるなくに」の用法で、文中に置かれ「……でないのに、まるで……のように」という形で下に続く。和歌で用いられることが多い。「わが恋はしらぬ山ぢにあらなくに迷（まど）ふ心ぞわびしかりける」（古今集・五九七）。
【所載】ナシ

一九七九　わりなくぞねてもさめてもこひらるゝ心をいづちやらばわすれん

【異同】ナシ
【現代語訳】どうしようもなく、寝ても覚めても恋しく思われる。心をどこへやったらあの人のことを忘れられるのだろうか。
【語句】〇わりなくぞ　道理がないほどに。どうしようもなく。「わりなくも慰めがたき心かなここそは君が同じことなれ」（和泉式部続集・八九）。〇こひらるゝ　恋しく思われる。「らるる」は自発の助動詞「らる」の連体形。
【所載】古今集・恋二・五七〇／新撰万葉集・四六八／寛平御時后宮歌合・一七二

一九八〇　いかばかりこひてふやまのふかければ（シゲヽレバ）いりといりぬるひとまどふらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】いったいどのくらい、恋という山が深いというので、そこに入った人がみな迷うのだろうか。
【語句】〇いかばかり　どれほど。いったいどのくらい。「いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉う

れしからまし」（古今集・七一二）。〇いりといりぬる　入った人がみな。同じ動詞を重ねて強調を表す。「我を君おもひつくばの山の端に入りと入りなばかへらざらなむ」（友則集・七二）。
【所載】万代集・一七六三

一九八一　こひしなんのちはなにせんいけるひのためこそ人は見まくほしけれオホトシノモヽヨイ

【異同】ナシ　「オホトシノモヽヨィ」ハカタカナ小字デ記ス。
【現代語訳】恋い死にした後では何になりましょう。生きている日のためにこそ、あなたに逢いたいというのに。
【語句】〇なにせん　何になろうか、いや何にもならない。何の役にも立たない。「玉敷ける家もなにせん八重葎おほへる小屋も妹と居りてば」（万葉集・二八三六〈旧二八二五〉）。〇みまくほしけれ　逢いたいというのに。「まくほしけれ」は、「まほし」の古形「まくほし」の已然形。「こそ」の係り結びによって逆接の意をこめる。「よそにのみまつはかなき住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ」（後撰集・六五三）。
【所載】拾遺抄・恋上・二四七／拾遺集・恋一・六八五／万葉集・五六三（旧五六〇）孤悲死牟　後者何為牟生日之　為社妹乎　欲見為礼　コヒシナムノチハナニセムイケルヒノタメコソイモヲミマクホリスレ　こひしなむのちはなにせむいけるひのためこそいもをみまくほりすれ／万葉集・二五九七（旧二五九二）恋死　後何為吾命　生日社　見幕欲為礼　コヒシナムノチハナニセムワガイノチイケルヒニコソミマクホリスレ（ホシケレ）　こひしなむのちはなにせむわがいのちいけるひにこそみまくほりすれ／人麿集Ⅱ・四五一／人麿集Ⅲ・四〇八／俊頼髄脳・一二七／古来風体抄・五二
【参考】作者名「オホトシノモヽヨィ」とあるが、所載欄に見える拾遺集、拾遺抄、万葉集五六三（旧五六〇）は作者を大伴百世とする。

〔以上五首担当　諸井〕

さかのうへの大娘或本

一九八二　よのなかのくるしきものにありけらしこひにたへずていのちしぬべし（ク）

【異同】ナシ
【現代語訳】（恋というものは）この世の中における苦しいものであったようだ。恋する気持ちに耐えられずに

死んでしまうに違いない。
【語句】〇よのなかのくるしきもの　この世の中における苦しいもの。〇ありけらし　……であったようだ。「けらし」は、過去の助動詞「けり」の連体形に推定の助動詞「らし」のついた「けるらし」の音韻変化。確実な根拠に基づいて過去の状態を推定する。「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも」（古今集・五〇一）。〇こひにたへずて　恋しい思いに耐えきれないで。「ずて」は、打消の助動詞「ず」に接続助詞「て」のついたもの。〇いのちしぬべし　命が死んでしまうに違いない。「命が死ぬ」という例は、「朝霧のほのにあひ見し人ゆゑに命死ぬべく恋ひわたるかも」（万葉集・六〇二〈旧五九九〉）などに見える。
【所載】万葉集・七四一（旧七三八）世間之　苦物尓　有家良久　恋二不勝而　可死念者　ヨノナカノクルシキモノニアリケラクコヒニタヘズテシヌベクオモヘバ　よのなかしくるしきものにありけらしこひにあへずてしぬべきおもへば
【参考】作者名「さかのうへの大娘」は、所載欄の万葉集に一致する。

一九八三　こひしきにわびてたましゐいでゝ（マドヒ）いなばむなしきからのなにやのこらむ

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しさに苦しみ果てて、魂が身体から出て行ったら、むなしい抜け殻、という評判が残るだろうか。
【語句】〇わびてたましゐ　苦しみ果てて魂が。「たましゐ」は魂（たましひ）。〇いでゝいなば　出て行ったら。「年をへて住みこし里をいでていなばいとど深草野とやなりなむ」（古今集・九七一）。傍記は「まどひいなば」で、さまよいつつ出て行ってしまったら、の意。〇むなしきからのなにやのこらむ　むなしい抜け殻という名（評判）が残るだろうか。「むなしきから」は、「空蝉のむなしきからになるまでも忘れんと思ふ我ならなくに」（後撰集・八九六）のように、死骸を表す例が多いが、ここでは魂が出てしまった抜け殻の状態と解した。ありもしない評判という意味で「空（から）の名」という用例はなく、「空しき殻」と「空（から）の名」の掛詞とはしなかった。
【所載】古今集・恋二・五七一／新撰万葉集・二一九／寛平御時后宮歌合・一九〇

一九八四　あまざかる（或本キタイ）ひなともしるくしげるもりしげきこひかもながきひもなし

【異同】ナシ
【現代語訳】（あまざかる）鄙であるとはっきりとわかるほど木が生い茂る森、繁るように募る恋であることよ。和らぐ日もなく。［第五句は所載欄の万葉集に従って解した。］
【語句】○あまざかる　「鄙（ひな）」にかかる枕詞。万葉集の仮名書き例では、一例のみ「あまさがる」であるが、他十六例は「あまざかる」。所載欄の万葉集歌でも「安麻射可流（あまざかる）」とする。底本傍記は「あきたかる」で、「秋田刈る」か。○しげるもり　木が生い繁る森。「しげるもりしげき」と同音によって「繁き恋」を導く。所載欄の万葉集では「ここだくも」。○ながきひもなし　「長き日」は、「梅の花咲き散る春の長き日を見れどもあかぬ磯にもあるかも」（万葉集・四五二六〈旧四五〇二〉）のように、春の日長の表現として用いられる。当該歌の歌意には合わないため、所載欄の万葉集「なぐるひもなく」で解した。「なぐるひもなく」は、和らぐ日もない、の意。「妹を見ず越の国辺に年ふれば吾が心どの和ぐる日もなし」（万葉集・四一九七〈旧四一七三〉）。
【所載】万葉集・四〇四三（旧四〇一九）安麻射可流　比奈等毛之流久　許己太久母　之気伎孤悲可毛　奈具流日毛奈久　アマザカルヒナトモシルクココダクモシゲキコヒカモナグルヒモナク　あまざかるひなともしるくここだくもしげきこひかもなぐるひもなく

一九八五　あさゆふに見んとききさへやわぎもこがみれど見ぬごとなをこひしけん

【異同】ナシ
【現代語訳】朝晩逢えるような時までも、あなたのことが、逢っていても逢っていないかのように、やはり恋しく思われるだろうか。
【語句】○あさゆふに見んとききさへや　朝晩逢えるような時までも。「まそ鏡手に取り持ちてあささな見む時さへや恋のしげけむ」（万葉集・二六四一〈旧二六三三〉）。○みれど見ぬごと　逢っても逢っていないかのように。「ごと」は、……の如く、の意。○なをこひしけん　猶（なほ）恋しけん。形容詞「恋し」の上代の未然形「恋しけ」に推量の助動詞「む」がついた形。「梓弓引き豊国の鏡山見ずひさならば恋しけむかも」（万葉集・三一四〈旧三一一〉）。「恋」は本来、目の前にない対象に惹かれる気持ちのことであるから、朝晩逢える状態になると「恋しい」という気持ちではなくなるはずであるが、まるで逢っていないかのように募るであろう恋心を表現したもの。

【所載】万葉集・七四八（旧七四五）朝夕二　将見時左倍也　吾妹之　雖見如不見　由恋四家武　アサユフニミムトキサヘヤワギモコガミレドミヌゴトナホコヒシケム　あさよひにみむときさへやわぎもこがみれどみぬごとなほこほしけむ

一九八六　こひしきにしぬるものとはきかねどもよのためしにもなりぬべきかな　いせ或本

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しさのあまり死んでしまうものだとは聞かないけれども、（私が死んでしまって）世の先例となるにちがいないよ。
【語句】○よのためしにも　世の先例にも。「よのためし」は、先例となって人々に語り継がれていくであろう事柄。「いさやまだ恋に死ぬてふこともなし我をや後のためしにはせむ」（玉葉集・一七一四・順）。
【所載】後撰集・恋六・一〇三六／続後撰集・恋二・七一三／伊勢集Ⅰ・四六四／伊勢集Ⅱ・三五七／恵慶集・二九六／三十人撰・七二／歌苑連署事書・三七
【参考】作者名「いせ」とあるが、後撰集は作者を忠岑とする（ただし忠岑集にはない）。続後撰集では伊勢の歌とし、伊勢集と恵慶集にも見えるが、いずれも増補歌とされる部分にある。

〔以上五首担当　諸井〕

一九八七　秋の夜のちよをひとよになずらへてやちよしねなばやこひはさめなん

【異同】やちよしねなはや―やちよしねなは（御・桂・大）
【現代語訳】もし仮に長い秋の夜の千夜を一夜と数えて、八千夜共寝をしたら、この恋は冷めるのだろうか。（いや、冷めるはずがない。）
【語句】○ちよをひとよになずらへて　千夜を一夜になぞらえて。秋の夜は長いものとされていた。その長い秋の夜の千夜分の長さを一晩分として。「秋の夜を長しと言へど積もりにし恋を尽くせば短かりけり」（万葉集・二三〇七〈旧二三〇三〉）。○やちよしねなばや　八千夜し寝なばや。八千夜共寝をしたなら。「な」は完了の助動詞の未然形、「ば」は接続助詞で順接仮定条件の意、「や」は疑問・反語の係助詞。秋の夜を無数に重ねる

ほど長い一夜を願う歌には「……しきたへの　衣手交へて　自妻と　頼める今夜　秋の夜の　百夜の長さ　ありこせぬかも……」（万葉集・五四九〈旧五四六〉）などがある。〇こひはさめなん　この恋が冷めるだろうか、いや冷めるはずがない。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形、「ん」は推量の助動詞「む」の連体形。

【所載】伊勢物語・二十二段・四四

【参考】伊勢物語（二十二段）では、絶えてしまった男女が再び逢った折に男が詠んだもので、第五句が「あく時のあらむ」となっており、満足するときがあるでしょうかという意となる。女は「秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむ」と返している。

一九八八　なぬかゆくはまのまさごとわがこひといづれまされりおきつしらなみ　やをかとも　かさのらう女ある本　マモリ

【異同】ナシ

【現代語訳】七日もかかって通って行くほど広い浜の砂粒と、私の恋心と、どちらが多いでしょうか、沖の白波よ。

【語句】〇なぬかゆくはまのまさご　通過するのに七日かかる浜の砂。「はまのまさご」は海岸の砂粒。浜には多くの砂粒があることから、数が多い喩えとして用いられる。「なぬか」は七日。「なぬかゆく」という表現は主に産養の七日夜の祝いに関係して詠まれる。「七日ゆく浜の真砂をかすかにて九日さへも数へつるかな」（和泉式部集・五〇一、詞書「安芸守の婦、子うみたる九日の日、ちごの衣やるとて」）。なお、「やをか」という傍記があるが、「やほか（八百日）」か。「やほかゆく」で長い日数を経て通過することをいう。「はまのまさご」に掛かることを考えると、本来は「やほかゆく」であると思われるが、ここでは現行本文に従った。〇わがこひといづれまされり　自分の恋心と浜の砂粒と、どちらの量がまさっているか、つまり、自分の恋心が浜の砂の量がよりも多い、という意。この趣旨の歌は「わが恋は詠むともつきじありそ海の浜の真砂はよみつくすとも」（古今集・仮名序）があげられる。〇おきつしらなみ　沖に立つ波。波に問いかける形をとりつつ、己が恋する相手に訴えかけている。

【所載】拾遺抄・恋上・三〇〇／拾遺集・恋四・八八九／万葉集・五九九（旧五九六）八百日往　浜之沙毛吾恋二　豈不益歟　奥嶋守　ヤホカユクハマノマサゴモワガコヒニアニマサラメヤオキツシマモリ　やほかゆくはまのまなごもあがこひにあにまさらじかおきつしまもり／新撰和歌・二三二／綺語抄・二四三／奥儀抄・

二六〇／和歌初学抄・一〇五／古来風体抄・五三／和歌色葉・三五九
【参考】作者名「かさのらう女」は、所載欄の万葉集に「笠女郎贈大伴宿祢家持歌廿四首」とあり、一致する。ただし、拾遺抄・拾遺集では「よみ人しらず」とされる。

一九八九　かくのごとこひつゝあらずはいはきにもならましものをものおもはずして

【異同】ナシ
【現代語訳】これほどまで恋しく思い続けていないで、いっそ情のない岩木になる方がましだ。こんな物思いもしないで。
【語句】〇こひつつあらずは　恋しく思い続けていないで。「ずは」は、打消の助動詞「ず」の連用形に、係助詞「は」がついた形で、「……ないで」の意。「かくばかり恋ひつつあらずは高山の岩根しまきて死なましものを」（万葉集・八六）。〇いはきにもならましものを　いっそ岩木にでもなる方がましだ。岩木は非情なもの、感情のないものの喩え。「あはれなる御心ざまを、岩木ならねば思ほし知る」（源氏物語・東屋）。「ましものを」は「ずは」と呼応して、「……の方がましだ」という意を表す。
【所載】万葉集・七二五（旧七二二）如是許　恋乍不有者　石木二毛　成益物乎　物不思四手　カクバカリコヒツツアラズハイハキニモナラマシモノヲモノオモハズシテ　かくばかりこひつつあらずはいはきにもならましものをものもはずして
【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集には「大伴宿祢家持歌一首」とある。

一九九〇　こゝろにはちへにおもへどひとにいはぬわがこひづまを見ん（ル）よしもがなカサノニラウ

【異同】ナシ　「カサノニラウ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】心では幾重にも思っているけれども、人に言わない私の恋しい人を見るすべがあってほしいものだ。
【語句】〇ちへにおもへど　千重に思へど。幾重にも思っているけれども。「心には千重に百重に思へれど人目を多み妹に逢はぬかも」（万葉集・二九二二〈旧二九一〇〉）。〇こひづま　恋しい人。男女のどちらにも用いるか。「……道のへの　いちしの花の　いちしろく　人皆知りぬ　我が恋妻は……」（万葉集・二四八四〈旧二四八〇〉）。

【所載】玉葉集・恋一・一二六六／万葉集・二三七五（旧二三七一）心　千遍雖念　人不云　吾恋孋　見依鴨
　ココロニハチヘニオモヘドヒトニイハヌワガコヒツマヲミルヨシモガモ　こころにはちへにおもへどひとにいはぬあがこひづまをみむよしもがも／人麿集Ⅲ・三八九

一九九一　こひはみなさま〴〵ありときくなへにをかのしゝとぞねはなかれける

【異同】をかのしゝとそ―をのかしゝとそ（大）
【現代語訳】恋は総じてさまざまであると聞くにつけても、丘の鹿が声をあげて鳴くように、私もしゃくり上げて泣いてしまうのだよ。
【語句】〇きくなへに　聞くにつけて。「なへ」は……するとともに。……するや否や。「雁がねの来鳴きしなへに唐衣竜田の山はもみちそめたり」（万葉集・二一九八〈旧二一九四〉）。〇をかのしゝとぞねはなかれける　をかのししとぞ音は泣かれける。丘の鹿が声をあげて鳴くように、私もしゃくり上げて泣いてしまうのだよ。「をかのしし」は、用例がないが丘の鹿か。「高山の峰行くししの友多み袖振らず来ぬ忘ると思ふな」（万葉集・二四九八〈旧二四九三〉）。「ねはなかれける」は声に出して泣くこと。「とぞねはなかれける」という形は「あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく」（古今集・一五〇）のように「……と声を上げて泣く」という意味で用いる。ここでは人の泣き声である「しし」と掛けているか。「ししと泣く」でしゃくりあげて泣く様。『……山に入り立ちては、いみじくもののおぼえはべること。なでふ御住まひなり』とて、ししと泣く」（蜻蛉日記・中巻）。異同の「をのかしし」は「おのがじし」か。それぞれ、めいめいという意。その場合、恋は様々あると聞くにつけて、恋する人それぞれがしゃくりあげて泣くことだという解釈になり、こちらの方が意味が通る。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　山村英理子〕

一九九二　こひしさはねぬになぐさむともなきにあやしくあはぬめをもみるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しく想う気持ちは、寝ないことによって心が晴れる、というわけでもないのに、不思議に眠れ

ないものだなあ。（あなたに）逢えない辛い目をみるものだなあ。
【語句】〇ねぬになぐさむ　寝ぬに慰む。寝ないことによって心が晴れる。「慰（なぐさ）む」は、物思いの心が晴れる、気がまぎれる、の意。〇あはぬめ　眠らない意の「合はぬ目」と「（恋しい人に）逢はぬ目」の掛詞。「鹿の音も聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな」（蜻蛉日記・七・兼家）。
【所載】後撰集・恋二・六七一／能宣集Ⅰ・二七八
【参考】所載欄の後撰集は作者を源浮とする。

一九九三　こひ〳〵てひとこひ〳〵にこひしなばもえんほのをもこひのかやせん（にキミ）（ケブリ）

【異同】ナシ
【現代語訳】恋い慕い続けて、あなたを恋い焦がれて恋い死にをするならば、（恋い死にした我が身の）燃える炎も恋の香がするのだろうか。
【語句】〇こひ〳〵に　恋ひ恋ひに。動詞の連用形を続けて動作が繰り返す意を表す。「恋ひ恋ひ」という名詞化した語と解した。ずっと慕い続けて。〇ひとこひ〳〵に　人恋ひ恋ひに。あなたを恋い焦がれて。所載欄の和歌童蒙抄には「ひとにことごと」とある。〇こひしなば　恋ひ死なば。恋い死にをするならば。「恋ひ死ぬ」の未然形に仮定条件「ば」が続いた形。〇もえんほのをも　燃えん炎も。傍記にケブリ（煙）とあり、所載欄の和歌童蒙抄にも「けぶり」とある。「この世をものちをもいかにいかがせん燃えむ煙も燃えほぼれつつ」（能宣集・六〇）、「いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」（源氏物語・柏木・五〇一）などの用例が見られることから「煙」とあるべきかもしれないが、ここは本文のままに訳した。〇こひのかやせん　恋の香（か）やせん、か。恋（こひ）の「ひ（火）」で恋い死にをした身が燃える炎からは、「恋の香」がするのだろうか、との意か。このような表現は他に用例はなく、物語にも見当たらない。
【所載】和歌童蒙抄・三五八

一九九四　いまはゝやこひしなましをあひ見んとたのめしことぞいのちなりける

【異同】ナシ
【現代語訳】今はもうさっさと恋い死にしてしまいたいものだよ。逢いましょう、と（あなたが私に）あてに

させた言葉だけが、私の命であるのだ。
【語句】〇いまはゝや　今はさっさと。〇こひしなましを　恋ひ死なましを。恋い死にしてしまいたいものだよ。「ましを」は、反実仮想の助動詞「まし」に詠嘆・感動の助詞「を」が付いた形。〇あひみんと　逢いましようと。「夢の内にあひ見むことを頼みつつくらせる宵は寝む方もなし」（古今集・五二五）。〇たのめしことぞ　（あなたが私に）あてにさせた言葉こそが。「たのめ」は他動詞「頼む」の連用形。「頼めつつ逢はで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ」（古今集・六一四）。
【所載】古今集・恋二・六一三／深養父集Ⅰ・二四／深養父集Ⅱ・二〇／三十人撰・九〇
【参考】作者名はないが、所載欄の各集は全て作者を深養父とする。

一九九五　あひ見ずはこひしきこともなからましをとにぞ人をきくべかりける

【異同】ナシ
【現代語訳】逢うことがなかったら、恋しく思うこともなかったであろうに。噂にだけあなたのことを聞いているべきだったよ。
【語句】〇をとにぞ人を　「をと」は「音（おと）」で、噂の意。「音にのみきくの白露夜はおきて昼は思ひに絶へず消ぬべし」（古今集・五三）。
【所載】古今集・恋四・六七八

一九九六　いつはりもにつきてぞするいつよりか見ぬ人こひにひとのしにする

【異同】ナシ
【現代語訳】嘘を付くにしても、もっともらしく言うものです。いったいいつから、姿を見たこともない人を恋して、人が死ぬというのでしょうか。
【語句】〇につきてぞする　似付きてぞする。「似付く」は、よく似ていることの意。もっともらしく言う。「偽りも似付きてぞする現（うつ）しくもまこと我妹子我に恋ひめや」（万葉集・七七四〈旧七七一〉）。〇見ぬ人こひに　見たこともない人を恋して。「夢にだに見ぬ人恋ひに燃ゆる身のけぶりは空に満ちやしぬらん」（民部卿家歌合・二三）。〇ひとのしにする　人の死にする。「死にする」は「死にす」の連体形。人が死ぬというのでし

ようか。「恋するに死にするものにあらませばちたびぞ我は死にかへらまし」（拾遺集・九三五・人麻呂）。
【所載】万葉集・二五七七（旧二五七二）偽毛　似付曽為　何時従鹿　不見人恋尓　人之死為　イツハリモニツキテゾスルイヅクニ（イツヨリ）カミヌヒトゴヒニヒトノシニスル　いつはりもにつきてぞするいつよりかみぬひとごひにひとのしにせし／人麿集Ⅱ・四五〇／人麿集Ⅳ・二三〇
【参考】当該歌は人麿集にも見えるが、人麿集は平安期になって編まれた歌集であり、人麻呂が詠者であるとは必ずしも言えない。

〔以上五首担当　吉田優子〕

一九九七　こひしなばこひもしねとやたまほこのみちゆき人にことつてもせぬ

人丸ある本

【異同】ナシ
【現代語訳】恋い死ぬのなら恋い死んでしまえというのですか。あなたは道を行く人に伝言さえもしてくれないのですね。
【語句】〇こひしなばこひもしねとや　恋ひ死なば恋ひも死ねとや。恋い死ぬなら恋い死んでしまえというのか。「死な」はナ行変格活用「死ぬ」の未然形に、接続助詞の「ば」が接続したもので、順接の仮定条件。「…なら」の意。〇たまほこの　「たまほこの」は「道」にかかる枕詞。〇みちゆき人　通行人。道を行く人。〇ことつてもせぬ　言伝もせぬ。伝言さえもしない。「ことつて」は物や人に託してものごとを人に伝えること、伝言。
【所載】拾遺集・恋五・九三七／万葉集・二三七四（旧二三七〇）恋死　恋死耶　玉桙　路行人　事告兼　コヒシナバコヒモシネトヤタマホコノミチユキビトニコトモツゲケム（カネ）　こひしなばこひもしねとやたまほこのみちゆくひとのことものらなく／人麿集Ⅱ・二九一／人麿集Ⅲ・四三一
【参考】作者名「人丸」は所載欄の拾遺集に一致し、人麿集にも見えるが、万葉集では作者未詳。類歌に「恋ひ死ねとするわざならでたまほこの使ひもみえずなり行くみれば」（古今六帖・一〇九八）がある。

一九九八　ますらをのうつし心もわれはなしよるひるわかずこひしわたれば

【異同】よるひるわかす―よるひわかす（大）
【現代語訳】雄々しい男子の正気の心も私にはもうないのです。夜昼となくあなたを恋しく思い続けているので。
【語句】○ますらを　立派な男子、強く勇ましい男子。
【所載】古今六帖・第三帖「しほ」一七八八番既出
【参考】所載欄の「しほ」では、初句を「あらしほの」とする。

一九九九　としわたるまでにも人はありてふをいつのまにぞもわがこひにけるレ

【異同】ナシ
【現代語訳】年が渡っていく一年の間までも人は耐えているというのに、いつの間に私はこんなにも恋い焦がれるようになってしまったのでしょう。
【語句】○としわたる　年渡る。一年を経ること。「あらたまの年を渡りてあるが上に降りつむ雪の消えぬ白山」（古今六帖・七四七）。○人はありてふを　人は耐えているというのに。「あり」は、そのままの状態でいる意。恋人と逢えずに一年経っても、変わらずに耐えていられる人もいる、ということ。七夕伝説を意識した表現か。
【所載】万葉集・三二七八（旧三二六四）年渡　麻弖尓毛人者　有云乎　何時之間曽母　吾恋尓来　トシワタルマデニモヒトハアリトイフヲイツノマニゾモワガコヒニケル　としわたるまでにもひとはありといふをいつのまにぞもあがこひにける
【参考】所載欄の万葉集では、軽皇子が自殺したときに作った長歌の対となる反歌。当該歌の対になる長歌は古事記にも載るが、当該歌はそこには収められていない。なお、「よく渡る人は年にもありといふをいつの間にぞも我が恋ひにける」（万葉集・五二六〈旧五二三〉）という下の句が同じ類想歌がある。

二〇〇〇　わがいのちいけらんかぎりわすれめやいやひごと○にはおもひますコヒマサルイとも

【異同】ナシ
【現代語訳】私の命が生きる限り忘れることがありましょうか。いいえ、ありますまい。ますます日ごとに思いは募っても。
【語句】○忘れめや　忘れることがあるだろうか、いやあるまい。「めや」の「め」は推量の助動詞「む」の已

然形、「や」は反語を表す助詞。○いやひごとには　ますます日ごとには。「いや」は、ますますといった意の副詞。
【所載】古今六帖・第五帖「たのむる」二九五四／万葉集・五九八（旧五九五）吾命之　将全牟限　忘目八弥日異者　念益十方　ワガイノチノマタケムカギリワスレメヤイヤヒニケニハオモヒマストモ　わがいのちのまたけむかぎりわすれめやいやひにけにはおもひますとも
【参考】所載欄の万葉集に拠ると、作者は笠女郎で、大伴家持に送った和歌の一つ。第三句以下がほぼ同じ「逢はずして恋ひわたるとも忘れめやいや日にけには思ひ増すとも」（万葉集・二八九四〈旧二八八二〉）という類歌がある。

かさのらう女ある本

二〇〇一　あめつちの神もことはりなくはこそわがおもふきみにあはずしにせめ（ヒト・デ）（カサノニヨラウイ）

【異同】ナシ　「カサノニヨラウイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】天地の神にさえも道理というものがないのなら、私が思いを寄せるあなたに逢わないで死んでしまうでしょうに。（道理があるから、恋死にせずにあなたに逢えるはずです。）
【語句】○ことはりなくはこそ　理（ことわり）なくはこそ。道理というものがないのなら。「なくは」は仮定条件を表す。
【所載】万葉集・六〇八（旧六〇五）天地之　神理　無者社　吾念君尓　不相死為目　アメツチノカミモコトワリナクハコソワガオモフキミニアハヌシニセメ　あめつちのかみにことわりなくはこそあがおもふきみにあはずしにせめ
【参考】作者名「かさのらう女」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　山村〕

なかとみのらう女

二〇〇二　たゞにあひて見てばのみこそたまきはるいのちにむかふ我こひをらめ（ヤマ）

【異同】ナシ

【現代語訳】直接にあなたに逢って、姿を見ることさえできたならば、命をかけた私のこの恋心は止むことでしょうに。

【語句】○たゞにあひて見てばのみこそ　直に逢ひて見てばのみこそ。直接に逢うことができさえしたなら。「みてば」は、助動詞「つ」の未然形「て」に、仮定条件の係助詞「ば」が付いた形。「のみ」は限定の副助詞。○たまきはる　「いのち」を導く枕詞。○いのちにむかふ　命に向かふ。自動詞「向かふ」は、「……に匹敵する程の」の意。命をかけた。「千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ」（伊勢物語・九四段・一六九）。○我こひをらめ　このままでは意味不通。傍記「ヤマ」をいかし、「ヤマめ」として解した。我（わが）恋止まめ。私の恋心は止むことでしょうに。「やまめ」は第二句の「見てばのみこそ」を受けた係り結び。

【所載】万葉集・六八一（旧六七八）直相而　見而者耳社　霊剋　命向　吾恋止眼　タダニアヒテミテバノミコソタマキハルイノチニムカフワガコヒヤマメ　ただにあひてみてばのみこそたまきはるいのちにむかふあがこひやまめ／俊頼髄脳・二三九／綺語抄・三九五／袖中抄・四〇四／井蛙抄・一八九

【参考】作者名「なかとみのらう女」は、所載欄の万葉集に「中臣女郎」とあるのに一致する。所載欄の万葉集歌は、「中臣女郎の大伴宿禰家持に贈れる歌五首」（六七八〈旧六七五〉）とある内の一首。また万葉集には、「まそ鏡ただ目に君を見てばこそ命に向かふ吾が恋止まめ」（二九九一〈旧二九七九〉）という作者不明の類似歌がある。

やかもちぁる本

二〇〇三　こひしなんそれもおなじななにせんに人め人事ふたみわがせむ（イ）

【異同】ナシ

【現代語訳】恋い死にをするなら、それも同じことだよ。どうして、人目や噂を私がうるさく思ったりしようか。いや、そんなこと思いはしない。

【語句】○こひしなん　恋い死なん。「恋い死ぬ」は、恋い焦がれて死ぬこと。恋い死にをするなのならば。○それもおなじな　それも同じな。それも同じことだ。逢えない今の辛さも、恋い焦がれて死ぬことも、辛いという点では同じだ、という意。○なにせんに　何せんに。反語。どうして……か、いや……ない。○人め人事　人目人言（ごと）。人の見る目や人のする噂。○ふたみわがせむ　意味不通のため、「ふたみ」を所載欄万葉集に拠って「言痛（こちた）み」と解し、「言痛み我がせむ」として現代語訳をした。「言痛み」は、形容詞「言痛

し」の語幹に接尾語「み」のついた形。私がうるさく思ったりしようか。「人言はまこと言痛くなりぬともそこに障らむ我にあらなくに」（万葉集・二八九八〈旧二八八六〉）。
【所載】万葉集七五一（旧七四八）恋死六　其毛同曽　奈何為二　人目他言　辞痛吾将為　コヒシナムソレモオナジゾナニセムニ（イカニシテ）ヒトメヒトゴトコチタクワレセム　こひしなむそこもおやじぞなにせむにひとめひとごとこちたみわれせむ
【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集に一致する。所載欄の万葉集歌は、七四四番（旧七四一番）から続く、大伴家持が坂上大嬢に贈った一五首の内の一首。

二〇〇四　おもひたえわびにしものをなか〳〵になにゝすべ（ミツ）なくあひみそめけん

【異同】ナシ
【現代語訳】関係が絶えて、つらい思いでいたのに、なまじっか、どうしようもなく、（また）逢い初めたのだろう。
【語句】〇おもひたえわびにしものを　思ひ絶えわびにしものを。恋愛関係が絶えてつらい思いでいたのに。「ものを」は、形式名詞「もの」と間投助詞「を」との複合語で、逆接の確定条件を表す。〇なか〳〵に　なまじっか。性懲りもなく。結句「あひみそめけん」に続くと解した。〇すべなく　術なく。「術なし」の連用形。どうしようもなく。〇あひみそめけん　逢ひ見初めけん。逢い初めたのだろう。
【所載】続古今集・恋四・一三〇七／万葉集七五三（旧七五〇）念絶　和備西物尾　中中尓　奈何辛苦　相見始兼　オモヒタエワビニシモノヲナカナカニナニカクルシクアヒミソメケム　おもひたえわびにしものをなかなかになにかくるしくあひみそめけむ
【参考】作者名はないが、所載欄の諸文献では大伴家持とする。

二〇〇五　こひしとはたがなづけゝんことのはぞしぬとぞたゞにいふべかりける（イヒソメシ）フカヤフィ

【異同】ナシ　「フカヤフイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】（この気持ちのことを）「恋し」とはいうのは、いったい誰が名付けた言葉なのか。（「恋し」などと言っておらずに）「死ぬ」と直接に言うべきであったよ。

【語句】○こひしとはたがなづけゝん　恋しとは誰が名付けけん。この気持ちを「恋し」というのは、いつたい誰が名付けたのか。「恋死（こひし）」を響かせる。○しぬとぞたゞに　死ぬとぞ直に。死ぬ、と直接に。「たゞに」は、直接に、の意。○いふべかりける　言ふべかりける。言うべきであったよ。「べかりける」は、当然のことを今、改めて悟ったというような場合に用いる。
【所載】古今集・恋四・六九八／深養父集Ⅰ・三〇
【参考】作者名「フカヤフイ」は、所載欄の諸文献に一致する。

二〇〇六　あひ見てはいくかもへぬをいかばかりくるひにくるひおもほゆるかも

【異同】大久保本ハ平仮名細字デ書ク
【現代語訳】逢ってから、幾日も経たないのに、どれほど狂おしく狂おしく思われることか。
【語句】○あひ見ては　逢ひ見ては。逢ってののちは。○いくかもへぬを　幾日も経ぬを。幾日も経ないのに。○いかばかり　如何ばかり。どれくらい。○くるひにくるひ　狂ひに狂ひ。「狂ひ」は心が乱れる、正気を失うの意。格助詞「に」を挟んで同じ動詞を繰り返すことで、程度の甚だしいことを強調する。非常に狂おしい様。「狂ひ」に「来る日」を響かせる。また、「来る日」と「幾日（いくか）」は縁語。
【所載】万葉集七五四（旧七五一）　相見而者　幾日毛不経乎　幾許久毛　久流比尓久流必　所念鴨　アヒミテハイクカモヘヌヲココバクモクルヒニクルヒオモホユルカモ　あひみてはいくかもへぬをここだくもくるひにくるひおもほゆるかも
【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集では大伴家持とする。

〔以上五首担当　吉田〕

二〇〇七　あひ見てばしばしはこひはなぎなんをおもへどいよ〳〵こひまさりけりヤカモチィ

【異同】なきなんを―なきなんと（大）　「ヤカモチィ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】逢ったなら少しの間は恋しさも静まるだろうに、そう思うけれどますます恋しさが募ったことだ。
【語句】○こひはなぎなんを　恋は和ぎなんを。恋しさは静まるだろうに。「は」は、取り立てて強示する意の係助詞。「和ぐ」は、和らぐ、静まる、穏やかになるという意。「うつせみは恋を繁みと……見むごとに心和ぎむ

と……見るごとに思ひは止まず恋し繁しも」（万葉集・四二〇九〈旧四一八五〉）。傍記の「と」により解釈した方が、「恋しさが静まるだろうと」という訳になり、下への続きがなめらかになる。

【所載】万葉集・七五六（旧七五三）相見者　須臾恋者　奈木六香登　雖念弥　恋益来　アヒミテバシバシモコヒハナギムカトオモヘドイトドコヒマサリケリ　あひみてばしましもこひはなぎむかとおもへどいよよこひまさりけり

【参考】作者名「ヤカモチイ」については、所載欄の万葉集によると作者は大伴家持。なお、万葉集に、「相見ては恋慰むと人は言へど見て後にぞも恋まさりける」（二五七二〈旧二五六七〉）という類想の歌がある。

二〇〇八　よのほどもいでつゝくらくあまたゝびなればわがむねいりやくがごと

【異同】ナシ

【現代語訳】夜の間もあなたの家を出てくることが何度も度重なるので、私の胸はまるで煎り焼くようにつらい。

【語句】〇いでつゝくらくあまたゝびなれば　出でつつ来らく数多度なれば。（あなたの家を）出てくることが何度も度重なるので。「つつ」は動作の反復を表す。「来らく」は、カ変動詞「来」のク語法。〇いりやくがごと　煎り焼くように。「いりやく」は他に用例を見いだせない語だが、恋の苦しみのため、胸を煎って焼くようにつらい意、と解した。所載欄の万葉集では、「きりやくがごと」とある。

【所載】万葉集・七五八（旧七五五）夜之穂苅呂　出都追来良久　遍多数　成者吾胸　截焼如　ヨノホドロイデツツクラクアマタタビナレバワガムネキリヤクガゴト　よのほどろいでつつくらくたびまねくなればあがむねきりやくごとし

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の万葉集によると作者は大伴家持。万葉集の諸注に『遊仙窟』を踏まえると指摘されている。

二〇〇九　わがこゝろやくもわがわざをしへやしきみにこふるもわがこゝろから

【異同】わかこゝろから―我から（大）

【現代語訳】自分の心を焼くのも私自身のすること。誰が教えてくれたのか、いやあなたに恋するのも私自身の心からです。

【語句】○わがこゝろやく　我が心焼く。自分の心を焼く。我から恋の思いに苦しむ。「冬ごもり春の大野を焼く人は焼き足らぬかも我（あ）が心焼く」（万葉集・一三四〇〈旧一三三六〉）。○をしへやし　教へやし。古今六帖本行の本文によって解釈すると、「教へし」に「や」が入ったものか。誰が教えてくれたのか。所載欄の万葉集では、「はしきやし」とある。○きみにこふるもわがこゝろから　君に恋ふるも我が心から。あなたに恋するのも、誰のせいでもない私自身の心からです。万葉集に「石走る垂水の水のはしきやし君に恋ふらく我が心から」（三〇三九〈旧三〇二五〉）という下句の似た歌がある。

【所載】万葉集・三二八五（旧三二七一）我情　焼毛吾有　愛八師　君尓恋毛　我之心柄　ワガココロヤクモワレナリヨシエヤシキミニコフルモワガココロカラ　わがこころやくもわれなりはしきやしきみにこふるもわがこころから

【参考】「人をおもふ心の熾（おき）は身をぞ焼く煙立つとは見えぬものから」（新撰万葉集・二一三）という似た発想の歌がある。

二〇一〇　あひ見てはちとせやへぬるいなをかのわれやしかおもふきみまちかねて

【異同】ナシ

【現代語訳】お互いに逢ってから千年も経ってしまったのでしょうか。いや、そうではないのでしょうか。私がそう思うだけでしょうか。あなたを待ちかねて。

【語句】○いなをかの　否をかの。いや、そうではないのでしょうか。他に用例を見いだせず未詳。「を」は間投助詞、「か」は疑問の係助詞、「の」は格助詞か。所載欄の万葉集では「いなをかも」。「いなをかも」は、他に「筑波嶺に雪かも降らるいなをかもかなしき児ろが布（にの）乾さるかも」（万葉集・三三六五〈旧三三五一〉）という例がある。

【所載】万葉集・二五四四（旧二五三九）相見者　千歳八去流　否乎鴨　我哉然念　待公難尓　アヒミテハチトセヤイヌルイナヲカモワレヤシカオモフキミマチカテニ　あひみてはちとせやいぬるいなをかもわれやしかおもふきみまちかてに、三四八九（旧三四七〇）安比見弖波　千等世夜伊奴流　伊奈乎加毛　安礼也思加毛布　伎美末知我弖尓　アヒミテハチトセヤイヌルイナヲカモアレヤシカモフキミマチガテニ　あひみてはちとせやいぬるいなをかもあれやしかもふきみまちがてに／人麿集Ⅲ・四六八

【参考】万葉集には「このころはちとせや行きも過ぎぬると我や然思ふ見まく欲りかも」（六八九〈旧六八六〉）

という似た発想の歌がある。

二〇一一　人もなくふりにしさとにあるひとをめでゝやきみがこひにしにせん

【異同】ナシ
【現代語訳】住む人もなくて古びてしまった里にいる人を愛おしがって、あなたは恋い死にするのでしょうか。
【語句】〇人もなくふりにしさとにあるひと　人もなく古りにし里にある人。通って来る人もいない、旧都にいる人。〇こひにしにせん　「恋に死にせん」。恋い死にするのでしょうか。所載欄の万葉集西本願寺本では「コヒニシニセム」、新訓では「こひにしなする」とある。
【所載】万葉集・二五六五（旧二五六〇）人毛無　古郷尓　有人乎　愍久也君之　恋尓令死　ヒトモナクフリニシサトニアルヒトヲメグクヤキミガコヒニシニセム　ひともなきふりにしさとにあるひとをめぐくやきみがこひにしなする

〔以上五首担当　長戸千恵子〕

二〇一二　なぐさむる心はなしにかくてのみこひやわたらん月に日ごとに

【異同】ナシ
【現代語訳】心が紛れることは一向になくて、このように焦がれつづけてばかりいるのだろうか。毎月、毎日。
【語句】〇かくてのみこひやわたらん　このように恋いわたるばかりなのであろうか。「かくて」は、ここでは現在の心の状態をいう。「のみ」は「こひわたる」を強調する。「こひわたる」はずっと恋うること。「や」は疑問を表し、「ん」は推量の助動詞、係り結びで連体形。〇月に日ごとに　月日が過ぎていくたびごとに、の意であろう。所載欄の万葉集には「月日殊」とあり、「つきにひにけに」と訓じて、月日が経つにつれて、一層、の意。
【所載】万葉集・二六〇一（旧二五九六）名草漏　心莫二　如是耳　恋也度　月日殊　ナグサムルココロハナシニカクシノミコヒヤワタラムツキニヒニケニ　なぐさもるこころはなしにかくのみしこひやわたらむつきにひにけに／人麿集Ⅱ・四五四／人麿集Ⅳ・二三八
【参考】当該歌は人麿集にも見えるが、人麿集は平安期に編まれた家集で、内容的には人麻呂詠とは直接の関係

がない。従って人麿集所載歌であっても人麻呂詠とはいえない。

二〇一三　わがこひはしらぬやまぢにあらなくになどかこゝろのまどひけぬべき　つらゆきある本（べモ）

【異同】ナシ
【現代語訳】私の恋は、見知らぬ山道でもないのに、どうして心が迷い、消えてしまいそうなのであろうか。
【語句】〇わがこひは　「あらなくに」にかかる。〇あらなくに　ないのに。「あらず」のいわゆるク語法。〇まどひけぬべき　迷い、消えてしまいそうなのだろうか。「けぬべき」は、「消ぬべき」で、ここは疑問の「などか」を受けている。「逢はぬ夜のふる白雪と積もりなばわれさへともに消（け）ぬべきものを」（古今集・六二一）。
【所載】ナシ
【参考】古今集・恋二・五九七、および貫之集Ⅰ・五六二に、「わが恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふ心ぞわびしかりける」とあり、また躬恒集Ⅳ・二八六にも、「わが恋は知らぬ道にもあらなくにまどひわたれどあふ人もなし」というきわめてよく似た歌がある。もっとも貫之集は伝本によってかなりの異同があり、類歌としてではなく、同じ歌と認定してもよいかもしれない。

二〇一四　もゝちどりなく時あれどきみをのみこふるわがねはいつとわかれず　タエセ　サダメイ

【異同】ナシ
【現代語訳】多くの鳥が鳴く時はともかくとして、あなたをひたすら恋い慕うばかりの私の泣き声は、いつと決まっているわけではありません。いつもいつもです。
【語句】〇もゝちどり　多くの鳥。いろいろな鳥。「ももち（百千）」は数が多いことを表す。「ももちどりさへづる春はものごとにあらたまれどもわれぞふり行く」（古今集・二八）。〇なく時あれど　鳴く時は別としても。「あれど」の特殊な用法として、……は別としても、……はともかくさしおいても、の意があろうかとする。日本古典文学大系『万葉集　三』補注二四二五。「妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにぞありける」（万葉集・三六一三〈旧三五九一〉）。〇わがねは　「わが音（ね）は」であろう。あなたを慕って泣く私の声

は。○いつとわかれず　いつと判断できない。いつもいつもだ。
【所載】貫之集Ⅰ・五九一

二〇一五　あめやまぬやまのあまぐもたちゐつゝやすきそらなくきみをしぞ思ふ

【異同】やまのあまくも―山の山雲（大）
【現代語訳】雨のやまない、山の雨雲が空に浮かんで落ち着かないように、落ち着かない気持ちであなたのことを思っています。
【語句】○やまのあまぐも　山にかかっている雨雲。○たちゐつゝ　立ち居つつ。雲が空に浮かんでいるさまをいう。「春山にたちゐる雲に身をなして空なる人にあふよしもがな」（古今六帖・五二二）。上三句は「やすきそらなく」を導く序。○やすきそらなく　安定した、落ち着いた空がなく。穏やかな心でいることができない様子。
【所載】玉葉集・恋一・一三三二／貫之集Ⅰ・五九四

二〇一六　あしひきの山したゝぎついはなみのこゝろくだけて人ぞこひしき

【異同】ナシ
【現代語訳】山の下を激しく流れ、岩にぶつかって立つ波、その波が砕けるように、私の心は千々に砕け、あの人のことが恋しく思われることだ。
【語句】○あしひきの　「山」の枕詞。○山したゝぎついはなみの　山の下を奔流となって流れる水が岩にぶつかって立つ波のように。「たぎつ」は水が激しく湧きかえり、逆巻き流れる意。四段動詞。ここは連体形で「いはなみ（岩波）」にかかる。なお上三句は「くだけて」を導く序。○こゝろくだけて　千々に思い乱れるさまをいう。
【所載】新古今集・恋一・一〇六七／貫之集Ⅰ・二〇三／和歌童蒙抄・二二九
【参考】源実朝の金槐集・四四九に、「石ばしる山下たぎつ山川の心砕けて恋ひやわたらむ」という同工異曲の歌がある。

〔以上五首担当　久保木哲夫〕

かさのらう女ある本

二〇一七　こひするにしぬるものにしあらませばちたびぞわれはしにかへらまし

【異同】ナシ
【現代語訳】恋死ぬものであるとしたら、千回も私は死んで生き返るということをくりかえすのであろう。
【語句】〇こひするに　恋するに。恋をすると。〇しぬるものにしあらませば　死ぬものであるとしたら。「……せば……まし」は実際にはあり得ないことを仮定する反実仮想。「ものにし」の「し」は強め。〇ちたび　千回。〇しにかへらまし　死に返らまし。「まし」は先の「せば」に呼応して、その結果を言う。死んでは生き返ることを繰り返すであろう。
【所載】拾遺集・恋五・九三五／万葉集・六〇六（旧六〇三）念西　死為物尓　有麻世波　千遍曽吾者　死反　コヒスルニシニスルモノニアラマセバワガミハチタビシニカヘラマシ　おもひにししにするものにあらませばちたびぞわれはしにかへらまし、二三九四（旧二三九〇）恋為　死為物　有者　我身　千遍　死反　コヒヲシテ　シニスルモノニアラマセバワガミハチタビシニカヘラマシ　こひするにしにするものにあらませばあがみはちたびしにかへらまし／奈良御集・一五／人麿集Ⅰ・一八七／人麿集Ⅱ・二八〇／人麿集Ⅲ・四〇二／人麿集・Ⅳ一二五
【参考】或る本に記するとする作者名「かさのらう女」は所載欄の文献に一致しない。なお、所載欄には、第二句以下は酷似するので、初句の「こひをして」「おもひにし」「かたこひに」とあるものも含めた。

かたこひ
二〇一八　かたこひはくるしきものとみごもりの神にうれへてしらせてしかな

【異同】ナシ
【現代語訳】相手にされない片思いは苦しいものと、みごもりの神様に訴えて知らせる術がないものかしら。
【語句】◎かたこひ　片恋。こちらだけが恋慕っている恋。その苦しさを詠む。つれない相手と心を交換して、そのつらさを感じさせたい、などと詠む。双方思い合う「諸（もろ）恋」の反対。「心がへするものにもがかた恋はくるしきものと人に知らせむ」（古今集・五四〇）。〇うれへて　憂へて。心の中の思いを歎き訴えて、の意。不満を人に訴える。嘆願する。〇みごもりの神　「みごもり」は「水籠り」で、水中に潜み隠れること。

打ち明けないで胸に秘める、の意。「みごもりの神」は水に籠る神。また、相手が振り向いてくれない苦しい恋の祈りを訴える神。「ちはやふる天の岩戸を押し開き我に片寄れみごもりの神」（長能集・九二）。〇しらせてしかな　「てしかな」は「……したいものだ」。知らせたい。

【所載】ナシ

【参考】「みごもり」は万葉集には「青山の岩垣沼のみごもりに恋ひや渡らぬ逢ふよしを無み」（二七一六〈旧二七〇七〉）などと詠まれて、副詞。平安中期に「みごもりの神」という表現が現れる。

二〇一九　みごもりの神にうれへんかくばかりこひしき人を見せずとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】みごもりの神様にこの苦しさを訴えて聞いていただこう、これほど恋しい人を目近に見ることができないなんて。

【語句】〇みごもりの神　二〇一六番歌の語句欄、参考欄参照。〇うれへん　憂へん。愁訴して聞いてもらおう。「憂ふ」は心の苦しみを他者に愁訴すること。〇かくばかり　このように。これほど。〇こひしき人　自分が恋慕う人。〇見せずとおもへば　見ずと思へば。自分が恋人に目近く会えないと思うと。

【所載】古今六帖・第四帖「かたこひ」二〇二一

二〇二〇　みごもりの神しまことの神ならばわがかたこひをもろこひになせ

【異同】わかかたこひを―わかかくこひを（御）

【現代語訳】みごもりの神がまことの神であるなら、私の片思いを、あの人の心をこちらに向けさせて、相思相愛の恋にしてくださいませ。

【語句】〇みごもりの神　二〇一八番歌の語句欄、参考欄を参照。〇神しまことの神ならば　「し」は強めの助詞。上の語を強める。みごもりの神が本当の神であるならば。神に祈る表現の定型に「神ならば神」がある。「天の川苗代水にせきくだせ天下ります神ならば神」（能因集・二一一）。〇もろこひになせ　「なせ」は動詞「なす」の命令形。双方が恋するもろ恋にせよ。

【所載】ナシ

これ二首或本

二〇二一　みごもりの神にうれへんかくばかりこひしき人を見せずとおもへば

【異同】ナシ　底本ハ次ノ歌トトモニ二首ヲ一行ズツニ小字補入。行頭ニ「これ二首或本」ト小字デ記ス。
【現代語訳】みごもりの神様にこの苦しさを聞いていただこう、これほど恋しい人を私に逢わせないなんて。
【語句】〇見せずとおもへば　恋しい人に（神が）逢わせないと思うと。この第五句だけが既出の二〇一九番歌と異なる。
【所載】古今六帖・第四帖「かたこひ」二〇一九番既出

〔以上五首担当　平野由紀子〕

二〇二二　みごもりの神にとひてもきゝてしかこひつゝあはぬなにのつみぞと（ゾモ）

【異同】神にとひても―神にとひとも（大）　底本ハ一行書キデ前ノ歌トトモニ小字補入、二〇二一番歌異同欄参照。
【現代語訳】みごもりの神に問いたずねても聞きたいものです。恋い続けているのに逢えないのは、どういう罪からなのかと。
【語句】〇みごもりの神　二〇一八番歌語句欄参照。「みごもりの神」は、「かたこひ」題のはじめから続いて五首に詠み込まれている。〇とひてもきゝてしか　問いたずねても聞きたいものだ。〇こひつゝあはぬなにのつみぞと　恋い続けているのに逢瀬がかなわないのは、どういう罪を犯したからなのかと。接続助詞「つつ」は、「恋ふ」事態が継続しているのに対し、下の「あはぬ」事態という不一致が並存して、……ながら、……にかかわらず、の意。係助詞「ぞ」は、疑問語「何」とともに用いられ、問いただす意味を添える。「何ゆゑにこの世を深くいとふぞと人の問へかしやすく答へむ」（新古今集・一八二六）。
【所載】ナシ

二〇二三　はるがすみたちにし日よりいまゝでにわがこひやまずかたこひにして（ケフマ）

【異同】ナシ
【現代語訳】春霞が立った日から今までずっと、私の恋はやまない。片思いのままであって。
【語句】〇はるがすみたちにし日より　霞がたなびき春になった日より、の意。〇いまゝでに　今に至るまで。所載欄の文献は「今日までに(も)」。〇かたこひにして　片恋のままであって。「片恋」は、片思いに同じ。二〇一八番歌参照。
【所載】万葉集・一九一四（旧一九一〇）春霞　立尓之日従　至今日　吾恋不止　本之繁家波〈一云、片念尓指天〉ハルカスミタチニシヒヨリケフマデニワガコヒヤマズモトノシゲケバ〈一云、かたもひにして〉／赤人集Ⅰ・一九一／赤人集Ⅱ・七二／赤人集Ⅲ・八〇

二〇二四　ねんごろにかたおもひするかこのころはわが心からいけるともなし

【異同】ナシ
【現代語訳】一途に片思いをしているなあ。自から好んで恋い続けているのに、そのせいでこの頃は生きているとも言えない。
【語句】〇ねんごろに　心をこめて。一途に。〇かたおもひするか　片思いすることだなあ。「か」は終助詞、詠嘆の意。〇わが心から　みずから好んで、みずから進んで、の意。「夏虫のおもひに入りてなぞもかくわが心から燃えむとはする」(伊勢集Ⅰ・一二九)。〇いけるともなし　生けるともなし。「る」は存続の意の助動詞「り」の連体形、「と」は格助詞。(心は恋の思いに占領されて、)生きているともいえない。ただし、所載欄の歌を万葉集注釈書には、「生けると」の「と」が上代特殊仮名遣いの甲類であることから助詞に解せず、「利心（とごころ）」「精神（こころど）」の「と（ど）」と同じで、しっかりした気力の意とする。
【所載】万葉集・二五三〇（旧二五二五）懃　片思為歟　比者之　吾情利乃　生戸裳名寸　ネモコロニカタオモヒスルカコノコロノワガココロド（タマシヒ）ノイケリトモナキ　ねもころにかたもひすれかこのころのあがこころどのいけるともなき

二〇二五　いせのあまのあさなゆふなにかづくてふあはびのかひのかたおもひして（に）

【異同】ナシ
【現代語訳】伊勢の海人が朝ごと夕ごとに潜ってとるという鮑の貝、そのように片思いのままであって。
【語句】〇いせのあまの　伊勢の海人の。「伊勢」の国は、現在の三重県北部にあたり、鮑を貢進した。〇あさなゆふな　毎朝毎晩。〇かづくてふ　潜るという。「てふ」は、「といふ」の約。なお、当該歌と第三句まで同じくする歌に、「伊勢の海人の朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽くよしもがな」（古今集・六八三）がある。〇あはびのかひの　鮑の貝の。この四句までが「かたおもひ」を導く措辞。所載欄の和歌色葉に、「鮑の貝は、その身の片つかたに付きたるによりて、かた思ひとはそへたるなり」と説明がある。鮑は、殻が片方だけに見えることから、「かた」に続き、「片思ひ」を導く。〇かたおもひにて　片思いであって。「かたおもひ／波かくるいはねにつけるあはび貝こやかた恋のたぐひなるらん」（俊成集Ⅱ・三五）。
【所載】新勅撰集・恋四・八七二／万葉集・二八〇八（旧二七九八）伊勢乃白水郎之　朝魚夕菜尓　潜云　鰒貝之　独念荷指天　イセノアマノアサナユフナニカヅクテフアハビノカヒノカタオモヒニシテ　いせのあまのあさなゆふなにかづくといふあはびのかひのかたもひにして／人麿集Ⅱ・四八三／人麿集Ⅳ・二五三／夫木抄・一三〇八三／綺語抄・六三六／和歌童蒙抄・九六五／和歌初学抄・一一八／和歌色葉・九九

二〇二六　みづのあはのたまにまじれるいろがひのかたこひにのみとしのへぬらん

【異同】ナシ
【現代語訳】水の泡の玉に混じっている色貝の片貝、どうして片思いのままで年は経てしまうのだろうか。
【語句】〇みづのあはのたまにまじれる　水の泡（あわ）の玉にまじれる。水の泡の玉にまじっているところの。「水の泡」を「玉」に見立てている。なお、所載欄の万葉集「水底の」「水くくる」、夫木抄「水底の」とあり、水の底にある貝の意である。〇いろがひの　色貝の。「色貝」は、色がついた貝、の意か。初句からこの第三句までが、「かたこひ」を導く序詞。「色貝」が片貝であることからの表現か。「色貝」を詠む歌は、時代も下る長久元年（一〇四〇）五月「斎宮貝合」に、「ふぢかたに濃き紫の色貝はいくしほ波か染めかへしけん」（二六）と見える。なお、所載欄の万葉集には、「磯貝」とある。
【所載】万葉集・二八〇六（旧二七九六）水泳　玉尓接有　礒貝之　独恋耳　年者経管　ミナソコノタマニマジレルイソカヒノカタコヒノミニトシハヘニツツ　みづくくるたまにまじれるいそかひのかたこひのみにとしはへにつつ／夫木抄・一三〇八二

〔以上五首担当　加藤静子〕

二〇二七　おもひやるかたはしらねどかたおもひのそこにぞわれはこひはなりにける

【異同】そこにそわれは―そらにそわれは（桂）
【現代語訳】重苦しい気持ちを振り払うやり「かた」はわからないが、「かた」思いでそなたに恋するようになってしまった。［第三句は所載欄の万葉集「かたもひの」に拠って解した。］
【語句】○おもひやるかた　重苦しい気持ちを追い払う方法。「思ひやるかたも知られず苦しきは心まどひのつねにやあるらむ」（後撰集・一二八六）。○かたおもひの　「かたおもひ」は自分を想ってくれない人を恋い慕うこと。片恋。上代においては、大伴坂上郎女の歌に「可多於毛比」（万葉集・四〇八一〈旧四一〇五〉）という表記があるのみで、平安期の和歌においても用例は少ない。「卯の花の咲くとはなしにあだ人を恋ひわたるらんかたおもひにして」（赤人集・二六四）。所載欄の万葉集は「片垸之（かたもひの）」とあり、片垸の中に書いた歌で、「かたおもひ」の約「かたもひ」と、蓋のない土師器「片垸」の掛詞となる。ここもそれに拠って解した。○そこ　指示語「そこ」、すなわち「あなたのところ」の意と、器の底の意の掛詞。同様の例に、指示語「そこ」と川底の「そこ」の掛詞が用いられた「世とともにあぶくま河の遠ければそこなる影を見ぬぞわびしき」（後撰集・五二〇）がある。○こひはなりにける　恋するようになってしまった。傍記は所載の万葉集と同じく「こひなりにける」と読ませるつもりであろう。「恋ひなる」は「思ひなる」と同様の複合動詞。「は」は強調。
【所載】万葉集・七一〇（旧七〇七）思遣　為便乃不知者　片垸之　底曽吾者　恋成尓家類　オモヒヤルスベノシラネバカタモヒノソコニゾワレハコヒナリニケル　おもひやるすべのしらねばかたもひのそこにぞあれはこひなりにける

二〇二八　ますらをのかたこひせんとなげゝどもおきのますらをなをこひにけり　とねかのわうじ或本

【異同】ナシ
【現代語訳】ますらおたる者が片思いなどするものか、と嘆くけれど、みっともないますらおだ、やはり（あの人のことを）恋しく思ってしまうのだ。［初句と第四句は所載欄の万葉集に拠って解した。］

【語句】○ますらをのかたこひせんと　「ますらを」は、堂々とした立派な男子の意。万葉集では官人でもあった歌人たちが自分を表現する語として用いた例が多い。所載欄の万葉集では「ますらをやかたこひせんと」で、ますらおである私がこうも片恋をしようか、の意。底本のままでは解しにくいため、万葉集に拠って解した。○おきのますらを　沖にいる勇ましい漁師の意か。所載欄の万葉集では「鬼（しこ）のますらを」。「鬼」は「醜」と通用させたもので、醜いものを表す語。万葉集の「鬼（しこ）」から「鬼（おに）」、仮名書きした「おに」から「おき」に誤写したものと考えられ、ここでは万葉集に拠って「しこのますらを」で解した。
【所載】万葉集・一一七　大夫哉　片恋将為跡　嘆友　鬼乃益卜雄　尚恋二家里　マスラヲヤカタコヒセムトナゲケドモシコノマスラヲナホコヒニケリ　ますらをやかたこひせむとなげけどもしこのますらをなほこひにけり／袖中抄・三／古来風体抄・三二
【参考】作者名「とねかのわうじ」とあるが、「か」と「り」の仮名の類似によって、所載欄の万葉集や古来風体抄で作者とする舎人親王の名が、このような表記になったものと考えられる。

ゆめ

こまち

二〇二九　おもひつゝぬればや人の見えつらんゆめとしりせばさめざらましを

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しく思いながら寝たので、あの人が夢に現れたのだろうか。もし夢とわかっていたら、目覚めないでいたものを。
【語句】◎ゆめ　夢。睡眠中に物事を現実のことのように見たり聞いたりする現象。古代においては、肉体を残したまま霊魂が行き来することによって夢を見ると信じられていたらしく、恋愛文学の大きな原動力となった。現実（うつつ）と対比的に詠まれることが多い。古今六帖では「恋」の大項目の中にあり、恋歌ではないことが他文献によって示されるものもあるが、ほとんどが恋愛に関する歌である。○おもひつゝぬればや人の見えつらん　恋しく思いながら寝たので、あの人が現れたのだろうか。「ぬればや」は、ナ行下二段活用「寝（ぬ）」の已然形「ぬれ」＋接続助詞「ば」＋疑問係助詞「や」。この「や」は原因推量の「らん」と呼応する。○しりせばさめざらましを　わかっていたら目覚めないでいたものを。「せば……まし」は反実仮想で、「もし……だったら、……だったのに」の意。

【所載】古今集・仮名序、恋二・五五二／新撰和歌・三〇〇／小町集Ⅰ・一六／小町集Ⅱ・一九／小町集Ⅲ・三三／和歌体十種・二四／三十人撰・九一／三十六人撰・六三／俊頼髄脳・一八八／奥儀抄・一三〇／古来風体抄・二七五／桐火桶・二〇九／悦目抄・三三／十訓抄・七二／伊勢物語・二三一／無名草子・八〇
【参考】作者名「こまち」は、所載欄の文献に一致する。

二〇三〇　ねぬるよのゆめをはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな　なりひら（クモ）

【異同】ナシ
【現代語訳】共寝した夜の逢瀬が、夢のようにはかなかったので、ついうとうとすると、（逢瀬自体がまぼろしであったかのように）一段とはかなさがこみ上げてくることだよ。
【語句】〇ねぬるよのゆめをはかなみ　二人で寝た夜の逢瀬が夢のようにはかなかったので。「……を……み」は、「……が……ので」の意。ここで「ゆめ」が「はかなし」とは、逢瀬が夢のように短く現実感がなかったことを表現したもの。「よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける」（後撰集・一七一）。〇いやはかなにも　ますます不確かで現実感がなくなって。「いや」は、状態を意味する語に付いて程度の甚だしいさまを表す。「見ぬほどに年のかはればあふことのいやはるばるに思ほゆるかな」（後撰集・六三九）。
【所載】古今集・仮名序、恋三・六四四／業平集Ⅰ・五〇／業平集Ⅱ・一六／業平集Ⅲ・二五／業平集Ⅳ・一〇／瑩玉集・一〇／桐火桶・一四三／伊勢物語・一七九
【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の文献に一致する。

二〇三一　こひわびてうちぬるなかにゆきかよふゆめのたゞちはうつゝならなん　としゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】恋に思い悩んで、まどろむ間に（あの人のもとに）行き来する、夢の中の近道は、現実であってほしいものだ。
【語句】〇こひわびて　恋に思い悩んで。〇うちぬる　「うち」は接頭語。少し寝る。まどろむ。恋に悩んで熟

睡できない様子。〇ゆめのたゞち　夢の直路。「ただち」は最短距離の道。「月夜よみ妹に逢はむとただちから吾は来つれど夜ぞふけにける」（万葉集・二六二五〈旧二六一八〉）。ここでは、夢の中で恋人に逢えることを、恋人のもとまで真っ直ぐに行ける近道があるとみなしての表現。〇うつゝならなん　現実であってほしい。「なん」は、他にあつらえ望む意の終助詞。「うたたねのひるねの夢にあやめぐさ結ぶと見つるうつつならなむ」（兼澄集・六三）。

【所載】古今集・恋二・五五八／新撰万葉集・二〇九／敏行集・九／寛平御時后宮歌合・一七三

【参考】作者名「としゆき」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　諸井〕

二〇三三一　こひしねとするわざならしむばたまのよるはすがらにゆめに見えつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】恋い焦がれて死んでしまえとする仕打ちであるらしい。夜の間ずっと私の夢に現れるのを繰り返しているよ。

【語句】〇こひしねと　恋ひ死ねと。「恋ひ死ぬ」は恋い焦がれて死ぬ意。「恋ひ死ねとするわざならで玉桙の使ひも見えずなり行くみれば」（古今六帖・一〇九八）。〇するわざならし　……とする仕打ちであるらしい。「ならし」は「なるらし」の約で、断定の助動詞「なり」と推定の助動詞「らし」から成る。〇むばたまの　黒いものにかかる枕詞。当該歌では「夜」にかかる。〇よるはすがらに　夜はすがらに。副詞「すがらに」は「途切れることなく、ずっと」の意。「朝な朝な袖をやしほるきりぎりす夜はすがらになき明かしつつ」（伊勢集・三一一）。

【所載】古今集・恋一・五二六／綺語抄・四六〇

としゆき

二〇三三三　すみよし（ノエ）のきしによるなみよるさへやゆめのかよひぢ人めよくらん

【異同】ナシ

【現代語訳】住吉の岸に寄る波、夜までも、あなたは夢の通い路で人目を避けて逢ってくれないのだろうか。

【語句】〇すみよし　住吉。摂津国の地名。今の大阪市住吉区。海浜の景勝地。〇きしによるなみ　岸に寄る波。

上二句が序詞となり、三句目の「よる」を導く。○よるさへや　夜さへや。「寄る」の同音反復で「夜」が導かれた。副助詞「さへ」は添加。係助詞「や」は疑問。○ゆめのかよひぢ　夢の通路。夢の中で恋しい人のもとへ通う道。「草枕露さへ結ぶ袂なりかれつつ後の夢の通路」（順集・六二）。○人めよくらん　人目避（よ）くらむ。人目を避けるのだろうか。「人目」は、他人の見る目、世間の目。現在推量の助動詞「らむ」は、係り結びで連体形。

【所載】古今集・恋二・五五九／寛平御時后宮歌合・一八六／百人秀歌・一一／百人一首・一八／近代秀歌・九三

【参考】作者名「としゆき」は所載欄の文献に一致する。

二〇三四　むばたまのやみのうつゝはさだかなるゆめにいくらもまさらざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】暗闇の中での現実（の出来事）は、はっきりした夢（の中の出来事）に大してまさっていなかったことだ。

【語句】○むばたまの　黒いものにかかる枕詞。当該歌では「闇」にかかる。○やみのうつゝ　闇の現。暗闇の中での現実の出来事。「現（うつゝ）」は「現実」の意で、ここでは現実の逢瀬を指す。○さだかなるゆめ　定かなる夢。はっきりした夢の中の出来事。「さだかなり」は、はっきりしているさまを表わす形容動詞。ここの「夢」は夢の中での逢瀬。「闇の現」と対比する。現実の逢瀬にまさるものは無いという常套を踏まえ、夢で見た逢瀬に現実の逢瀬がそれほどまさっていなかったと詠む。現実の逢瀬がもの足りなかったということ。

【所載】古今集・恋三・六四七／金玉集・四六／深窓秘抄・六六／袖中抄・四五〇

おき風

二〇三五　わびぬればしゐてわすれんとおもへどもゆめてふものぞ人だのめなる

【異同】ナシ

【現代語訳】つらいので無理に忘れようと思うけれども、夢というものは人に期待させることだよ。

【語句】○わびぬれば　侘びぬれば。つらいので。「侘ぶ」は、苦悩や悲嘆に打ちひしがれ、気力を失う意。「ぬ

れば」は、完了の助動詞「ぬ」の已然形と接続助詞「ば」。この「ば」は、順接確定条件で原因・理由を表す。○しゐてわすれんと　しひて忘れむと。無理に忘れようと。副詞「しひて」は、逆らって無理に進める意。助動詞「む」は意志。○ゆめてふものぞ　夢というものは。「てふ」は「といふ」の約。「ぞ」は強意の係助詞。○人だのめなる　人頼めなる。人に期待させる。「人頼め」は、実際には頼りにならないのに頼もしく思わせること。当該歌では、恋しい相手の現れた夢が期待を抱かせること。「春を待つ梅の古枝にふる雪は人頼めなる花にざりける」（家持集・二七〇）。

【所載】古今集・恋二・五六九／新撰万葉集・四七〇／興風集Ⅰ・四七／興風集Ⅱ・二〇、四九／寛平御時后宮歌合・一七四

【参考】作者名「おき風」は所載欄の文献に一致する。類歌に「侘びぬればしひて忘れむと思へども心弱くも落つる涙か」（寛平御時中宮歌合・二九）がある。

二〇三六　きみやこしわれやゆきけんおもほえずゆめかうつゝかねてかさめてか

さい宮ぁる本

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが来たのでしょうか、私が行ったのでしょうか。わかりません。夢だったのか現実だったのか。寝ていたのか目覚めていたのか。

【語句】○きみやこしわれやゆきけん　君や来し我や行きけむ。二つの係助詞「や」は疑問。「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。「けむ」は、過去推量の助動詞「けむ」の連体形。「君」と「我」、「来」と「行く」が対になっている。○おもほえず　思ほえず。わからない。「おもほゆ」は、ひとりでに思われる、我知らず考える意。「ず」は打消の助動詞。○ゆめかうつゝか　夢か現か。ここでは、逢瀬が夢の中の出来事だったのか、現実に起こったことだったのか、ということ。第五句の「寝てか覚めてか」も同様に逢瀬のこと。「ほととぎす夢か現か朝露のおきて別れし暁の声」（古今集・六四一）。

【所載】古今集・恋三・六四五／業平集Ⅰ・四八／業平集Ⅱ・三／業平集Ⅲ・二三／俊頼髄脳・一九三／袖中抄・二五五／伊勢物語・一二六

【参考】作者名「さい宮」は、所載欄の古今集には「斎宮なりける人」、伊勢物語には「かの伊勢の斎宮なりける人」とある。業平集Ⅰでは「いみじうわりなくてあひたる女」、業平集Ⅱでは「エアフマジキ女」、業平集Ⅲで

は「あるひと」。

〔以上五首担当　原山絵美子〕

二〇三七　かきくらすこゝろのやみにまよひにき夢うつゝとはよ人さだめよ

なりひら

【異同】まよひにき―まとひにき(桂)
【現代語訳】思い乱れて分別のなくなった心の闇によって、私は迷ってしまいました。あれが夢の中のできごとであったか、それともうつつのことであったか、それは世の人が決めなさい。私には、わからない。
【語句】〇かきくらす　「かき」は接頭語。「くらす」は四段活用他動詞「くらす」の連体形、思いが昏迷して、心の分別がなくなっているさま。〇こゝろのやみに　心の闇によって。思い乱れて分別のなくなった心の状態を、比喩的に「闇」と言った。〇まよひにき　迷ってしまった。所載欄の業平集や伊勢物語では、「まどひにき」となっている。「まどひにき」は、思い悩んで心乱れることであるが、ここでは底本本文のまま「まよひにき」で現代語訳した。〇夢うつゝとは　夢であったのか現実のことであったのか、ということについては。〇よ人さだめよ　世の中の人が決めなさい。自分はその判断ができぬほど心が乱れている、ということ。「よ人」は世人。
【所載】古今集・恋三・六四六／業平集Ⅰ・四九／業平集Ⅱ・四／業平集Ⅲ・二四／業平集Ⅳ・一九／俊頼髄脳・一九四／袖中抄・二五六／伊勢物語・一二七
【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

二〇三八　わぎもこにこひてすべなししろたへのそでかはしゝはゆめに見えきや

よみ人しらずある本

【異同】そてかはしゝは―そてかはしくは（桂）
【現代語訳】いとしいおまえのことが恋しくて、どうしようもない。袖を交わして共寝したことは、夢に見えましたか。
【語句】〇わぎもこ　吾妹子。男性の側から妻や恋人を親しんで呼んだ語。所載欄の万葉集で見れば、この歌は次の二〇三九番歌と一対をなす問答歌であり、この歌における「わぎもこ」は、相手の女性（次歌の作者）を直

接呼んだことばと見られる。〇しろたへの　白妙の。ここでは、次の「そで」を導くための措辞。〇そでかはしゝは　袖を交わして共寝したことは。〇ゆめに見えきや　夢に見えましたか。相手に尋ねたことば。

【所載】万葉集・二八二三（旧二八一二）吾妹児尓　恋而為便無　白細布之　袖反之者　夢所見也　ワギモコニコヒテスベナミシロタヘノソデカヘシシハユメニミエキヤ　わぎもこにこひてすべなみしろたへのそでかへししはいめにみえきや／夫木抄・一七〇六八

【参考】作者表示に「よみ人しらず」とあるが、万葉集でもこれは作者不明の歌。ただし、古今六帖において「よみ人しらず」が表示されているのは、稀少の例である。

所載欄の万葉集では、古今六帖における次歌（二〇三九番歌）と一対をなす問答歌のうちの、問歌である。

人麿集Ⅱの四九〇番歌には、「わぎもこに恋ひてかひなき白妙の袖返しては夢に見えつつ」という類似した歌がある。

二〇三九　わぎもこがそでかへすよのゆめならしまこともきみ（ヤイ）にあふことありき

【異同】ナシ

【現代語訳】［第五句は歌意に整合しないところがあるが、底本本文のままで訳した。］いとしいおまえが袖を返して寝た夜の夢なのでしょう。実際にも、あなたに逢ったことはありました。

【語句】〇わぎもこが　「わぎもこ」は前歌参照。所載欄の万葉集では「わが背子が」とある。前歌への返歌であるならば、「わが背子が」の方が整合性があるが、ここでは底本本文に拠り「わぎもこが」のままで解した。〇ゆめならし　夢であるらしい。「ならし」は、「なるらし」の約。断定の助動詞「なり」の連体形「なる」に、推量の助動詞「らし」が付いた形。〇まことも　実際にも。事実としても。この「まこと」は、「ゆめ」に対する現実、の意。〇きみにあふことありき　あなたに逢ったことがあった。「ありき」はそのことが過去に事実としてあった、ということ。所載欄の万葉集では「君に逢ひたるごとし」となっており、その方が歌意の整合性は高い。

【所載】万葉集・二八二四（旧二八一三）吾背子之　袖返夜之　夢有之　真毛君尓　如相有　ワガセコガソデカヘスヨノユメナラシマコトモキミニアヘリシガゴト　わがせこがそでかへすよのいめならしまこともきみにあひたるごとし／夫木抄・一七〇六九

【参考】所載欄の万葉集では、古今六帖における前歌（二〇三八番歌）に対する返歌となっている

人麿集Ⅱの四九一番歌には、「わが背子がたもと返せるよるの夢にまさしく妹が逢ふがごとくに」、人麿集Ⅳの二六二番歌には、「わが背子が袖返し夜の夢ならしまさしく妹に逢ふがごとくに」という類似した歌がある。

二〇四〇　ゆめにだになぞかも見えぬみゆれども（ユトテモ）われかも（ナトイ）まよふこひのしげきに（ミユヤトテイ）

【異同】われ（ナトイ）かもまよふ―われかもまとふ（御・桂・大）
【現代語訳】せめて夢にだけでも、どうしてあなたは見えないのか。いや、見えているのだけれども、私の方が心迷って（見えないで）いるのか。恋の思いの繁さによって。
【語句】〇なぞかも見えぬ　なぜ見えないのか。「なぞ」は「なにぞ」の約。なんで、どうして、の意。「か」は疑問、「も」は強意。〇みゆれども　ほんとうは見えているのだけれども。〇われかもまよふ　私の方が心乱れて迷っているのだろうか。そのために見えるはずのあなたが見えなくなっているのだろうか、ということ。〇こひのしげきに　恋の思いが繁くあることによって。「しげき」は繁き、その思いが多く激しくあること。
【所載】万葉集・二六〇〇（旧二五九五）夢谷　何鴨不所見　雖所見　吾鴨迷　恋茂尓　ユメニダニナニカモミエヌミユレドモワレカモマトフコヒノシゲキニ　いめにだになにかもみえぬみゆれどもわれかもまとふこひのしげきに／人麿集Ⅱ・四五三／人麿集Ⅳ・二三七

二〇四一　夢ぢにはあしもやすまずかよへどもうつゝにひとめ見しごとはあらず

【異同】ナシ
【現代語訳】夢の中では足を休めることもなく頻繁に通っているのだけれども、（しかし、夢はやはり夢にすぎなくて、）現実においてひと目逢ったときのよろこびには、とても及ぶものではない。
【語句】〇夢ぢには　夢の中のできごととしては。〇あしもやすまずかよへども　足を休めることなくしげしげと通っているのだけれども。〇うつつに　実際に。現実に。この「うつつ」は「夢」に対して言われている。〇見しごとはあらず　実際に相逢ったときのようではない。現実に相逢ったよろこびに、到底及ぶものではない、の意。「見し」は恋の場での逢いのこと。
【所載】古今集・恋三・六五八／小町集Ⅰ・二五／小町集Ⅱ・二一／小町集Ⅲ・四〇／新撰髄脳・五／俊頼髄脳・一二三／奥儀抄・二四

〔以上五首担当　山下道代〕

二〇四二　かぎりなきおもひのまゝ(ニマ)によるもこんゆめぢ(ウツヽニサヘヤ)にさへや人のとがめん

【異同】ナシ
【現代語訳】限りない恋慕の情にまかせて、夜も通って行こう。夢の通い路まで人がとがめることはあるまい。
【語句】〇かぎりなきおもひ　とどまることを知らぬ恋心。「かぎりなし」は善悪にかかわらず、物事の限度を越えてとどまる所なく進む意。〇よるもこん　せめて夜だけでも通って行こう。「こん」は「行く」の意。「も」は、程度の軽いものをあげて言外に重いものを暗示する係助詞。現実に通って行きたいのだが、せめてというニュアンスが含まれる。〇ゆめぢにさへや人のとがめん　夢路にまでも、人がとがめることはあるだろうか、あるまい。「にさへ」は、格助詞「に」＋既にあるものの上に更に事物を添加する意の副助詞「さへ」。現実にはともかく、夢路に通うことまでは。「人の見て言とがめせぬ夢に我今宵いたらむ宿さすなゆめ」（万葉集・二九二四〈二九一二〉）。なお、「や」は反語。「にさへや」は「恋ふれども逢ふ夜のなきは忘れ草夢路にさへや生ひ繁るらむ」（古今集・七六六）のごとく、疑問と考えられる用例もあるが、当該歌の文脈からみて反語が妥当。
【所載】古今集・恋三・六五七／小町集Ⅰ・七〇／小町集Ⅱ・二二／小町集Ⅲ・三九
【参考】作者名はないが、古今集では小町の作、小町集にもみえる。所載欄の文献によれば小町の作だが、男の立場に立つ創作歌の歌とも解し得る。

二〇四三　夢のうちにあひ見んことをたのみつゝくらせるよひはねんかたもなし

【異同】くらせるよひは―くらせるよるは（桂）
【現代語訳】夢の中で逢うことを期待しながら一日を暮らした宵は、どうしたら夢にみることができるかという方法がわからず、眠ることができない。
【語句】〇たのみつゝ　頼みにしながら。「つゝ」は動作の作用や継続を表す接続助詞。現実には逢えぬ相手をせめて夢で見たい、と期待する。〇ねんかたもなし　寝る方法がわからない。恋しい人を夢に見るために、あれこれ工夫してみるが、うまい方法が見つからない。「宵々に枕定めむ方もなしいかに寝し夜か夢に見えけむ」（古今集・五一六）、恋しい人を夢に見ることができた枕の方角が思い出せないとする歌と似た戯画性がみられる。

【所載】古今集・恋一・五二五／和歌式・五

二〇四四　見し夢のおもひいづれどはかなきはこのよのことにあらぬなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】あの人と逢った夢を思い出そうとしたけれど、はっきりしないのは、夢がこの世のことではないからなのだなあ。
【語句】〇見し夢の　逢瀬の夢。「恋」題中の小題「夢」であるから、単に「見た夢」ではなく、恋人と逢った夢とみる。〇はかなきは　はかないことは。逢瀬の夢をはかないとする歌は多く、「はかなくて夢にも人を見つる夜は朝の床ぞ起き憂かりける」（古今集・五七五）、「夢のごとはかなきものはなかりけり何とて人に逢ふと見つらん」（後撰集・七六五）などがある。〇このよのことにあらぬ　この世のことではない。「このよ」は此の世、現世。仏教的無常感に基づいて、この世を夢のようにはかないものとする歌は、「夢とのみ見ゆるこの世のはかなさはおどろき顔に問はれやはする」（清輔集・三四八）など例が多いが、当該歌は、逆に夢はこの世のことではない故にはかない、とする。
【所載】ナシ

二〇四五　いをしねばゆめにも人をみるべきにこふとおもへばたゞにあかしつ

【異同】ナシ
【現代語訳】せめて眠りさえしたら、夢にでもあの人を見ることができたでしょうに、恋しいと思う気持ちゆえに、眠れずにむなしく夜を明かしてしまいました。
【語句】〇いをしねば　睡眠をとることさえしたならば。「いをしねば」の語構成は、名詞「寝（い）」＋格助詞「を」＋強意の副助詞「し」＋下二段動詞「寝（ぬ）」の未然形＋順接仮定条件「ば」。「いをし寝ば夢にも人を見るべきを夜な夜な覚むる目こそつらけれ」（陽成院親王二人歌合・九）。〇こふとおもへばたゞにあかしつ　恋しい思いで、眠れずにむなしく夜を明かしてしまった。「こふとおもへば」は他に例がなく、第五句との繋がりもわかりにくい。「たゞに」はむなしく、いたづらに。　和泉式部集（一八〇）の詞書に、「三月ばかり、人の来むとてただにあかしたるつとめて、いひにやる」、男が来るというのでむなしく待ち明かしたとあるのを参

考にすれば、本来、第四句は「こむとおもへば」であったと考えられるが、本文通りとして訳した。
【所載】ナシ

二〇四六　もろこしもゆめに見しかばちかゝりきおもはぬなかぞはるけかりける　けんげい法師ある本

【異同】ナシ
【現代語訳】遠いはずの唐土も、夢に見たところ近いものでした。思い合うことのない二人の仲こそ、（唐土よりも）遙かに遠いものでありましたなあ。
【語句】〇もろこしも　唐土さえも。「もろこし」はわが国で中国を指して呼んだ名称。遠いところの例としてあげた。「も」は遠いとされる唐土さえもの意。〇ゆめに見しかばちかゝりき　夢に見たところ、近いものだった。「しかば」は、過去の助動詞「き」の已然形＋「ば」は順接確定条件の接続助詞。自分が実際に夢で見て、近く感じたとする。〇おもはぬなかぞはるけかりける　思い合わない仲こそ、遠く隔たったものでした。「思はぬ仲」では夢にも現れないから遠いとする説もあるが、「もろこし」を引き合いに出して、思い合わぬ仲の距離感そのものをいったと考えられる。自分は思っているが、同じように思ってくれない相手に訴えた歌。
【所載】古今集・恋五・七六八
【参考】作者名「けんげい法師　ある本」となっているが古今集では兼芸法師の歌である。

〔以上五首担当　中野方子〕

二〇四七　むばたまのゆめ（ヨル）になにかはなぐさめんうつゝにだにもあかぬこゝろを　ふかやぶ（マ）ある本

【異同】ナシ
【現代語訳】夢に見たからといって、なんで心を慰めることができようか、できはしない。現実に逢ってさえも満ち足りた気持にはなれぬこの心を。
【語句】〇むばたまの　「ぬばたまの」の転。「黒」「夜」などにかかる枕詞。ここでは「夢」にかかっている。〇ゆめになにかはなぐさめん　夢によってどうして心を慰めることができようか、できはしない。「かは」は反

語。「なぐさめ」は他動詞「慰む」の未然形。所載欄の文献はすべてが「なぐさまむ」と自動詞形になっており、その方がより自然である。○うつゝ　現実。第二句の「ゆめ」に対して言われている。○あかぬこゝろ　飽かぬ心。飽き足りない気持、これで充分と満足することができない気持。

【所載】古今集・物名・四四九／深養父集Ⅰ・二一／深養父集Ⅱ・一七／三十人集・八九

【参考】作者名「ふかやぶ」は、所載欄の文献に一致する。また古今集においてこの歌は、「かはなぐさ」を題とする物名歌であり、第二・三句の中にそれが隠し詠みこまれている。なお、「かはなぐさ」は古今伝授「三木」のひとつであるが、それがなんの植物のことであるかについては、諸説あり未詳。

二〇四八　よのなかはねてもさめてもゆめならばわすれぬさへをわするとやせん（ミイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】この世の中のことは、寝ていても覚めていても夢のように不確かなものだというのならば、わたしが（あの人のことを）忘れないでいることまでをも、忘れることだ、ということにしようか。

【語句】○ねてもさめても　眠っていても覚醒していても。○わすれぬさへを　忘れないでいる、そのことまでをも。○わするとやせん　忘れることだ、ということにしようか。

【所載】ナシ

二〇四九　ものおもへばいもねられぬをあやしくもわするゝことを夢に見るかな

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いをすれば眠ることもできないのに、ふしぎなことに、忘れていたことを夢に見るものだなあ。

【語句】○いもねられぬを　睡眠することができないのに。「い」は睡眠という意味の名詞、「寝（い）をぬ」「寝（い）もねず」などの形で用いられることが多い。○あやしくも　ふしぎなことに。「あやし」はたやすく理解あるいは納得できず、ふしぎに思われる、という気持を表わす。○わするゝことを　それまで忘れていたことを。

【所載】新拾遺集・恋五・一三二一

つらゆき

二〇五〇　ねぬるよの夢はやみにもあらなくにたちかへりてもきみをみつるか（ナ）

【異同】ナシ
【現代語訳】［第二句に不審があるが、本文のままで訳した。］寝た夜に見た夢は、闇でもないのに、（その夢の中で）くり返しあなたを見たなあ。
【語句】〇やみにもあらなくに　闇だというわけでもないのに。「やみ」は不審。所載欄の貫之集Ⅰでは「波にもあらなくに」となっている。その方が、第三句「たちかへり」との整合性もあり、歌意はよく通る。〇たちかへり　もとのところにたち戻ること。ここでは、くり返して、ということ。
【所載】貫之集Ⅰ・六二六

みなもとのよるか

二〇五一　ゆめばかりはかなきものはなかりけりなにとて人にあふと見つらん

【異同】ナシ
【現代語訳】夢ほどはかないものはなかったなあ。どうして、あの人に逢うという夢を見たのであろうか。
【語句】〇はかなきもの　不確かであてにならないもの。〇あふとみつらん　逢った、という夢を見たのであろうか。
【所載】後撰集・恋三・七六五
【参考】作者名「みなもとのよるか」とあるが、その根拠は不明。所載欄の後撰集では「源たのむ」の作である。また、「みなもとのよるか」は、その人物を特定できない。古今集の作者に「藤原因香」がいるが、それと同一人物かどうか、言うことができない。

〔以上五首担当　山下〕

二〇五二　こひしさのなぐさむべくもあらざりきゆめのうちにも夢と見しかば

【異同】ナシ

【現代語訳】（あなたと夢でお逢いしても）恋しく思う気持ちが慰められるはずもありませんでした。夢の中でもこれが夢だとわかっていたので。

【語句】〇ゆめのうちにも夢とみしかば　夢のうちにも夢と見しかば。夢の中でもこれが夢だとわかっていたので。逢えない人に夢で逢えたという詠作は多くあるが、当該歌は夢だとわかっているため、逢瀬にも慰められることはないという詠みぶり。

【所載】後撰集・哀傷・一四二一／大鏡・二五

【参考】作者名は無表記だが、所載欄の文献では作者を「大輔」とする。大鏡に拠ると、保明親王の死後乳母子である大輔が親王の夢を見た際に、親王妃から贈られてきた「時のまも慰めつらん覚めぬ間は夢にだに見ぬわれぞかなしき」（後撰集・一四二〇）への返歌。当該歌は詠作事情を踏まえると、恋の部にあるのが不自然に見えるかもしれない。だが、「娘にまかりおくれて」と詞書にあるのにも関わらず恋の部にある「忘られてしばしまどろむほどもがないつかは君を夢ならで見む」（拾遺抄・三七三）という歌もある。これと同様に、人を恋する気持ちは必ずしも男女間に限らないということか。

二〇五三　わすれねどなにぞもしるし夢のうちにものはかなくてやみにしものを

【異同】わすれねと―わすれねは（大）

【現代語訳】（あなたへの思いを）私は忘れてはいませんが、いったい何のかいがあるというのでしょうか。夢の中で逢瀬があっけなく終わってしまったというのに。（それは、あなたが私を忘れてしまったからなのでしょうね。）

【語句】〇なにぞもしるし　何ぞもしるし。何のかいがあるというのか。「ぞも」は強意の係助詞「ぞ」「も」がついたもの。「なに」を強調している。「千歳ふる松やなにぞも万代の岩根におふる常磐なりけり」（元輔集・一五五）。「しるし」は、他と比べて際だっていて感覚に強く訴えかけてくるさまに用いられる形容詞。原因と結果が符合する場合などにも用いられる。〇ものはかなくてやみにしものを　あっけなく終わってしまったというのに。「ものを」は詠嘆の終助詞。……なのに、という意。夢の中での逢瀬は互いが思い合うことで可能になる。逢瀬が終わってしまったということは、恋人の心変わりを表していると思われる。「夢にだに逢ふこと難くなりゆくは我やいを寝ぬ人や忘るる」（古今集・七六七）。

【所載】ナシ

二〇五四　うつゝにもはかなきことのわびしきはねなくにゆめとおもふなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】（夢の逢瀬がはかないものの例とされますけれど）起きている現実においてもはかないことがつらく思われるのは、眠っているわけではないのに夢かと思うほどのはかないものだからなのですよ。
【語句】○うつゝにもはかなきことのわびしきは　現実においてもはかないことがつらく思われるのは。「うつつ」は目が覚めている状態、現実。一般的に「うつつ」と「夢」を対比させ、夢を「はかなし」と形容することが多い。それを踏まえて、夢ははかないというが、現実においてもはかないのがつらく思われることは、という意。○ねなくにゆめとおもふなりけり　寝なくに夢と思ふなりけり。寝ているわけではないのに夢かと思うようなはかない逢瀬なのだった。「なくに」は、打消の「ず」のク語法。……ないのに、という意。
【所載】後撰集・恋一・五九八、恋三・七〇三

二〇五五　見しゆめのおもひでらるゝよひごとにいはぬをしるはなみだなりけり　或本　い勢

【異同】ナシ
【現代語訳】かつて見た、あなたにお逢いする夢が思い出される宵のたびに、私の口に出さない思いを知って流れてくるのは涙でしたよ。
【語句】○見しゆめ　見し夢。かつて見た夢。以前見た逢瀬の夢のこと。○いはぬをしるはなみだなりけり　言はぬを知るは涙なりけり。言葉にしない私の心のうちを知っているのは涙であったなあ。「世中の憂きもつらきもつげなくにまづ知るものは涙なりけり」（古今集・九四一）。
【所載】古今六帖・第五帖「いはでおもふ」二六五三／後撰集・恋四・八二五／伊勢集Ⅰ・二一四／伊勢集Ⅱ・二一八／伊勢集Ⅲ・二一七／古来風体抄・三二九
【参考】作者名「い勢」は所載欄の文献に一致する。

二〇五六　きみをのみおもひねにねし夢なればわが心から見つるなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたのことをひたすら思って寝た「思ひ寝」をしたときに見た夢なので、この夢は私の思いから見た夢なのですね。
【語句】〇きみをのみおもひねにねし夢なれば　君をのみ思ひ寝に寝し夢なれば。あなたのことをひたすら思って寝た「思ひ寝」をしたときに見た夢なので。「のみ」は強意の副助詞。「おもひね」はものを思いながら寝ること、愛しい人のことを思って寝ること。「思ひねのよなよな夢に逢ふ事をただかた時のうつつともがな」（後撰集・七六六）。〇わが心からみつるなりけり　わが心から見つるなりけり。私の思いから見たのでした。夢に恋しい人が出てくるのは、相手が自分のことを思っているから、という俗習がある。しかし、今回は自分が「思ひ寝」をしたから夢を見たのであって、相手が自分のことを思ってくれているからではないのだ、ということ。
【所載】古今集・恋二・六〇八／躬恒集Ⅰ・二九八／躬恒集Ⅱ・一六三／躬恒集Ⅲ・三二二
【参考】作者名無表記だが、所載欄の文献では「みつね」とある。

〔以上五首担当　山村〕

二〇五七　ゆめを見てかひなきことのわびしきはさむるうつゝのこひにぞありける

つらゆき

【異同】ゆめを見て―夢に見て（大）
【現代語訳】夢を見て、夢の中で逢っても効がなくて侘びしいのは、夢から目覚めると逢うことのできない状態にある現実の恋であった。
【語句】〇さむるうつゝのこひ　夢から覚めた現実の恋。「うつゝ」は現実。夢と対比して、夢で恋しい人に逢っても、夢から覚めると現実には逢えないその現実の恋の侘びしさを詠む。
【所載】新千載集・恋二・一一五三／貫之集Ⅰ・六三四
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

二〇五八　夢にてもうれしとも見ばうつゝにてわびしきよりはなをまさりなん

みつね

【異同】なをまさりなん―猶まさりけり（大）
【現代語訳】たとえ夢の中でも嬉しい目にあうならば、現実の世の中で侘びしい状態にあるのよりはやはり勝っているでしょう。
【語句】○うれしとも見ば　嬉しとも見ば。「嬉しい」とでも見るならば。嬉しい目にあうならば。恋の歌なら「嬉し」いことは思う人に逢えることだが、当該歌は、所載欄の文献の詞書によると昇進を意味する。参考欄参照。○なをまさりなん　猶（なほ）勝りなん。それでもやはり勝っているでしょう。
【所載】後撰集・雑二・一一九四／躬恒集Ⅰ・五／躬恒集Ⅱ・一九八／躬恒集Ⅲ・一八四／躬恒集Ⅴ・四四
【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。所載欄の文献によると、自身の不遇を愁訴し、昇進できるよう取りなしてもらうべく贈った歌。愁訴の相手は、後撰集では蔵人、躬恒集では女房とある。夢と「うつゝ」（現実）を対比して、現実の侘びしさを訴えている。千里集には「夢にても嬉しきことの見えつるはただにうれふる身にはまされり」（一一六）という類想の歌がある。

たゞみね

二〇五九　いのちにもまさりておしくあるものは見はてぬゆめのさむるなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】命にもまさって惜しいものは、見果てぬ夢が覚めることだったんだなあ。
【語句】○見はてぬゆめ　見果てぬ夢。最後まで見終わらないうちに途中で目覚めてしまう夢。恋しい人と逢う夢を見たのに途中で覚めてしまう夢。「よそながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける」（後撰集・一七一）。
【所載】古今集・恋二・六〇九／忠岑集Ⅰ・一七／忠岑集Ⅱ・二八／忠岑集Ⅲ・四二／忠岑集Ⅳ・四一
【参考】作者名「たゞみね」は、所載欄の文献に一致する。

ふぢはらのうがふのえう　卿イ　ある本

二〇六〇　あか月のゆめに見えつゝかはしまのいそこすなみのしきておもほゆ（ルイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】暁の夢に度々見えては、川島の磯を越す波がしきりに打ち寄せるように、あの人のことがしきりに思われる。
【語句】○あか月　暁。夜明け前のまだ暗い頃。○かはしまのいそこすなみのしきておもほゆ　川島の磯を越す波がしきりに打ち寄せるように、しきりに思われる。「かはしま」は古今六帖の本文のままで解釈すると川の中の島か。所載欄の万葉集には「梶嶋」とある。「かはしまのいそこすなみの」は、「しきて」を導く序。「しきて」は、後から後から寄せて、しきりに、の意。
【所載】続古今集・雑中・一六五五／万葉集・一七三三（旧一七二九）暁之　夢所見乍　梶嶋乃　石越浪乃　敷弖志所念　アカツキノユメニミエツツカヂシマノイハコスナミノシキテシゾオモフ　あかときのいめにみえつつかぢしまのいそこすなみのしきてしおもほゆ／夫木抄・一〇四六一
【参考】作者名「ふぢはらのうがふのえう」とあるが、所載欄の文献によると作者は藤原宇合。「宇合（うまかい）」を「うがふ」と音読したか。「えう」は「卿」か。万葉集に「夢のみに継ぎて見えつつ小竹嶋の磯越す波のしくしく思ほゆ」（一二四〇〈旧一二三六〉）という類似した歌がある。

おもかげ

なりひら

二〇六一　めかるともおもほえなくにわすらるゝときしなければおもかげにたつ（ミ　ミユイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたにお会いしなくなったとも思われませんのに。あなたのことを忘れる時などないので、お姿が面影となって立ち現れています。
【語句】◎おもかげ　面影。実体はそこにないのに目前に見える姿や面ざし。そこにはいない人の幻が見えるのを詠むことが多く、時には鏡に映った姿を詠むこともある。○めかる　目離（か）る。会わなくなる。○わすらるゝとき　（自然に）忘れる時。「わすらるゝ」は、ラ行四段活用の動詞「忘る」の未然形に、自発の助動詞「る」の連体形が付いたもの。
【所載】業平集Ⅱ・六〇／伊勢物語・八六
【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の業平集に一致する。伊勢物語では、業平と目される「男」の歌で、他

国へ行った親友から、会わないでいるので忘れられたかとつらい思いをしている、という手紙が届いたのに対して、「私はあなたのことを忘れる時とてないので、あなたのお姿が面影となって立ち現れています。だから、あなたが遠く離れた所にいても、お会いしていないとも思えませんのに。」という気持ちを詠んで送ったもの。

〔以上五首担当　長戸〕

二〇六二　わがせこがおもかげやまのさかゐまにわれのみこひて見ねはかなしも

さかのうへのらう女ある本

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたの面影が（見たいという）気持ちとは逆に、私は恋うるばかりで、あなたを見られないのは残念なことです。

【語句】〇わがせこが　「せ（兄・背）」は、夫や恋人など、女性が親しい男性を指していう語。「わがせこ（我背子）」で、私のいとしい人。「わぎもこ（我妹子）」の対。「が」は連体格助詞であろう。〇おもかげやま　夫木抄には「おも影山、因幡」とあり、歌枕名寄には「面影山、顕昭歌枕長門国云々」とある。前者は現在の鳥取市、後者は山口県下関市にある。いずれにしても「面影」の意を掛ける。「白雲の絶えて知らじな別れては面影山の立ち居恋ふとも」（肥後集・一八〇）。〇さかゐまに　意不明。所載欄の本文にはいずれも「さかさまに」とある。「さかさま」は順序などが逆、反対、あるいは事実や道理に反すること。ここは一応「さかさまに」の本文による。「さかさまに年も行かなむ取りもあへず過ぐる齢やともに帰ると」（古今集・八九六）。〇われのみこひて　私はひたすら恋い慕うばかりで。私だけが恋い慕って、の意ではない。「御胸のみつとふたがりて」（源氏物語・桐壺）。〇ねたしも　「ねたし」は、しゃくにさわる、憎らしい、残念だ、の意。「も」は詠嘆の終助詞。

【所載】古今六帖・第五帖「わがせこ」三一〇一／夫木抄・八五四六

【参考】作者名「さかのうへのらう女」は、第五帖では「かさの女郎」とし、夫木抄では出典を古今六帖・第五帖としながら「坂上郎女」とする。

二〇六三　めをさめてひまより月をながむればおもかげにのみきみは見えつる

【異同】きみは見えつる―君は見えつゝ（大）

【現代語訳】目を覚まして隙間から月を眺めたところ、あなたは面影に見えるばかりでした。
【語句】〇めをさめて　「さむ（覚む）」は本来自動詞だが、ここでは他動詞のように用いられている。〇ひま　時間的にも空間的にも用いられる。ここは空間的に、隙間。
【所載】陽成院親王二人歌合・一三
【参考】下句の「おもかげにのみきみは見えつる」は、実際には来てくれなかった、の意であろう。月が恋人の面影に見えたか。

二〇六四　みちのくのまのゝのかや（クサ）はらとをけれどおもかげにし見ゝえつる（ユトイフ）ものをカサノニヨラウ　さかのらう女

【異同】ナシ　「カサノニヨラウ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】陸奥の真野の萱原は遠いけれども、面影にはっきり見えたのに。それなのにあなたは見えないのですね。
【語句】〇みちのく　陸奥。「みちのおく」の約。現在の青森、岩手、宮城、福島の各県を合わせた地域。出羽国（秋田、山形）を含め、漠然と東北地方全体を指すこともある。〇まのゝのかやはら　真野の萱原。陸奥の歌枕。八雲御抄にも「陸奥」と見える。現在の福島県南相馬市鹿島区。〇とをけれど　とほけれど。遠いけれど。〇おもかげにし見ゝえつるものを　誤写があるか。所載の万葉集では「面影為而所見云物乎（おもかげにしてみゆといふものを）」とある。真野の萱原は遠いけれども、面影にして見えたという伝承があったか。
【所載】新千載集・恋二・一二三六／万葉集・三九九（旧三九六）陸奥之　真野乃草原　雖遠　面影為而　所見云物乎　ミチノクノマノノカヤハラトホケレドオモカゲニシテミユトイフモノヲ　みちのくのまののかやはらとほけどもおもかげにしてみゆといふものを／夫木抄・九九〇一／井蛙抄・三四六／東野州聞書・一五三
【参考】作者名「さかのらう女」は、所載欄の新千載集や万葉集では「笠郎女」とする。

二〇六五　見（或本）しときとこひつゝをればゆふぐれのいもがしみかをおもかげに見ゆ本

【異同】ナシ
【現代語訳】かつて逢った時刻だと思って恋い慕っていると、夕暮れ時の彼女の「しみか」を私は面影に見るこ

とだ。

【語句】○いもがしみかを　「いも（妹）」は妻や恋人など、男性が親しい女性を指していう語。「しみか」については意味不明。参考欄参照。

【所載】ナシ

【参考】古今集・物名「くれのおも」一一〇三（貫之）に、「来し時と恋ひつつをればゆふぐれのおもかげにのみ見えわたるかな」という類歌がある。このあたり本文の乱れが甚だしいので、あるいはこの貫之詠に次の二〇六六番歌における下句の傍記「いもがえみがほおもかげに見ゆ」が混態現象を起こし、さらに「えみかほ」が「しみかを」に誤られたか。「え」と「し」は誤りやすい。あるいは「見し顔」の誤りか。

二〇六六　ともしびのかげにかゞよふうつせみのいもがおもかげ（エミガホヲモカゲニミユ）こお風ゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】灯火の火影に揺れ輝いている、生き生きとした彼女の笑顔が、面影に浮かんで見えることだ。

【語句】○かゞよふ　きらきら光って動く。きらめきゆれる。○うつせみの　万葉時代の用法としては、生身の、現実の、この世に生きている、生き生きとしている、などの意。○いもがおもかげこお風ゆ　なぜこうした本文が生じたかは不明だが、当然誤写があろう。所載の万葉集では「妹蛾咲状思面影尓所見（いもがゑまひしおもかげにみゆ）」とあり、傍記にも「いもがエミガホヲモカゲニミユ（妹が笑み顔面影に見ゆ）」とある。一応傍記によって訳した。

【所載】万葉集・二六五〇（旧二六四二）灯之　陰尓蚊蛾欲布　虚蝉之　妹蛾咲状思　面影尓所見　トモシビノカゲニカガヨフウツセミノイモガヱメリシオモカゲニミユ　ともしびのかげにかがよふうつせみのいもがゑまひしおもかげにみゆ／夫木抄・七九一九／人麿集Ⅱ・四七四／人麿集Ⅲ・四六四／人麿集Ⅳ・一四九

〔以上五首担当　久保木〕

二〇六七　しろたへのころもでかへでわれまつとあるらんきみはおもかげに見ゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】衣をさし交わすこともなく、わたしを待っているであろうあなたの姿は、おもかげに立って見える

のです。

【語句】〇しろたへの　「衣」に掛かる枕詞。〇ころもでかへで　衣手替へで。身に着る衣服をとりかえることなく。すなわち、共寝する機会もなく、ということ。「ころもで」は衣服の袖のことだが、ここでは衣服そのもののこと。所載欄の万葉集では「ころもでかれて」となっており、それならば「衣手離（か）れて」であって、衣をさし交わすこともなくて、ということになる。〇われまつとあるらんきみ　わたしの訪れを待とうとしているあなた。推量の助動詞「らん」を用いて、相手のようすを推量する言い方をとっている。〇おもかげ　ここでは、想像の中に立ち現われる相手の姿かたちのこと。

【所載】万葉集・二六一二（旧二六〇七）敷細之　衣手可礼天　吾乎待登　在監子等者　面影尓見　シキタヘノコロモデカレテワレヲマツトアリケムコラハオモカゲニミユ　しきたへのころもでかれてわをまつとあるらむこらはおもかげにみゆ／奥儀抄・三八五

二〇六八　さかざらむものとはなしにさくらばなおもかげにのみさだき見ゆらん

みつねぁる本

【異同】ナシ

【現代語訳】［第五句は傍記により「まだき見ゆらん」として解する。］花として咲かないもの、というわけではないのに、さくらばなは、まだその時期にならぬうちから、どうしてこんなにおもかげにのみ立って見えるのであろう。

【語句】〇さかざらむものとはなしに　咲かないだろう、というものではないのに。咲くにきまっているのに。〇まだき　まだその時期になっていないのに。早くも。〇見ゆらん　見えるのであろうか。ここの助動詞「らん」は「どうして……なのであろうか」と原因・理由を推量している。

【所載】拾遺集・雑春・一〇三六／躬恒集Ⅰ・五〇／躬恒集Ⅱ・二二九／躬恒集Ⅲ・一五三／躬恒集Ⅴ・七一／亭子院歌合・三／俊頼髄脳・三九／和歌童蒙抄・八八一／奥儀抄・七七／袋草紙・三三一、五九三／和歌色葉・五八／八雲御抄・五〇／十訓抄・六

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

二〇六九　夢にても見ゆとは見えじあさな〳〵わがおもかげにはづる身なれば（ツイヘジ）（これこそいせと覚え候へ）

【異同】ナシ
【現代語訳】夢の中でさえも、あなたに逢った、と見えるようなことはしますまい。朝ごとに鏡に映るわが顔かたちに恥じている身なのですから。
【語句】〇夢にても　現実にはもちろんのこと、夢の中においてさえも。〇見ゆとは見えじ　あなたに逢った、と見えるようなことはしますまい。「見ゆ」は、恋の場で相手に逢った、ということ。「見えじ」は、外から見てそのように見えるようなことはしますまい、ということ。〇わがおもかげにはづる身　鏡に映るわが容姿について恥じている自分、ということ。恋のやつれがあることを恥じる、の含みがある。
【所載】古今集・恋四・六八一／伊勢集Ⅰ・一六〇／伊勢集Ⅱ・一六四／伊勢集Ⅲ・一六四
【参考】作者名表示の位置に細字で「これこそいせと覚え候へ」とあるのは、この歌は伊勢の作であると思われる、とした書きこみ。底本だけでなく、御所本・桂宮本・大久保本でも、同様の細字補入の形になっている。古今六帖は、この歌と次の歌二〇七〇番歌とを一対の贈答歌として扱い、二〇七〇番歌に「伊勢」と作者表示しているので、それに対して、この歌（二〇六九番歌）こそ伊勢の歌だ、と言ったものである。なお、所載欄の文献で見れば、この歌も次歌も、共にある男（平貞文と見られる）とのつきあいの中で詠まれた伊勢の歌である。作者を「伊勢」とする指摘は正しいが、この二首が一対の贈答歌であったとは認め難い。次歌参考欄参照。

返

二〇七〇　おもかげはみづにつけても見えずやはこゝろにのりてこがれしものを　伊勢

【異同】ナシ
【現代語訳】わたしのおもかげは、水に映ってでも見えないでしょうか、見えるはずです。これほど一心になってあなたのことを恋いこがれていたのですもの。
【語句】〇みづにつけても　水に映ってでも、ということ。伊勢集で見ればこの歌は、伊勢とある男（平貞文と見られる）とのあいだで「見つ」という語をめぐってやりとりされた贈答歌の中の、男からの贈歌であり、「み

づ」は「水」に「見つ」を掛けた技巧である。○見えずやは　見えないだろうか、いや、きっと見えるはずだ。「やは」は反語。○こゝろにのりて　心に乗りて。そのことが心をすっかり占めてしまって。心がそのことばかりを考えて。○こがれしものを　恋いこがれていたのだから。恋の思いの「焦がれ」に「みつ（水）」の縁で舟の「漕がれ」を掛けている。

【所載】伊勢集Ⅰ・三二五／伊勢集Ⅱ・三二四／伊勢集Ⅲ・三二六

【参考】詞書の位置に「返」とあるのは、前歌二〇六九番歌に対する返歌、ということ。すなわち古今六帖は、前歌とこの歌を一対の贈答歌として扱っている。しかし前歌参考欄でも述べたごとく、この二首は本来対になるべき贈答歌ではない。伊勢集諸本によれば、この歌は次歌二〇七一番歌と対になった贈答歌であり、ある男（平貞文と見られる）から伊勢へ届けられた歌である。従って、これは伊勢の歌ではなく、ここに「伊勢」と作者名があるのは、所載欄の文献に一致しない。

二〇七一　こゝろにや○のりてこひしきあふみてふなはいたづらに見つかげもせで

【異同】ナシ

【現代語訳】ほんとうにそんなに一心になって私に恋いこがれていらっしゃるのでしょうかね。逢う身（近江）という名もむなしく、あなたの姿は水影にさえも映ってはいないのですが。

【語句】○こゝろにやのりてこひしき　ほんとうに「心に乗りて」恋い焦れているのか。そうは思えない、という気持。前歌の下句「こゝろにのりてこがれしものを」を受けて言われている。○あふみてふなはいたづらに　思う人に「逢ふ身」という意味の「近江」の名もむなしく。「逢ふ身」に「近江」を掛けている。ここに「近江」という国名が出てくるのは、この歌を贈られた相手がなにか「近江国」と縁のある立場にいたからであろうと思われるが、具体的な事情は不明。○見つかげもせで　「見つ」に「水」を掛けている。水影にさえも見えないで。まったく姿など見えないのに、ということ。前歌の「みづにつけても見えずやは」を受けて言われている。

【所載】伊勢集Ⅰ・三二六／伊勢集Ⅱ・三二五／伊勢集Ⅲ・三二七

【参考】前歌参考欄に述べたごとく、伊勢集諸本で見れば、この歌は、前歌二〇七〇番歌に対する伊勢の返歌で、「見つ」の一語にかかわって返された歌である。

〔以上五首担当　山下〕

二〇七二　或本ゆふぐれはものおもひまさる見し人のことゝひしかほおもかげにしてカサノニヨラウイ

【異同】ナシ　「カサノニヨラウイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】夕暮れ時はもの思いがまさる。あの人が語りかけてくれたお顔が面影に現れて。
【語句】〇ゆふぐれはものおもひまさる　夕暮れ時は恋の物思いがますます勝るということ。和泉式部正集にも「夕暮れの思ひ」という題のもとに詠まれた「夕暮れになどもの思ひの勝るらん待つ人のまたある身ともなし」（一七一）がある。〇見し人のことゝひしかほ　逢瀬の折に、相手がいろいろと語りかけてきた姿。「見し人」はお逢いした人。「こととふ」は語りかける、愛の言葉を交わす、の意。「山彦のよそに応へし声なれど言問ひしこそうれしかりけれ」（古今六帖・九九九）。〇おもかげにして　相手の姿が面影に現れて。「立ち替はり月重なりて会はねどもさね忘らえず面影にして」（万葉集・一七九八〈旧一七九四〉）。
【所載】古今六帖・第五帖「ひごろへだてたる」二七六八／万葉集・六〇五（旧六〇二）暮去者　物念益　見之人乃　言問為形　面景為而　ユフサレバモノオモヒマサルミシヒトノコトトヒシサマオモカゲニシテ　ゆふされば　ものもひまさるみしひとのことゝふすがたおもかげにして／玉葉集・恋五・一七六七
【参考】本文は右上に「或本」とあり一行目下の左に「カサノニヨラウイ」と小さく作者名表示があるが、所載欄の万葉集では笠女郎が家持に贈った一連の歌群中にあり、これと一致する。

二〇七三　かくばかりおもかげにのみおもほえばいかにかもせん人めしげくて　かさの女らうやかもちともある本

【異同】いかにかもせん―いかにかもてん（御）
【現代語訳】これほどあなたのことを面影としてのみ恋しく思われたら、どうしたらいいのでしょう。世間の目があまりに多くて。
【語句】〇おもかげにのみおもほえば　幻影としてばかり思われたら。恋しい人が常に面影としてのみ目の前に見えたら、ということ。「面影」とは、現実としてではなく、想像や思い出の中にイメージとして立ち現れる顔や姿のこと。「来し時と恋ひつつをれば夕暮れの面影にのみ見えわたるかな」（古今集・一一〇三）。〇いかにかもせん人めしげくて　どうしたらいいのでしょう。人目があまりに多くて。万葉集に「今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむするすべのなさ」（三九五〇〈旧三九二八〉）という歌があり、恋心ばかりが募ってしまった

らなすすべもないのでどうしたらいいのか、という状況が当該歌と通じる。「人目しげくて」は、世間の目が多くてあなたのもとに通えないのに、という心情であろう。
【所載】万葉集・七五五（旧七五二）如是許　面影耳　所念者　何如将為　人目繁而　カクバカリオモカゲニノミオモホエバイカニカモセムヒトメシゲクテ　かくばかりおもかげにのみおもほえばいかにかもせむひとめしげくて
【参考】作者名表示として「かさの女らう　やかもちとも　ある本」と記載があるが、所載欄の万葉集では大伴家持が坂上大嬢に贈った一連の歌群中に位置し、作者は家持と考えられる。

二〇七四　うたゝね（うたゝねにはかなく人を夢に見てうつゝにさへもおつるなみだか）

【異同】ナシ
【現代語訳】うたた寝の中ではかなくあの人を夢に見て、現実でまでも落ちる涙であることよ。
【語句】◎うたゝね　寝るとはなしにうとうとと眠ること。和歌では恋の物思いと関係が深いことが多い。〇はかなく人を夢に見て　うたた寝の夢で恋しい人をほんのつかの間に見て。「はかなく」はすぐに実体の消えてしまう頼りなさ、あっけなさを表す。〇うつゝにさへもおつるなみだか　現実でまでも落ちる涙であることよ。「……も……か」で驚きや感動の気持ちを表す。「夢」と「うつつ（現）」の対比の中で深い恋心を詠じている。
【所載】新後拾遺・恋二・一〇一一
【参考】左兵衛佐定文歌合に「あかずにて別れし人を夢に見てうつつにさへもおつる涙か」（三四）という類似した一首がある。

二〇七五　たらちねのおやのいさめしうたゝねはものおもふときのわざにざりける（こまちぁる本　ヒトマツ　ゾア）

【異同】ナシ
【現代語訳】親の禁止したうたた寝は、恋のもの思いの時の行為であったのだなあ。
【語句】〇たらちねの　「母」や「親」にかかる枕詞。〇おやのいさめし　親の禁止した。「いさむ」は禁じる、

制止する。「恋しくは来ても見よかしちはやぶる神の諫むる道ならなくに」（伊勢物語・一三一）。○わざにざりける　行為であったよ。「わざ」は行い。「……にざりける」は「……にぞありける」で、「ざり」は係助詞「ぞ」に動詞の「あり」が複合した形。「もどかしと恋する人を見しかどもげにて死ぬべきわざにざりける」（寛和二年内裏歌合・三九）。
【所載】拾遺抄・恋下・三二三／拾遺集・恋四・八九七／夫木抄・一六五五九／奥儀抄・二六四／和歌色葉・三六三
【参考】「こまち　ある本」と作者名表示があるが、所載欄の拾遺抄、拾遺集ではよみ人知らずの歌。

二〇七六　うたゝねにこひしき人を見てしよりゆめてふものはたのみそめてきコマチ

【異同】ナシ　「コマチ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】うたた寝の夢に恋しいあの人を見てからというもの、夢という儚いものを頼みに思い始めてしまった。
【語句】○ゆめてふものはたのみそめてき　夢というものを頼みにするようになってしまった。「てき」は完了の助動詞「つ」の連用形に過去の助動詞「き」のついたもの。「夢」は頼みがいのない儚いものであることを前提として、そのようなものまで頼みにし始めてしまったという恋情を表現している。「散りぬべき花心ぞとかつ見つつ頼みそめけむ我やなになる」（元良親王集・九四）。
【所載】古今集・恋二・五五三／小町集Ⅰ・一七／小町集Ⅱ・二八
【参考】作者名「コマチ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　尾高直子〕

二〇七七　うたゝねのゆめにやあるらんさくら花はハかなくみてぞやエみぬべらなる

【異同】ナシ
【現代語訳】うとうととした眠りのなかの夢だったのであろうか、桜花は。ほんの束の間見ただけで終わってしまったことだ。
【語句】○うたゝね　二〇七四番歌参照。○はかなく見てぞ　ほんの束の間見て。「はかなく」は、あっけない、

つかの間。所載欄の躬恒集には「はかなく見えて」とある。○やみぬべらなる　終わってしまったことよ。「べらなる」は「べらなり」の連体形。「べらなり」は、助動詞「べし」の語幹「べ」に、客体化の接尾語「ら」、断定の助動詞「なり」によって構成された確定推量の助動詞。様態推量、婉曲の助動詞とされるが、平安初期の漢文訓点資料に散見し、漢文訓読に用いられた表現で、比喩を心情的に実体化させようとする強調の意をもつ。桜の花があまりにもあっけなく散ってしまったことを、はかないものの代表である「うたゝねのゆめ」に喩えた趣向。

【所載】躬恒集Ⅰ・一四六／躬恒集Ⅱ・五七／躬恒集Ⅲ・四五／躬恒集Ⅳ・四三〇／亭子院歌合・一六

【参考】作者名はないが、躬恒集にあり、亭子院歌合でも躬恒の作となっている。

なみだがは

二〇七八　つれづれのながめにまさるなみだがはそでのみひちてあふよしもなし（ノキ）

としゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】することもなくぼんやりともの思いにふけっていると、折からの長雨で水かさを増した川のように涙があふれ、袖が濡れるばかりであなたに逢う手だてもありません。

【語句】◎なみだがは　涙川。おびただしく流れる涙を川と見立てる。八雲御抄は伊勢国の歌枕とするが、実際の地名としてよりも、主として恋歌における比喩表現としての用例が多い。○あふよしもなし　逢う手段もない。所載欄の四五八番歌（既出）では「あふよしもなみ」とあるが、歌が所載される古今集、伊勢物語をはじめとする文献は、全て当該歌と同様「あふよしもなし」となっている。

【所載】古今六帖・第一帖「あめ」四五八番既出

返し

二〇七九　あさみこそ袖はひつらめなみだがは身さへながるるときかばたのまん

なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】お気持ちが浅いからこそ、袖が濡れる程度なのでしょう。あなたの流す涙が川となって身まで流れると聞いたなら、頼みにいたしましょう。
【語句】○あさみこそ　浅いからこそ。「あさみ」は、形容詞「あさし」の語幹に接尾語「み」がついた形で、原因、理由を表す。相手の気持ちの浅いことに涙川が浅いことを掛ける。○ひつ　漬つ。水につかる。濡れる。○なみだがは　二〇七八番歌参照。○身さへながると　身までも流れると。思いが深ければ、流す涙でできる川も深いはず、袖が濡れるだけでなく、身体ごと流されるほどの気持ちがあれば、という期待をこめる。
【所載】古今集・恋三・六一八／業平集Ⅰ・二六／業平集Ⅱ・四四／業平集Ⅲ・一四／業平集Ⅳ・九／八雲御抄・三五／悦目抄・七四／伊勢物語・一〇七段・一八四
【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。「返し」とあるように二〇七八番への返歌である。古今集、伊勢物語には、女に代わって業平が詠んだ歌とある。

二〇八〇　なみだがはほりやるかたのなければや身をはなれてはながれざるらむ

【異同】ほりやるかたの―おりやるかたの（大）
【現代語訳】川のようにあふれる涙は、掘ってよそにやるすべがないので、私の身を離れては流れることがないのだろうか。
【語句】○なみだがは　二〇七八番歌参照。○ほりやるかたの　掘り遣る方の。「ほりやる」は、用例がない語だが、「やる」は水を他方に流れさせることであるから、掘って他に流れてゆくようにする意とみる。所載欄の続古今集では「せきやるかたの」とある。○ながれざるらん　流れないのだろうか。「なければや」の「や」を受けて疑問となる。「ほり」と「なかれ」は「（涙）川」の縁語。
【所載】続古今集・恋二・一〇九七

つらゆきぁる本

二〇八一　よとゝもにながれてぞ行なみだがはみづもこほらぬみなはなりけり（フユ）

【異同】つらゆきぁる本―つらゆき（大）
【現代語訳】絶えず泣かれて、流れ続けてゆくことだ。涙川は、水も凍ることがないほど激しい流れに浮かぶ、

水の泡のようなものだったのです。

【語句】〇よとゝもに　常に。絶えず。〇ながれてぞ行　流れてぞ行く。流れ続けてゆく。「流れて」に「泣かれて」を掛ける。〇なみだがは　二〇七八番歌参照。〇みづもこほらぬ　水も凍らぬ。傍記、所載欄の古今集、貫之集に「ふゆもこほらぬ」とあるのが本来の形と考えられるが、本文通りに訳した。〇みなはなりけり　水泡（みなわ）なりけり。水泡だったのだ。「涙」ではなく、「涙川」を「水泡」とする趣向がわかりにくいため、古今集の注釈書では「水泡」を「水」のこととする例もあるが、そのまま「水泡」と解した。「水泡」は、「巻向の山辺とよみてゆく水の水泡のごとし世の人我は」（万葉集・一二七三〈一二六九〉）のごとく、激しい流れによってできるものとされ、所載欄の古今集、貫之集では恋部にあることから、あなたを思って流す涙が川となって、常住不変の激しさで流れ、水泡となっている、と訴えた歌とみられ、当該歌も結局は遂げられぬ恋のはかなさを「水泡」に喩えたと考えられる。「な」音の繰り返しが効果的。

【所載】古今集・恋二・五七三／貫之集Ⅰ・六〇三

【参考】作者名「つらゆき　ある本」となっているが、古今集では貫之の作、貫之集にもみえる。

〔以上五首担当　中野〕

二〇八二　なみだがはいかなるみづかながるらんなどわがこひをけつときのなき（人モ）

【異同】ナシ

【現代語訳】涙川には、いったいどのような水が流れているのだろう。川ならばその水は火を消してくれるはずなのに、涙川の水はどうしてわが恋の火を消してくれるときがないのであろうか。

【語句】〇なみだがは　二〇七八番参照。〇などわがこひをけつときのなき　など我が恋を消つときのなき。どうしてわが恋の火を消すときがないのか。「恋（こひ）」に「火」を掛けた。「けつ」は「消つ」、四段活用の他動詞。

【所載】新拾遺集・恋一・九三八／躬恒集Ⅱ・二九八／躬恒集Ⅴ・八五／興風集Ⅰ・七二／興風集Ⅲ・一〇／亭子院歌合・五一／袋草紙・六三三／八雲御抄・八四

二〇八三　いかばかりものおもふときのなみだがはからくれなゐにそでのそむらん

【異同】ナシ
【現代語訳】もの思いするときの涙川は、いったいどれほどまでにからくれないの色になって、袖が染まるのであろうか。
【語句】〇いかばかり　いったいどのくらい。問う形として第五句「そでのそむらん」にかかる。〇なみだがは　二〇七八番参照。〇からくれなゐ　韓から渡来した紅、の意。美しい深紅の色。ここでは血の涙の意を含む。〇そでのそむらん　袖の染むらん。袖が染まるのであろうか。ここの助詞「の」は主格。「そむ」は四段活用の自動詞「染む」の終止形。「らん」には、初句の「いかばかり」を受けて疑問の意がある。
【所載】新勅撰集・恋二・七三三

二〇八四　はやきせにみるめおひせばわが袖のなみだのかはにうへて見ましを　つらゆきある本

【異同】ナシ
【現代語訳】流れの速い瀬に、もし、「見る目」という名の海藻が生えるものならば、わが袖の涙の川に植えて、見たいものを。
【語句】〇みるめおひせば　海松布が生えるならば。「みるめ」は海松布、海藻類の総称。ここではその「海松布」に恋の「見る目」（逢う機会の意）を掛けた。〇わが袖のなみだのかはにうへて見ましを　「うへて」は「植ゑて」。わが袖にも速き瀬のごとき涙川が流れているのだが、そこに海松布（見る目）を植えて、それを見たいものを、ということ、すなわち、逢う瀬があってほしいということ。
【所載】古今集・恋一・五三一
【参考】作者名を「つらゆきある本」としているが、この歌を貫之の作とする根拠は、見出せない。

二〇八五　なみだがは身をしがらみにせきかねてながれくるとはしらずやあるらん

【異同】ナシ
【現代語訳】涙川では、わが身をしがらみによって堰きかねて、流れてくるのだとは、知らないでいるのだろうか。（わたしが、川のように流れる涙を堰き止めかねて、泣けてくるのだとは、あの人は知らないでいるのだろ

うか。）

【語句】〇なみだがは　二〇七八番参照。〇しがらみ　流れる水の中に杭を立てて、木や竹の枝などをからませた、流れを塞くためのもの。〇せきかねて　堰き兼ねて。堰くことができなくて。〇ながれくる　「流れくる」に「泣かれくる」を掛けた。「しがらみ」「せき」「ながれ」は「川」の縁語。

【所載】ナシ

（この二首　或本）

二〇八六　あふことのきみにたえにしわが身よりいくらのなみだながれいづらん　伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたに逢うことの絶えてなくなったわたしの身から、いったいどれほどの涙が流れ出ることであろうか。

【語句】〇あふことのきみにたえにしわが身　逢ふことの君に絶えにしわが身。あなたに逢うことがまったくなくなってしまったわが身、ということ。〇いくらのなみだ　どれほどの涙。流れ出る涙の量を問う形をとることによって、その涙が川のようにおびただしいことを暗示している。一首の中に「なみだがは」の語が用いられていないのに、古今六帖においてこの歌が「なみだがは」の題の下に収められているのは、その暗示によってである。

【所載】伊勢集Ⅰ・一〇五／伊勢集Ⅱ・一〇七／伊勢集Ⅲ・一〇三／亭子院歌合・五九

【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　山下〕

二〇八七　なみだがはうきたるあはと身をなして人のうきせ（フチ）をながれてを見ん

【異同】ナシ

【現代語訳】涙川に浮いている泡にわが身を変えて、私を泣かせたあの人のつらい時を、いつまでも生き長らえてしっかり見届けよう。

【語句】〇なみだがは　二〇七八番歌参照。〇うきたるあはと　「あは」は「あわ（泡）」。浮いている泡と。〇

人のうきせを　「うきせ」は「憂き瀬」。つらい境遇。つらい時。一七四〇番歌参照。〇ながれてを見ん　「流れて……見ん」は、長らえて見よう。「を」は強めの間投助詞。「ん」は意志を表す。「伊勢の海の小野の湊の流れ江の流れても見ん人の心を」（古今六帖・一六六一）。なお、「ながれて」に「泣かれて」を掛ける。「浮き」「泡」「瀬」「流れ」は「川」の縁語。また「泣かれて」は「涙」の縁語。

【所載】ナシ

二〇八八　きみこふるなみだしなくはからころもむねのあたりはいろもえなましツラユキ

【異同】ナシ　「ツラユキ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。

【現代語訳】あなたを恋い慕って流す涙がもしなかったら、この美しい衣の胸のあたりは色が燃え立ってしまうことでしょう。涙があるから、その思いを消すことができるのですよ。

【語句】〇なみだしなくは　涙がもしなかったら。「し」は強めの副助詞。「なくは」は「なし」の連用形に係助詞「は」を伴い、仮定条件を示す。〇からころも　大陸渡来の衣。あるいは外来風の衣。転じて、一般の衣服、着物の意。和歌にのみ用いられる語。「朝影にわが身はなりぬからころも裾のあはずて久しくなれば」（万葉集・二六二六〈旧二六一九〉）などのように、「からころも」が詠まれた歌は少なくとも平安初期まではもっぱら逢えない人のことを嘆く気持ちが籠められているとする説（「王朝和歌における服飾表現―「からころも」をめぐって―」和田早苗「服飾美学」一九九八・九）もある。〇いろもえなまし　色燃えなまし。色が燃えてしまうことだろう。「火」のような色でという意味で、「燃ゆ」が用いられている。「な」は完了の助動詞「ぬ」の未然形。「まし」は仮定条件の「なくは」と呼応して反実仮想の意を表す。なかったら……燃えてしまうことだろう。実際には涙があるから、燃えない、の意。

【所載】古今集・恋二・五七二／新撰万葉集・四五八／貫之集Ⅰ・五六三／貫之集Ⅲ・五

【参考】作者名「ツラユキ」は所載欄の文献に一致する。

二〇八九　みをせばみそでよりもふるなみだにはつれなき人もぬれよとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】身が狭いので、袖より洩れる涙には、私に対して冷たいあの人も、私と同じように濡れてほしいと

思うことです。

【語句】〇みをせばみ　身を狭み。身が狭いので。「……を……み」は原因・理由を表す。ただし、身が狭いとは具体的にどのようなことをいうのか。衣服に関係があるのか。身分が高いと一般にゆったりとした生地を使うことが多いので、ここは身分の低さと関係し、身幅が狭いので、の意か。「身を狭み」の用例は他に見当たらない。〇そでよりもふる　「ふる」は「降る」か。しかし「袖に……降る」とする用例は多いが、「袖より……降る」とする用例は見当たらない。あるいは本文に問題があるか。「そでよりもゝる」「そでよりもるゝ」などの誤写と考えると、袖より洩れる涙、の意となり、理解しやすい。現代語訳は一応誤写と考え、「洩る」に従った。〇つれなき人　冷淡な人。そっけない人。「わが宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせし間に」（古今集・七七〇）。

【所載】ナシ

二〇九〇　つゝめどもそでにたまらぬしら玉は人を見ぬめのなみだなりけり　アベノキヨユキ

【異同】ナシ　「アベノキヨユキ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。

【現代語訳】人目につかないように大事に包んでいるけれども、袖にたまらないで外に流れ出る白玉は、実はあなたに逢えないで私の目から出る涙だったのです。

【語句】〇つゝめどもそでにたまらぬしら玉　大切に包むけれども袖にたまらない白玉。「しら玉」は通常真珠をさすが、ここは経文に関係がある。参考欄参照。〇人を見ぬめのなみだ　あなたを見ないせいで私の目から出る涙。あなたに逢えないために流す涙。

【所載】古今六帖・第五帖「たま」三一八五／古今集・恋二・五五六／新撰和歌・三四八／小町集Ⅰ・三九／小町集Ⅱ・三／小町集Ⅲ・四四／八雲御抄・三二／悦目抄・七一

【参考】作者名「アベノキヨユキ（安倍清行）」は、所載欄の作者名表記がある文献に基本的に一致する。なお、古今集によれば、当該歌は、さる法事の際、導師の言った言葉を用いて詠みかけた恋の歌という。その言葉が「白玉」で、法華経の五百弟子授記品に見える「以無価宝珠繋其衣裏」の衣の裏の「無価宝珠」がそれであろうと古来説かれている。「無価」とは価がつけられないほど高価な、という意。次の二〇九一番歌とは贈答をなす。

こまち

二〇九一　をろかなるなみだぞゝでにたまえなすわれはせきあへずたきつせなれば

【異同】たまえなす―たまはなす（御・桂・大）
【現代語訳】あなたの、そのいい加減な涙が袖の上で玉の形を造るのです。私の方はとても堰き止めることができません。激しく、急流のように流れる涙ですから。
【語句】〇をろかなる　おろかなる。疎かな、いい加減な、の意。〇たまえなす　底本の誤写であろう。異同欄ならびに所載欄掲出の本文によって「たまはなす」と解する。「なす」は、造る。生む。〇せきあへず　堰き止めようとしても堰き止めきれない。「あへず」は「敢へず」で、完全にしきれない意を表す。〇たきつせ　滝つ瀬。水が湧きあがる意の動詞「たぎつ」の連体形に「瀬」が伴った「たぎつ瀬」から生じた語。水が激しく流れる瀬。
【所載】古今集・恋二・五五七／小町集Ⅰ・四〇／小町集Ⅱ・四／小町集Ⅲ・五、四五／八雲御抄・三三／悦目抄・七二
【参考】作者名「こまち」は所載欄の文献に一致する。二〇九〇番歌に対する返歌。

〔以上五首担当　久保木〕

つらゆき

二〇九二　こひしきやいろにはあるらんなみだがはながるゝおくのみづぞうつろふ

【異同】ナシ
【現代語訳】恋しく思うことは色なのであろうか。涙川と流れる目の奥の水の色は赤く変じている。
【語句】〇こひしきやいろにはあるらん　恋うことは色なのであろうか。「には」の「に」は断定の助動詞の連用形。原因理由を推量する助動詞「らん」は、疑問の係助詞「や」の結び。〇なみだがはながるゝ　「ながるる」は、涙川が「流るる」と、「泣かるる」の掛詞。〇みづぞうつろふ　水の色が赤く変じている。涙川は血の涙があふれて川となるので、水の色が変じるという。涙川が「色」になって現れるという歌に、「くれなゐに袖ぞうつろふ恋しきや涙の川の色にはあるらん」（貫之集Ⅰ・五九八）がある。
【所載】貫之集Ⅰ・五四五
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

二〇九三　かけていへばなみだのかはのせをはやみこゝろづからやまたはながれん

【異同】ナシ
【現代語訳】口に出して言いますと、涙川の瀬の流れが速いので、他ならぬわが心から、我が身も流されてしまうほどに、また泣かれてしまうのでしょうか。
【語句】〇かけていへば　口に出していうと。〇なみだのかはのせをはやみ　涙川の瀬の流れが速いので。「せきもあへず涙の川の瀬をはやみかからんものと思ひやはせし」（後撰集・一〇五八）。〇こゝろづから　自分の心によって。他ならぬ自身の心のせいで。〇またはながれん　再び流れていくのでしょうか。「ながれん」には、「泣かれん」が掛けられており、この句には、「また泣かれてしまうのでしょうか」という意味がある。なお、『伊勢集全釈』によれば、この歌は、昌泰四年（九〇一）正月の菅原道真左遷にかかわって、源敏相がもとの官職を解かれて但馬国に流されたとき、伊勢から送られた歌に対する返歌である。
【所載】伊勢集Ⅰ・一八／伊勢集Ⅱ・一九／伊勢集Ⅲ・一七

二〇九四　あかずしてきみをこひつるなみだにはうきしづみつゝやせわたりつる

【異同】うきしつみつゝ―うきみしつみゝつゝ（大）
【現代語訳】飽くことなくあなたを恋い慕って流すこの涙の川には、浮いたり沈んだりしながら八瀬を通過したことです。私の体は、すっかり痩せ細っています。
【語句】〇あかずしてきみをこひつる　飽くことなくひたすらあなたのことを恋うている。〇うきしづみつゝ　涙川の流れに浮いたり沈んだりして。所載欄の文献に「うきみしづみみ」、「うきみしづみて」。〇やせわたりつる　すっかり痩せはててしまっている。「痩せわたり」に、「涙（川）」の縁語「八瀬渡る」を掛ける。「聞くにだにやせわたるなる水なればおりたつ人ぞ思ひやらるる」（実頼集・五五）。
【所載】新撰萬葉集・四六六／寛平御時后宮歌合・一七〇

二〇九五　うきことのかくわくときはなみだがはめのまへにこそおちたぎりけれィセ

【異同】ナシ　「イセ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】つらいことがこのように続いて湧き出るときは、涙があふれて川となって目の前を激しく流れ落ちていくことです。
【語句】○うきことのかくわくときは　つらく思われることがこのように湧き出るときは。○なみだがはめのまへにこそおちたぎりけれ　涙が川となって目の前を激しく流れ落ちていくことだ。「落ちたぎる」は、高所から低所へ流れ落ちること。なお、「湧く」「たぎり」は、「涙川」の縁語。
【所載】伊勢集Ⅰ・一六一／伊勢集Ⅱ・一六五／伊勢集Ⅲ・一六五
【参考】作者名「イセ」は所載欄の文献に一致する。

うらみ
二〇九六　うくもよにおもふこゝろにかなはぬかたれもちとせのまつならなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】つらいことにまあ、あの人への思いは決して叶わないものなのか。人は誰しも千年の松のごとき命を持てるものではないのに。
【語句】◎うらみ　「うらみ」は、恨めしく思うこと、心残りに思うこと、嘆き悲しむこと、などの意。この第四帖「恋」部の小題「うらみ」の歌には、「うらむ」と直接的に表現する他に、相手のつれなさに嘆いたり、我が身のふがいなさを嘆じたりして、「憂し」「悲し」「つらし」などの語が見え、報われぬ恋の思いが詠まれている。○うくもよにおもふこゝろにかなはぬか　憂くもよに思ふ心にかなはぬか。つらいことにまあ、あの人を思う私の心は決してかなうことがないのか。「よに」は、どんなことがあっても決して……ない、の意で、「叶はぬ」に掛かり、「憂くも」も、「叶はぬ」に掛かる。終助詞「か」は係助詞「も」と呼応して詠嘆を表す。○ならなくに　であるわけではないのに。
【所載】ナシ
【参考】源氏物語の柏木巻や宿木巻に、「誰も千歳の松ならぬ世」という当該歌の引歌表現が見える。
〔以上五首担当　加藤〕

二〇九七　よのなかのうきもつらきもかなしきもたれにいへとか人のつれなき（ウレシキ）

【異同】ナシ
【現代語訳】男女の仲の、いやなことも辛いことも悲しいことも、誰に訴えよというつもりで、あの人はつれなくするのでしょうか。
【語句】〇よのなかのうきもつらきもかなしきも　男女の仲のいやなことも辛いことも悲しいことも。第五句の「人」のつれなさゆえにそのような感情になるということ。したがって、ここでの「世の中」は、男女の関係と解した。「世の中の憂きもつらきもとりすゑて知らする君や人をうらむる」（元良親王集・三八）。〇たれにいへとか人のつれなき　誰に訴えて言えというつもりで、あの人はつれないのか。「かきくらし降る白雪の下消えにきえうせねとや人のつれなき」（古今六帖・七一〇）。
【所載】続後撰集・恋二・七八八

二〇九八　いへばえにいはねばくるしよのなかをなげきてのみもつくすべきかな（ツハリニ）（スグイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（自分の気持ちを）言おうとすると言えず、言わないと苦しい。この人生を、ただ嘆くばかりで終えることだろうよ。
【語句】〇いへばえに　言おうとすると言えず。「えに」は、動詞「得（う）」の未然形「え」に、打消の助動詞「ず」の連用形古形「に」がついたもの。「いへばえにいはねば胸にさわがれて心ひとつに嘆くころかな」（伊勢物語・三四段・六八）。〇よのなか　この世。人間の一生。〇つくすべきかな　終えることだろうよ。「つくす」は「尽くす」。終わりにする意。「かくしつつ世をやつくさむ高砂の尾の上に立てる松ならなくに」（古今集・九〇八）のように、「世を尽くす」は一生を終える意であり、「世の中を尽くす」も同様と解した。
【所載】ナシ

二〇九九　人やりにあらぬものからたましゐとひとつこゝろに身をぞうらむる（ある本）

【異同】ナシ
【現代語訳】他人が強いたわけではなく、自ら選んだことだけれども、我が魂も、我が身の上も、（恋に苦しみ、

思いのままにならないことを）ともに恨めしく思うことだ。
【語句】〇人やりにあらぬものから　人が強いたのではないけれども。「人やり」は、自らの意志ではなく他人が強制すること。「人やりにあらぬことにもあらなくに身もいたづらに成りぬべきかな」（信明集・六四）。〇たましゐ　たましひ（魂）。「恋しきにわびてたましひ迷ひなばむなしきからの名にや残らむ」（古今集・五七一）のように、恋しさが募ると身体から離れてしまうものと捉えられていた。〇ひとつこゝろに　同じ気持ちで。ここでは魂も身もともに、の意と解した。〇身をぞうらむる　我が身の上を恨めしく思うことだ。「ふる雪につもる年をばよそへつつ消えむ期もなき身をぞ恨むる」（蜻蛉日記・中巻・一五〇）。
【所載】ナシ

二一〇〇　おもはずはつれなきこともつらからじたのめば人をうらみつるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】（あの人のことを）恋い慕ってないならば、つれない態度もつらく感じることはあるまい。期待をするから、あの人を恨んでしまうのだ。
【語句】〇おもはずは　恋い慕っていなければ。「ずは」は、打消「ず」に係助詞「は」がついたもの。順接仮定条件を表す。……ないならば、の意。「思はずは思はずとやは言ひはてぬなぞ世の中の玉だすきかな」（古今六帖・三二一六）。〇たのめば　期待すると。「たのむ」は、「頼む」。相手の言葉を信じ、あてにすること。ここでは恋愛の成就を期待している。「ば」は順接確定条件。
【所載】拾遺抄・恋下・三三五／拾遺集・恋五・九七三

二一〇一　あさなけによのうきことをしのぶ（ラズシ）とてながめせしまにとしぞへにける

【異同】ナシ
【現代語訳】朝も昼もずっと、人生のつらさを耐え忍んでもの思いにふけっていた間に、年月が経ってしまったなあ。
【語句】〇あさなけに　朝に昼に。いつもいつも。「朝なけに見べき君としたのまねば思ひたちぬる草枕なり」（古今集・三七六）。〇ながめせしまに　もの思いにふけっていた間に。「ながめ」は、もの思いにふけりながら、ぼ

んやりとひとところを見ているさま。「花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」（古今集・一一三）。
【所載】後撰集・雑二・一一七四／新勅撰集・雑一・一一二五／新撰和歌・三二三／綺語抄・一〇八
〔以上五首担当　諸井〕

二一〇二　われはかりわれをおもはん人もがなさてもやうきとよをこゝろみん

【異同】ナシ
【現代語訳】私が（あの人を）思うほどに、私のことを思ってくれる人がいたらいいのになあ。そうであっても辛いものであるのか、男女の仲というものを試してみよう。
【語句】〇われはかりわれをおもはん人もがな　我ばかり我を思はん人もがな。私が（あの人を）思うほどに私のことを思ってくれる人がいたらいいのになあ。「我（が思ふ）ばかり我を思はん人」の意として現代語訳をした。「ばかり」は程度の副助詞。「もがな」は、願望の終助詞。……だったらいいのになあ、の意。〇さてもやうきと　さてもや憂きと。そうであっても、辛いものであろうか、と。「さてもや」は、副詞「さて」に強意の助詞「も」、疑問の助詞「や」が付いた形。そのような状態であっても、の意。〇よをこゝろみん　世を試みん。男女の仲というものを試してみよう。「世」は男女の仲の意。
【所載】古今集・恋五・七五〇／拾遺集・恋五・九九五／躬恒集Ⅰ・三〇一／躬恒集Ⅱ・一六九／躬恒集Ⅲ・三二五／信明集Ⅱ・五六
【参考】作者名はないが、所載欄の古今集は「凡河内躬恒」とし、躬恒集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに見られる。

二一〇三　しかありとてそむかれなくにことしあればまづなげかるゝあなうよの中

たかむら（ナホ）ある本

【異同】ナシ
【現代語訳】そうだからといって、出家できるものではないのに。何か事があるといつも、まずため息が出てしまう。ああ、辛いことだなあ、この世の中は。
【語句】〇しかありとて　然ありとて。そうであるといって。漢文訓読語。〇そむかれなくに　背かれなくに。

（世を）背くことができないのに。世を背くとは、出家をすること。「なくに」は、……ないのに、の意。○こととしあれば　事しあれば。何か事があるといつも。「事」は、何かの事件や、成し遂げるための障害などを言う。「し」は強意の助詞。「あれば」は、順接の恒常条件を表し、……であるといつも、の意。○なげかるゝ　嘆かるる。「嘆く」は、希望や条件が満たされずため息が出ること。○あなうよの中　あな憂、世の中。ああ、辛いことだ、この世の中は。「あなう」は、感動詞「あな」に形容詞「憂し」の語幹「憂」が続いた形。倒置法。

【所載】古今集・雑下・九三六／新撰和歌・二四九／古来風体抄・二九一／井蛙抄・一九七

【参考】作者名「たかむら」は、所載欄の古今集、古来風体抄に「小野たかむらの朝臣」とあるのに一致する。

二一〇四　わたつうみのふかきこゝろはありながらうらみられぬるものにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】大海のような深い心を持っているのにもかかわらず、恨まれてしまうものであったよ。

【語句】○わたつうみのふかきこゝろ　わたつうみの深き心。「わたつうみの」は、「深き」を導く措辞。相手への深い思いをいう。○うらみられぬるものにぞありける　恨みられぬるものにぞありける。恨まれてしまうものであったよ。「られ」は、受身の助動詞「らる」の連用形。「うらみ」に「浦見」を響かせる。「深き」、「浦見」は、「わたつうみ」の縁語。

【所載】拾遺抄・恋下・三三九／拾遺集・恋五・九八三／大和物語・第五二段・七一

二一〇五　かずならぬ身は心だになからなんおもひしらずはうらみざらまし（リセバ／ルベク）

【異同】ナシ

【現代語訳】ものの数にも入らない我が身は、心さえもなければいいのに。（あなたの私に対する）つれない思いを知ることがなかったならば、恨むこともないでしょうに。

【語句】○かずならぬ身　数ならぬ身。ひと数にも入らない我が身。○おもひしらずはうらみざらまし　思ひ知らずは恨みざらまし。（あなたの私に対する）つれない思いを知ることがなかったならば、恨むこともないでしょうに。「まし」は反実仮想の助動詞。

【所載】拾遺抄・恋下・三三二／拾遺集・恋五・九八四

二一〇六　あひ見てはむつましくこそなるときけつれなさのみもまさるきみかな（アリト）

【異同】ナシ
【現代語訳】逢ったのちは、愛情深く親密になると聞いている。なのに、つれなさが増すばかりのあなたであることよ。
【語句】〇むつましく　睦ましく。「睦まし」は、間柄が親密になること。特に、男女の間での仲がよいこと。〇つれなさのみもまさるきみかな　つれなさのみも増さる君かな。つれなさが増すばかりのあなたであることよ。「つれなし」は、冷淡、そっけない態度であること。逢ったら打ち解けてくれるものと思っていたのに、それどころか冷淡さが増すばかりであった、ということ。
【所載】夫木抄・一七一三六／左兵衛佐定文歌合・三三
【参考】作者名はないが、所載欄の文献では「平定文」とする。

〔以上五首担当　吉田〕

伊勢

二一〇七　或本　みづのあはのきえてうきよとしりながらながれてもなをたのまるゝかな（ウラミラレケリ）

【異同】ナシ
【現代語訳】水の泡が消えてはまた浮かぶ、そんなふうに、あてにならずつらいあの人との仲だと知りながら生きながらえていても、やはりあの人を頼みに思わずにはいられないことだ。
【語句】〇みづのあはのきえてうきよとしりながら　水の泡（あわ）の消えてうき世と知りながら。水の泡が消えてはまた浮かぶ、そんなふうに、あてにならずつらいあの人との仲だと知っていながら。「うき」は、水の泡が浮かぶ意の「浮き」と「憂き世」の「憂き」とを掛け、「水の泡の」は「消えてうき」を導く序。「ここに消えかしこに結ぶ水の泡のうき世にすめる身にこそ有りけれ」（公任集・二八九）。「憂き世」は、はかなくつらい世の中。ここでは特につらい男女の仲。〇ながれてもなを　流れてもなほ（猶）。時が過ぎて生きながらえてもやはり。「流れて」は、「水」の縁語の「流れて」に、時が経過していく、生きながらえるの意を込める。「浮きながら消ぬる泡ともなりななむ流れてとだに頼まれぬ身は」（古今集・八二七・友則）、「流れての世をも頼まず水

の上の泡に消えぬるうき身と思へば」（後撰集・一一一五・大江千里）。〇たのまるゝかな　頼まるるかな。頼みに思わずにはいられないことだ。「るゝ」は自発の助動詞「る」の連体形。

【所載】古今六帖・第四帖「ざふの思」二一八四／古今集・恋五・七九二／友則集・五二

【参考】作者名「伊勢」とあるが、所載欄の古今集では作者を「とものり（友則）」とし、友則集にも見える。現代の古今集・友則集・古今和歌六帖の注釈では、「きえて」を「消えで（消えないで）」とするのが通説となっているが、水の泡は、語句欄の例歌のように、はかなく消えるもの、そして消えてはまた浮かぶものとして詠まれているので、「消えて」と解釈した。但し、「消えで」と解釈して、語句欄に挙げた、作者が同じ友則である古今集・八二七番歌とは逆に、はかなく消えるはずの水の泡が消えもせず浮かんでいるように憂き世に生きながらえていると詠んだ歌の可能性もあるか。その場合には「はかない水の泡が消えもせずに浮かんで流れているように、消えずに浮く、この憂き世とは知りながら生きながらえても、やはりあの人を頼みに思わずにはいられないことだ。」という意味の歌になる。

二一〇八　ひとごとはあまのかるもにしげくともおもはましかばよしやよのなか（ワガコヒ）

【異同】ナシ

【現代語訳】たとえ人の噂は海人の苅藻が茂っているようにうるさくても、あの人のことを思えたらいいなあ。ええままよ、世の中とはそういう、人の噂が喧しいものだよ。

【語句】〇ひとごとはあまのかるもにしげくとも　人言は海人の苅藻に繁くとも。人の噂は海人が刈り採る海藻が繁茂しているようにうるさくても。「しげく」は、海藻が繁茂する意と人言が頻繁である意とを掛け、「海人の苅藻に」が「繁く」を導いている。「人言は夏野の草の繁くとも妹と我とし携はり寝ば（万葉集・一九八七〈旧一九八三〉）。〇おもはましかば　思はましかば。思えたらいいのになあ。「暁の鐘の声こそ聞こゆなれこれを入相と思はましかば」（後拾遺集・九一八）。〇よしやよのなか　よしや世の中。ええままよ、世の中とはそういうものだよ。当該歌では、世の中とは、そういう、人の噂が喧しいものだよという意。「よしや」は、「ええままよ」という意の副詞。「世の中」は世間、特に男女の仲。

【所載】ナシ

【参考】語句の係り受けなどが不分明で、歌意が特定しにくい。

二一〇九　ながれてはいもせの山のなか（ミネ）におつるよしのゝたきのよしや世の中

【異同】よしのゝたきの―芳野の川の（大）
【現代語訳】流れては妹背の山の間に激流となって落ちたぎつ吉野の滝、その「よし」という言葉ではないけれど、ままよ、夫婦の仲とはそんな、泣かずにはいられないで涙を落としながら過ごすものだよ。
【語句】○ながれては　流れては。「流れ」に「泣かれ」を掛ける。当該歌を題として詠んだ「我が涙吉野の川のよしさらば妹背の山の中に流れよ」（拾玉集・三五六〇）という影響歌に「我が涙……流れよ」と詠まれているので、「泣かれ」を掛けたと解釈した。○いもせのやま　妹背の山。八二九番歌既出。万葉集における妹背の山の所在は紀伊国。現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町。紀川をはさんで北岸にあるのが勢能山（背山）。これに対する形で南岸にある丘が妹山だと言われている（山下道代『歌枕新考』青簡舎）。当該歌では、夫婦の意の「妹背」を響かせる。○よしのゝたきの　吉野の滝の。吉野川の激流の。吉野川は大和国の歌枕。大台ヶ原に発して、吉野の宮滝や五條市を経て紀伊国に入り、紀ノ川となる。初句から第四句目までは、「よし」の同音反復で「よしや」を導く。○よしや世の中　二一〇八番歌語句欄参照。
【所載】古今集・恋五・八二八／新撰和歌・三六一／奥儀抄・五四七／和歌初学抄・二二三／袖中抄・六三〇

二一一〇　ありしだにうかりしものをあかずとていづくにそふるつらさなるらん　中つかさ（ナミダ）ある本

【異同】ナシ
【現代語訳】以前でさえあなたの薄情な仕打ちが辛く思われたのに、それでも足りないということで、どこに付け加える、あなたの恨めしい薄情さなのでしょうか。
【語句】○うかりしものを　憂かりしものを。あなたの薄情な仕打ちが、私には辛く思われたのに。○あかずとて　飽かずとて。まだ充分ではないということで。それでも足りないということで。○いづくにそふるつらさなるらん　いづくに添ふる辛さなるらん。どこに付け加えるあなたの薄情さなのでしょうか。「つらさ」は、相手の冷淡で薄情なことに対する恨めしさ。もうどこにも付け加えるところなどないほど、以前からとても薄情だったのに、さらに冷淡な仕打ちをするのか、という気持ち。
【所載】後撰集・恋五・九五二／中務集Ⅰ・二三七／俊成三十六人歌合・一〇七／時代不同歌合・一七七

【参考】作者名「中つかさ（務）」は、所載欄の後撰集、俊成三十六人歌合に一致し、中務集にも見える。後撰集には「左大臣につかはしける」という詞書があり、藤原実頼に贈った歌。また、「内大臣家元永二年歌合」に「ありしだに憂かりしものをなぞもかく行方も知らぬ辛さ添ふらん」（五〇・忠隆）という上二句の同じ歌がある。

二一一一　われのみぞかなしかりける　たなばたもあはですごせるとしゝなければ
　　みつねある本

【異同】ナシ
【現代語訳】私だけがあなたに逢えなくてこんなに悲しい思いをしているのだったよ。あのたなばただって、逢わないで過ごした年はないのだから。
【語句】○たなばたも　一年に一回しか逢えないたなばたでさえも。「たなばた」は、古今集の時代には、織女星、または牽牛・織女の「二星を総括した称」（久保木哲夫「「たなばた」―語義の変容―」『和歌文学研究』平成二十七年六月）。所載欄の文献では「彦星も」とある。
【所載】古今集・恋二・六一二／躬恒集Ⅰ・二八、二一三、二九五／躬恒集Ⅱ・一六五／躬恒集Ⅲ・三一九／躬恒集四・三一三
【参考】作者名「みつね」は所載欄の古今集に一致し、躬恒集にも見える。

〔以上五首担当　長戸〕

二一一二　見るもなくめもなきうらのはまにいでゝかへすゞ〳〵（ハマ　ウラニイデヽ　ルガヘルモ）
　　もうらみつるかなともののりある本

【異同】ナシ
【現代語訳】海松布も全く生えない浦の浜に出て、何度も浦を見たことですよ。（お目にかかる機会も全くなく、幾度となくあなたを恨んだことですよ。）
【語句】○見るもなくめもなき　海松（みる）もなく海布（め）もなき。「見る目もない」ことを強めて言う。すなわち、あなたに逢うことが全くないということ。「海松」は海藻の一種、「見る」を掛ける。「海布」は食用

にする海藻の総称、「目」を掛ける。「あふみてふ方のしるべも得てしがな見るめなきこと行きてうらみん」（後撰集・八五八）。〇うらのはまにいでゝ　浦の浜に出て。「みるめ」「浦」は「浜」の縁語。〇かへすぐ〳〵も　何度も。くり返し。〇うらみつるかな　恨んだことですよ。「恨み」に「浦見」を掛ける。

【所載】後撰集・恋四・七九九／友則集・三七

【参考】作者名「とものり」は、所載欄の文献に一致する。

二一一三　うきながらきえせぬあはとなりなゝんながれてとだにたのまれなくに（ヌミハ）

とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】浮いたまま消えない泡になってほしい（つらい思いをしながらもこの世にとどまっていたい）。水の流れる（生き長らえる）ことさえあてにできないのに。

【語句】〇うきながらきえせぬあは　（水面に）浮きながら消えない泡。「浮き」に「憂き」、「消えせ（消えす）」に「死ぬ」意を掛け、つらい思いをしながらもこの世にとどまるむ意を含む。所載欄の古今集は、二句「けぬるあわとも」五句「たのまれぬ身は」とあり、意が通じやすい。「うきながら消えせぬものは身なりけりうらやましきは水の泡かな」（拾遺集・一三一三）。〇なりなゝん　（我が身が）なってほしい。動詞「なり」に助動詞「ぬ」の未然形「な」、終助詞「なん」が付く。ここは「なん」を他への願望で解したが、希求の意とも解せる。「かずならぬ身はうき草となりなんつれなき人によるべ知られじ」（後撰集・九七七）。〇ながれてとだに　流れてとさえ。長らえることさえ。水の「流れる」に「生き長らえる」を掛ける。所載欄の友則集は下句を「ながゝれとだにたのまれぬ身は」とする。〇たのまれなくに　あてにできないのに。「なくに」は「……ないのに」。

【所載】古今集・恋五・八二七／友則集・五三

【参考】作者名「とものり」は、所載欄の文献に一致する。

二一一四　くもゝなくなぎたるあさのわれなれやいとはれてのみよをばへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】雲もなく穏やかに晴れた朝が私なのかしら。それで、あの人に厭われてずっと過ごしてばかりいるのでしょう。

【語句】○くもゝなくなぎたるあさのわれなれや　雲もなく穏やかに晴れた朝が私なのかしら。「凪ぎ」は波風なく穏やかの意。「なれや」で切れ、下句で謎解きをする。「や」は疑問。○いとはれてのみ　（あの人に）厭われてばかりで。「いとはれて」は、「厭ふ」の受身形に、「いと晴れて」を掛ける。「あけがたきとやまの雲のいとはれてかへりしほどはわびしかりきや」（宗于集・三三）。両義とも、所載欄の作者友則の頃の発音は「イトハレテ」とされる。平野由紀子「古今和歌集―二つの文脈―」（『国語と国文学』二〇一三年九月）、築島裕『訓点語彙集成』（汲古書院、二〇〇七年）参照。○よをばへぬらん　世をば経ぬらん。ずっと過ごしているのでしょう。

【所載】古今集・恋五・七五三／友則集・五四

【参考】当該歌に作者名表記は無いが、所載欄の文献は一致して友則とする。なお、二七二番に、類似歌「雲もなく凪ぎたる朝の照る日にも思はれまさる我や何なり」がある。

二一一五　たまもかるあまのゆきかひさすさほのながくや人をうらみわたらん　（ある本）

【異同】あまのゆきかひ―あさのゆきかひ（御・桂・大）

【現代語訳】玉藻を刈る漁師が行き交いつつさす棹が長いように、私もあの人をずっと長く恨めしく思い続けるのだろうか。

【語句】○たまもかるあまのゆきかひさすさほの　玉藻を刈る漁師（の舟）が行き交いつつ差す棹が。ここまでの上三句は「長く」を導く序。「玉藻刈る」は「あま（海人）」を導く措辞。「あま」は漁師。「さほ」は「棹（さを）」。○ながくや人をうらみわたらん　（私もあの人を）ずっと長く恨めしく思い続けるのだろうか。棹が「長い」ことに「長い時間」を掛ける。「あはずして今宵あけなば春の日のながくや人をつらしと思はん」（古今集・六二四）。「……わたる」は時間の継続を表す。「恨み」に「浦見」を掛ける。「わたつみの我が身こす浪立ち返りあまのすむてふうらみつるかな」（古今・八一六）。「浦」「渡る」は「あま」の縁語。

【所載】拾遺集・雑恋・一二七二／貫之集Ⅰ・二〇九

【参考】当該歌に作者名表記は無いが、所載欄の文献は貫之で一致する。所載欄の文献によれば、三条右大臣（藤原定方）に関わる屏風歌である。

二一一六　おしからでかなしきものは身なりけりうきよをすてんかたしなければ
つらゆきある本　ヲシラネバ

【異同】ナシ
【現代語訳】惜しくはないけれどいとしいものは我が身だったのですね。あの人とのつらい間柄を捨てようにもそのすべなど無いので。
【語句】〇おしからでかなしきものは　惜（を）し。惜しくはないけれど、それでいて愛しいものは。〇身なりけり　我が身だったのですね。「けり」は気づきの表現。〇うきよをすてん　あの人とのつらい間柄を捨てるような。ここは「恋」題なので「うきよ」をつらい恋愛関係の意で解した。「うき世とは思ふものから天の門の明くるはつらきものにぞありける」（後撰集・九九六）。〇かたしなければ　すべなど無いので。「かた」は方法、手段。「し」は強意の副助詞。
【所載】後撰集・雑二・一一八九／貫之集Ⅰ・五八九
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集では恋部に入る。

〔以上五首担当　河本明子〕

二一一七　おしからぬいのちなれどもこゝろにしまかせたらねばうらみてぞふる
伊勢ある本　モ　ラレ

【異同】ナシ
【現代語訳】惜しくはない命だけれど、思うようにこの世を離れることが出来ないので、恨めしいと思い続けて生きているのです。
【語句】〇おしからぬいのち　をしからぬ命。惜しくはない命。死んでもかまわない命。「惜しからぬ命なればももろともにいかまほしきはいきの松原」（弁乳母集・一〇六）。〇こゝろにしまかせたらねば　心にし任せたらねば。「し」は強意の助詞。「心に任す」とは思う通りになる、の意。思う通りにはならないので。〇うらみてぞふる　恨みてぞ経る。「経る」は下二段活用の動詞「経（ふ）」の連体形。「経」は時を過ごす、の意。
【所載】玉葉集・雑五・二五五九／万代集・三六〇七／伊勢集Ⅰ・二〇六／伊勢集Ⅱ・二一〇／伊勢集Ⅲ・二

○九

二一一八　いかでかくうきもつらきもふたしへにこゝろひとつをなして見すらん

【異同】ナシ
【現代語訳】どうしてこのように、心は一つなのに、「うし」とも「つらし」とも、あなたは二重に、私の心に思わせてみせるのでしょう。
【語句】○いかでかく　どうしてこんなに。「なして見すらん」に続く。○うきもつらきも　「うし」はいとわしい、うらめしい。「つらし」は苦しくてつらい。形容詞「うし」と「つらし」の連体形を重ねる。うらめしいことも苦しくつらいことも。所載欄の文献では「うくもつらくも」とする。「世の中のうきもつらきも告げなくに先づ知るものは涙なりけり」（古今集・九四一）。○ふたしへに　「し」は強意の助詞。ふたへに。二重に。二つ重ねて。○こゝろひとつを　心は一つなのに、「うきこと」と「つらきこと」と二重に。○なして見す　私の心をそのような状態にさせて、見せる。恋の相手に訴えるのであって、あなたによってうらめしいと思い、つらいと思い、二重の苦しみを感じる自分の心をいう。
【所載】後撰集・恋一・五五五／伊勢集Ⅰ・二〇九／伊勢集Ⅱ・二一三／伊勢集Ⅲ・二一二
【参考】「うし」と「つらし」について。山崎良幸『源氏物語の語義の研究』（風間書房　昭和五三年）によれば、「うし」は「宿世」「世」「身」などに続く観想の表現であること、不幸観の表現であり、自分の身の拙さを「くやしくも情けなくも思う」時に発せられ、「つらし」は、「相手が自分に冷淡な態度を示す時に生じる恨めしいと思い歎く」心情をいう、と説明する。

二一一九　わすれねといひしにかなふきみなればドとはぬはつらきものにぞありける

【異同】わすれねと―わすれぬと（大）　ものにそありける―物にさりけり（大）
【現代語訳】何と言っても無駄です私のことは忘れて下さい、と言った通りにしてくれたあなたですが、まったく音沙汰がないのは恨めしく思われるのでした。
【語句】○わすれね　忘れてしまって下さい。もう通って来ないで下さい。「ね」は助動詞「ぬ」の命令形。「それならぬ言もありしを忘れねと言ひしばかりを耳にとめけん」（拾遺集・一二六三）。「忘る」は特に、通い婚の

男女に交わされる平安和歌では、男の来訪が途絶えた場合に用いた。女が男に「わすらる」のであり、男が女を「わする」というように用いる。〇いひしにかなふ　言った通りにする。言った通りになる。「今さらになにかうらみむ忘れねといひしにかなふ人の心を」（続拾遺集・一〇八四）。〇きみなれば　（言う通りになった）あなただけれど。助詞「ば」は、ここでは逆接。〇とはぬはつらき　消息を寄こさないのは冷淡な仕打ちで苦しい。

【所載】後撰集・恋五・九二八／宝物集・一九〇

【参考】所載欄の後撰集には長大な詞書があり、次のようである。「朝頼の朝臣、年ごろ消息通はし侍りける女のもとより、「要なし。今は思ひ忘れね」とばかり申してひさしうなりにければ、異（こと）女に言ひついて消息もせずなりにければ」とあり、作者は「本院のくら」と記している。

うらみず

二一二〇　つらけれどいさまたひとをうらみ見ばかひなくならんさまのうければ

【異同】いさまたひとを―今はた人を（大）　うらみ見は―うらみ見す（御）、恨す（大）

【現代語訳】あなたに冷たくされて悲しくてならないけれど、さあ、だからといって、あなたを恨めしいと思ったりしたら、何もかも打ち壊しになるだろうと、それは避けたいので。

【語句】◎うらみず　「うらむ」ということをしない。「うらむ」は恨めしく思う、相手の気持を不満に思う、恨みごとをいうことであるから、それを抑える気持ちを詠む。「うらみず」詠は古今六帖では当該歌を含む三首のみ。「忘れなんそれはうらみず思ふらん恋ふらんとだに思ひおこせば」（和泉式部集Ⅰ・五四九）。〇つらけれど　「つらし」については二一一八番歌の参考欄参照。〇いさまたひとをうらみ見ば　「いさ」は「知らず」を伴って、さあ、どうであろうかと判断を少々控えめに述べる時に使う副詞。「ひとをうらみ見ば」は、相手を恨むということをしたとしたら。〇かひなくならん　詮無いことになるだろう。「かひなし」は、甲斐無しの意。〇うければ　「うし」は二一一八番歌の参考欄参照。

【所載】ナシ

二一二一　いづかたにゆきかくれなんよのなかに身のあればこそ人もつらけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】どこに行って身を隠してしまおうか。私自身がこの世に生きていればこそ、あの人の冷淡さに苦しむのだから。
【語句】〇いづかたに　どの方向に。どこに。〇ゆきかくれなん　行き隠れなん。余りの絶望に我が身を消してしまいたい、という表現。「人心うさこそまされ春たてばとまらず消ゆるゆきかくれなん」（後撰集・三〇）は、詞書によれば長年求愛していた女が「今年ばかり待って下さい」と言ったのを、信じていたのに翌年も冷淡なので、詠んだという。「うち頼む君が心のつらからば野にも山にもゆきかくれなん」（玉葉集・一三三〇・素性）。〇身のあればこそ人もつらけれ　「あり」は存在する、生きている、の意。「つらし」は二一一八番歌の参考欄参照。我が身がなければ、「つらし」と思うこともないだろう、との意。「あればこそ人もつらけれあやしきは命もがなと頼むなりけり」（後拾遺集・七九四）。
【所載】拾遺集・恋五・九三〇／新古今集・恋五・一三六五

〔以上五首担当　平野〕

二一二二　人かればわれこそさきにわすれなめつれなきをしもなにかたのまん（シキテ）

【異同】ナシ
【現代語訳】あの人が遠ざかるようなことがあったら、私の方こそ先に忘れてしまおう。つれない人のことをなんか、どうして頼みにしようか。
【語句】〇人かれば　あの人が仮に自分から離れてしまうことがあったなら。「離（か）る」はラ行下二段活用動詞の未然形＋「ば」で順接仮定条件、はなれる、うとくなるの意。「思ふともかれなむ人をいかがせむあかず散りぬる花とこそ見め」（古今集・七九九）など、「離る」の用例は多いが、「ば」に続く例は見られない。〇つれなきをしも　つれない人のことをなど。「つれなきを今は恋ひじと思へども心よわくもおつる涙か」（古今集・八〇九）。〇なにかたのまん　どうして頼みにしようか、するまい。「か」は反語。
【所載】ナシ

ないがしろ

二一二三　秋はぎのたまゝくくずのうるさ〳〵われをなこひそあひもおもはず（ニ）（ナクニ）

【異同】ナシ
【現代語訳】秋萩に葉先が玉のように丸まって絡みつく葛のような男、ああ、うるさい、うっとうしい。私を好きになんかならないで。あなたを思ってなんかいないのだから。
【語句】◎ないがしろ　形容動詞の語幹。「無きが代」の変化した語。①人や物があってもないかのようにするさま。無視するさま。軽んじあなどるさま。②人目を気にしないでうちとけたさま、しどけないさま。①の例として、「度々文遣りなどするにはいとないがしろにはあらぬなめり」（宇津保物語・蔵開中）、②の例として「ないがしろなるもの。女官どもの髪あげ姿、唐絵の革の帯のうしろ」（枕草子）、「ないがしろに着なして」（源氏物語・空蝉）などがある。和歌においては当該題と新撰六帖に題がある以外に用例はない。当該題の歌は七首、ないがしろにする側とないがしろにされた側の歌が交互に二組、その後はないがしろにされた側の歌が三首続く。○秋はぎの　意味が通らぬため、傍記をとり「秋はぎに」として訳す。秋萩を女性（作者自身）に喩える。○たまゝくくずの　玉巻く葛の。葉先が玉のように巻いている葛の。「玉まく」は葛の葉の先が玉のように丸まっている様子をいい、「焼きすてしふる野の小野の真葛原玉まくばかり成りにけるかな」（千載集・一四五）のごとく、夏草が繁茂し葉先が玉を巻くようになった葛を、煩わしいほどまつわりつく男に喩えている。○うるさ〳〵　ああ、うるさい、うっとうしい。相手をひどくわずらわしく思うさま。ク活用の形容詞「うるさし」の語幹を重ねた形で、口語的な言い回し。和歌としては、はるか後代の弘化四年（一八四七）に刊行された亮々遺稿の貧窮百首のなかに「わが宿に何のよろこびうるさ〳〵門さしこめてなしといはばや」（一五七九）という例があるのみだが、当該歌の表現の影響を受けた可能性が高い。○あひもおもはず　思ってなんかいない。自分は全く相手を思っていない、の意。「あひ」は単に語調を整えるための接頭語か。
【所載】古今六帖・第五帖「あひおもはぬ」二六二九

二一二四　いなといはん人をもこひじしきしまのやまとのくにゝ人やたえたる

【異同】人をもこひじ―ひとをもしひじ（御・桂・大）
【現代語訳】嫌と言うような人のことをなんか、恋したりすまい。敷島の大和の国に恋の相手がいなくなるわけではないのだし。
【語句】○いなといはん人　「否」と言うような人がいるとしたら、その人。「ん」は仮定の意の助動詞の連体形。○しきしまのやまとのくに　敷島の大和の国。「しきしまの」は「やまと」にかかる枕詞。「やまとのくに」

は日本全体。「敷島の大和の国に人ふたりありとしおもはば何かなげかむ」（万葉集・三二六三〈旧三二四九〉）。○人やたえたる　人の絶えることがあろうか、いやあるまい。「人」は恋の対象、「や」は反語。
【所載】和歌童蒙抄・一六二
【参考】所載はないが、隆源口伝に「いまととはむ人をばしばし敷島や大和の国に人や絶えたる」（四八）という類歌がある。当該歌は二一二三番歌を贈られた男の開き直った独詠歌のような趣きを感じさせる配列となっている。

二一二五　おもはずもあれかしあやなみちしばの人のふるせるわれならなくに（ナライ）

【異同】ナシ
【現代語訳】どうか好きになったりなどしないで下さいね、何のかいもありません。道ばたの草程度の人なんかに捨てられてしまうような私ではありませんのに。
【語句】○あやな　無駄だ。何のかいもない。「あやなし」の語幹。感動詞。○みちしばの　道ばたの草の。「みちしば」は露、霜を導くのが通例だが、ここでは、「人」に続く。○ふるせるわれならなくに　見捨てられるような私ではありませんのに。「ふるせる」は「古せる」、飽きて見捨てられる。捨てられることを懸念して、あらかじめ相手に警告する意があるか。
【所載】ナシ

二一二六　いとはれてわれやはわびてひとりぬるはぎのしたばのいろづけばなど（ゾ）

【異同】ナシ
【現代語訳】あの人にうとまれて私は辛い思いで独り寝するのだろうか。萩の下葉が色づいてくると、どうしてこんなに（辛いのだろう）。
【語句】○いとはれて　うとましく思われて。いやがられて。○われやは　私は……だろうか。「や」は疑問、「は」は係助詞。○はぎのしたばのいろづけばなど　萩の下葉が色づいてくると、どうして辛さがまさるのだろう。「ば」は順接の確定条件を表す接続助詞。萩の下葉が色づくのは、秋の訪れを知らせるものであると同時に、「秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする」（古今集・二二〇）、「秋風に萩の下葉の色づ

けばひとりぬる身ぞ恋ひまさりける」（貫之集・六一六）のように、ひとり寝のつらさを際立たせるものであった。「など」は疑問の副詞。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　中野〕

二一二七　いまはとて人のかれはてあさぢふにされば（ユク）なづなのはなぞさきける

【異同】ナシ

【現代語訳】もうこれっきりだといって、あの人が完全に訪ねてくれなくなり、荒れた家に、だからぺんぺん草の花が咲いてしまったことよ。

【語句】〇いまはとて　今はもうこれが最後だといって。もうこれまでだといって。「今はとて天の羽衣着る折ぞ君をあはれと思ひ出でける」（竹取物語・一四）。〇人のかれはて　「かれはて」は「離れ果て」で、人がすっかり疎遠になって、完全に訪れが絶えて、の意。〇あさぢふに　浅茅の生えているところに。「浅茅」は、丈の低い茅萱（ちがや）。荒れた、侘しい家のイメージ。「いとどしく虫の音繁き浅茅生に露おき添ふる雲の上人」（源氏物語・桐壺・四）。〇されば　「さあれば」の約。そうであるので。だから。〇なづな　アブラナ科の二年草。春の七草の一つ。通称ぺんぺん草。「雪を薄み垣根に摘める唐なづななづさはまくのほしき君かな」（拾遺集・一〇二一）。

【所載】ナシ

二一二八　さみだれにみだれやはせしあやめぐさあやなしいまは（ヒトシイマハ）おもひわすれね　みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】五月雨の季節に私は乱れたか。いや決して乱れたりはしなかった。わけのわからないことだ。あの人のことはもう今は忘れてしまえ。

【語句】〇さみだれに　五月雨の季節に詠まれた歌であろうが、ここは同音により、二句の「みだれやはせし」を導くための枕詞的用法となっている。〇みだれやはせし　乱れたか、乱れたりはしなかった。「やは」は反語。

○あやめぐさ　「さみだれ」の縁で、ここも「あやなし」を導く枕詞的用法。○あやなし　ものごとの筋が通らない。理屈に合わない。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」（古今集・四一）。○おもひわすれね　思い忘れてしまえ。「ね」は完了の助動詞「ぬ」の命令形。自分自身に向かって言っているのであろう。

【所載】躬恒集Ⅰ・一九二／躬恒集Ⅱ・一〇九／躬恒集Ⅲ・九七／躬恒集Ⅳ・四四三

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

二一二九　よしのがはよしのかはれよさもあらばあれせになるふちはなくはこそあらめ

【異同】ナシ

【現代語訳】吉野川、よし、変われよ。それならそれでもいいでしょう。瀬になる渕はないのならともかく、あるのですから。

【語句】○よしのがは　大和国の歌枕。奈良、三重県境の大台ヶ原付近に発し、宮滝、五条市などを経て、和歌山県に入り、紀ノ川となる。ここは同音により「よしのかはれよ」を導く枕詞的用法。○よしのかはれよ　よし、変はれよ。「ないがしろ」という項に分類された歌としては、男女間の心変わりを詠んだ歌であろう。○さもあらばあれ　不本意だが、という気持ちで、それならそれでよい、ままよ、などの意を表す。○せになるふちは「せ（瀬）」は浅く、流れの早いところ。「ふち（渕）」は深く、淀んでいるところ。「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の渕ぞ今日は瀬になる」（古今集・九三三）。○なくはこそあらめ　「なくは」は「なし」の仮定形。「仮定形＋こそあらめ」は、もし……ならともかく、という気持ちを表す。仮定を用いた逆接的強調表現。「春を経て花待ち遠に見ゆるかな秋の頼みもなくはこそあらめ」（元輔集Ⅰ・一六四）。

【所載】ナシ

ざうの思

二一三〇　そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに

【異同】あないひしらす―あひいひしらす（大）

【現代語訳】だからといって、こうすれば、ああなる。ああすれば、こうなる。ああ、どう言ったらいいかわか

らない。逢うにつけ、関係を断つにつけ。

【語句】◎ざうの思　「雑（ざふ）の思ひ」。「雑」は、分類上は、春、夏、秋、冬、賀、離別、恋など、特定の項目に属さない歌ばかりを集めた項目をいうが、ここは、「思ひ」の歌、すなわち恋歌の中でも純粋な恋歌ではなく、比較的特殊な、たとえば古今集所載歌でいえば雑体（誹諧歌）に属するような歌を多く集めているのであろう。なお第五帖には大項目としての「雑思」があり、それとは内容的に異なるようである。〇そへにとて　名義抄に「故　ユヘ、カルカユヘニ、ソヘニ」とあり、「そ故（ゆゑ）にとて」の意とされる。そういうわけだからといって。〇とすればかゝりかくすれば　「とすれば、かくあり、かくすれば、とあり」の約。副詞の「と」と「かく」は並べて用いられることが多い。こうすれば、ああだ、ああすれば、こうだ、の意。〇あないひしらず　「あな」は感動詞。ああ、言うべき言葉を知らない。〇あふさきるさに　諸説があるが、「逢ふさ切るさに」であろう。逢うにしろ、切るにしろ。あちらがよければこちらが悪いというような状態で、物事が食い違っていたり、具合の悪いさまをいう。「とあればかかり、あふさきるさにて」（源氏物語・帚木）。なお「さ」は、ある行為の過程にある意を示す接尾語。「白菅の真野の榛原行くさ来さ君こそ見らめ真野の榛原」（万葉集・二八四〈旧二八一〉）。

【所載】古今集・雑体・一〇六〇／奥儀抄・五八八／六百番陳状・一六三／和歌色葉・二九四

二一三一　おもふてふ人のこゝろのくまごとにたちかくれつゝ見るよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたのことを思っている、という、その人の本心はどうか、その度ごとに、心の隠れた部分に立ち隠れ立ち隠れしては、真偽を見定めるすべがあったらなあと思います。

【語句】〇おもふてふ　思うという。あなたのことを愛しているという。「てふ」は「といふ」の約。〇こゝろのくまごとに　「こゝろのくま」は、心のすみ、心の底を意味する漢語「心曲」の訓読語であろう。本来「くま」は、名義抄に「隅、曲、隈　クマ」とあるように、曲がりくねったところ、見えにくいところを意味する。また「ごとに」は、古今集の注釈書類の多くは「あの人の心のすみずみ」の意に解し、ある特定の人物の心の中を想定しているが、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』のように、ここは「（思ふてふ人の心のくま）ごとに」の意で、「人」を複数に解する方が適当であろう。つまり、いろいろな人が言ってくるけれど、その「心のくまごとに」の意に解するのである。〇見るよしもがな　見る方法がないものかなあ。「もがな」は願望の終助詞。

【所載】古今集・雑体・一〇三八

〔以上五首担当　久保木〕

二一三二　おもへどもおもはずとのみいふなればいまはおもはじおもふかひなし（ナヤ）

【異同】ナシ
【現代語訳】こんなに私は思っているのに、あなたは「思ってくれない」とばかり言うようですので、今はもう思いますまい。思っても甲斐がありません。
【語句】〇おもへども　心から私は思っているのだけれど。「ども」は逆接の確定条件、……けれども。一首のなかに、以下「おもふ」が四回繰り返される。〇おもはずとのみいふなれば　この「思はず」について、古今集の当該歌注釈にあたると、恋する相手が詠者を思ってくれない、詠者が思っても相手は認めてくれない、の二つに分かれる。後者に解した。助動詞「なり」は、ここは耳で聞いて判断する意。〇いまは　今はもう。傍記や所載欄の和歌には「いなや」とあり、いやもう、いやいや、の意。〇おもはじ　思うまい。助動詞「じ」は打消意志、終止形。
【所載】古今集・雑体・一〇三九／竹園抄・四八
【参考】当該歌を含む古今六帖の二一三一～二一三五番歌は、順序が異なるものの、古今集の誹諧歌一〇三八～一〇四二番に見える。なお、所載欄の竹園抄「返事体事」に、「歌を詠むには、人の返事をすべきやう、よく心えて詠むべきなり」として、四種を例にあげ、「四に、鸚鵡返しとて、口まねをするやうに詠むなり」と、次のように贈答歌を記す。

思へども思はずとのみ言ふなればいなや思はじ思ふかひなし（四八）
思へども思はぬ仲は言ふこともいなやよしなし言ふかひもなし（四九）

二一三三　われをおもふ人をおもはぬむくひにやわがおもふ人のわれをおもはぬ（ニツレナキ）（ニツレナキ）

【異同】ナシ
【現代語訳】私を思ってくれる人を私は思ってやらなかった、その報いなのだろうか。私が思う人は私を思ってくれないことだ。

【語句】○われをおもふ人　自分を思ってくれる人。一首のなかに、「おもふ」「おもはぬ」「おもふ」「おもはぬ」と、「われ」「わが」「われ」と繰り返す。○むくひにや　報いにや。報いなのであろうか。係助詞「や」は、疑問の意。
【所載】古今集・雑体・一〇四一／九品和歌・一二／奥儀抄・九八／和歌色葉・六八

二一三四　おもひけん人をぞともにおもはましまさしやむくひなかりけりやは
ふかやぶ

【異同】ナシ
【現代語訳】かつて私を思ってくれたであろうあの人を、ともに私も思っていたらよかったなあ。本当だったよ。私は、どんなに思っても少しも思ってもらえない、という報いがなかったろうか、いやあったことだよ。
【語句】○おもひけん人　かつて私を愛してくれたであろう人。助動詞「けん」は過去の事態の推量を表す。○ともにおもはまし　同じように思っていたらなあ。愛していればよかった。「まし」は反実仮想の助動詞。○まさしや　正しや。本当であったなあ。「や」は詠嘆の終助詞。○むくひなかりけりやは　報いなかりけりやは。係助詞「やは」は反語。愛さなかったことの報いがなかったか、いやあった。今まさに、私は愛する人に思われないという報いを受けている。
【所載】古今集・雑体・一〇四二／深養父集Ⅰ・三九／深養父集Ⅱ・二八
【参考】作者名「ふかやぶ」は、深養父集ⅠⅡの、深養父作と認められる範囲に見え、『古今集校本』（笠間書院、一九七七年）によれば、六条家本、家長本（永治二年清輔本）、前田家本（保元二年清輔本）、基俊本などにあり、一致する。

二一三五　われをのみおもふといはゞあるべきをいでやこゝろはおほぬさにして

【異同】ナシ
【現代語訳】私だけを思っている、と言ってくれるならば、それはそれなりに過ごせようが、いやもう、あの人の心は大幣であって（いろんな女性にひかれてばかり。頼りにならない）。
【語句】○あるべきを　それ相応に過ごすこともできようが。「あるべきをとは、さても有べきをといふ也」（顕

注密勘)。「を」は逆接。「なかなかにつらくはさてもあるべきを再びものを思はするかな」(続詞花集・六〇七)。○いでや　いやいや。さてまあ。不満に思う気持を表す。○おほぬさにして　大幣にして。「大幣」は大串につけた幣で、祓のときに使用し、終わって参列者がそれを引き寄せて、身をなでけがれを祓う。ここでは、この歌の相手の男が、多くの女性に惹かれていることを、「大幣」に喩えて表現した。「ある女の、業平の朝臣をところ定めず歩きすと思ひて、詠みて遣はしける／大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」(古今集・恋四・七〇六)。

【所載】古今集・雑体・一〇四〇

二一三六　たれによりおもひみだるゝこゝろぞはしらぬぞ人のつらきなりける

【異同】つらきなりける―つらさなりける(御)、つらさ也ける(大)

【現代語訳】いったい誰によって思い乱れている心なのだろうかなあ。この私の思いを知らないことこそ、あの人の冷淡さなのであったよ。

【語句】○たれによりおもひみだるゝこゝろぞは　「思ひ乱る」は、恋により惑乱すること。「ぞは」は、「たれ」という疑問を表す語を受けて感動的に強調する、……だろうかなあ。……だろうねえ。所載欄の文献では、亭子院歌合のみが「心ぞは」、他は「心ぞと」「心とも」。○人のつらきなりける　あの人の薄情さなのであったよ。「つらし」は、薄情である、冷淡である、の意。「なりけり」は、初めて気づいた思いをあらわす。

【所載】続古今集・恋一・九四五／万代集・一七五六／躬恒集Ⅱ・二五八／躬恒集Ⅴ・八六／亭子院歌合・五三

【参考】作者名はないが、所載欄の文献により、躬恒の歌と知られる。

〔以上五首担当　加藤〕

二一三七　人ごゝろいまはかぎりとなりぬれば見しこそ見ぬにおとらざりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたの心が「これでさよなら」となってしまうと、逢瀬をもったことは、逢瀬をもたないのに劣らず、つらいものなのだなあ。

【語句】○人ごゝろ　相手の心。「人心いさや白波高ければ寄らむ渚ぞかねてかなしき」(後撰集・一一五四)。

○いまはかぎり　今はもう終わり。これでおしまい。別離の際に用いる表現。「忘れむと言ひしことにもあらなくに今は限りと思ふものかは」（後撰集・九二四）。○見しこそ見ぬにおとらざりけれ　逢瀬をもったことは、逢瀬をもたないのに劣らないのだなあ。相手の気持ちが離れてしまうと、逢瀬をもったことが、逢瀬をもたないことと同じくらいつらくなってしまうということ。「見し」は逢瀬をもったこと、「見ぬ」は逢瀬をもたないこと。「あひ見しもまだ見ぬ恋も郭公月になく夜ぞ世に似ざりける」（後撰集・八二四）。「けり」は気づきの「けり」。

【所載】左兵衛佐定文歌合・二九

二一三八　ひとしれず（ヒトリノミ）おもへばくるしいかにしておなじこゝろに人をゝしへん

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れず恋しく思っていると、苦しくてたまらない。どのようにして、同じ気持ちになるように、あの人を教えればいいのだろうか。

【語句】○ひとしれずおもへばくるし　密かに思いを寄せていると、苦しくてたまらない。「人知れず思へば苦し紅の末摘花の色に出でなむ」（古今集・四九六）。なお、所載欄に挙げた文献では、初句は全て傍記と同じ「ひとりのみ」。○おなじこゝろ　同じ心。同じ気持ち。「よそにして恋ふれば苦し入れ紐の同じ心にいざ結びてむ」（古今集・五四一）。

【所載】古今六帖・第五帖「あひおもはぬ」二六三〇／後撰集・恋二・六〇二／忠岑集Ⅰ・一八／忠岑集Ⅱ・六二／忠岑集Ⅲ・四八、一二八／忠岑集Ⅳ・一五六

二一三九　えぞしらぬいまこゝろみん（よ）いのちあらばわれやわするゝ人やとはぬと

【異同】ナシ

【現代語訳】どうなるかわかりません。今すぐ試してみましょう。もし私の命がこの先もあるとしたら、私があなたを忘れるか、あなたが私のもとを訪れなくなるか、と。

【語句】○えぞしらぬ　知ることができない。「え知らず」に強意の係助詞「ぞ」が入ったもの。○いまこゝろみん　直ちに試してみよう。「こころみる」は試すこと。「心みよ君が心も心みんいざ都へと来て誘ひみよ」（和泉式部集・二三〇）。

【所載】古今集・離別・三七七
【参考】古今集では、「きのむねさだ」が東国に赴任する際に、泊まった家の女性が詠んだ歌。

二一四〇　いつはりのなきよなりせばいかばかり人のことのはうれしからまし

【異同】ナシ
【現代語訳】もし、偽りというものがない世の中であったならば、どれほどあの人の言葉が嬉しかろうに。（世の中には偽りというものがあるから、あの人の言葉を信じることができないのだ。）
【語句】○いつはりのなきよなりせば　偽りというものがない世の中であったならば。「せば」は「まし」と呼応して反実仮想を表す。もし……だったら……だろうに、の意。
【所載】古今集・仮名序、恋四・七一二／和漢朗詠集・四七八／奥儀抄・一六／和歌色葉・五／八雲御抄・七
【参考】古今集仮名序では「ただこと歌」の例として挙げられ、初・二句は、和歌口伝（二八一）にも引用されている。当該歌と次の二一四一番歌は、古今集でも二首続けて載る。

二一四一　いつはりとおもふものからいまさらにたがまことをかわれはたのまん

【異同】ナシ
【現代語訳】（あの人の言葉を）偽りと思うものの、今となってはもう、いったい私は誰の真実を信頼したらいいのだろうか。（あの人の言葉を信じるしかないのだ。）
【語句】○おもふものから　思うものの。「ものから」は逆接確定条件の接続助詞。○いまさらに　今となってはもう。多く下に否定・疑問・反語を伴い、今となっては遅すぎるという意を表す。「むら鳥の立ちにしわが名今さらにことなしぶともしるしあらめや」（古今集・六七四）。
【所載】古今集・恋四・七一三／拾遺集・恋五・九三二／三五記・二五六／伊勢物語・二三五
【参考】当該歌と前の二一四〇番歌は、古今集でも二首続けて載る。伊勢物語では、第三六段の異本所載歌で、阿波文庫本・顕昭本のみに見える。

〔以上五首担当　諸井〕

二一四二　うつゝにもゆめにも人によるしあへばくれゆくばかりうれしきはなし

【異同】ナシ
【現代語訳】現実でも夢でも恋しい人には夜に逢うのだから、私にとって一日が暮れて行くことほど嬉しいことはない。
【語句】〇よるしあへば　夜に逢うので。「し」は強意の助詞。〇くれゆくばかりうれしきはなし　暮れ行くばかりうれしいことはない。「くれゆく」は、くれゆく春、くれゆく秋など、日が尽きる、季節が尽きるのを惜しむ歌が多いが、ここでは夜は恋しい人に逢えるのだから暮れ行くことは残念ではなく嬉しいこと、という心情を詠じた。
【所載】拾遺抄・恋上・二六六／拾遺集・恋二・七二五／躬恒集Ⅴ・八八／亭子院歌合・五七

二一四三　あひ見ずてこひしきことをたとふればくるしきことはものならなくに
　　つらゆき　たび

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、逢うことなくて恋しいことをたとえるとすると、世の常の苦しいことなど、ものの数でもないのに。
【語句】〇あひ見ずてこひしきこと　恋しい人に逢わずに恋しさを募らせること。「あひ見ずて一日も君にならはねばたなばたよりも我ぞまされる」（拾遺集・一〇九四）。〇たとふれば　たとえると。なぞらえると。〇くるしきこと　苦しいこと。深養父集に「なにか世にくるしきものと人とはばあはぬ恋とぞいふべかりける」（五八）とあるが、当該歌も「あい見ることのない恋」は、世の常の「苦しさ」などとは比較にならぬ苦しさだと詠じている。〇ものならなくに　ものの数ではないのに。「もの思ひの深さくらべにきてみれば夏のしげりもものならなくに」（蜻蛉日記・一七三）。
【所載】貫之集Ⅰ・六五九
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

おなじ人

二一四四　あひ見ずてわがこひしなんいのちをばさすがに人やつらしとおもはん

【異同】ナシ
【現代語訳】逢うことなくて恋い焦がれて死んでしまうかもしれない私の命を、恋い死んでしまったらさすがにあの人も自分が薄情だったと思うでしょうか。
【語句】〇あひ見ずて　二一四三番歌参照。〇わがこひしなんいのちをば　私の、恋しさのあまり尽きてしまう命を。「恋ひ死ぬ」は、恋い焦がれて死ぬこと。恋によって死ぬこと。「ん」は仮想。〇つらしとおもはん　薄情だったと思うでしょうか。「つらし」は相手のひどい仕打ちを身に染みて思うこと。「あはずして今宵あけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ」（古今集・六二四）。
【所載】玉葉集・恋一・一三〇三／万代集・一九六七／貫之集Ⅰ・六六〇
【参考】作者名「おなじ人」は、前歌二一四三番の作者名表示「つらゆき」を指し、これは所載欄の文献に一致する。

二一四五　あふことを月日にそへてまつときはくちゆくするぬになりねかしとぞ思（イマトソオモフ）

【異同】ナシ
【現代語訳】逢うことを月日とともに待っている時は、松も朽ちゆく、「行く末」になれ、と思う。
【語句】〇あふことを　恋しい人に逢うことを。〇月日にそへてまつときは　月日とともに待っている時は。長い時間をかけて待っているさま。「待つ」に「松」をかける。〇くちゆくするぬに　朽ちゆく、行く末に。「ゆく」に「（松が朽ち）ゆく」と「行く（末）」をかける。「くちゆくするぬ」という用例は他に確認できないが、長寿の松が朽ちてしまうような長い時間をイメージさせ、それでも逢瀬を期待する思いを詠じたものと考えておく。「行く末」は、拾遺集「行く末はつひに過ぎつつ逢ふ事の年月なきぞわびしかりける」（六八三）の歌のように、逢瀬に関して期待していた将来の時、という意味で用いられている。〇なりねかしとぞ思　きっとなれ、と思う。「なりねかし」は、動詞「なる」の連用形に完了の助動詞「ぬ」と強意の助詞「かし」がついたもの。もう逢瀬を待ちのぞんだ行く末の日になってほしい、という期待。
【所載】拾遺集・恋一・六八〇／貫之集Ⅰ・五六四

二一四六　あはれをばなげのことばといひながらおもはぬ人にかくるものかは

【異同】ナシ
【現代語訳】「あはれ」という言葉は、通り一遍の言葉だというけれど、それでもその言葉を愛していない人にかけるものでしょうか、かけはしない。
【語句】〇あはれをば　「あはれ」という言葉を。「あはれ」は、愛おしい、心惹かれる、などの、対象への愛着や讃嘆や執着などを表わす。〇なげのことばといひながら　通り一遍の言葉と言いながら。「なげ」は無いに等しいさま。当該歌を踏まえた歌として「ことの葉はなげなるものと言ひながらおもはぬためは君も知るらん」（後撰集・八二七）がある。〇おもはぬ人に　愛していない人に。「思ふ人思はぬ人の思ふ人思はざらなん思ひしるべく」（後撰集・五七一）。
【所載】行宗集・一一八
【参考】所載欄の行宗集は平安末期の歌人、源行宗の家集。「あはれをば」の一首は、雑纂的歌群に位置する贈答歌の中の贈歌で、作者「尼」が古今六帖の当該歌を引用して詠みかけたのであろう。

〔以上五首担当　尾高〕

二一四七　心なきくさきなれどもあはれとぞものおもふときのめには見えける

【異同】ナシ
【現代語訳】（いつもは）ものの心を解さない草木であるのに、「あはれ」だと、もの思いをする時の（私の）目には見えることだよ。
【語句】〇心なきくさきなれども　心なき草木なれども。情緒を解さない草木であるのに。「心なき」は、情緒を解さない、心を動かさない、などの意。「ども」は、逆接の接続助詞。「心なき草木と言へどあはれなり今年は咲かずともに枯れなん」（古今集異本所載歌・尚侍広井女王）。〇あはれとぞ　「あはれ」は、心の底から湧き上がる、親愛や情緒、しみじみとした感情のこと。また、そういった感情を起こさせる状況をいう。
【所載】ナシ
【参考】類似の一首に、「助くべき草木ならねどあはれとぞもの思ふ人の目には見えける」（平中物語・第二五段・九三）がある。物思いをしている今の自分には、いつもと違い草木も自分の気持ちに共感してくれているよ

うに見える、の意か。

二一四八　あはれてふことなかりせばいふべきをなにゝたとへてこふとしらせん（マレナラ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（恋しい時に）「あはれ」という言葉がなかったならば、（相手に）言うべき思いを、何に喩えて「恋しい」と知らせたらいいのだろうか。
【語句】〇あはれてふこと　あはれてふ言。「あはれ」は、恋しい、愛しいの意。「言」は言葉の意。〇なにゝたとへてこふとしらせん　何に喩えて恋ふと知らせん。（私は）何に喩えて（あなたを）恋い慕っていると知らせたらいいのだろうか。
【所載】ナシ

二一四九　あはれてふことよわひかにあるものを人にしらるゝなみだなりけり（ヨリホカニ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（想いを相手に伝える手段は）「あはれ」という言葉以外にもあるのに。相手に知られてしまうその手段とは、涙だったのです。
【語句】〇ことよわひかに　意味不通。傍記「ヨリホカニ」を以って解する。言より他に。言葉以外に。〇人にしらるゝ　人に知らるる。人に知られてしまう。〇なみだなりけり　涙なりけり。「なりけり」は、今はじめて気づいたという気持ちを表す。
【所載】ナシ

二一五〇（ある本）　よの中はいかにくるしとおもふらんよろづの人にうらみられ（る）ば

【異同】ナシ
【現代語訳】「世の中」は、どんなにつらいと思っていることだろう。大勢の人に恨み言を言われているので。
【語句】〇いかにくるしと　如何に苦しと。どんなにつらいと。「いかに」は、程度の副詞。〇よろづの人　万

の人。多くの人。〇うらみられば　傍記を採り、「うらみらるれば」と解した。恨みらるれば。恨まれているので。

【所載】古今集・雑体・一〇六二／忠岑集Ⅱ・四九／忠岑集Ⅲ・七四／忠岑集Ⅳ・七〇／奥儀抄・六四四

【参考】作者名はないが、所載欄の古今集には「在原元方」とある。「世の中」を擬人化した一首。「世の中」は、「我ならぬ菊の花さへ世の中を恨むるさまにうつろへるかな」（敦忠集・一二六）のように、常に人々の恨みの対象として歌われる。

二一五一　いにしへのしづのをだまきいやしきもよきもさかりはありしものなりコものを

【異同】ありしものなりコものを―有こしものを（大）

【現代語訳】卑しい人も、高貴な人も、（誰であれ）元気盛んな頃はあったものなのになあ。

【語句】〇いにしへのしづのをだまき　古の倭文の苧環。「いにしへの」は「倭文の苧環」の枕詞。「倭文（しづ）」と同音の「賤（しづ）」が「卑しき」を導いている。「をだまき（苧環）」は、糸を巻いて環状にした物のことで、ここでは特に意を持たない。〇いやしきもよきもさかりは　卑しきも良きも盛りは。「良き」は、身分が高い人、の意。「盛り」は、最盛期、元気な年頃、の意。〇ありしものを　あったものを。所載欄の古今集には「ありこしものを」とあり、傍記「コ」があった方が意が通りやすいが、底本のまま現代語訳をした。

【所載】古今集・雑上・八八八／綺語抄・三六四／奥儀抄・五五五／和歌色葉・二八一

〔以上五首担当　吉田〕

二一五二　あひおもはぬ人をおもふぞやまひなるなにかありまのゆへもゆくべき　おきかぜある本

【異同】ゆへもゆくへき―ゆへもゆくへき（御・桂・大）

【現代語訳】私のことを思ってもくださらない方を恋しく思うことこそが病なのですよ。どうして有馬の湯へも行くべきでしょうか。（この病が治ることはありませんよ。）

【語句】〇あひおもはぬ人をおもふぞやまひなる　あひ思はぬ人を思ふぞ病なる。私のことを思ってもくださ

らない方を恋しく思うことこそが病なのですよ。つらい恋は病に喩えられることがある。「我こそや見ぬ人恋ふる病すれあふ日ならではやむ薬なし」（拾遺集・六六五）。〇ありまのゆ　有馬の湯。有馬は現在の兵庫県神戸市北区有馬町の一帯。古来有名な温泉地で、枕草子「いでゆ」の項にも「ありまのゆ」があげられているが、有馬の湯を詠み込んだ歌は少ない。「我が恋に落つる涙をわかすかなあふよ有馬の出でゆならねど」（久安百首・二一六八）。

【所載】夫木抄・一二四九〇

【参考】作者名「おきかぜ（ある本）」とするが、興風集になく、所載欄の文献にも「よみ人知らず」とある。

二一五三　身はすてつこゝろをだにもはふらさじつゐにはいかゞなるとしるべく（ミ）

おき風

【異同】なるとしるへく―なるとしるへき（大）

【現代語訳】この身は既に捨ててしまった。だが、せめて心だけはうち捨てまい。最後にどうなるか知ることができるように。

【語句】〇こころをだにもはふらさじ　心をだにも放らさじ。せめて心だけは捨てはしまい。「はふらさじ」は、うち捨てる、放り出すという意の動詞「はふらす」に、打消意志の助動詞「じ」が接続した形。〇つゐにはいかがなるとしるべく　つひにはいかがなると知るべく。最後にはどうなるかを知ることができるように。

【所載】古今集・雑体・一〇六四／新撰和歌・三二九／興風集Ⅰ・五一／興風集Ⅱ・二七／興風集Ⅲ・一三／興風集・解・一六

【参考】作者名「おき風」は、所載欄の古今集、興風集に一致する。

二一五四　いのちかはなにぞもつゆのあだものをあふにしかへばおしからなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】命なんて、いったい何なのだ、露のようにはかなく頼りないものなのだ。あの人との逢瀬に換えられるのなら惜しくはないのに。

【語句】〇いのちかはなにぞもつゆのあだものを　命かは何ぞも露のあだものを。命なんて、いったい何なの

だ、露のようにはかないものなのだ。「かは」は反語を表す表現。「ぞも」とともに用いると、いったい……なのか、という意となる。〇あふにしかへばおしからなくに　逢ふにしかへば惜（を）しからなくに。あなたとの逢瀬に換えられるのなら惜しくはないのに。「あふにしかへば」の「し」は強意の副助詞。「なくに」は打消の助動詞「ず」のク語法。……ないのに、という意。「生きたれば恋ひすることの苦しきをなほ命をば逢ふにかへてん」（拾遺集・六八四）。

【所載】古今集・恋二・六一五／友則集・四九／宝物集・七六

二一五五　いたづらにたび〳〵しぬといふなるはあふにはなにをかへんとすらん（コトニシヌトイヘバイ）

なかつかさ

【異同】ナシ

【現代語訳】何度も何度もむやみに「死んでしまう」とあなたは言いますのは、いったい逢瀬と何を引き換えにするおつもりなのでしょう。（命を逢瀬と引き換えにするつもりかもしれませんけれど、その時にはあなたには逢瀬に換える命がないではありませんか。）

【語句】〇あふにはなにをかへんとすらん　逢ふには何を換へんとすらん。逢瀬と何を引き換えにするつもりなのだろうか。命を逢瀬に換えようとするのは二一五四番歌と同様の発想。

【所載】後撰集・恋三・七〇七／信明集Ⅰ・九〇／俊頼髄脳・四二一

【参考】作者名「なかつかさ」は、所載欄の後撰集に一致する。

返し

源さねあきら（ヲ）　ある本

二一五六　しぬ〳〵ときく〳〵だにもあひ見ねばいのちもいつのたにかのこさん

【異同】たにかのこさん―ためか残らん（大）

【現代語訳】「お逢いできなければ死ぬ」と何度聞いても聞いてもあなたが逢ってくださらないので、私は命をいつのために残しておくというのでしょうか。（逢ってくださらないのなら、命など残しておいても甲斐がないですよ。）

【語句】○いのちもいつのたにかのこさん　本文「たにか」は不審。大久保本は「ためか」、後撰集は「よにか」、信明集は「ために」とする。ここは大久保本の「ためか」に拠って解した。命もいつのために残しておくというのか、という意。
【所載】後撰集・恋三・七〇八／信明集Ⅰ・九一／俊頼髄脳・四二一
【参考】作者名「源さねあきら（信明）」は、所載欄の後撰集と信明集に一致する。

〔以上五首担当　山村〕

二一五七　こゝろをしふかふのさとにをきたらばはこや（或本イエノ）の山は見まくちかけん

【異同】ナシ
【現代語訳】〔第二句「ふかふのさと」は「むがうのさと」として解した。〕心を無何有の郷に置いたならば、藐姑射の山は見ることも近いだろう。
【語句】○こゝろをしふかふのさとにをきたらば　「ふかふのさと」は「無何有（むがう）の郷」として解した。心をし無何有の郷に置（お）きたらば。心を無何有の郷に置いたならば。「無何有の郷」は「何も無い郷」。「むかゆうのさと」とも。所載欄の万葉集の西本願寺本の訓では「フカウノサト」。荘子逍遙遊第一などに見える虚無自然の楽土。「無何有の郷に心を置く」とは、無心になり安らかな気持ちになる意。「たら」は完了の助動詞「たり」未然形。接続助詞「ば」は順接仮定条件。○はこやの山　藐姑射の山。神人が住むという中国の伝説上の山。荘子逍遙遊第一に見える。○見まくちかけん　見まく近けむ。見ることも近いだろう。「まく」は「……（だろう）こと」。
【所載】万葉集・三八七三（旧三八五一）心乎之　無何有乃郷尓　置而有者　藐孤射能山乎　見末久知香谿務
ココロヲシフカウノサトニオキタラババコヤノヤマヲミマクチカケム　こころをしむがうのさとにおきてあらばばこやのやまをみまくちかけむ／俊頼髄脳・三五九／綺語抄・二八九／奥儀抄・三六九／和歌色葉・一三九

二一五八　わがやどのひつにじやうさしおさめたるこひのやつらのつかみかゝりて

【異同】ひつにしやうさし―ひとつにしやうさし（御）　こひのやつらの―こひのやつこの（桂）
【現代語訳】私の家の箱に鍵をかけて閉じ込めておいた恋という奴がつかみ掛かってきて。

【語句】〇ひつにじやうさし　櫃に鎖（じやう）鎖し。箱に鍵をかけて。「櫃」は蓋付きの大型の箱。「鎖（じやう）」は「錠」で、鍵を使って開閉する金具。〇こひのやつら　「恋の奴（やつ）ら」は他に見えない表現。桂宮本と所載欄の文献により、「恋の奴（やつこ）」で解した。恋という奴。「奴（やつこ）」は、ある対象を軽蔑して言う語。恋心を擬人化して卑しめた表現。
【所載】万葉集・三八三八（旧三八一六）家尓有之　櫃尓鎖刺　蔵而師　恋乃奴之　束見懸而　イヘニアリシヒツニザウサシヲサメテシコヒノヤツコノツカミカカリテ　いへにあるひつにかぎさしをさめてしこひのやつこがつかみかかりて／夫木抄・一七一四〇

二一五九　ゆふづくよさすやをかべ（カハ）につくるやのかたちをよしみしかぞよりくる

【異同】ナシ
【現代語訳】夕方の月が射す岡に造った建物の形がいいので、こうして寄ってくるのだ。
【語句】〇ゆふづくよ　夕月夜。陰暦上旬の夕方に出ている月。所載の古今六帖二七九番歌では「ゆふづくひ」で、夕日。
【所載】古今六帖・第一帖「てるひ」二七九番既出
【参考】初・二句は、古今六帖の三五五番歌「夕月夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋もするかな」に類似する。この歌は古今集の四九〇番などにも見える。

二一六〇　まゆめかき（ネ）ひもときわたりまつらむやいつしか見んとおもふわぎもこ

【異同】まゆめかき―さゆめかき（御）、まゆねかき（大）
【現代語訳】［初句「まゆめかき」は「まゆねかき」として解した。］眉を掻いて下紐をすべて解いて待っているだろうか、「早く会いたい」と思う愛しい人は。
【語句】〇まゆめかき　傍記により「まゆねかき（眉根掻き）」で解した。眉を掻いて。眉が痒くなるのは恋しい人に会える前兆とされ、自ら眉を掻いて同じ効果を期待する場合もあった。「めづらしき君を見えとこそ左手の弓執るかたの眉根掻きつれ」（万葉集・二五八〇（旧二五七五））。〇ひもときわたり　紐解きわたり。下紐をすべて解いて。「紐解く」は下紐を解くこと。共寝の準備を意味する。〇いつしか見んと　「いつしか見む」と。

「早く会いたい」と。「いつしか見む」は、直訳すると「いつになったら会えるだろうか」。副詞「いつしか」には待ち望む思いが込められる。〇わぎもこ　我妹子。男性が女性を親しんで呼ぶ語。

【所載】万葉集・二四一二（旧二四〇八）眉根削　鼻鳴紐解　待哉　何時見　念吾君　マユネカキハナヒヒモトキマツラムヤイツシカミムトオモフワガキミ　まよねかきはなひひもとけまつらむかいつかもみむとおもへるわれを、二八一九（旧二八〇八）眉根掻　鼻火紐解　待八方　何時毛将見跡　恋来吾乎　マユネカキハナヒヒモトキマタメヤモイツカモミムトコヒコシワレヲ　まよねかきはなひひもとけまてりやもいつかもみむとこひこしあれを／人麿集Ⅱ・四八九／人麿集Ⅲ・五七八／人麿集Ⅳ・二六〇／和歌一字抄・一一五三／俊頼髄脳・二五四／奥儀抄・五〇二／袋草紙・八三八／袖中抄・一〇七六／和歌色葉・二一八

二一六一　或本はや人のなきおふよしへいちしるくわがなかたえばつまとたのまん　人丸

【異同】ナシ

【現代語訳】［第二句「なきおふよしへ」は「なにおふよごゑ」として解した。第四句「わがなかたえば」に不審があり、完全な訳が示せない。］隼人の名高い夜声、はっきりと私たちの仲が疎遠になったら妻として頼みにしよう。

【語句】〇はや人　隼人。古代、九州南部に居住した部族。律令下では衛門府隼人司に属した。宮廷の警護や儀礼に奉仕し、「吠声」という呪術的な声を発したとされる。〇なきおふよしへ　意味不明。所載欄の万葉集により、「名に負ふ夜声（よごゑ）」で解した。「夜声」は夜に聞こえる声や音のこと。当該歌では「隼人」が夜警のために発した「吠声」か。〇いちしるく　はっきりと。初・二句は、この「いちしるく」を導き出すための措辞と見られる。〇わがなかたえば　我が仲絶えば。「私たちの仲が疎遠になったら」か。第五句が「妻として頼みにしよう」と解せるため意味上の繋がりが不自然だが、本文に従い現代語訳した。所載欄の万葉集の西本願寺本の訓と人麿集Ⅲでは「我が名を言はば」で、「自分の名を言うならば」の意。自分の名を告げることは結婚の承諾を意味し、これなら歌意はよく通る。

【所載】万葉集・二五〇二（旧二四九七）早人　名負夜音　灼然　吾名謂　孃恃　ハヤヒトノナニオフ（ナノリノ）ヨゴエイチシロクワガナヲイハバツマトタノマム　はやひとのなにおふよごゑのいちしろくわがなはのりつつまとたのませ／人麿集Ⅲ・五〇一

【参考】作者名「人丸」について、所載欄の万葉集二五〇二番歌は「以前一百四十九首柿本朝臣人麻呂之歌集出」（二五二一〈旧二五一六〉番歌）のうちの一首である。また人麿集Ⅲにも見える。

〔以上五首担当　原山〕

二一　六二一　おもはずにいたらばいもがうれしみとゑまんまびきのおもほゆるかな（ト）（モ）

【異同】いたらはいもか―いたらすいもか（御・大）　ゑまんまひきの―ゑたんまひきの（御・大）

【現代語訳】思いがけない時に私が着いたら妻が嬉しいこととほほえむであろう眉のさまが、自ずと思われることだよ。

【語句】〇おもはずにいたらば　思はずに到らば。予期していない時に私が妻のところへ行ったならば。〇いも　妹。男性が妻や恋人を指していう語。〇ゑまんまびき　笑まん眉引き。ほほえむであろう眉のさま。「まびき」は「まよびき」と同じ意で、眉墨を引いて描かれた、細長く美しい眉のさま。「まびき」は、目つき、目くばせの意の「目引」とも解せるが、所載欄の万葉集では「眉曳」（まよびき）とあるので、「眉引き」と解釈した。また、万葉集・二九一二番「我妹子が笑まひ眉引き面影にかかりてもとな思ほゆるかも」（旧二九〇〇）の本文「眉引」は、新しい訓では「まよびき」だが西本願寺本の訓では「マビキ」とあり、後の袖中抄・八〇番歌でも「まびき」となっている例がある。

【所載】万葉集・二五五一（旧二五四六）不念丹　到者妹之　歓三跡　咲牟眉曳　所思鴨　オモハズニイタラバイモガウレシミトヱマムマヨビキオモホユルカモ　おもはぬにいたらばいもがうれしみとゑまむまよびきおもほゆるかも

【参考】万葉集に「待つらむに至らば妹が嬉しみと笑まむ姿を行きてはや見む」（二五三一〈旧二五二六〉）という類歌がある。

二一　六三　或本　かくばかりこひんものとしおもはればいもがたもとをまかぬよもありき

【異同】ナシ

【現代語訳】［第三句を「おもはねば」として訳す。］これほど恋しくなるであろうものと思わなかったので妻の手枕をしない夜もあった。

【語句】○かくばかりこひんものとし　かくばかり恋ひむものとし。これほど恋しくなるであろうものと。「し」は強意。「かくばかり恋ひむものそと知らませばその夜はゆたにあらましものを」（万葉集・二八七九〈旧二八六七〉）。○おもはれば　思はれば。しかしこれでは下句との整合性がなく、所載欄の万葉集、並びに古今六帖・三二五二番には「思はねば(思わないので)」とあり、「れ」は「ね」の誤写と判断した。○いもがたもとをまかぬよもありき　妹が手本を巻かぬ夜もありき。妻の手を手枕にしない夜もあった。「妹」は、二一六二番歌語句欄参照。「たもと」は手首や手の辺り。「たもとをまく」とは、手枕にして共寝をすること。

【所載】古今六帖・第五帖「たまくら」三二五二／万葉集・二五五二（旧二五四七）如是許　将恋物衣常　不念者　妹之手本乎　不纏夜裳有寸　カクバカリコヒムモノゾトオモハネバイモガタモトヲマカヌヨモアリキ　かくばかりこひむものぞとおもはねばいもがたもとをまかぬよもありき／人麿集Ⅳ・二一九

【参考】当該歌は人麿集Ⅳにも見えるが、万葉集では巻十一の作者不明歌の歌群に見える。万葉集に、「世の中に恋繁けむと思はねば君がたもとをまかぬ夜もありき」（二九三六〈旧二九二四〉）という類想歌がある。

二一六四　ときもりのうらならすつゞみかず見ればたつにはなりぬあはぬあやしも或本

【異同】ナシ

【現代語訳】時守が打ち鳴らす鼓の音の数を数えてみると、もう辰の時にもなってしまった。それなのにあなたに逢わないのはいぶかしいことよ。

【語句】○ときもりのうちならすつゞみ　時守の打ち鳴らす鼓。時守が打ち鳴らす鼓。「時守」は、時刻を知らせる役人、守辰丁（しゅしんちょう）。「鼓」は、円筒形の胴の両端に皮を張って作った打楽器の総称。延喜式・陰陽寮に「諸時撃鼓……辰戌五下。巳亥四下。」（新訂増補国史大系）と見え、令義解・職員令・陰陽寮に「守辰丁二十人。掌伺漏剋之節。以時撃鐘鼓。」（新訂増補国史大系）と見える。○たつにはなりぬ　辰にはなりぬ。所載欄の万葉集に「辰尓波成」とあるので、それを「辰にはなりぬ」と読んだか。辰の時は午前八時頃。あなたが私に逢いに来ると約束していたのに逢えないまま夜が明けて辰の時にもなってしまったということか。○あはぬあやしも　逢はぬ怪しも。逢わないのは不思議なことだなあ。あなたが逢いに来ないのは訝しいことよ。「住吉の敷津の浦の名告藻（なのりそ）の名は告（の）りてしを逢はなくも怪し」（万葉集・三〇九〇〈旧三〇六七〉）。

【所載】万葉集・二六四九（旧二六四一）時守之　打鳴鼓　数見者　辰尓波成　不相毛恠　トキモリノウチナスツヅミカゾフレバ（カズミレバ）トキ（タツ）ニハナリヌアハヌモアヤシ　ときもりのうちなすつづみよみみれ

ばときにはなりぬあはなくもあやし／夫木抄・一五二三三／人麿集Ⅳ・一四八
【参考】当該歌は人麿集Ⅳにも見えるが、万葉集では巻十一の作者不明歌の歌群に見える。

二一六五　いもがたもとをまかぬよもありき

【異同】いもかたもとをまかぬよもありき―ナシ（大）
【現代語訳】妻の手枕をしない夜もあった。
【語句】〇いもがたもとをまかぬよもありき　二一六三番歌語句欄参照。
【所載】ナシ
【参考】底本・御所本・桂宮本では、古今六帖・二一六三番歌や万葉集二五五二番歌、二九三六番歌の下句と同じ二句のみが記載されている。

二一六六　おほかたはわがおもふことかくばかりかたきみかどをまかりいでなん（ヒラク）（メヤ）

【異同】ナシ
【現代語訳】ともかくも私が思っていること。それは、こんなに守りの厳重な御門であっても、きっとそこを抜け出して逢いにまいりましょうということです。
【語句】〇おほかたは　一八六四番歌語句欄参照。全体的には。総じて。大体のところは。細かいことはともかくも、の意を込める。「おほかたはわが名もみなとこぎいでなむ世をうみべたに見るめすくなし」（古今集・六六九、古今六帖・一八六四）。〇かくばかり　これほど。こんなに。〇かたきみかど　難き御門。出入りに厳しい、守りの厳重な御門。〇まかりいでなん　罷り出でなむ。きっと出てまいりましょう。きっと抜け出して逢いにまいりましょう。出てくる意の謙譲語「罷り出づ」の連用形に、強意の助動詞「ぬ」の未然形「な」と、意志を表す助動詞「む」の終止形が付いた形。
【所載】ナシ
【参考】万葉集・二五七三番歌「おほろかに我し思はばかくばかり難き御門を罷り出でめやも」（旧二五六八）や古今六帖・第二帖「かど」一三六九番歌「世のつねにわが思ひせばかくばかり難き御門をまたいでめやは」と言葉の重ね方はよく似ている。一三六九番歌参考欄参照。これらの歌の方が整合性がある。

〔以上五首担当　長戸〕

二一六七　あさかしはぬるやかはべのしのゝめに人もあひあはずきみなしがちに（にえあはずつまなしにして）

【異同】ナシ　底本ハ、下二句ノ傍記「にえあはずつまなしにして」ヲ、初・二句ノ右側ニ小字傍記スル
【現代語訳】［本文に不審があり、完全な訳が示せない。］（あさかしはぬるや）川辺の篠の芽のように人目を忍んで、思う人に相逢うこともなく、（君なし）のことが多い。
【語句】○あさかしはぬるやかはべの　「あさかしは」は枕詞かと思われるが、不詳。所載欄に挙げた重出三〇三九番歌の初句は「あきかしは」。なお、参考欄万葉集の二四八二（旧二四七八）番歌では、初・二句が「秋柏うるわ川辺の」となっており、二七六四（旧二七五四）番歌では「朝柏うるや川辺の」となっていて、どちらにも異同が見られるが、これらの場合も、初句は第二句に対して枕詞的に掛かっているように見える。○かはべのしのゝめに　川辺の篠の芽に。「しのゝめ」には「忍ぶ」を掛けたか。○人もあひあはずきみなしがちに　意をとりにくいが、思う人に相逢うことがなくて、恋人無しの状態が多い、ということか。小字傍記「にえあはずつまなしにして」に拠れば、思う相手に逢うことができず「妻なし」の状態である、と意味はやや明瞭になる。
【所載】古今六帖・第五帖「くれどあはず」三〇三九／人麿集Ⅲ・三〇一
【参考】万葉集二四八二（旧二四七八）番歌には「秋柏うるわ川辺（潤和川辺）の篠の芽の人には忍び君に逢へなくに」があり、当該歌と類似している。また万葉集二七六四（旧二七五四）番歌には「朝柏うるや川辺（閏八河辺）の篠の芽の偲びてぬればいめに見えけり」があり、新勅撰集・恋二の七二四番歌には「朝柏ぬるや川辺のしののめの思ひてぬれば夢に見えつつ」があり、夫木抄一〇九七一番歌には「朝柏ぬるや川辺のしののめに思ひてぬれば夢に見えけり」があって、これらは上句が当該歌に類似している。

二一六八　わぎもこをあひしらせたるひとをこそこひのまされればうらめしみおもへ（田部忌寸櫟子）

【異同】ナシ　「田部忌寸櫟子」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】わが思う人を私に引き合わせてくれた人をこそ、いまは恋の思いが増してきているので、かえって恨めしく思ってしまうのだ。
【語句】○わぎもこ　男性が妻や恋人を親しんで呼ぶ語。○あひしらせたるひと　相知らせたる人。自分に引き

合わせてくれた人。
【所載】万葉集・四九七（旧四九四）吾妹子乎　相令知　人乎許曾　恋之益者　恨三念　ワギモコヲアヒシラセケムヒトヲコソコヒノマサレバウラメシミオモヘ　わぎもこをあひしらしめしひとをこそこひのまさればうらめしみおもへ
【参考】万葉集によれば、この歌は、作者田部忌寸櫟子(たべのいみきいちいこ)が大宰府へ赴任するとき、恋人と思われる女性の舎人吉年（とねりきね）と贈答した四首の中の一首。田部忌寸櫟子は伝不詳。舎人吉年には天智天皇大殯のときに詠んだ歌があるので、田部忌寸櫟子もそのころの人と推定される。

二一六九　おふのうらにつりするあまのふなのりにのりにしこゝろつねにわすれず

【異同】ナシ
【現代語訳】麻生の浦に釣する漁夫が舟に乗る、あたかもそのように、あの人のことが心に乗ってしまって、その気持はいつも忘れようがない。
【語句】〇おふのうら　麻生の浦。伊勢国の歌枕。現三重県鳥羽市の海岸という。古今集巻二十東歌に伊勢歌として、「麻生の浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寝てかたらはむ」（一〇九九）がある。初句より第三句までは、第四句の「のりにし」に掛かる序詞。〇のりにしこゝろ　相手のことが気になって、それが心に乗ってしまったような気持。すなわち相手を恋するようになった気持。
【所載】夫木抄・一〇三四三／人麿集Ⅱ・五二〇／人麿集Ⅲ・三三九／人麿集Ⅳ・三〇
【参考】万葉集一四〇二（旧一三九八）番歌には、「ささなみのしがつの浦の船のりに乗りにしこころつねわすらえず」という類似した歌があり、さらにこの万葉集歌と同じ歌は、夫木抄一一六七五番、綺語抄二四四番、袖中抄四八〇番、井蛙抄三六〇番にも見られる。ただし、夫木抄と井蛙抄では初句が「ささなみや」。

二一七〇　いまもおもふ(ひ)のちもわすれず(じ)かりこものみだれてのみぞわがこひわたる

【異同】ナシ
【現代語訳】いまも心に思っている。のちの日も忘れはしない。私はこの恋ゆえにただただこころ乱れて、あなたのことを思いつづけている。

【語句】〇かりこもの　「みだれて」に掛かる枕詞。〇こひわたる　恋いつづけている。「わたる」は、その状態が時間的に長く継続してつづくさま。
【所載】玉葉集・恋五・一七三〇／人麿集Ⅱ・三六二／人麿集Ⅲ・三〇九／人麿集Ⅳ・三一

二一七一　みか月(ヅクキ)のをかのくずはをふきかへしたれかもきみを(ニ)こひんと思し

【異同】みか月(ツクキ)の―水くきの（大）　こひんと思し―こひん思し（大）
【現代語訳】岡の葛の葉を風が吹き返す、そのように、一度はおさまっていた思いがふき返して、またあなたを恋しようなどと、いったいたれが思ったろうか。そんなことは、思いもしなかったのに。
【語句】〇みか月のをかのくずは　みか月のおか（岡）の葛葉。初句「みか月の」は、小字傍記に拠れば「みづくきの」であり、大久保本も「水くきの」となっている。「みづくきの」は「岡」に掛かる枕詞。初・二句は、「ふきかへし」を導く序詞。〇ふきかへし　風が葛葉を「吹き返す」ことに、一度はおさまっていた恋の思いが「ふき返す」ことを重ねて言っている。〇たれかも　いったいたれが。「か」は疑問にして反語。「も」は強意。
【所載】新古今集・一〇五六／人麿集Ⅲ・三六〇
【参考】万葉集三〇八二（旧三〇六八）番歌には、「みづくきの岡の葛葉を吹き返し面(おも)知る子らが見えぬころかも」、人麿集Ⅳ六一番歌には、「みづくきの岡の葛葉を吹き返すおもしる子らが見えぬころかも」があり、夫木抄五八二九番歌には、「みづくきの岡の真葛を吹き返すおりしる子らが見えぬころかも」がある。上三句が当該歌に類似している。

〔以上五首担当　山下〕

二一七二　をとゝしのさいつとしよりことしまでこふれどなどかいもにあひがたき

【異同】ナシ
【現代語訳】おととしのその前年から今年に至るまで、いとしいあの人を恋い慕っているのに、なぜ逢うことがかなわないのでしょう。
【語句】〇をとゝしのさいつとし　さきおととし。一昨昨年。「をとゝし」は一昨年。昨年の前の年。「さいつとし」は「さきつ年」の音便形、前の年。所載欄の夫木抄では「さいととし」。〇などかいもにあひがたき　ど

うして恋人に逢えないのだろうか。「山城のいは田のもりに心おそく手向けしたれや妹に逢ひがたき」（万葉集・二八六七〈旧二八六五〉）。

【所載】万葉集・七八六（旧七八三）前年之　先年従　至今年　恋跡奈何毛　妹尓相難　ヲトトシノサキツトシヨリコトシマデコフレドナゾモイモニアヒカタキ　をととしのさきつとしよりことしまでこふれどなぞもいもにあひかたき／夫木抄・一七一四一

【参考】所載欄の万葉集の題詞によれば、大伴家持がある女性に贈った歌三首のうちの一つ。「をとゝし」「さいつとし」「ことし」と年に関する言葉を重ねる。二一七五番歌の参考欄参照。

二一七三　こゝろこそこゝろをはかるこゝろなれ心のあたはこゝろなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】心こそ心をあざむく心なのだ。心のかたきは心だったのだ。

【語句】○こゝろをはかる　「はかる」は企てる、もくろむなどの意味があるが、ここでは「陥れる」「だます」の意。○心のあた　「あた」は敵、仇。古辞書にはこのほか「讐」「怨」の文字にも「アタ」の訓が付されている。「形見こそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらましものを」（古今集・七四六）。

【所載】新撰和歌髄脳・二／和歌童蒙抄・八六八／奥儀抄・五一／和歌色葉・二四／和歌大綱・一六／悦目抄・六九

【参考】「心」という語をいくつも重ねている歌。所載欄の文献はすべて、おなじことを重ねていう「畳句」の例としてこの歌を挙げる。二一七五番歌の参考欄参照。

二一七四　ゆめにのみきゝゝきゝゝときゝゝきゝゝときゝゝきゝゝといだくとぞ見し

【異同】ナシ

【現代語訳】夢の中でだけ、嬉しくて嬉しくて、嬉々と嬉々として、あの人を抱くと見た。

【語句】○ゆめにのみ　下の「抱くとぞ見し」にかかる。○きゝゝきゝゝと　「ききと」は非常に喜ぶ様を表す。二句から四句まで、それを何度も重ねる表現。「ききと抱く」という続き。用例は無いが、古辞書には「熙々」に対し「キキ」「タノシ」と和語をあてる。（前田本色葉字類抄）。

【所載】ナシ
【参考】副詞「ききと」をいくつも重ねた珍しい歌。次の二一七五番歌と同類。二一七五番歌の参考欄参照。

二一七五　きみによりよゝよゝよゝよゝとよゝよゝよゝとねをのみぞなくよゝよゝよゝと
（ヨヽヨヽヨヽトネヲノミゾナク）

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたへの苦しい恋のせいで、よよよよと声をあげて泣いている、よよよよよよと。
【語句】〇きみにより　あなたがもとで。あなたのために。〇よゝよゝよゝよゝと　「よよと泣く」はしゃくりあげて激しく泣くさまをいう。おいおいと。「よよと」という副詞を重ねて強調する表現。「悲しきことものに似ず、よよとぞ泣きける」（大和物語・一四八段）〇ねをのみぞなく　「ねを泣く」は声をたてて泣く。「のみ」は、「ねを泣く」を強調する。
【所載】ナシ
【参考】副詞「よよと」をいくつも重ねた珍しい歌。前の二一七四番歌と同類の歌。また、二一七二番歌からここまで、同じ語を重ねる歌として共通するものがある。

二一七六　おく山のしもふりかゝるならのはのあをかりしよりおもひそめてき

【異同】ナシ
【現代語訳】奥山の霜ふりかかる楢の葉のまだ青い時分から、あなたを恋し始めたのでした。
【語句】〇あをかりしより　青々としていた時から。もみじ（紅葉・黄葉）に対し若い葉を「青し」という例は「秋山の木の葉を見ては　もみぢ葉を採りてぞしのふ　あおきをば置きてぞ歎く　そこしうらめし　秋山われは」（万葉集・一六〈旧一六〉）など多くある。〇ならのは　楢の葉。落葉広葉樹。コナラ・ミズナラなどの総称。古名、ははそ。〇おもひそめてき　思ひ初めてき。「おもひそむ」は、こころにかけ始める。恋し始める。「てき」は、完了の助動詞「つ」の連用形に、過去の助動詞「き」の接続したかたち。
【所載】ナシ
【参考】下句が同じく「あをかりしよりおもひそめてき」となっている歌が平安末期の歌学書などに見える（袋草紙・二八一／十訓抄・一九二／古今著聞集・一六四／沙石集・四〇）。上句は「しぐれする稲荷の山のもみぢ

葉は」とあり、稲荷詣で途中に時雨にあった和泉式部に「牛飼童の襖（あを）をぬぎて着せたりける」（袋草紙）という話にしている。後にこの童が式部のもとに来た時、用件を尋ねられ詠んだ歌とする。「襖」は粗末な上着であり、「あをかりし」に「襖借りし」を掛けたとする説話だが、和泉式部説話として広範に流布した。

〔以上五首担当　平野〕

二一七七　山がつのかきをにかこふませがきのませたりきとも見えしきみかな（ニ）

【異同】ナシ
【現代語訳】山住みの粗末な家の垣根として囲うませ垣、すっかり成長したとも見えたあなたよ。
【語句】〇山がつのかきを　山がつの垣穂（かきほ）。山住みの者の粗末な家の垣根。「山がつ」は木こりや猟師の住む粗末な家。「かきほ」は垣根。「あな恋ひし今も見てしか山がつの垣穂に咲ける大和なでしこ」（古今集・六九五）。〇ませがきの　籬垣の。「籬垣」は竹や芝などで目を粗く編んだ垣。上句は「ませたりき」の「ませ」を導くための序。〇ませたりき　すっかり成長した。「ませ」は、サ行下二段活用の自動詞。「き」は過去・回想の助動詞の終止形。
【所載】ナシ

二一七八　すむ人はさしもぞ（モコソ）あらめいふ人のかはらこゑこそあやしかりけれ

【異同】ナシ
【現代語訳】「語義未詳の語があるため完全な訳が示せない。」住んでいる人がどれほど澄み切った気持ちでいるからといって、噂をする人の「かはら声」こそ理解できぬことです。
【語句】〇すむ人は　住んでいる人は。「すむ」は「住む」に「澄む」を掛ける。〇さしもぞあらめ　係助詞「ぞ」の結びならば、連体形「む」となるはずだが、已然形「め」となっているため、傍記の「さもこそあらめ」を採る。解しにくいが、「どれほど……だからといって。」の意か。「さもこそ……め」は、あゆひ抄に「ナンバウ何なればとて」という心を持ちを見るべきとある。〇いふ人のかはらこゑ　噂をする人の「かはら声」。「いふ」は噂をする意か。「かはら声」は語義未詳。用例もみられず、意味がとりにくいが、「かはら」は、「玉」に対して、価値のないもの、がらくたといった意味があり、価値のない、がらくたようながらがらした声といった意

味か。〇あやしかりけれ　理解できぬことだ。「あやし」は、霊妙だ、奇怪だ、珍しいといった意味の他に、見苦しい、理解できないといった意味がある。

【所載】ナシ

二一七九　もゝしきのにはにかきしくしらかはのされたりきとも思はざりしを（或本）

【異同】ナシ

【現代語訳】宮中の庭一面に敷いている白い川のような小石は曝（さら）されている、そんなふうに戯れたふるまいをしたとも思っていなかったのに。

【語句】〇もゝしきのには　宮中の庭。「もゝしきの」は宮中、内裏、禁裏。〇かきしく　敷いている。「かき（掻）」は語調を整える接頭語。〇しらかはの　白川の。「しらかは」は、一面に敷きつめられた白い小石や砂利を白い川に見立てていう。上句は「され」にかかる序。〇されたりきとも　色めいたふるまいをしていたとも。「曝（さ）れ」に「され（戯れ）」をかける。「曝（さ）れ」は小石や砂利が雨風にさらされて色が薄れる意、「ざれ（戯れ）」は古くは清音で、「ふざけて」、「戯れて」、「色めいて」といった意。

【所載】ナシ

二一八〇　いふ人はさもこそあらめきくひとのいたさはぐかほぞおもひやらるゝ（フキハテ）

【異同】ナシ

【現代語訳】噂をする人はいくらそうであるからといっても、聞く人のうろたえた顔こそが思いやられます。

【語句】〇いふ人　噂をする人。二一七八番歌参照。〇さもこそあらめ　いくらそうだからといっても。二一七八番歌参照。〇いたさはぐかほぞ　いたさわぐ顔ぞ。たいそううろたえている顔が。「いたさわぐ」は語義未詳、用例もみられない。「いた」は形容詞「いたし」の語幹で、程度の甚だしいさまで接頭語として用いられている。「いた泣かば人知りぬべし」（古事記・下）。「さわぐ」は、あわてふためく、うろたえる意。「物にあたるばかりさわぐも、いといとものぐるほし」（枕草子・一三六段）。「ぞ」は強調の係助詞。〇おもひやらるゝ　自然に思いやられる。「うらうへぞおもひやらるる唐衣唐にうつりて君がきたれば」（伊勢集・二一五）。「るゝ」は、自発の助動詞「る」の連体形で、係助詞「ぞ」を受けた結び。

【所載】ナシ

二一八一　いきはてをいたくないひそゝかくだにいそといふなるめかはゝもあり

【異同】ゝかくたに―そかたかに（大）　めかはゝもあり―めかはくも有（大）

【現代語訳】「語義未詳の語があるため完全な訳が示せない。」寿命のことをそんなに言いなさんな、「そかくだに」五十歳までと聞きますが、「めかはゝ」もありますから。

【語句】〇いきはてを　生命の限りを、寿命を。用例は見られない。〇いたくないひそ　それほど言わないで下さい。「いたく……な……そ」の例歌に、「山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ」（古今集・五〇）がある。〇ゝ（そ）かくだに　語義未詳。用例なし。〇いそといふなる　五十歳というように聞く、の意か。「いそ」は五十であろうか。〇めかはゝ　語義未詳。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　中野〕

とう三条の右大臣

二一八二　こひしともわれはまうさずあだしそゝしぬるものなりしぬるものなり

【異同】ナシ

【現代語訳】恋しいとも私は申しません。誠意のない……、死ぬものですよ、死ぬものですよ。

【語句】〇あだしそゝ　本文に乱れがあるか。「あだし」は、誠意がない、いい加減な、はかない、浮気、などの意を持つが、一般に「あだし心」「あだし契り」「あだし世」など、他の名詞と複合した形で用いられる。従ってここも「そ」あるいは「そゝ」の部分が名詞である可能性が高いのだが、意味不明。傍記の「ニゝ」を採用しても同様である。〇しぬるものなり　死ぬものである。「しぬる」はナ行変格活用動詞「死ぬ」の連体形。

【所載】ナシ

【参考】和歌では特殊な場合を除いて一般に敬語は用いられないが、当該歌ではわざわざ「まうさず」が用いられ、下句では何を言いたいのか意味不明の「死ぬるものなり」が繰り返され、強調されている。第三句の「あだしそゝ」とともにすべてがわかりにくい歌である。あるいは、私はあなたを恋しいなどとは言わない、ただひた

すらあなたを思って死ぬほどだ、などと訴えている歌か。

なお、作者名「とう三条の右大臣」は、「とう〈東〉三条の左大臣」（嵯峨天皇皇子源常）の誤りか。古今六帖・第二帖・一四〇四番歌には古今集・春上・三六番歌と同じ歌が載っていて、そこでは古今集と同じく「とう三条の左大臣」となっており、その同じ歌は第六帖・四一二七番にも重出歌として見え、そこでは「東三条右大臣」となっている。

二一　八三　こゑたてゝなきぞしぬべきあき山にともまどはせるしかにはあらねど（ノイ）（ナラナクニ）

【異同】ナシ

【現代語訳】声をあげて泣いてしまいそうです。秋山に友を迷わせて鳴いている鹿ではないけれど。

【語句】〇なきぞしぬべき　泣いてしまいそうだ。「しぬべき」は、サ行変格活用動詞「す」の連用形に、完了の助動詞「ぬ」と推量の助動詞「べし」が添えられた形。係助詞「ぞ」の結びで「べき」と連体形。……してしまいそうだ、きっと……してしまうにちがいない。〇ともまどはせる　鳴いて、友を混乱させている。友とはぐれ、独り鳴いている鹿なのであろう。孤独なイメージ。「夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥鳴くなり」（拾遺集・二三八）。

【所載】後撰集・秋下・三七二／新撰万葉集・一三九／友則集・一八

【参考】所載欄の文献によると、作者は紀友則。

二一　八四　みづのあはのきえてうき身と思へどもながれてなをもたのまるゝかな

【異同】ナシ

【現代語訳】水の泡が消えてはまた浮かぶ、そんなふうに、はかなくつらいこの身とは思うけれども、生きながらえて、やはりあの人を頼みに思わずにはいられないことだ。

【語句】〇きえてうき身と思へども　古今集等の注釈類では、通常「きえて」を「消えで」とし、「消えないで」と解しているが、本注釈では「消えて」と解した。「うき身」は、つらい身。〇なをも　なほも。やはり。

【所載】古今六帖・第四帖「うらみ」二一〇七番既出

二一八五　なにをして身のいたづらにおいぬらんとしのおもはんこともやさしく

【異同】ナシ
【現代語訳】一体何をしてこうむなしく年をとってしまっているのだろう。年月というものがそういう私をどう思っているか、その思っているかもしれないことも恥ずかしく思われることだ。
【語句】○身のいたづらにおいぬらん　自分の身がなすこともなく老いているのだろう。「身の」の「の」は主格。主格の「の」を受けて述語「おいぬらん」の「らん」は連体形。なお「いたづらに」は、無為に、無駄に、なすこともなく、などの意。○としのおもはんこともやさしく　年が思うかもしれないことも恥ずかしく。「とし」を擬人化し、「おもはんこと」の「ん」は連体形で、仮想を表す。「とし」が何か思ったとして、そのことを。「やさし」は、身が細るような思いがする。恥ずかしい。「世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」（万葉集・八九七〈旧八九三〉）。
【所載】古今集・雑体・一〇六三／和漢朗詠集・述懐・七六三／興風集Ⅲ・一四／和歌体十種・一一／和歌十体・五／奥儀抄・一〇九、五八九／和歌色葉・二九五

二一八六　すぎいたもてふけるいたまのあはざらばいかにせよとてわがねそめけん

【異同】いかにせよとて―いかにせねとて（大）
【現代語訳】杉板で葺いた屋根の板と板との合わせ目がうまく合わないように、もしあの人が逢ってくれなかったら、どのようにしろということで私は共寝をはじめたのだろうか。
【語句】○すぎいたもて　「すぎいた」は杉の板。ここは屋根を葺くための材料。杉板でもって。○ふける　葺いている。「葺く」は雨などを防ぐために瓦や板で屋根を覆うこと。○いたまのあはざらば　「いたま」は、板間。板と板の合わせ目。「あはざらば」は、板間が「合はざらば」と、あの人が「逢はざらば」の掛詞。「逢はざらば」は男女間における問題としていう。初二句は「逢はざらば」を導く序。○わがねそめけん　私が寝初めたのだろう。
【所載】拾遺集・恋二・七四六／万葉集・二六五八（旧二六五〇）十寸板持　盖流板目乃　不合相者　如何為跡可　吾宿始兼　ソキイタモテフケルイタマノアハザラバイカニセムトカワガネソメケム　そきいたもちふけるいためのあはざらばいかにせむとかわがねそめけむ／人麿集Ⅰ・一六／人麿集Ⅱ・三五〇

〔以上五首担当　久保木〕

二一八七　人のするあたれもせずてはゝきゞやきみをおもへどよぞふけにける（ある本ヌ／ヂネ／ア）

【異同】ナシ
【現代語訳】［第二句は、「あたれ」の傍記「あぢね（味寝）」で現代語訳した］人がよくする共寝もしないで、君はそこにいるとわかっていながら、こんなに思っているのに逢うこともできず、夜はすっかり更けてしまった。
【語句】〇あたれ　「あたれ」では意味が通じないので、傍記「あぢね」で解した。「あぢね」（味寝）は、男女が愛を語らい共寝すること。契沖はこの箇所について、「あちね歟。万に味寝とあるをうまいと点せるを、古くはあちねとも点せしなり」（古今和歌六帖、書入）と記す。万葉集西本願寺本に、「白細之（シロタヘノ）　手本寛久（タモトユタケク）　人之宿（ヒトノヌル）　味宿者不寐哉（アヂネ（ウマイ）ハネズヤ）　恋将渡（コヒワタリナム）」（二九七五〈旧二九六三〉）と「アヂネ」「ウマイ」の二つの訓が並び、また、同歌を色葉和難集（八〇〇）には「あぢね」としている。〇せずて　しないで、もっぱら……する。〇はゝきゞや　帚木や。「帚木」は信濃国園原にあって、遠くからは見えるが近づくと見えなくなるという木。ここは、「平定文家歌合／園原やふせ屋におふる帚木のありとは見えて逢はぬ君かな」（新古今集・九九七・坂上是則）の、「ありとは見えて」と同様の意味であろう。そこにいるとはわかっていても。〇きみをおもへど　あなたのことを思っているけれど、逢えないままで。
【所載】ナシ

二一八八　神やまの身をうのはなのほとゝぎすくやし（ミヤコ）〳〵とねをのみぞなく

【異同】ナシ
【現代語訳】神山の卯の花かげで、ほととぎすは声をたてて鳴いている。神に仕える我が身のつたなさが悔やまれる、悔やまれると、声に出して泣いてばかりいるよ。
【語句】〇神やまの身をうのはなの　「神やま」は、京都市北区上賀茂神社の北方から東方にかけての山の総称。「神山の身」とは、賀茂の斎院などに仕える女性であろうか。「聞かばやなそのかみ山のほととぎすありし昔のおなじ声かと」（後拾遺集・一八三）は、禖子斎院に仕え再び後三条天皇の斎院に出仕した女房に贈られた歌。「身

を憂（「憂し」の語幹）」に、「卯の花」を掛ける。「わがごとくもの思ふときはほととぎす身をうの花のかげになくらむ」（敦忠集・一二五）。当該歌で「身を憂し」と思うのは、詠者が神に仕え清浄を保たなければならぬ立場にあり、恋人に自由に逢えない辛さがあってのことか。〇くやしくやしと　「くやし」は、後悔される、無念だ、の意。「くやし」を二回重ねるのは、「ほととぎす」の鳴き声を模したのかとも思われる。が、「ほととぎす」と「くやし」を詠む歌は、「ほのかなるただ一声はほととぎす寝覚めくやしき心地こそすれ」（左大臣家歌合・長保五年・二六）など何首か見えるものの、ほととぎすの声として詠む例歌は見出せなかった。〇ねをのみぞなくほととぎすが声を出し鳴いていることに、自分が声に出して泣いてばかりいるということを掛けた。「なげきのみしげき深山のほととぎすこがくれゐてもねをのみぞなく」（大和物語・六六段・九二）。

【所載】夫木抄・二四三七

二一八九　ちはやぶるたゞすのかみのまつにしてそらなきしつるほとゝぎすかな

【異同】まつにして―まへにして（桂・大）

【現代語訳】［第三句を他本の「まへにして」で解した］よりによって糺すの神がおいでになる社の前で、そのつもりではないのに鳴くほととぎすだなあ。事を糺すという社の前で、あなたはうそ泣きばかりしているなあ。

【語句】〇ちはやぶる　「神」にかかる枕詞。ここは、「糺すの神」にかかる。〇たゞすのかみのまつにして　「糺すの神」は、下賀茂社のこと。「まつにして」は、他本「まへ（前）にして」の本文で解す。糺すの神の前において。〇そらなきしつる　「そら鳴き」は、小題「ざうの思」からすると、「ほととぎす」の鳴く声に喩えて、恋の相手が不実をごまかして泣くのを咎めた内容か。なお、「そら鳴き」する「ほととぎす」だが、他に例歌を見出せず、明確にできなかった。

【所載】夫木抄・二七六二

二一九〇　ちはやぶるかみもきくらんけふよりはながきうへめとたのまるゝかな

【異同】ナシ

【現代語訳】［第四句の「うへめと」は傍記「こゑすと」で解した］神もきっと聞いていらっしゃるでしょう。ですから、今日よりは途絶えることなく、なごやかな声を聞かせてくれると頼みに思われることですよ。

【語釈】〇かみもきくらん　神様もきっと聞いていることでしょう。助動詞「らん」は、現在の推量。〇ながきうへめと　「うへめ」では意味不通。傍記の「ながきこゑすと」で解したが、何の声なのか、また「ながき声」の例も管見に入らなかった。よって歌意が明確にならない。今日からは末長く声が聞こえる、つまりとだえなく通ってくるの意に、一応解しておいた。〇たのまるゝかな　自然と頼みに思われることですよ。助動詞「るゝ」は自発の意。
【所載】ナシ

二一九一　うれしくはわするゝこともありなましつらきぞながきかたみなりける
ふかやぶ
（コ、ロナリケル）

【異同】ナシ
【現代語訳】嬉しかったならば、忘れてしまうこともあるでしょう。しかし、あの人の薄情さが、かえっていつまでも忘れられぬ恋の形見なのでした。
【語釈】〇うれしくはわするゝこともありなまし　嬉しくは忘るることもありなまし。もし嬉しかったならば、それを忘れてしまうこともあるでしょう。形容詞「嬉し」＋係助詞「は」は、仮定条件を表す、もし……ならば。「なまし」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形＋仮想の意の助動詞「まし」の語構成、……してしまうだろう、の意。〇つらきぞ　あの人の冷淡さこそが。〇かたみ　形見。二人の記念、思い出のよすが。
【所載】新古今集・恋五・一四〇三／深養父集Ⅰ・二八／深養父集解・六／時代不同歌合・一四三
【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　加藤〕

二一九二　くさもきもふけばかれゆく秋かぜにさきのみまさるものおもひのはな
みつね
（ク）

【異同】ものおもひのはな―ものおもひはな（桂）
【現代語訳】草も木もそれが吹くと枯れてゆく秋の風、心にもそれが吹けば離（か）れてゆく飽きの風、それによって、もの思いの花が咲きまさるばかりです。

【語句】○かれゆく　草木が「枯れゆく」ことに、人の心が「離（か）れゆく」ことを掛けた。○秋かぜに　秋風によって。「秋」に「飽き」を掛けた。○さきのみまさるものおもひのはな　もの思いがまさってゆくばかりだ、ということ。初句にある「草」「木」の縁により「さき（咲き）」「はな（花）」の語を用いた。
【所載】夫木抄・一七三五〇／躬恒集Ⅳ・二七三／貫之集Ⅰ・八二三
【参考】作者名「みつね」は、所載欄の躬恒集Ⅳ・貫之集Ⅰに一致する。この歌と次の二一九三番歌は、躬恒・貫之間で詠み交わされた一対のたわむれ歌である。

返し

つらゆき

二一九三　ことしげきこゝろよりさくものおもひのはなのえだをやつらつえにつく

【異同】ナシ
【現代語訳】いろいろと多情の心から咲くもの思いの花の、その枝を頬杖について（もの思いをして）いるのですか。
【語句】○ことしげきこゝろ　あれこれと多情な心。この場合の「こゝろ」は恋にかかわる情のことである。○ものおもひのはなのえだをやつらつえにつく　「や」は疑問。「つらつゑ」は「つらづゑ」。頬杖のこと。前歌の下句「さきのみまさるものおもひのはな」を受けて、その「もの思ひの花の枝」を杖として頬杖をついているのかと、たわむれ返した。
【所載】夫木抄・一七三五一／躬恒集Ⅳ・二七四／貫之集Ⅰ・八二四
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の躬恒集Ⅳ・貫之集Ⅰに一致する。二一九二番歌参照。

女をはなれてよめる

きのとものり

二一九四　たぎつせにうきくさのねはとめつとも人のこゝろをいかゞたのまん

【異同】ナシ
【現代語訳】激流の中に、仮に浮草の根はとどめたとしても、あの人の心をどうしてつなぎとめておくことがで

きようか、できはしない。

【語句】〇女をはなれてよめる　底本および御所本・大久保本では、「きのとものり」という作者名より前に、一行どりで書かれている。歌の内容から見て、これは当該歌以下四十首のすべてにかかる詞書と見られる。桂宮本では、作者名「きのとものり」と同じ行に書かれているが、以下四十首にかかる詞書と見られることは、底本等の場合と同様である。「女をはなれて」とは、つきあいのあった女性との関係がなくなって、ということ。従ってこの詞書の下のある四十首の歌はすべて、恋の関係を失ってしまった男性の立場で詠まれた、という設定の下にある歌である。〇たぎつせ　激しく波立って流れる瀬。激流。〇ねはとめつとも　根は留めつとも。仮に根はとどめたとしても。「つ」は完了の助動詞、ここでは強調のはたらきがある。「とも」は、動詞型活用語においてはその終止形、形容詞型活用語においてはその連用形に接続して、逆接の仮定条件を表す。「仮に……であったとしても」ということ。〇人のこゝろ　恋の関係にある相手の心。〇いかゞたのまん　どうして頼みにできようか、できはしない。「いかゞ」は、ここでは反語。

【所載】ナシ

【参考】作者名「きのとものり」とあるが、その根拠は不明。なお、以下二二五三番までの四十首は、すべて下句を同じくする歌群であり、その四十首が十首ずつ均等に四人の作者のものであるかのような形にまとめられていて、古今六帖の中では、編集の形式上特殊な歌群である。ただし、当該歌以下二二〇二番までの十首が友則の作であるという資料的根拠は、得られない。

　また、以下四十首のすべてにおいて、第三句の終わりに「とも」が使われている。すなわち、上句においておよそ世にありえないことを仮定しておいて、もし仮にそれがありえたとしてもあの人の心をあてにすることはできないと、恋の場における相手の心の頼み難さを下句で言う。効果を意図した詠法。以下四十首のすべてが、同じパターンで詠まれている。

二一九五　あさがほのきのふのはなはかれずとも

【異同】ナシ

【現代語訳】あのしおれやすい朝顔の、きのう咲いた花が仮に枯れなかったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇あさがほ　朝顔。朝に花の咲く植物の名、上代においては、キキョウ・ムクゲ・アサガオなどが「あ

さがほ」と呼ばれていたようであるが、ここでは具体的になんの花をさしているのか不明。ただし、ここの「あさがほ」は、うつろいやすい花、として言われたものである。〇かれずとも　枯れずとも。仮に枯れなかったとしても。「とも」は前歌二一九四番参照。

【所載】ナシ

【参考】当該歌には上句のみがあって下句が記されていないが、これは、前歌の下句「人のこゝろをいかゞたのまん」と同一であるため省略したものである。以下二一三三番歌までの三十九首すべてが、同じ理由で下句省略の形になっている。

二一九六　うつせみをそめてともしにかひつとも

【異同】ナシ

【現代語訳】［意味不明の語があるため、完全な訳が示せない。］蝉を籠にこめて、仮に照射（ともし）の中に飼ったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇うつせみ　ここでは蝉のこと。〇そめて　意味不明。諸本みな「そ」に傍記して「こ」とある。それに従えば「こめて（籠めて）」か。ここでは「こめて」で現代語訳した。〇ともし　鹿狩りに用いられるたいまつの火の照射（ともし）のことか。〇かひつとも　飼ひつとも。飼うことができても。「つとも」は二一九四番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】この歌は、上句に意味不明の語があるため、どのようなことを仮定したつもりなのか、わかりにくい。

［以上五首担当　山下］

二一九七　かりのこをとをづゝとをはかさぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】水鳥の卵を、仮に、十個ずつ十段積み重ねたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇かりのこ　雁や鴨など水鳥の卵。「こ」は卵の意。〇とをづゝとをはかさぬとも　十づつ十は重ぬと

も。十個ずつ十段に積み重ねることが、仮にできたとしても。「とも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ
【参考】伊勢物語第五十段に「鳥のこを十づつ十は重ぬとも思はぬ人を思ふものかは」（九二）という歌があり、上句がこれに類似している。

二一九八　かたなもてながるゝみづはきり（セキ）つとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、刀でもって流れる水は切ったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】○きりつとも　切りつとも。切ったとしても。「つとも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ

二一九九　くものあみにふきくる風はとめつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】蜘蛛の巣の網に、仮に、吹いてくる風はとどめたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】○とめつとも　留めつとも。とどめたとしても。「つとも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ

二二〇〇　ふくかぜをくものふくろにこめつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】吹く風を、仮に、雲の袋に籠めたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】○くものふくろにこめつとも　雲の袋に籠めつとも。仮に、雲でもって袋を作って、その中に（吹く風

を）入れ籠めることができたとしても。「つとも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ

二二〇一　ふるゆきをそらにとめてはありぬとも（しはしまてとはとゝむとも）（メツ）

【異同】ありぬとも―有つとも（大）
【現代語訳】降る雪を、仮に、そのまま空にとどめておくということはあり得ても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【所載】ナシ

〔以上五首担当　山下〕

二二〇二　をくつゆをけたでたまとはなしつとも（チトセハアリヌ）

【異同】ナシ
【現代語訳】置く露を、仮に、消さないで玉となしたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇をくつゆを　おくつゆを。置く露を。〇けたで　消たで。四段活用他動詞「消つ」の未然形に打消の助詞「で」が付いた形。消さずして。〇たまとはなしつとも　玉とはなしつとも。玉となしたとしても。「つとも」は二一四九番歌参照
【所載】ナシ

二二〇三　いる月をやまのはにげていれずとも

【異同】ナシ
【現代語訳】入る月を、仮に、山の端が逃げて入れなかったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【所載】ナシ

【参考】古今集雑上の部（伊勢物語・業平集などにも）に収載されている業平の歌「あかなくにまだきも月のかくるるか山の端逃げて入れずもあらなむ」（八八四）をふまえて詠まれている。

二二〇四　けのするゑにはねつくむまはつなぐとも　　ありはらのときはる

【異同】はねつくむまは―はねへて馬は（大）
【現代語訳】仮に、毛の末端に跳ねまわる馬はつないだとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】○けのするゑ　毛の末。毛の末端。○はねつくむま　跳ねつく馬。跳ねまわる馬のことか。
【所載】ナシ
【参考】作者名「ありはらのときはる」は在原時春。在原滋春の子で業平の孫にあたり、古今集三五五番歌の左註に、この人の名が見られる。ただし、この人をこの歌の作者とする根拠は不明。この歌以下二二一三番歌までの十首が「ありはらのときはる」の作であるという資料的根拠も得られない。二一九四番歌の参考欄参照。

二二〇五　そでのうちに月のひかりはつゝ（ト）むとも

【異同】つゝ（ト）むとも―とゝむとも（大）
【現代語訳】袖のうちに、仮に、月の光は包んだとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【所載】ナシ

二二〇六　ちらずしてこぞのさくらはありぬとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、散ることなくして、去年のさくらの花はそのままあったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇こぞのさくらはありぬとも　去年のさくらの花が散らずしてそのままで現在まであったとしても。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　山下〕

二二〇七　もみぢばにかぜをばつゝみとめつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、もみじ葉に吹く風を包みとめてしまったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇つゝみとめつとも　包んでのがさぬようにとどめてしまったとしても。「つとも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ

二二〇八　たごのうらのなみをばしづめとめつとも（トヽム）ある本

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、田子の浦に立つ波を鎮め止めてしまったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇たごのうら　田子の浦。駿河国の歌枕。古くは、静岡県富士市の現在の田子の浦から富士川河口より西の吹上浜あたりまでを、「田子の浦」と呼んでいた。〇しづめとめつとも　鎮め止めてしまったとしても。「つとも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ

二二〇九　みづのあはをしらたまとてはぬきつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、水の泡を真珠だということにして緒に貫いてしまったとしても。（あの人の心をどうして頼

みにすることができようか、できない。）
【語句】〇みづのあは　みづのあわ。水泡。〇しらたまとては　白玉だということにしては。「しらたま」は白色の美しい玉、真珠のこと。〇ぬきつとも　貫きつとも。緒に貫き通してしまったとしても。「つとも」は二一九四番歌参照。
【所載】ナシ

二二一〇　かみすぢにちゐろ（ヒキ）のふね（イシハニナフ）はつなぐとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、髪の毛筋に千尋の舟は繋留したとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇かみすぢ　髪筋。毛髪の筋。〇ちゐろのふね　千尋の舟。非常に長くて大きな舟。中古以降「千尋」（ちひろ）を「ちいろ」とも言った。底本では、その「ちいろ」の仮名遣いが「ちゐろ」となっている。〇つなぐ　舟を繋留すること。
【所載】ナシ

二二一一　こふのいしをありにおほせてはこぶとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、劫の石を蟻に背負わせて運んだとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇こふのいし　劫の石。「劫」は仏教語で、極めて長い時間の単位。天人が百年に一度天降って天衣の袖で方四十里の石を撫でるとき、その石が磨滅しつくすまでの時間を「一劫」とする。すなわち「劫の石」とは、天人の衣で磨滅しつくすのに一劫もかかるような非常に巨大な石ということ。「後朱雀院生まれさせたまひて七夜に／いとけなき衣の袖はせばくとも劫の石をば撫でつくしてん」（公任集・五五五）。〇ありにおほせて　蟻に背負わせて。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　山下〕

二二二二　かのまゆにくにこほりをばたてつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、蚊の眉に国や郡を置くことができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇かのまゆ　蚊の眉。「大蔵卿ばかり耳とき人はなし。まことに蚊の睫の落つるをも聞きつけたまひつべうこそありしか。」（枕草子・二五七段）のように、ごく微細なものの例として挙げたのであろう。〇くにこほり　国と郡。律令制下の地方行政区画。国・郡・里の三段階に編成されていた。「甲斐の国都留の郡の板野なる白玉小菅笠にぬひてん」（古今六帖・一二六二）。〇たてつとも　建てたとしても。「つとも」は、二一九四番歌参照。ここでは、蚊の眉のように微細なものに国や郡を置くことができたとしても、の意。
【所載】ナシ
【参考】蚊の眉に国や郡を置くという発想について、和漢朗詠集（七九二）には白氏文集の「蝸牛の角の上に何事をか争ふ」（対酒其二）があり、かたつむりの左の角に位置する触氏と右の角に位置する蛮氏が争ったという寓話（荘子則陽篇）の影響があるか。

二二二三　ひをうちてみづのうちにはともすとも

【異同】みつのうちには―水の底には（大）
【現代語訳】仮に、火を打って起こし水の中に灯すことができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇ひをうちて　火を打ちて。火打ち石と火打ち金で火をつけること。「此法師火ヲ打テ、前ニ灯シ付テ、香ニ火ヲ置ツ。」（今昔物語集・巻一五・第二七）。〇みづのうちにはともすとも　水の中に灯したとしても。ここでは、水の中に灯すことができたとしても、の意であろう。
【所載】ナシ

二一一四　ほとゝぎすはるをなけともあとふとも　　きのつらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、夏の鳥であるほととぎすに、春を惜しんで鳴けと頼むことができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇ほとゝぎすはるをなけとも　ほととぎす春を鳴けとも。「春を鳴く」という表現はあまり例がないが、「行く春を一声なきてうぐひすは夜のま涙をたむるなりけり」（伊勢集・三〇一）のように、「春を惜しんで鳴く」の意と解した。「ほととぎす声ききしよりあやめ草かざす五月と知りにしものを」（古今六帖・九二）とあるように、ほととぎすは夏に鳴く鳥。ここでは、夏に鳴く鳥に、春を惜しんで鳴かせることができたとしても、という不可能なことがらを述べていると解した。なお、『古今和歌六帖標注』は、「越」と「起」の誤写という説を挙げており、それに拠れば「ほととぎす春来鳴けとも」となる。〇あとふとも　頼んでも。「誂（あと）ふ」は、結婚を申し込む、相手に誘いかける、の意。ここでは頼んで自分の思い通りにさせようとする意と解した。「武彦を廬城河（いほきのかは）に誘（あと）へ率て、偽きてうかはたつまねして、因りて其の思はぬに打ち殺しつ。」（日本書紀・巻一四）。
【所載】ナシ
【参考】作者名「きのつらゆき」とあるが、その根拠は不明。二一九四番歌参考欄参照。

二一一五　かげろふのかげ（ひげをばぬきてとりつとも或本タ）をばゆきてとりつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、陽炎のゆらめく光を、そこに行って取ることができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇かげろふ　立ちのぼる水蒸気に当たった光の屈折で、物の形がゆらゆら揺れて見える現象。八二〇番歌参照。なお傍記の「ひげをばぬきてとりつとも」の「かげろふ」は、カゲロウ目に属する昆虫の総称。その場合二句以下は、はかなく小さい昆虫のヒゲを抜いて取ることができたとしても、の意になる。〇かげ　ここでは陽炎のゆらめく光のこと。吉田比呂子『「カゲ」の語誌的研究』（和泉書院、一九九七年）は、陽炎や朝焼け・夕

焼けといった、太陽の光輝によって引き起こされるさまざまな光と色彩の現象を幅広く捉えた語が「カゲ」であると指摘する。〇ゆきてとりつとも　行って取ったとしても。「つとも」は、二一九四番歌参照。ここでは、取りえたとしても、の意であろう。

【所載】ナシ

二二一六　はなすゝきほとにいでぬ秋はありぬとも

【異同】ほとにいてぬ秋は―ほにいてぬ秋は（御・桂・大）　ありぬとも―ありつとも（大）

【現代語訳】仮に、花すすきが穂として出ない秋はあったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇はなすゝき　穂の出た薄。〇ほといでぬ　穂と出でぬ。穂として出ない。「穂と出づ」という表現は他に例がないが、「穂に出づ」は、イネ科の植物が穂先に実を結ぶこと。秋の景物として詠まれた。「めづらしき君が家なる花すすき穂にいづる秋の過ぐらく惜しも」（万葉集・一六〇五〈旧一六〇一〉）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　諸井〕

二二一七　わたつうみのなみのはなをばとりつとも

【異同】ナシ

【現代語訳】仮に、海原の波の花を取ることができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇わたつうみ　「わたつみ」の転。海神の意から転じて、海、海原の意で用いられる。〇なみのはな　波の花。白く立つ波のしぶきや泡を咲く花に見立てたもので、白氏文集の「風翻白浪花千片」など漢詩の影響が指摘されている。〇とりつとも　取ったとしても。ここでは、取ることができたとしても、の意であろう。

【所載】ナシ

二二一八　こぐふねのさほのしづくはおちずとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、漕ぐ舟の棹のしずくが落ちないとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇さほのしづく　棹（さを）の雫。棹は、水底を突いて船を動かし進める棒。「夏の夜は道たづたづし舟に乗り川の瀬ごとにさをさしのぼれ」（万葉集・四〇八六〈旧四〇六二〉）。
【所載】ナシ

二二一九　あみのめにふきくるかぜはとまるとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、網の目によって、吹いてくる風が止められたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇あみのめに　網の目によって。網の、編んである部分の糸と糸に囲まれた隙間の部分によって。網は「逢ふことの片寄にする網の目にいはけなきまでこひかかりぬる」（古今六帖・一八四三）のように、魚や鳥獣を捕るための道具。〇とまるとも　ここでは、止められたとしても、の意であろう。
【所載】ナシ
【参考】二一九九番歌（「くもの網に吹きくる風はとめつとも」）と類想の歌。
和泉式部集には、「網の目に風もとまらぬ浦にきて海人ならなくに長居つるかな」（六七一）という、初・二句に当該歌の影響がみられる歌がある。

二二二〇　あるゝむまをくちたるなはにつなぐとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、暴れ馬を、朽ちている縄につなぐことができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇あるゝむま　気性が荒々しい馬。暴れ馬。「小笠原速見（へみ）の御牧に荒るる馬もとればぞなつく

この我が袖とれ」（古今六帖・一四三一）。〇くちたるなは　朽ちたる縄。朽ちている縄では暴れ馬を繋ぐことはできない。〇つなぐとも　繋ぐとも。ここでは、繋ぐことができたとしても、の意であろう。
【所載】ナシ

二二二一　をみなへしわがつまにてはとしふとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、植物の女郎花が、私の妻として年月を重ねたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇をみなへし　山野に自生する多年生草本。初秋に黄色の花を咲かせる。「人の見ることや苦しきをみなへし秋霧にのみたち隠るらむ」（古今集・二三五）のように、女性に擬して詠まれることが多い。〇わがつまにては　私の妻としては。「わがつま」は、「……人妻に吾もまじはらむ吾が妻にひとも言問へ」（万葉集・一七六三〈旧一七五九〉）のように、自分の配偶者を指す語。「にては」は、断定の助動詞「なり」の連用形に、接続助詞「て」と係助詞「は」の付いたもので、「……としては」の意。〇としふとも　年経とも。年月を重ねたとしても。「みわの山いかに待ちみむ年ふともたづぬる人もあらじと思へば」（古今集・七八〇）。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　諸井〕

二二二二　ゆくみづにふりくるゆきはとまるとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、流れゆく水に降り落ちる雪が消えずに残るとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇ゆくみづに　流れゆく水に。水の流れに。〇ふりくるゆきは　降ってくる雪は。当該歌は、流れる水の上に雪が降っても消えていくものだが、それが残ったとしても、人の心をどうして頼みにできようか、という詠歌。
【所載】ナシ

【参考】忠岑集にも、恋する身と降りくる雪とを比較している「恋するに消えかへる身と春立ちて降り来る雪といづれまされり」、「恋するに消えかへるとも身は失せじ春来る雪のあとはとまるや」（一四五・一四六）という躬恒との問答歌がある。

二二二三　わがそでのなみだにいをはすみぬとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、我が袖の涙―涙が袖にたまってできた水の流れに魚が住んだとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇わがそでのなみだ　我が袖の涙。涙で袖がぬれることを川にたとえて、涙川という。「はやき瀬に見るめおひせばわが袖の涙の河にうゑましものを」（古今集・五三一）。〇いをはすみぬとも　たとえ魚が住んだとしても。「いを」は「魚」。
【所載】ナシ

二二二四　ますかゞみぬしなきかげはうつるとも　　おりしかうちのみつね（トナル）

【異同】おりしかうちのみつね―おうしかうちのみつね（大）
【現代語訳】仮に、ます鏡に、主のいない、実体のない姿がうつるとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇ますかがみ　真澄鏡。曇りなく澄んだ鏡。〇ぬしなきかげはうつるとも　主のいない姿が鏡に映っても。実体はないのに鏡に姿が映っているということ。「影にだに見えもやするとたのみつるかひなく恋をます鏡かな」（後撰集・八〇五）のように、姿は見えずともせめて鏡の中に面影が映ってほしいと詠じる歌は多いが、当該歌は実体のない影が鏡の中に見えるというそんな荒唐無稽なことがあったとしても、という意味になる。
【所載】ナシ
【参考】作者名「おりしかうちのみつね」とあるのは「凡河内躬恒」の誤記か。当該歌以下一〇首、「おりしかうちのみつね」の作が続く構成となっている。作者名の資料的根拠は不明。二一九四番歌参考欄参照。

二二二五　さほやまのもみぢぬあきはありぬとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、佐保山の紅葉しない秋があったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることできようか、できない。）
【語句】〇さほやまの　佐保山の。佐保山は奈良県奈良市法蓮町辺りの丘陵。「柞の紅葉」の名所。「秋霧は今朝はな立ちそ佐保山の柞の紅葉よそにても見む」（古今集・二六六）。〇もみぢぬあきはありぬとも　紅葉しない秋があったとしても。紅葉の景勝地として知られる佐保山が紅葉しない秋があったとしても、ということ。
【所載】ナシ

二二二六　かるかやをほたるのひにはともすとも

【異同】ナシ
【現代語訳】（蛍の火では燃えない）苅萱を、仮に、その蛍の火で灯すことができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇かるかやを　苅萱を。苅萱はイネ科の多年草で、秋に穂をつける。苅萱は秋の草なので、蛍と共に詠まれることはほとんどない。〇ほたるのひにはともすとも　蛍の火で灯すことがあったとしても。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　尾高〕

二二二七　ひとつけにとらのまだらはわきつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、一本の毛に、とらのまだら模様を見分けることができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇ひとつけに　一つの毛に。「ひとつけ」は、他に用例を確認できない語だが、おそらく「一つ毛」で

あろう。「一つ瀬に波さへさはり行く水の後もあひなん今ならずとも」（古今六帖・一七四三）のように、「一つ」＋「名詞」として解釈する。〇とらのまだらは　虎の背中の斑模様は。「みるやいかに山の木の葉は落ちつきて道にあたれる虎のまだらを」（風雅集・二〇七四）。当該歌は、虎の背中全体で見分けることのできる斑模様を、一本の毛の中でも区別できるとしても、という荒唐無稽さを仮定している。

【所載】ナシ

二二二八　はるかへるかりをばみなもとゞむ（トメツ）とも

【異同】ナシ

【現代語訳】仮に、春に北に帰る雁を全て帰さずにとどめおくことができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇はるかへるかりをばみなも　春に北へ帰る雁を皆。雁は春に北方に帰るものであるが、その雁を帰さずに全てここに止めるという荒唐無稽さを仮定している。

【所載】ナシ

二二二九　しろきけをこきみどりにはかへす（イシ）とも（なしつ）

【異同】ナシ

【現代語訳】仮に、白い髪を濃いみどりいろ（若々しい黒髪）に戻したとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）

【語句】〇しろきけをこきみどりにはかへす　白い毛を濃いみどりいろに返す。「かへす」は元に戻す。当該歌は漢詩の「緑髪」や「翠髪」を受けた表現。「雲山垣翠頭素髪」（新撰万葉集・四一七）や「紅林定有重青日、素髪応無更緑春」（新撰朗詠集・二八四）などには「白（髪）」と「翠・緑」との対比が詠じられ、白髪が再び「緑なる春」となることはない、という漢詩の発想が当該歌に影響した可能性が考えられる。「みどり」は、松の常緑や、春の新芽、夏の若葉などの若々しさを表現するものが多いが、当該歌は、荒唐無稽さを仮定した一連の歌群の中にあることから、白髪を黒髪（特に若々しい黒髪）の状態に戻すことができたとしても、と詠じたものと考えられる。

【所載】ナシ

二二三〇　としのうちに月なき月はありぬとも

【異同】ありぬとも―有つとも（大）
【現代語訳】仮に、一年の内に、月のない月があったとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇月なき月は　月のない月は。最初の「月」が空に浮かぶ天体としての月で、二番目の「月」が暦の上でのひと月のこと。
【所載】ナシ

二二三一　わたつみをむすびてそこは見せずとも

【異同】見せすとも―見せつとも（御・大）
【現代語訳】仮に、広大な海の水を手ですくって、底を見せることができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇むすびてそこは見せず（つ）とも　海水をすべて両手ですくいあげて、海の底を見せるようなことができたとしても。「むすびて」は両掌を合わせて水をすくう動作を表す。手で水をすくった時に海の底が見えないのでは荒唐無稽さを表現できないので、傍記や他の諸本に従い「見せつとも」で解釈した。「底は見せつ」の「は」は目的格の「を」を吸収した用法。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　尾高〕

二二三二　つゆしもをとけてのゝちはわきつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、露と霜が溶けたのちに区別ができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることがで

きようか、できない。）
【語句】〇つゆしもをとけてのゝち　露霜を溶けてののち。露と霜が溶けて水になったのち。「とく」は、「溶く」。〇わきつとも　分きつとも。どの部分が露でどの部分が霜か区別ができたとしても。
【所載】ナシ

二二三三　てをさへてよしのゝたきはせきつとも

【異同】ナシ
【現代語訳】仮に、手で遮って、吉野川の急流をせき止めることができたとしても。（あの人の心をどうして頼みにすることができようか、できない。）
【語句】〇てをさへて　手を障へて。手で遮って。「さふ（障ふ）」は、ひっかける、遮る、妨害する、などの意。手を出して遮る、の意で、「を」は格助詞か。後代の例であるが、「手をさへてむすびとどめし水の泡をうれしき瀬にもかき流すかな」（俊頼集Ⅰ・九六八）という一首がある。〇よしのゝたき　吉野の滝。吉野川の早瀬。「滝」は、激しい水の流れ、急流の意。〇せきつとも　塞きつとも。せき止めたとしても。
【所載】ナシ

二二三四　いはひ
わがきみはちよにましませさゞれいしのいはほとなりてこけのむすまで

【異同】ナシ
【現代語訳】我が君は、千世においでになりますように。小石が巌となって、苔が生すまで。
【語句】◎いはひ　祝ひ。祝いの意を表す歌。古今集仮名序に記される、和歌六義の一つ。御代を寿ぎ、長寿を寿ぐ。長寿とされる鶴亀、白玉などの数の多さ、常緑の松竹などの普遍性を題材とし、幸いを願う心、祝福する気持ちを詠む。〇ちよにましませ　千世にましませ。「ましませ」は、「あり」の尊敬語「ます」の命令形。詠み手の願いを表す。〇さゞれいし　細石。『和名抄』に、「細石　説文云礫〈音歴　和名佐々礼以之〉水中細石也」とあり、細かい石、砂利のことをいう。「浜千鳥跡踏み作る細石の巌とならむ時を待て君」（躬恒集・二九三）。〇いはほ　巌。大きな石。

【所載】古今集・賀・三四三／新撰和歌・一六一／和漢朗詠集・七七六／和歌体十種・六／和歌十体・三／深窓秘抄・一〇一／秀歌大体・一一二／奥儀抄・一〇七

二二三五　ふして思おきてかぞふるよろづよは神ぞしるらんわがきみのため

【異同】ナシ
【現代語訳】臥して願い、起きては数える万世は（誰のための祈りか。）神はご存じであろう、我が君のためであると。
【語句】〇ふして思おきてかぞふるよろづよ　臥して思ひ起きて数ふる万世。寝ても覚めても、（我が君の）万世を願う、の意。〇神ぞしるらん　神はご存じであるだろう。
【所載】古今集・賀・三五四／新撰和歌・一七一／素性集Ⅰ・五三／素性集Ⅱ・二七
【参考】作者名はないが、所載欄の古今集では素性。素性集に拠れば屏風歌。

二二三六　つるかめもちとせのゝちはしらなくにあかぬこゝろにまかせはてゝむ　ありはらのしげはる

【異同】ナシ
【現代語訳】鶴や亀も、千年のその先のことは知らないのだから、（どれ程長生きしたとしても）満足しない私の心に、その先は任せきってしまいましょう。
【語句】〇ちとせのゝちはしらなくに　千年ののちは知らなくに。千年のその先のことは知らないのだから。鶴亀は千年の長寿を保つというが、「千年」という限りがあり、その先のことは知らないのだから、の意。〇あかぬこゝろ　飽かぬ心。（限られた年月では）満足しない私の気持ち。
【所載】古今集・賀・三五五
【参考】作者名「ありはらのしげはる」は、所載欄に一致するが、その左注には「この歌は、ある人、在原時春がとも言ふ」ともある。

〔以上五首担当　吉田〕

二二三七　いにしへにありきあらずはしらねどもちとせのためしきみにはじめん（ミセテ）

【異同】ナシ
【現代語訳】いにしえの昔にあったかなかったかは存じ上げませんが、千年の寿命をもつという先例は今あなた様を初めといたしましょう。
【語句】〇いにしへにありきあらずはしらねども　古へにありきあらずは知らねども。古の昔にあったか、なかったかは知らないけれども。〇ちとせのためし　千年のためし。千年もの寿命をもつという先例。「ねがふ事心にあれば植ゑてみる松を千とせのためしとぞ見る」（貫之集・七〇九）。
【所載】古今集・賀・三五三／新撰和歌・一六九／素性集Ⅰ・五二／素性集Ⅱ・二六／素性集Ⅲ・三七
【参考】作者名無表記だが、所載欄の文献は新撰和歌以外素性の詠とする。古今集、素性集には本康親王の七十賀の屏風歌として詠まれたとある。

二二三八　神なびのやまのうへなるいはしみづいはひてぞくむよろづよのため

【異同】やまのうへなる―上なる（大）
【現代語訳】神がおわしますという神なびの山の上にある、岩から湧き出る清水を祈って汲みます。あなた様の万代までのご長寿のために。
【語句】〇神なびのやま　具体的な歌枕を指すこともあるが、ここでは神霊が鎮座する山を表す普通名詞。〇いはしみづいはひてぞくむよろづよのため　岩清水いはひてぞ汲むよろづ代のため。岩間から湧き出る清水を祈って汲む、あなたの長寿のために。「いはしみづ」は岩間から湧き出る水のこと。生活に欠かすことのできない水、信仰の対象ともなる聖なる水を称えていう言葉。こんこんと湧き出る清水に長寿のイメージを重ね、それを汲み上げるというように詠まれることがある。「そこひなき岩井の清水君が世にいくたび水はくまむとすらん」（嘉言集・一〇一）。「いはしみづいはひて」は同音反復。
【所載】続古今集・賀・一九〇四

二二三九　かめのをの山のいはねをとめておつるたきのしらたまちよのかずかもツラユキ

【異同】ナシ　「ツラユキ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】亀の尾の山の岩根を伝って落ちる滝の無数の飛沫は、あなた様の寿命である千代を表していることですよ。
【語句】〇かめのをの山のいはねをとめておつる　亀の尾の山の岩根をとめて落つる。亀山の岩を伝って落ちる。「かめのをの山」は山城国の歌枕で、現在の京都市右京区にある亀山のこと。小倉山の南東の尾根。「いはね」は地に根付いた岩のこと。恒久なものの象徴として賀の歌で詠まれることが多い。「とめて」は求めて行くという意。〇たきのしらたまちよのかずかも　滝の白玉千代の数かも。玉となって飛び散る滝の無数の飛沫はあなた様の寿命である千代を表しているのだなあ。急流から飛び散る飛沫を白玉に例え、無数の飛沫と同じだけの寿命を重ねて長生きしてほしいという詠みぶり。「いかにして数を知らまし落ちたぎつ滝の水脈よりぬくる白玉」（貫之集・三三）。
【所載】古今集・賀・三五〇／新撰和歌・一六七
【参考】作者名「ツラユキ」とあるが、所載欄の古今集は紀惟岳が貞辰親王の叔母の四十賀を大井で催した際に詠んだとする。

二二四〇　しほのやまさしでのいそにすむ（なく）ちどりきみがみよをばやちよとぞなく

【異同】ナシ
【現代語訳】しほの山のさしでの磯に住む千鳥は、あなた様の御代を「やちよ」と鳴くことです。（あなた様の御代は八千代まで続くと言って鳴いています。）
【語句】〇しほのやまさしでのいそにすむちどり　しほの山のさしでの磯にすむ千鳥。「しほのやま」「さしでのいそ」は諸説あるが、甲斐国の歌枕とされる。前者は現在の山梨県塩山市にある塩山、後者は現在の山梨県山梨市万力の笛吹川沿岸とされるが、当該歌は屏風などの絵を見て詠まれたもので、特定の地名を指すものではないという説もある。〇きみがみよをばやちよとぞなく　君が御代をやちよとぞ鳴く。あなた様の御代が八千代まで続くといって「やちよ」と鳴くことだ。「やちよ」は、千鳥の「ちよちよ」という鳴き声を「八千代」ととりなす。「高砂の松をともとて鳴く千鳥君がやちよの声やそふらむ」（秋篠月清集・一四〇五）。
【所載】古今集・賀・三四五／新撰和歌・一六五／伊勢集Ⅰ・四〇五／伊勢集Ⅱ・四〇九／伊勢集Ⅲ・四四九／和歌一字抄・一〇九五／袋草紙・七五六／和歌初学抄・二六七

【参考】伊勢集に見えるが、伊勢が作者ではない古歌が混入した巻末の歌群の中に見える。

二二四一　かの見ゆるたづのむらとりきみにとぞをのがよゝをばいはふべらなる
つらゆき

【異同】いはふへらなる―祝へらなれ（大）
【現代語訳】あそこに見える群がった鶴は、あなた様に（さしあげよう）と自分の長い寿命をことほいでいるようだ。
【語句】○たづのむらとり　田鶴の群鳥。群がった多くの鶴のこと。○をのがよゝをばいはふべらなる　おのが世々をば祝ふべらなる。それぞれが自分の長い寿命をことほいでいるようだ。「おのがよゝ」は、それぞれが別々の生活や人生を送る意で、意味が通らない。ここでは所載欄の夫木抄、貫之集の「おのがよはひを」で解釈する。鶴が己の長い寿命をさしだすために、自らの長寿をことほぎ、さらに相手の長寿を祈る詠みぶり。「群れゐつつ中州に遊ぶあしたづはおのがよはひを君にとや思ふ」（能宣集・四五七）。
【所載】夫木抄・一二五八七／貫之集Ⅰ・一九五
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集によると、延長四（九二六）年に宇多法皇の六十賀を京極御息所褒子が催した際の屏風歌十一首のうちの一首。

〔以上五首担当　山村〕

二二四二　山かぜはふけどふかねどしらなみのよするいはねはひさしかりけり
いせ

【異同】ナシ
【現代語訳】山風は吹いても吹かないでも、白波の打ち寄せる岩根はいつまでも変わらないことだ。
【語句】○しらなみのよするいはねは　白波の打ち寄せる岩根は。「白波」は、砕けて白く見える波。「岩根」は、地面に食い込むように根を下ろした岩。
【所載】新古今集・賀・七二一／伊勢集Ⅲ・五一一／貫之集Ⅰ・一九三
【参考】作者名「いせ」は所載欄の新古今集に一致する。伊勢集Ⅲにも見えるが増補歌と考えられる。貫之集Ⅰ

の詞書には、「延長四年九月法皇の御六十賀、京極の御息所のつかうまつり給ふ時の御屏風の歌十一首」とある。

二二四三　おほぞらにむれたるたづのさしながらおもふこゝろのありげなるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】大空に群れている鶴たちがある方向を目指しながら飛んでいく、その状態でありながら、祝う心があるように見えることだ。
【語句】〇さしながら　「ある方向を目指しながら」の意の「指しながら」に、「その状態でありながら」の意の「然しながら」を掛ける。〇おもふこゝろ　思う心。ここでは賀意や祝意である。
【所載】拾遺抄・賀・一八一／拾遺集・賀・二八四／和漢朗詠集・四五二／伊勢集Ⅰ・六九／伊勢集Ⅱ・七一／伊勢集Ⅲ・六八／信明集Ⅱ・六三

二二四四　つるおほくよをへて見ゆるはまべにぞちとせつもれるところなりけれ
つらゆき

【異同】はまへにそ―濱へこそ（大）　ところなりけれ―所也けり（大）
【現代語訳】［第三句「はまべにぞ」は「はまべこそ」として解した。］幾世にもわたって鶴が多く見える浜辺こそ、千年の寿命が積み重なっている所だったのだ。
【語句】〇つるおほく　鶴が多く。「見ゆる」にかかる。「鶴」は長寿を象徴する瑞鳥。〇よをへて見ゆる　世を経て見ゆる。幾世にもわたって見える。〇はまべにぞ　底本の「浜辺にぞ」は、所載欄の文献の「浜辺こそ」で解す。係助詞「こそ」は強意。「浜辺」は、無数の真砂があり長寿が積み重なる場所とされる。当該歌では、多数の鶴が長年住みつく浜辺こそ、と詠む。
【所載】貫之集Ⅰ・三三五、八八三／貫之集Ⅱ・五七
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

二二四五　もゝとせといはふをわれはきゝながらおもふがためはあかずぞありける（ある本シリ）

【異同】あかすそありける―あかすも有ける（大）
【現代語訳】「百年」と人々が寿ぐのを私は聞きながら、思う方のためには（百年の寿命では）物足りなく感じることであるよ。
【語句】○もゝとせといはふを　百年と祝ふを。「百年」と人々が寿ぐのを。「祝ふ」は、寿ぐ。吉言を唱えてその実現を祈る行為。○おもふがためは　思ふがためは。思う方のためには。「思ふ」の直後に「君」などの名詞が省略されている。○あかずぞありける　飽かずぞありける。物足りないことであるよ。係助詞「ぞ」は強意。ここでは「思う方の寿命が百年では、短くて物足りなく感じる」の意。
【所載】後撰集・慶賀・一三七二／貫之集Ⅰ・六七八

おなじ人

二二四六　ことをひにひくはまゆふのからころもちよをかねてぞいはひそめけん
ある本　ことしをひのこひてはまゆのからころも　よをかけてぞ

【異同】いはひそめけん―いはひ初ける（大）
【現代語訳】［初・二句「ことをひにひくはまゆふの」は「ことしおひのにひぐはまゆの」として解した。］今年萌え出た新葉の桑で育った蚕の繭で織った唐衣は、あなたさまの千年の寿命を予見して、祈りはじめたのでしょう（祈って染めたのでしょう）。
【語句】○ことをひにひくはまゆふの　意味不明。所載欄の貫之集により「ことしおひのにひぐはまゆの（今年生ひの新桑繭の）」で解した。今年萌え出た新葉の桑で育った蚕の繭の。「新桑繭（にひぐはまゆ）」は、桑の新葉を食べて育った蚕が作った繭。「にひぐはまよ」とも。○ちよをかねてぞ　千代を兼ねてぞ。あなたさまの千年の寿命を予見して。「兼ね」は下二段動詞「兼ぬ」の連用形。「兼ぬ」は「将来のことを予想する」意。ここでは、「唐衣」を贈られる人物の寿命が千年続くと予見する。係助詞「ぞ」は強意。○いはひそめけん　祝ひそめけむ。「祝ひ」は「寿ぐ」の意。ここでは長寿を祈願する。「祝ひ初む」は、「祈りはじめる」の意。「初め」に「染め」を掛ける。「染め」は「唐衣」の縁語。助動詞「けむ」は過去の推量。唐衣を作ることによって長寿の祈願が始まったということ。
【所載】古今六帖・第四帖「いはひ」二二五三／夫木抄・一四〇八八／貫之集Ⅰ・六八〇
【参考】作者名「おなじ人」が紀貫之を指すならば、所載欄の夫木抄と貫之集Ⅰに一致する。

〔以上五首担当　原山〕

二二四七　いはのうへにちりもなけれどせみのはのそでにのみこそいはふべらなれ

おなじ人

【異同】ナシ

【現代語訳】岩の上には払うべき塵もないけれど、薄い蝉の羽の袖によって払い清め、ひたすら祝っているようだ。

【語句】〇せみのはのそでにのみこそいはふべらなれ　蝉の羽の袖にのみこそ祝ふべらなれ。蝉の羽の袖によって払い清め、祝っているようだ。蝉の羽は薄いので薄い着物のたとえに用いられた。「蝉の羽の夜の衣は薄けれど移り香こくも匂ひぬるかな」（古今集・八七六）。当該歌では、故事にある天女の羽衣のように薄い袖で岩の上を払っても岩を撫で尽くすには長い年月がかかることから、そのような長寿を寿ぐ意を込めるか。参考欄参照。「のみ」も「こそ」も強調。「いはふ」は、当該歌では、長寿を祝う意を込める。「べらなれ」は、確定推量を表す助動詞「べらなり」の已然形（参考欄の論文参照）。なお、「いはふ」は、所載欄の貫之集Ⅰでは「たぐふ」、西本願寺本貫之集では「はらふ」とある。

【所載】貫之集Ⅰ・六八一

【参考】作者名「おなじ人」は、二二四四番歌の作者名「つらゆき」を指し、これは所載欄の文献と一致する。貫之集Ⅰによると、藤原定方が延喜十二（九一二）年十二月の年内立春の日（二十二日）に、同母妹である尚侍満子の四十賀を奉った際に詠進した五首のうちの一首で、二二四八番歌も同じ折の詠である。実は、満子の四十歳は翌年であって、醍醐天皇主催の満子四十賀も、延喜十三（九一三）年十月十四日に行われているのだが（日本紀略）、定方は年内立春により前年十二月に行ったものと考えられる。第一帖三番歌も、その際の詠である。当該歌は、岩に蝉が止まっている風景を詠み、「袖」は贈った衣の袖か（木村正中『新潮日本古典集成　貫之集』新潮社、昭和六十三年）。天女が軽い羽衣の袖で岩を撫で尽くすまでの長い時間（劫）を指すという「盤石劫」（雑阿含経）の故事によって、満子の寿命の永劫であることを祈る（中野方子「『古今集』における「べらなり」―喩に承接される助動詞―」『国文』平成九年一月）。

おなじ人

二二四八　としをのみおもひつめつゝいまゝでにこゝろにあけることのなきかな

【異同】ナシ
【現代語訳】あなた様の長寿を思ってばかりいて、今まで心にこれで充分だと思うことなく、満足できるようなお祝いの言葉がなかったことですよ。
【語句】〇おもひつめつゝ　「思ひ詰めつゝ」か。思ってきて。考え込んできて。〇こゝろにあけることのなきかな　心に飽けることのなきかな。満足できるような言葉がなかったことですよ。「あけ」は「飽く」の已然形で、「る」は完了存続の助動詞「り」の連体形。「飽ける」に掛けた「空け」は、第二句の「思ひ詰めつゝ」に掛けた「詰め」と対比させる。「こと」は「言」と「事」を掛ける。
【所載】貫之集Ⅰ・六八二
【参考】作者名「おなじ人」は、二二四四番歌の作者名「つらゆき」を指し、これは所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰによると、藤原定方が同母妹である尚侍満子の四十賀を奉った際に詠進した歌五首のうちの一首。二二四七番歌参考欄参照。

又　おなじ人

二二四九　おもふことこゝろにあればうへて見るまつをちとせのためしとぞおもふみる

【異同】ためしとそおもふ―例とそみる（大）
【現代語訳】願い思うことが心にあるので、植えて眺めている松を、千歳の先例だと思うことです。
【語句】〇うへて見る　植ゑて見る。植えて眺めている。〇まつをちとせのためしとぞおもふ　松を千歳の例とぞ思ふ。松を千歳の先例だと思う。「千歳」は千年、そのように長い年月。「ぞ」は、強意。常緑で千年もの寿命を保つとされていた松を、千年も続く先例と思い、長久を寿ぐ、ということ。「音にのみ聞き渡りつる住吉の松の千歳を今日見つるかな」（拾遺集・四五六・貫之）。
【所載】貫之集Ⅰ・六九〇／貫之集Ⅱ・七五
【参考】作者名「又おなじ人」は、二二四四番歌に作者名「つらゆき」とある通り、所載欄の文献に一致する。貫之集の詠歌事情を示す詞書には伝本により異同があるが、所載欄の貫之集Ⅰ・六八八番の詞書には「延長五年九月、右大臣殿前栽の合負態、内舎人橘の助縄つかうまつる州浜に書ける」とある。

二二五〇　なみのまにすなごふみこみなくたづはきみにちとせをゆづるべらなり　又　おなじ人

【異同】ナシ
【現代語訳】波間に、数え切れないほど多い砂子を踏み込んで鳴く鶴は、その千年の長寿をあなた様に譲るにちがいありません。
【語句】〇すなご　砂子。砂。数え切れないほど数が多いことから、長寿の祝意を表す。「わたつ海の浜の真砂を数えつつ君が千歳のあり数にせむ」（古今集・三四四）。〇君にちとせをゆづる　君に千歳を譲る。「千歳」は、二二四九番歌語句欄参照。当該歌では、千年の長寿を保つ「たづ（鶴）」もあなた様にはそれを譲ると詠むことで、「君」の千歳の長久を寿ぐ。「住吉の岸に波立つ松も皆千歳は君に譲るべらなり」（兼澄集・一一六）。〇べらなり　二二四七番歌参照。
【所載】ナシ
【参考】作者名「又おなじ人」は、二二四四番歌に作者名「つらゆき」とあるので貫之を指すが、他の文献では確認はできない。

二二五一　たのめつゝかゝれるふぢはまつのきのちとせをいふともあかずぞ有ける　いせ

【異同】ナシ
【現代語訳】松の木が頼りにさせていて、それに這いかかっている藤は、その松の木には千年の寿命があるとは言ってもまだ満足できず、もっと長久であってほしいと思うのでしたよ。
【語句】〇まつのきのちとせをいふとも　松の木の千年の寿命のことを言っても。松の木には千年の寿命があるとはいっても。「松の木の千歳」については二二四九番歌語句欄参照。〇あかずぞありける　飽かずぞありける。それでもう充分だと満足はしないことだったよ。当該歌では、頼みとする松の木の寿命が千年もあってもまだ飽きたらず、もっと長久であってほしい、さらに長く頼りにしていたいと思うのだったよという気持ちを表す。
【所載】伊勢集Ⅰ・七五／伊勢集Ⅱ・七七／伊勢集Ⅲ・七四

【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰや日本紀略によると、延長四(九二六)年九月二十八日に、京極御息所(藤原褒子)が宇多法皇の六十賀を主催した際に詠進された屏風歌三首のうちの一首で、「松にふぢかかれるところ」という画題がある。関根慶子・山下道代『伊勢集全釈』(風間書房、平成八年)に、「松にはいかかる藤という題は、このころの屏風歌に散見し、屏風歌として好まれる画題であったらしい。」という指摘がある。

〔以上五首担当　長戸〕

二二五二　すみのえのはまのまさごをふむ(ニス)つるはひさしきあとをとむるなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】住の江の浜の砂を踏んでいる鶴は、久しく残る足跡をとどめているのですね。
【語句】○すみのえ　摂津国の歌枕。現在の大阪市住吉区の住吉神社一帯を指し、入り江があった。○はまのまさご　浜の真砂。「まさご」は「砂」の美称。無数にあることから、「わたつ海の浜のまさごを数へつつ君が千歳のありかずにせむ」(古今集・賀・三四四)など、賀の歌に詠まれる。○ふむつるは　立って(砂を)踏んでいる鶴は。所載欄の新古今集・伊勢集Ⅱでは「ふむたづは」。○ひさしきあとをとむるなりけり　「あと」は鶴の足跡。「なりけり」は、今はじめて気づいた意。千年の齢をもつ「鶴」は、その足跡を久しく残すのですね、と祝意を表す。
【所載】新古今集・賀・七一四／伊勢集Ⅰ・八五／伊勢集Ⅱ・八六／伊勢集Ⅲ・八四
【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば伊勢の歌で、皇太后穏子の五十賀を祝うときの屏風歌である。

二二五三　コトシオヒノニヒヽクマユノカラコロモチヨヲカケテゾイハヒソメケル

【異同】底本・御所本ハ末尾ニ小字デ片仮名書キ一行ニ記シ、桂宮本・大久保本ハ本行ニ平仮名デ記ス。
【現代語訳】二二四六番歌既出。[第二句「ニヒヽクマユノ」は「にひくはまゆの(新桑繭の)」で解す。]今年萌え出た新葉の桑で育った蚕の繭で織る唐衣、千年にかけての長寿をと心に願って染めはじめたことです。
【語句】○コトシオヒノニヒヽクマユ　「ニヒヽクマユ」では意味不通なので、二二四六番歌所載欄の貫之集Ⅰ・六八〇「にひくはまゆ」(新桑繭)で解した。今年生ひの新桑繭。今年萌え出た葉で育った蚕の繭。○チヨヲ

カケテゾイハヒソメケル　千年にわたる長寿をと心にかけて祈り染めはじめたことです。「チヨヲカケ」の例として、「祈りつつ千代をかけたる藤波に生きの松こそ思ひやらるれ」（後拾遺集・四六九）がある。なお、「ソメ」は、「初め」に「唐衣」の縁語の「染め」を掛ける。当該歌は、尚侍満子四十賀の屏風歌。

【所載】古今六帖・第四帖「いはひ」二二四六番既出

二二五四　わがやどのまつのこずゑになくたづをちよのゆかりとおもふなりけり（ベラナリ）

つらゆき（たゞみね或本）

【異同】おもふなりけり―思ふへらなり（ヘラナリ）（大）

【現代語訳】わが家の松の梢に鳴いている鶴を、千年の寿命をもつ松のゆかりであると思うのでした。

【語句】〇ちよのゆかりと　千代のゆかりと。「ゆかり」は、つながり、縁故、の意。松は千年の齢をもつ樹木、鶴も千年の長寿をもつ、両者はそういう縁故をもつのだと。「見わたせば松のうれごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる」（土佐日記・一月九日条）。また、二二九四番歌参照。〇おもふなりけり　思うのであったよ。なお、この「思ふなりけり」の箇所、底本本行のままに解したが、所載欄の貫之集や傍記では「思ふ」主体は「たづは」とあり、「なりけり」も「べらなり」とある。

【所載】金葉集初度本・賀・四四四／夫木抄・一二五八六／忠岑集Ⅳ・一八四／貫之集Ⅰ・五一

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の金葉集初度本に一致する。なお、「たゞみね或本」と注記されるが、所載欄の忠岑集Ⅳ末尾に、「同じ忠岑が集の歌、少なきがあるに、またこれに入らぬ歌のあるを、選り出でて、なにとなくここより書き入れたるなり」という詞書で、一七五～一八五番の歌群があり、その中に見える。

二二五五　まなづるのたちゐならせるかはのせにちとせのあとをのこさゞるべき（トゞメザラメヤ）

たゞみね

【異同】ナシ

【現代語訳】［結句を所載欄の文献により「残さざらめや」で現代語訳した］真鶴が立ったりすわったり暮らし慣れている川の瀬に、千年の足跡を残さないでしょうか、いやきっと残すでありましょう。あなたさまも、千年の足跡をきっと残すことでありましょう。

【語句】○まなづる　ツル科の鳥。中形の鶴。田や水辺で小動物や草の根などを食す。○たちゐならせる　立ち居慣らせる。暮らし慣れている。「立ち居る」（上一段活用）は立ったり座ったりする。「……立ち居ならし大殿は　玉の御簾さへ　上げてけり……」（伊勢集Ⅱ・五二〇）。「慣らせる」は、四段「慣らす」の已然形＋存続の助動詞「り」の連体形。○かはのせ　川の浅瀬のところ。○ちとせのあとをのこさゞるべき　「のこさゞるべき」（残さずそあるべき）では意味が通らないので、所載欄の文献「のこさゞらめや」で解す。（千年の齢をもつ鶴の足跡は川の瀬に）千年残さないでしょうか、いやきっと残すにちがいない。あなた様も足跡を千年も残すにちがいない。所載欄の忠岑集Ⅱに、題「つる州に立てり、大井の行幸」とある。
【所載】忠岑集Ⅱ・一二二／忠岑集Ⅲ・一〇三／忠岑集Ⅳ・八八
【参考】作者名「たゞみね」は、所載欄の文献に一致する。

二二五六　ときはなるまつのしらべにひくことはをごとにきみをちとせとぞなる

ふかやぶ

【異同】ナシ
【現代語訳】色の変わらない松に吹く風音と同じ調べで弾く琴は、それぞれの絃ごとに、「あなた様の御寿命は千年である」と鳴っているのです。
【語句】○ときはなるまつのしらべにひくことは　永遠に色を変じない松に吹く風の調べで弾く琴は。松風と琴の音色は似通うと詠まれる。「野の宮に斎宮の庚申し侍りけるに、松風入夜琴といふ題をよみ侍りける／ことのねに峰の松風かよふらしいづれのをより調べ初めけむ」（拾遺集・四五一・斎宮女御）。なお、「常磐なる松」も「松の調べ」も。ともに同様の祝意を表す。○をごとにきみをちとせとぞなる　緒ごとに君を千歳とぞ鳴る。それぞれの絃が「あなた様の寿命は千歳」と鳴っていることです。
【所載】ナシ
【参考】作者名「ふかやぶ」とあるが、他文献で確認することはできなかった。なお、貫之集Ⅰの、「八条院にて琴（きん）ひくを聞きて詠める／ながきよの秋の調べを聞く人は緒ごとに君を千歳とぞなる」（六七九）は、当該歌と下句が同じ。古今六帖・三四〇〇番歌も当該歌に類似する。

〔以上五首担当　加藤〕

二二五七　よろづよのまつにぞとしをいのりつるちとせのかげにすまむとおもへば　つらゆきある本（キミハ）

【異同】ナシ
【現代語訳】万年も不変の松によそえてあなた様の寿命をお祈りします。千年もの間あなた様の庇護のもとに私も生きようと思いますので。
【語句】〇よろづよのまつ　万代の松。常緑の松は永遠に不変とされる。〇ちとせのかげにすまむ　千歳の蔭に住まむ。千年もの間、庇護の下に過ごそう。「蔭に住む」は松蔭など草木のかげに安らぐの意から、恩顧を受けて生きる、の意。
【所載】古今集・賀・三五六／素性集Ⅰ・四三／素性集Ⅱ・二八／素性集Ⅲ・三六
【参考】作者名表示に「つらゆきある本」とあるが、この歌は貫之集にはなく、貫之と伝える記述も見当たらない。所載欄の文献には「素性」作とする。

二二五八　ときはなるはなたちばなにほとゝぎすなきとよめつゝちよもへぬかな　つらゆき（ベシ）

【異同】ナシ
【現代語訳】永遠に変わらぬ花橘に、ほととぎすが来ては鳴き声を響かせ、響かせしては千代も過ぎたことよ。これからも永遠に。
【語句】〇ときはなるはなたちばな　常盤なる花橘。橘は常緑の果樹。常に緑の変わらぬ花橘。〇なきとよめつゝ　鳴きとよめつつ。鳴き声を大きく響かせた、ということが繰り返される。「とよむ」はマ行下二段活用の動詞。大きな音をたてる、大きな声を響かせる。「わが宿の花橘をほととぎす来鳴きとよめてもとに散らしつ」（万葉集・一四九七〈旧一四九三〉）。「つつ」は同じ作用が繰り返されることを表す接続助詞。ここでは夏になるとほととぎすが来ては鳴きとよむ、ということを繰り返す、ということ。
【所載】ナシ
【参考】作者名「つらゆき」は他文献にはない。屏風絵に付される屏風歌は、描かれた画面は静止して変化しないため、時の不変を歌えるという特色がある（片野達郎『日本文芸と絵画の相関性の研究』笠間書院、一九

七五年）。

二二五九　うへて見るまつとたけとぞきみがよのちとせゆきふるいろもかはらず（ヌ）

【異同】ナシ
【現代語訳】ここに植えて見る松と竹とはあなた様の代が千歳経ることを表わしていて、雪が降っても色も変わらないのです。
【語句】○うへてみる　植ゑて見る。植えてそれを見る。○まつとたけ　松と竹。どちらも常緑で不変の生命を讃えられる植物。○ちとせゆきふるいろもかはらず　千歳雪降る色も変わらず。千年雪が降る中でも緑の色が変わらない。「降る」に「経る」を掛ける。
【所載】続後撰集・一三五四／万代集・三七六九／素性集Ⅰ・三五／素性集Ⅱ・三一／素性集Ⅲ・四二
【参考】所載欄の文献では屏風歌であることを示す詞書がある。

二二六〇　いろかへぬまつとたけとのするゑのよをいづれひさしときみのみぞ見ん（ヨハヒヲモ）

【異同】ナシ
【現代語訳】時が経ってもまったく色を変えない常緑の松と竹と、どちらが久しく長く生きるか見届けるのはあなた様だけでしょう。
【語句】○いろかへぬまつとたけ　色変へぬ松と竹。常に緑の松と竹。他の植物のように緑色が変わるということのない松と竹。○するゑのよを　末の世を。時間が経ってゆく先を。○いづれひさし　どちらが長くあるか。どちらが永続するか。
【所載】拾遺抄・賀・一七三／拾遺集・賀・二七五／如意宝集・一九
【参考】所載欄の文献には「承平四年中宮賀屏風」に斎宮内侍の詠んだ歌とする。

二二六一　あらはなるかたにしもすむあしたづはちよを見よてふこゝろなつかし（ナリケリ）（いせ）

【異同】ナシ
【現代語訳】人目につくところに鶴が立っているのは、その齢千年を見よとの心なのでしょう。
【語句】〇あらはなるかた　「あらはなり」は、人目に立つ、明瞭に見える、の意の形容動詞。所載欄の伊勢集Ⅰには「后宮五十賀御屏風内裏し給し」との詞書の歌群中にあり、「松の末に鶴立てり」という絵の説明がある。〇ちよを見よてふ　千代を見よてふ。「てふ」は「といふ」のつづまった形。〇こゝろなつかし　古今六帖の現存伝本はすべてこの通りであるが、伊勢集Ⅰの「なるへし」は見誤りやすい字形であり、誤写か。「なるへし」で訳す。「こころなつかし」の平安期の用例はない。
【所載】伊勢集Ⅰ・八四／伊勢集Ⅱ・八五／伊勢集Ⅲ・八三
【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　平野〕

二二六二一　いくよともさして（アスヲバ）はいはじしらつゆのしらぬまでこそあらまほしけれ

【異同】ナシ
【現代語訳】幾世であるとも指し示してはっきりとは言いますまい。いつまでと知れないくらい長生きすることこそ望ましいのです。
【語句】〇いくよとも　幾世とも。〇さしてはいはじ　指し示してはっきりとは言うまい。「さして」は、それと限定して、こうだと指し示して。「じ」は打消の意志。〇しらつゆの　白露の。「しらぬ」の「しら」を導く措辞。「白玉の」は「知ら」を導くが、「白露の」は「置く」を導く場合が多く、「知ら」を導く例は、後代に「青柳の糸に玉ぬく白露の知らず幾世の春か経ぬらむ」（新古今集・七五）がみられる程度である。所載欄の和歌童蒙抄では「しらつるの」となっていて、「鶴」の題の中の一首、「いはひ」の歌としてはその方がふさわしい。〇しらぬまでこそ　（いつまでと）知らぬくらいであることこそ。「まで」は、程度をあらわす副助詞。〇あらまほしけれ　そうあることが望ましい。「あら」に生存する、生きながらえる意を含ませる。「こそ」の結びで已然形となる。
【所載】和歌童蒙抄・七六五

二二六三　いとをのみたえずくりため（イダス）あをやぎのとしのをながきしるしとぞ思（ミル）

【異同】ナシ
【現代語訳】糸をひっきりなしに繰っては巻き取って、青柳の枝は緒のように（切れ目なく）長く続いている、それはあなた様の寿命がずっと長く続くしるしだと思います。
【語句】〇くりため　糸を繰って巻き取り。青柳の細い枝を糸に見立てるのは、「青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のほころびにける」（古今集・一二六）のごとく、常套表現であるが、それを「くりため」とする例はない。傍記の「くりいだす」ならば、糸を繰って、次々に送り出す意で、青柳の細い枝が風に靡く様子にふさわしいが、本文通りに解す。〇あをやぎの　青柳の。上三句は「（としの）をながき」を導く序。〇としのをながき　年の緒長き。寿命が長く続くことを緒（糸、紐）に喩える。「織女に貸しつる糸のうちはへて年の緒ながく恋ひやわたらむ」（古今集・一八〇）。風に揺れる青柳の枝の、次々に繰り出される糸のような細く長い印象が、緒のように連綿と続く歳のイメージと重ねられる。「絶え」「繰り」「緒」「長き」は「糸」の縁語。
【所載】古今六帖・第六帖「柳」四一五六／貫之集Ⅰ・二六九
【参考】作者名はないが貫之集にみられる。貫之集では、延喜十年十月十四日、陽成天皇の第一皇子元良親王の妃（醍醐天皇の第八皇女）修子内親王が、親王の四十賀のために調進させた屏風の歌で、元良親王の長寿を祝う意がこめられる。

つらゆき

二二六四　おほ井がはせきのわき〳〵なくちどりいくよの秋をかぞへきぬらん

【異同】ナシ
【現代語訳】大井川の井堰が（水で）湧き返り、堰を分けつつ飛んで鳴いている千鳥は、幾世の秋を数えてきたのだろうか。
【語句】〇おほ井がはせきのわき〳〵　「大井川」は山城国の歌枕。一六二三番歌参照。「おほ井がはせきの」までが「わき〳〵」に掛かる序。「わき〳〵」は、用例がなく、わかりにくい語だが、井堰で堰き止められた水が絶えず湧き返ることと、千鳥が堰を分けつつ飛ぶ意を掛けたものとみる。「吉野川岩の井堰を湧き返り白木綿花や滝の玉水」（散木奇歌集・一三〇〇）は、岩が井堰となって水が湧き返る例。〇ちどり　千鳥。チドリ科の鳥の総称。その鳴き声は、「しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く」（古今集・賀・三四

五）のごとく、チヨチヨと鳴く「八千代」と聞きなされ、長寿を寿ぐとされた。二二四〇番歌参照。〇いくよの秋　幾世の秋。どれほどの年月の秋、多くの秋。「幾世」は「千鳥」の「千」と響き合う。
【所載】ナシ
【参考】作者名「つらゆき」とあるが、他の文献で確認できない。

二二六五　いかでなをきみがちとせはきくのはなをくしらつゆにぬれんとぞ思（ヲ）（リツ、）

【異同】ナシ
【現代語訳】何とかしてやはり、あなたの千年の命があることを聞こうとして、私も菊の花に置く白露に濡れようと思うのです。
【語句】〇いかでなを　いかでなほ。何とかして、やはり。〇きみがちとせは　傍記の「きみがちとせを」として解す。あなたの千年の命があることを。「春くれば宿にまづ咲く梅の花君が千歳のかざしとぞ見る」（古今集・三五二）。〇きくのはな　菊の花。「君が千歳」を「聞く」に「菊の花」の「菊」を掛ける。〇をくしらつゆにぬれんとぞ思　置（お）く白露に濡れんとぞ思ふ。置いている白露に濡れようと思う。菊の露は不老長寿をもたらすもの。一八七、一九一番歌参照。当該歌は、直接相手の長寿を祈るのではなく、相手の命が千歳であることを聞き届けるために、自分もあやかって菊の露に濡れて千年を生きたいという一ひねりした表現である。
【所載】古今六帖・第四帖「いはひ」二二七五／貫之集Ⅰ・一九六
【参考】作者名はないが、貫之集にみられる。貫之集では延長四年九月、宇多法皇の御六十賀を、京極御息所が主催した時の屏風歌で、画中人物の立場で、宇多法皇の千歳の長寿を予祝し、それにあやかりたいと願うもの。

二二六六　あづさゆみつるのいのちもかゝらなんきみをたとへに人はひくべく（モ）

【異同】人はひくへく―人は引とも（大）
【現代語訳】鶴の命もこのようであって欲しいものです。（鶴よりも長寿である）あなたを例として人が引き合いに出すように。
【語句】〇あづさゆみ　「はる」「ひく」を導く枕詞であるが、当該歌では「つる（弦）」を導く。「つる」を導くのは、「梓弓つるばみ（橡）衣ひきつれて春のはじめにまとゐをぞする」（肥後集・八）と、「弦」ではなく「つ

るばみ衣」の「つる」を導く一例のみ。〇つるのいのち　鶴の命。「弦」に「鶴」を掛ける。「松柏与亀鶴　其寿皆千年（松柏と亀鶴と其の寿は皆千年）」（『劾陶潜体詩十六首』・『白氏文集』・〇二一三）などといった中国文学の発想に基づいて作られた、「鶴亀も千歳ののちは知らなくに飽かぬ心にまかせ果ててむ」（古今集・三五五）という歌のように、千年の寿命をもつ鶴を引き合いに出し、君はその鶴よりも長寿であるとする趣向。〇かゝらなん　このようであればよい、かくのごとき状態であって欲しい。「なん」は願望の終助詞。〇人はひくべく　人が引き合いに出すように。たとえとして「引く」に弓を「引く」を掛ける。「つる」「ひく」は「弓」の縁語。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　中野〕

二二六七　山かげのきくのしたみづいかなればくむ人ごとにおいわたるらん　おきかぜ

（ヲトムラン　ワスルランイ）

【異同】くむ人ことに―くむことに（大）

【現代語訳】山かげの菊の下を流れる水は、どういうわけで、汲む人汲む人が皆、老いてなお長寿を保っているのであろう。

【語句】〇きくのしたみづ　菊の下水。中国に伝わるいわゆる菊水説話による。説話はさまざまな形で伝えられているが、たとえば応劭の風俗通義佚文によると、南陽郡（現在の河南省南陽市）の酈県（れきけん、てっけん）には「甘谷」と呼ばれるところがあって、その谷の水は甘美だった、山の上に大きな菊の花があり、水が山から流れ落ちる時にその菊から滋養に富んだ液を含むからで、その水を飲む谷の住人はみな長生き、普通でも百歳を越え、七十歳、八十歳で死んだ者は「夭（早死に）」と言われるほどだった、とする。「老いをせく菊の下水手にむすぶこの里人ぞ千代も住むべき」（夫木抄・五九八〇）。〇おいわたるらん　老いわたるらむ。老齢になってもそれがいつまでもつづくだろう、の意。なお「……わたる」は、時間的、空間的にある幅を持っている意を表す。ここは時間的に、ずっと。

【所載】新古今集・賀・七一七／興風集Ⅰ・三二／興風集Ⅱ・一五

【参考】作者名「おきかぜ」は、所載欄の文献に一致する。

二二六八　ちよをふるまつにかゝれるこきなればとしのをながくなりにけらしも　みつねある本　ルカナ

【異同】ナシ
【現代語訳】千年もの長寿を保つ松に生えている苔なので、随分長いこと年月が経ってしまったらしいですね。
【語句】〇ちよをふる　千代を経る。千年を過ごす。長い歳月を過ごす。〇としのを　年の緒。年月が長くつづくことを緒にたとえていう。一般に「長し」とともに用いられる。「織女に貸しつる糸のうちはへて年の緒長く恋ひやわたらむ」（古今集・一八〇）。〇なりにけらしも　なってしまったらしい。「けらし」は、助動詞の「けり」に「らし」のついた「けるらし」の変化したもの。一説に、「なつく」→「なつかし」、「ゆく」→「ゆかし」などと同じように、助動詞「けり」が形容詞的に活用した語ともいう。
【所載】続古今集・賀（異本歌）・一九二六／夫木抄・一三三一四／躬恒集Ⅱ・二六一／躬恒集Ⅲ・一三八
【参考】作者名「みつねある本」は、所載欄の文献に一致する。なお古今六帖・三九五九、新古今集・七三一に、「ときはなる松にかかれる苔見れば年の緒長きしるべとぞ思ふ」という非常に類似した歌が見られる。

二二六九　よろづよをけふよとゝせとかぞふればのこりはるけきゝみがみよかな　かねもりある本　ト　モ

【異同】ナシ
【現代語訳】限りなく長い年月を、今日、四十年と数えますと、残りがまだまだ非常に多いあなた様の御代ですね。
【語句】〇よろづよを　万代を。限りなく多くの年月を。〇けふよとゝせと　「よとゝせ」が意不明。「よそとせ（四十年）」の誤りか。算賀といって、四十歳以後、十年おきに長寿の祝いが行われた。四十賀、五十賀などという。
【所載】ナシ
【参考】作者名「かねもり（兼盛）」は、他に資料なく確認できない。

いせ

二二七〇　としごとにおいそふたけのよゝをへてかはらぬいろをたれかとがめん

【異同】ナシ
【現代語訳】毎年毎年生え加わる竹の、その竹の節のように、代々を経ても変わらない緑の色を、一体誰のことして見ましょうか。言うまでもなくあなた様のこととしてです。
【語句】〇おいそふ　生ひ添ふ。生えて加わる。〇たけのよゝをへて　竹の「よ（節）」に、「代々を経て」を掛ける。竹の「よ」は、竹の節と節との間をいう。上二句に、長寿と繁栄の祝意が込められており、「代々」を導く序詞的な役割も果たしている。〇たれかとがめん　本文どおり解すれば、誰が咎めようか、咎める者はいない、の意となり、「いはひ」の歌としては意不明。所載欄の本文にはすべて「たれとかは見む」とあるので、それにより解した。誰のこととして見ようか。
【所載】新古今集・賀・七一五／伊勢集Ⅰ・七六／伊勢集Ⅱ・七八／伊勢集Ⅲ・七五／貫之集Ⅰ・一九八
【参考】作者名「いせ」は、伊勢集に見えるものの、貫之集にもあり、新古今集では「貫之」とする。

二二七一　見えわたるはまのまさごやあしたづのちよをかぞふるかずとなるらん

【異同】ナシ
【現代語訳】一面に見える浜の真砂は、長寿で名高い鶴の、千年もの年月を数えるものとなっているのでしょうか。
【語句】〇見えわたる　一面に見える。「……わたる」については二二六七番歌参照。ここは空間的な意。〇はまのまさごや　「まさご」は「真砂」で、砂の意。「真」は美称。「や」は疑問の係助詞。従って末尾の「なるらん」の「らん」は、係り結びにより連体形。〇あしたづ　鶴の異名。葦が生えている水辺に多くいるところからという。
【所載】続後撰集・賀・一三五〇／新撰和歌・一七九

〔以上五首担当　久保木〕

二二七二　まつのうへにふりしくゆきをあしたづのちよのゆかりにすむかとぞおもふ

【異同】ナシ
【現代語訳】松の枝に降り積もる雪を、鶴が、松と同じ千年の齢をもつという縁で、棲んでいるのかと思ったことです。
【語句】○まつのうへにふりしくゆき　松の上に降り敷く雪。所載欄の古今六帖六八四番では、「……ふりおほふ雪」。○すむかとぞおもふ　（葦鶴が）棲んでいるのかと思うことです。所載欄の古今六帖六八四番では、「きゐるとぞ見る」。
【所載】古今六帖・第一帖「ゆき」六八四番既出
【参考】作者名「つらゆき」は貫之集にあり一致する。六八四番歌参考欄も参照。

二二七三　つゆしもをしのべるきくは見る人のちとせをゝくるしるしなりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】露や霜に堪えて美しく咲く菊の花は、それを見る人が千年を過ごすというあかしなのでした。
【語句】○つゆしも　露と霜のこと。花を色美しく染めると詠まれる。「ひともとの菊にはあれど露霜ぞ分きてことごと色は染むらし」（躬恒集Ⅳ・二〇四）。○しのべるきく　忍べる菊。こらえている菊。「しのべる」は、他動詞四段「忍ぶ」の已然形＋存続の助動詞「り」の連体形。○ちとせをゝくる　千年を送（おく）る。「菊」から「千年」を導いて祝意を表す。○しるしなりけり　証拠なのでした。「人の家に男女庭の菊みる／植ゑてみる菊といふ菊は千世までに人の過ぐべきしるしなりけり」（貫之集・三七〇）。
【所載】ナシ

二二七四　やをとめのそでかと見ゆるをみなへしきみをいはひてなではじめつる

【異同】ナシ
【現代語訳】八人の天女の袖かと見える女郎花は、天人が衣の袖で岩を撫でたように、あなた様の長寿を祈って撫ではじめたのです。

【語句】〇やをとめのそでかと見ゆるをみなへし　八人の天女の袖かと見える女郎花は。「八乙女」は、春日社や石清水社に見える巫女（頴注密勘）をいうが、当該歌の「乙女」は下句から天女を指す。〇きみをいはひて君を祝ひて。「祝ふ」は、吉事を祈る、祝福する、意。〇なではじめつる　岩を撫ではじめたのです。天人が衣の袖で岩を撫でた「盤石劫」の仏教故事にもとづく表現。女郎花を天人にたとえ、「八乙女の袖」「岩」「撫ではじめ」という文脈がある。第二帖「いはほ」一〇〇四番・一〇〇五番歌参照。
【所載】夫木抄・四二二八／亭子院女郎花合・四九／和歌童蒙抄・五三四
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の夫木抄に「家集　伊勢」とあるが、現存の伊勢集にこの歌は見えない。亭子院女郎花合・和歌童蒙抄では作者名なし。

二二七五　ほしきつゝきみがちとせはきくのはなをかんつゆにもぬれんとぞ思　つらゆき

【異同】ナシ
【現代語訳】菊の露に濡れた衣を干して着てをくり返して、あなたさまの寿命は千年と聞いております。私も菊の花に置くであろう露に濡れようと思うことです。
【語句】〇ほしきつゝ　「干し着つつ」か。濡れた衣を干しては着てをくり返して。他に例の見当たらない表現。当時、菊においた露に濡れることで、寿命が延びるとされていた。「仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる／濡れて干す山路の菊のつゆのまにいつか千年を我は経にけむ」（古今集・二七三・素性）。〇をかんつゆにも　置（お）かむ露にも。菊の花に置くであろう露にも。
【所載】古今六帖・第四帖「いはひ」二二六五番既出／貫之集Ⅰ・一九六
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の貫之集にあり一致する。

二二七六　ゆきのうちにちとせかはらぬまつがえはひさしきこゝろたれによすらん

【異同】ナシ
【現代語訳】雪の中で千年も変わらない常緑の松の枝は、その久しく続く心をいったい誰に寄せるのであろうか。他ならぬあなた様にです。

【語句】〇ゆきのうちにちとせかはらぬまつがえ　雪の中でも千年も色の変わらない松の枝。「十八公（＝松）の栄（えい）は霜の後に露（あらは）れ　一千年の色は雪の中（うち）に深し」（和漢朗詠集「松」・四二五・源順）。〇ひさしきこゝろ　変わりなく久しく続く心。「波寄する岸に年ふる松の葉の久しき心たれかしるらん」（玉葉集・二一八九・貫之）。〇たれによすらん　いったい誰に寄せるのであろうか。他ならぬ祝われるその人にです、というのである。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　加藤〕

二二七七　いかでかとおもふときにはよのなかのちよてふこともあかずぞ有ける

【異同】ナシ

【現代語訳】ぜひずっとお元気でいてほしいと思う時には、世の中でいう「千代（の命）」という表現でも、全然足りないのです。（もっともっと長くお元気でいてほしいのです。）

【語句】〇いかでかとおもふ　どうにかして……と思う。ぜひにも……と思う。あとに詠者の心情が省略されている。「いかでかと思ふ心のある時はおぼめくさへぞうれしかりける」（拾遺集・六九三）。当該歌では、相手に長生きをしてほしいという心情がこめられている。〇ちよてふこともあかずぞ有りける　千代の寿命ということでも充分でないのだったよ。「たのみつつかかれる藤は松の木の千代てふこともあかずぞありける」（伊勢集・七五）。

【所載】ナシ

二二七八　しほがまのいそのいさごをつゝみもてみよのかずとぞおもふべらなる

【異同】ナシ

【現代語訳】塩竈の磯の（数限りない）砂を包み持って、帝の御代の限りない年数だと確信することです。

【語句】〇しほがまのいそのいさご　塩竈の磯の砂子。塩竈の磯にある数限りない砂。塩竈は陸奥国の歌枕。現在の塩竈湾一帯をいう。一七九六番歌参照。〇みよのかず　御代の数。「御代」は天皇の治世。〇おもふべらなる　確信することだ。「べらなり」については、二〇七七番歌参照。賀歌においては、虚構の喩を現実にあり

得る確かなこととして言い切るために用いられた。
【所載】玉葉集・賀歌・一〇三七／夫木抄・一二〇八〇／忠岑集Ⅰ・三八／忠岑集Ⅱ・九三／忠岑集Ⅲ・九九、一三四／忠岑集Ⅳ・一五二
【参考】所載欄の文献によれば、醍醐天皇の外戚であった右大将藤原定国の四十賀の屏風歌。

二二七九　さくかぎりちらとではてぬるきくのはなむべしもちよのよはひのぶらん　つらゆき十八首ただみね或本

【異同】ナシ
【現代語訳】咲いている間ずっと散らずに終わった菊の花。なるほど、本当に千年の齢を延ばすのだろうなあ。
【語句】〇さくかぎりちらではてぬるきくのはな　咲く限り散らで果てぬる菊の花。菊の花びらが落ちることなく色が変わり、そのままになっていることを表現したものであろう。〇むべしも　「むべ」は、後に述べる事柄を当然だと得心する時に用いる副詞。なるほど、本当に。「しも」は強意を表す副助詞「し」に係助詞「も」がついたもの。〇ちよのよはひのぶらん　千代の齢延ぶらん。芸文類聚などに見られる菊水の故事をふまえる。菊水は現在の河南省にある川で、上流に菊の花があり、その雫がしたたり落ちた川の水は甘く、飲めば寿命を延ばすという。二二六七番歌参照。
【所載】貫之集Ⅰ・四二
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。小字で「十八首」とあるが、当該歌から二二九七番歌まで、二二八九番歌を除く一八首は、全て貫之集に所載のある歌となっている。「たゞみね或本」とあるのは、前の二二七八番歌の作者名にあたるものが、書写されていく中で当該歌の注記の形になったものか。
　なお、所載欄の文献によれば、醍醐天皇皇女勧子内親王の裳着に際し、宇多法皇の下命で献上した十五首のうちの一首。

二二八〇　ふくかぜもあかずおもひてしらなみのかずにぞきみがとしをよせつる

【異同】ナシ
【現代語訳】吹く風も、全然足りないと思って、白波が立ち返る数ほどに多く、あなたの寿命を寄せたのだ。

【語句】〇ふくかぜも　吹く風も。「も」は強意の係助詞。ここでは、自分だけでなく、吹く風も同じように思っている、ということ。〇しらなみのかずにぞ　白波の数にぞ。白波の数は「白波の立ち返りくる数よりも我が身を嘆くことはまされり」（千里集・一二〇）のように、限りなく多いものとして詠まれる。ここでは、白波が立つ数と同じくらい長寿を保ってほしいという願いを詠んだもの。
【所載】貫之集Ⅰ・一六二
【参考】作者については、二二七九番歌参照。所載欄の貫之集によれば、左大臣藤原忠平の北の方、源順子の四十賀の名所絵屏風の歌で田子の浦を詠んだもの。貫之集においても次の二二八一番歌の前に置かれている。

二二八一　きみとなを（ガ）ちとせのはるはあふさかのしみづはわれもくまむとぞ思

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたがますます栄えて千年の春に巡り逢うという、その逢坂の清水は、私も（あやかって）汲もうと思うことだ。
【語句】〇きみとなを　傍記の「きみがなほ」で解した。「なほ（猶）」は、ますます、ずっと、の意。ここでは「君」がますます栄え続けることを表している。〇ちとせのはるはあふさかのしみづ　千年の春に逢うという名を持つ、その逢坂の清水。「千年の春」は、賀の歌や屏風歌でよく用いられる表現で、永遠性を表す。源順の「今日とくる氷にかへてむすぶらん千年の春にあはむちぎりを」（後拾遺集・四二五）などがある。「あふ」は、千年の春に巡り逢うという意の「逢ふ」と「逢坂」の掛詞。同様の掛詞を用い、逢坂の清水を詠みこんだ歌に「君が世に逢坂山の石清水木がくれたりと思ひけるかな」（古今集・一〇〇四）がある。
【所載】貫之集Ⅰ・一六三
【参考】作者については、二二七九番歌参照。詠歌状況については、二二八〇番歌参照。

〔以上五首担当　諸井〕

二二八二　うちまよふあじろ（ツ）にたてるあしたづのよはひをきみになみもこさなん（ヨセ）

【異同】よはひをきみに―齢を君も（大）
【現代語訳】群がり乱れ合って網代のところに立っている鶴、その鶴の長きよわいをわが君のためにと、どうか

波も打ち寄せてほしいものです。

【語句】○うちまよふ　うち迷う。一首の中でのこの初句の意はとりにくいが、多くの葦鶴が群がり乱れ合っているさまを言ったものか。「うち」は接頭語。この初句は、第二句の「あじろ」に掛かるものではなく、第三句の「あしたづ」に掛かるものと見たい。○あじろにたてる　網代に立てる。網代のところに立っている。「網代」は、川の流れを横切る形に杭を立て並べ、それに簀をかけわたして魚がかかるようにしたしかけのこと。所載欄の貫之集Ⅰ六九二番歌では、「葦辺に立てる」となっており、その方が情景としては自然である。○あしたづ　葦の生えたところにいる鶴。鶴は千年のよわいを持つものとされていた。○なみもこさなん　波も越さなん。「越さなん」は、傍記に拠り「よせなん（寄せなん）」として訳した。所載欄の貫之集Ⅰ六九二番歌も「寄せなん」となっている。波も打ち寄せてほしい。「なん」は他者に対して誂え望む助詞。

【所載】貫之集Ⅰ・六九二／貫之集Ⅱ・七七

【参考】作者については二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによればこの歌は、「延長五年九月、右（ママ）大臣殿前栽合まけわざ、内舎人橘すけなはつかうまつる州浜にかける」として貫之が詠んだ七首の中の一首である。なお、右詞書中に「右（ママ）大臣殿」とあるのは「左大臣」忠平のことである。

二二八三　たがとしのかずとかは見るゆきかひてちこ(トリ)ゑなくなるはまのまさごを

【異同】ちこ(トリ)ゑなくなる―千鳥なくなる（大）

【現代語訳】いったいどなたの年齢の数として見ますか。行き交いながら千鳥が鳴いているこの浜の、真砂の数を。

【語句】○たがとしのかずとかは見る　たれの年齢の数として見るか。言外に「それはあなたのよわいの数だ」の意がある。○ちこ(トリ)ゑなくなる　千声鳴くなる。ただし、「千声」では鳴いているものがなんであるかが分らない。傍記に拠り「千鳥鳴くなる」として解した。所載欄の諸文献もみな「千鳥」となっている。千鳥は、「ちよ、ちよ（千代、千代）」と鳴くものとされていた。○はまのまさごを　浜の真砂を。「浜の真砂」は、数あまたあることの比喩として言われている。

【所載】拾遺抄・賀・一九一／拾遺集・賀・二九六／貫之集Ⅰ・六九四／貫之集Ⅱ・七九

【参考】作者については、二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによれば、この歌は前歌（二二八二番歌）と同じ機会に詠まれた貫之の作である。

二二八四　ひさしきをねがふ身なればはるがすみたなびくまつをいかでとぞ思

【異同】ナシ
【現代語訳】（わが君の）久しきよわいを願う身でありますから、どうか、あの春霞のたなびいている松のような長寿があられますように、と思うのです。
【語句】〇ひさしきをねがふ　久しきを願ふ。よわいの久しいことを願う。「ひさしき」は、この歌の奉られた対象についての願望として言われている。参考欄参照。〇はるがすみたなびくまつ　春霞たなびく松。たなびく春霞のかかっている松。この松は、久しきよわいのあるものとして言われている。〇いかでとぞ思　どうかして、なんとかして、あのようでありますように、と思う。ここの「いかで」は、願望を表わす。
【所載】貫之集Ⅰ・二八一
【参考】作者については、二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによればこの歌は、「延喜の末よりこなた延長七年よりあなた、うち〳〵の仰せにて奉れる御屏風の歌　二十七首」の中の一首で、貫之の作である。

二二八五　かめ山のかげをうつしてゆくみづをこぎくるふねはいくよへぬらん

【異同】ゆくみつを―行水に（大）
【現代語訳】亀山の影を映しながら流れて行く水の上を漕いでくる舟は、いったい幾代を経ているのでありましょうか。（きっと、亀山というその名のとおり、万年を経た舟なのですよ。）
【語句】〇かめ山　亀山。山城国の歌枕。現在の京都市右京区嵯峨にある山。「亀山」の名の「亀」は、万年のよわいを経るものとされていた。〇かげをうつしてゆくみづ　影を映して行く水。嵯峨の亀山は大堰川に近いので、その流れに影を映して流れゆく、と詠んだ。
【所載】貫之集Ⅰ・一六四／夫木抄・八三〇三
【参考】作者については、二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによればこの歌は、「延長二年、左のおとどの北の方の御屏風の歌　十首」の中の一首で、貫之の作である。なお、右詞書中に「左のおとどの北の方」とあるのは、左大臣忠平の室で、宇多天皇皇女源順子のことである。

二二八六　君がよのとしのかずをばしろたへのはまのまさごをたれかしきけん（ト）

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたのご寿命の年数をば、あのように数かぎりもなきものとして、白妙の浜の真砂を、いったいたれが敷いたのでしょう。
【語句】〇君がよのとしのかず　あなたの寿命としての年の数。「君」は、ここで慶祝の対象とされている人物をさす（参考欄および前歌〈二二八五番歌〉の参考欄を参照）。〇はまのまさごをたれかしきけん　浜の真砂をたれか敷きけん。あのように数かぎりもないものとして、浜の真砂をたれが敷いたのだろう。「まさごを」は、傍記により「まさごと」とした方が、歌意はなだらかに通る。「敷きけん」とあるのは、白砂を敷いた庭、という屏風の絵柄を見て詠んだのであろう。
【所載】新古今集・賀・七一〇／貫之集Ⅰ・一六五
【参考】作者については、二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによればこの歌は、前歌（二二八五番歌）と同じ機会に屏風歌として詠まれた貫之の作である。

〔以上五首担当　山下〕

二二八七　よとゝもにゆきかふゝねを見るごとにほにいでゝきみをちとせとぞ思

【異同】ナシ
【現代語訳】いつもいつも往来する舟を見るたびに、はっきりと我が君の寿命は千年だと思うことですよ。
【語句】〇よとゝもに　世と共に。常に、絶えず、の意。「松をのみ常盤と思へば世と共に流るる水も緑なりけり」（貫之集・一一八）。第三句「見るごとに」にかかる。〇ほにいでゝ　穂に出でて。高く突出し目立つ部分を「ほ（秀・穂）」という。「穂に出づ」は、はっきりと表に現れる、の意。ここでは「秀」に「帆」を掛けた。「帆」は「舟」の縁語。一八二六番歌参照。
【所載】貫之集Ⅰ・一六六
【参考】作者については、二二七九番歌参照。上句は「ほにいでゝ」を導く措辞か。詠歌事情は二二八五番歌参照。

二二八八　いはひつゝうへたるやどのはなればおもふがごとぞいろこかりける

【異同】ナシ
【現代語訳】繰り返し願いを口にしながら植えた宿の花であるので、私の思ったとおり濃い色で咲いたことだ。
【語句】〇いはひつゝ　祝いつつ。繰り返し願いながら。「祝ふ」は、言祝ぐこと。「つつ」は反復の意を表す助詞。〇おもふがごとぞ　思ふがごとぞ。思いによって色が濃くなる。思いの深さが色の濃さを引き出す。〇いろこかりける　色濃かりける。色の濃さは、ここでは長寿を深く願った結果を表す。
【所載】貫之集Ⅰ・一八〇
【参考】作者については、二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによればこの歌は、「延長四年清貫の民部卿六十賀、恒佐の中納言内方せられける」と十五首あるの中の一首。

二二八九　ちとせふるまつといふともうへて見る人ぞかぞへてしるべかりける　いせ（ぁる本）

【異同】ちとせふる―千年をふる（大）
【現代語訳】たとえ千年を経る松だと言っても、この松を植えて見る人が、数えて千年であることを知るべきでした。
【語句】〇うへて見る　う（植）ゑて見る。松を植えて、その行く末を見る。〇まつといふとも　松と言ふとも。「とも」は逆説の仮定条件。〇しるべかりける　知るべかりける。知るべきであったよ。「べかりける」は、二〇〇五番歌参照。
【所載】続後撰集・賀・一三五三／伊勢集Ⅰ・一八四／伊勢集Ⅱ・一八八／伊勢集Ⅲ・一八七／元輔集Ⅰ・二五七／三十人撰・三七／三十六人撰・三二
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の伊勢集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ及び三十人撰、三十六人撰に「伊勢」とあるのに一致する。伊勢集Ⅰによればこの歌は、「八条大将四十賀、権中納言のし給」と四首ある中の一首。

二二九〇　きくのはなした行水にかげみればさらになみなくおいせざりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】菊の花の下を流れる水に映った我が姿を見ると、波が立たず皺もなく、決して老いることはなかったのだよ。
【語句】○かげみれば　影見れば。「影」は姿。○さらになみなくおいせざりけり　さらに波なく老いせざりけり。「さらに」は打消の語を伴って、「決して」、「全然」の意となる。第五句「老いせざりけり」にかかる。「老いせ」は、サ変動詞「老いす」の未然形。「波」を「皺」に見立てる。「……長らへば　難波の浦に　立つ波の　波の皺にや　溺ほれん……」（忠岑集・八一）。
【所載】貫之集Ⅰ・一九七
【参考】作者については、二二七九番歌参照。類想の一首に「菊の花ひちて流るる水にさへ波の皺なき宿にざりける」（貫之集・三四八）がある。貫之集Ⅰによればこの歌は、「延長四年九月法皇の御六十賀京極の御息所のつかうまつり給ときの御屏風の歌　十一首」の中の一首。

二二九一　たけをしもおほくうへたるやどなればちとせはほかのものとやは見（オモフ）るツラユキイ

【異同】ナシ　「ツラユキイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】竹を多く植えている宿なので、千年は他の宿のものではなく、この宿のものなのですよ。
【語句】○たけをしも　竹をしも。竹は長寿の象徴。「し」と「も」は強意の助詞。○ちとせはほかのものとやは見る　千年は他のものとやは見る。「やは」は反語。「千年」は、竹を多く植えているこの宿（ここに住む人）のものであるという。つまり、この宿に住む人には、千年の齢があるだろう、との意。
【所載】貫之集Ⅰ・二三九
【参考】作者については、二二七九番歌参照。貫之集Ⅰによればこの歌は、「延喜御時内裏御屏風の歌　二十六首」とある中の一首。

〔以上五首担当　吉田〕

二二九二　むれてゐ（ヰツヽ）るかはのかは（べたづは）づはきみがためわがおもふことをおもふべらなり

【異同】かはのかはつは（へたつは）―河へのたつは（大）

【現代語訳】群れ集まっている川辺の鶴は、あなた様のために私が望んでいることを同じように願っているに違いありません。
【語句】〇むれてゐるかはべのかはづは　「かはづ」は上代ではカジカガエルのことを指すと考えられる場合が多いが、平安時代の歌学書などはカエル一般の雅語と説明する。水辺で鳴くといった詠みぶりや、山吹との取り合わせが多い。当該歌は「かはづ」の一般的な詠みぶりと異なっており、本来は傍記や所載欄の貫之集の「かはべのたづ」という本文であったと考えられるため、「かはべのたづ」で解釈する。群れ集まっている川辺にいる鶴は、という意。〇おもふことをおもふべらなり　思ふことを思ふべらなり。私が願っていることを同じように願っているに違いない。かはづが祈るといった詠みぶりは他の用例では見られないが、鶴の場合は長寿を願っていることが多い。
【所載】貫之集Ⅰ・二三四
【参考】作者名については二二七九番歌参照。作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。延喜年間（九〇一～九二三）に醍醐天皇の命で詠まれた屏風歌二十六首のうちの一首である。

二二九三　ひとえだのきくおるからにあらたまのちとせはたゞにへぬべかりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】一枝の菊を折っただけで、千年もの長い時はすぐにでも経ってしまいそうですよ。
【語句】〇ひとえだのきくおるからに　一枝の菊折（を）るからに。一枝の菊を折っただけで。〇あらたまのちとせはたゞにへぬべかりけり　あらたまの千年はただに経ぬべかりけり。千年もの長い時はただちに経ってしまいそうだなあ。「あらたまの」は「年」を導く枕詞であるが、ここでは「ちとせ」を導く。菊水の故事から、菊は不老長寿の象徴として和歌に詠み込まれることが多かった。「濡れて乾す山路の菊のつゆの間にいつか千歳を我は経にけむ」（古今集・二七三）。初句の「ひとえだ」の一と「ちとせ」の千は対比になっており、一枝の菊を折っただけで、千年という長い時間が経ってしまったという点におもしろみがある。
【所載】夫木抄・五八九三／貫之集Ⅰ・二九〇
【参考】作者名については二二七九番歌参照。作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。延喜末（九二三）年から延長七（九二九）年の間に醍醐天皇の命で献上した屏風歌二十七首のうちの一首。

二二九四　ちよまでのゆかりしあればまつかぜのたぐひしたづのこゑぞきこゆる
つらゆきある本

【異同】ナシ
【現代語訳】（松と鶴には）千代までの長寿という縁があるので、（その松の名を含む）松風をともなった鶴の声が聞こえる。
【語句】〇ちよまでのゆかりしあれば　千代までの縁しあれば。（松と鶴には）千年までの長い寿命という縁があるので。松と鶴とが長寿のシンボルという点において縁があるという発想。「我が宿の松の梢に鳴くたづは千代のゆかりと思ふなるべし」（忠岑集・一八五）。「し」は強意の助詞。〇まつかぜのたぐひしたづの　松風のたぐひし鶴の。（縁である松の名を含む）松風とともに鶴の。長寿という点でつながりのある松の名を含んだ松風も鶴とつながりがあるのだとする詠みぶり。松風を長寿の象徴とする詠作はまれ。「朝夕に吹く松風は世とともに千代のかげこそたえず聞こゆれ」（道済集・二二六）。
【所載】金葉集・初度本・四四八／貫之集Ⅰ・七四
【参考】作者名については二二七九番歌参照。作者名「つらゆきある本」とともに、所載欄の文献に一致する。所載欄の貫之集によると、当該歌は延喜十七（九一七）年八月に醍醐天皇の宣旨を受けて詠まれたものの一首。

二二九五　きくのはなうへたるのべのあやしきはおいてふことをしらぬなりけり
モノ　モノ

【異同】おいてふことを―おひてふことは（大）
【現代語訳】菊の花を植えてある野辺が不思議なのは、（そこにいると）老いというものを知らないことであったよ。
【語句】〇きくのはなうへたるのべのあやしきは　菊の花植ゑたる野辺のあやしきは。菊の花を植えてある野辺が不思議なのは。野辺を擬人化している。〇おいてふことをしらぬなりけり　老いてふことを知らぬなりけり。老いということを知らないことであったよ。二二九三番歌参照。菊の花の不老の効力で、菊の花の咲いている野は老いることがないという意。「みな人の老いをとどむといふ菊は百年をやる花にざりける」（貫之集・四八九）。
【所載】貫之集Ⅰ・一八三／元輔集Ⅰ・二三三

【参考】作者名については二二七九番歌参照。作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。次の二二九六番歌とともに延長四（九二六）年の藤原清貫六十賀の屏風歌として詠まれた。

二二九六　さゝらなみよするみぎはにすむつるはきみがへんよのしるべなりけり（ヲ）（レ）

【異同】すむつるは―すむたつは（大）
【現代語訳】さざ波が寄せる波打ち際に棲む鶴は、あなた様がこれから過ごしていく長い年月のしるべなのでありますよ。
【語句】○さゝらなみよするみぎはにすむつるは　ささら波寄する汀に棲む鶴は。「ささら波」はさざ波。「みぎは」は水際のことで、鶴や松など汀に生息する動植物とともに詠まれることが多い。特に鶴は長寿の象徴としてしばしば屏風歌などで汀にいる姿を詠まれてきた。「あしたづの立てるなぎさの川波は千代を数へてをるにやあるらむ」（河原院歌合・一）。
【所載】貫之集Ⅰ・一八四／元輔集Ⅰ・二三四
【参考】作者名については二二七九番歌参照。作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。二二九五番歌とともに延長四（九二六）年の藤原清貫六十賀の屏風歌として詠まれた。

〔以上五首担当　山村〕

二二九七　まつかぜのふかんかぎりはうちはへてたゆべくもあらずさけるふぢなみ（ある本）

【異同】ナシ
【現代語訳】松風が吹いている限りは、ずっと長くいつまでも途切れるはずもなく咲いている藤の花だ。
【語句】○まつかぜの　松風の。「松風」は、松を吹く風。松は長寿や永遠の象徴。○うちはへて　打ち延へて。ずっと長くいつまでも。○さけるふぢなみ　咲ける藤波。「藤波」は、藤の花房が揺れる様を波に見立てて言う語。藤と松は常套の配合で、松に蔓を絡ませて成長する藤が絵に多く描かれている。当該歌でも松に咲く藤を詠み、松がある限り藤が咲き続けるとし、風が吹いて藤の花が揺れる景を絶えない波に見立てた。
【所載】拾遺集・雑春・一〇六七／貫之集Ⅰ・一九一
【参考】作者については、二二七九番歌参照。当該歌が「つらゆき十八首」の一首ならば、作者名「つらゆき」

は所載欄の文献に一致する。所載欄の文献では、延長四年九月二十八日、京極御息所（藤原褒子）主催、宇多法皇の六十賀の屏風歌とされる。題は、拾遺集では「藤の花」、貫之集Ⅰでは「松にかかれる藤」。

二二九八　きみがためうつしてうふるくれたけのちよもこもれる心ちこそすれ
きよたゞ

【異同】ナシ
【現代語訳】あなた様のために移して植える呉竹は、千の節――千代もこもっているような気がいたします。
【語句】○うつしてうふる　移して植える。○くれたけの　呉竹の。「呉竹」は、淡竹の一種で、中国から伝来した竹。○ちよもこもれる　千代もこもれる。竹の節と節の間の空洞を「節（よ）」と言う。「節（よ）」は「竹」の縁語。「節」に「代」を掛けて「千代」とし、祝意を込めた。竹に長寿の力が「こもる」と詠む例に、「君がため今日きる竹の杖なればまたも尽きせぬ世々ぞこもれる」（拾遺集・二八〇・能宣）がある。
【所載】後撰集・慶賀・一三八二
【参考】作者名「きよたゞ」は所載欄の文献に一致する。後撰集の詞書は、「東宮の御前に呉竹植ゑさせたまひけるに」。

二二九九　もみぢばゝいくそばかりかちりかはるみどりながらにまつがひさしさ

【異同】まつかひさしさ―まつか久しき（大）
【現代語訳】色変わりした葉は、どのくらい多く散りかわるのであろうか。（それに比べて）緑のままでいる松の長久よ。
【語句】○もみぢばゝ　黄葉（もみぢば）は。紅葉（もみぢば）は。色変わりした葉は。○いくそばかりか　幾十ばかりか。どのくらい多く……か。係助詞「か」は疑問。○ちりかはる　散りかはる。ここでは、色変わりした葉が散って新しい葉が生える意。「か」と呼応し連体形。三句切れ。○みどりながらに　緑ながらに。接続助詞「ながら」は「……のままで」の意。○まつがひさしさ　松が久しさ。松の長久よ。松の幾久しさよ。「松」は常緑樹であり、長寿や不変の象徴。「もみぢば」との対比。
【所載】ナシ

みつね

二三〇〇　きみがよはながつきときくもゝとせをひとりときけどなをあかぬかな
ツメリト　ケフトキケドモイ

【異同】ナシ
【現代語訳】［第四句「ひとりときけど」は「つめりときけど」として解した。］君が代は、長月にあやかって長いと聞きます。（長い年月と聞く）百年を積み重ねていると聞いても、それでもなおもの足りないことです。
【語句】〇きみがよは　君が代は。「代」は寿命、治世。〇ながつきときく　長月と聞く。初・二句で「君が代は長し」と言いかけ、「長」に「長月」を掛けた。「長月」は陰暦九月で、不老長寿を祈る重陽の節句が行われる月。重陽は菊の節句で、菊は延寿の植物とされた。当該歌でも「聞く」に「菊」を響かせるか。「長し」と「長月」を掛けた例に、「君が世を長月とだに思はずはいかに別れの悲しからまし」（「天暦御時九月十五日、斎宮くだり侍りけるに」・拾遺集・三〇九）がある。〇もゝとせをひとりときけど　傍記により「百年を積（つ）めりと聞けど」と解す。百年を積み重ねていると聞いても。「り」は存続の助動詞「り」の終止形。〇なをあかぬかな　なほ飽かぬかな。それでもなおもの足りないことです。
【所載】躬恒集Ⅰ・三二、二一〇
【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

二三〇一　つゆかゝるきくのなかなるあしたづはいまいくたびのちよをそふらん
いせ

【異同】ちよをそふらん―千代をかそへん（大）
【現代語訳】露の置いた菊の花が咲いている中にいる鶴は、さらにこれから幾度の千代を添えていくことだろうか。
【語句】〇つゆかゝるきくのなかなるあしたづは　露かかる菊の中なる葦鶴は。露の置いた菊の花が咲いている中にいる鶴は。菊および菊の露は、不老長寿をもたらすとされる。「葦鶴」は、葦の生えている所に住む鶴を言うが、単なる鶴にも用いる。鶴は長寿の象徴。当該歌では菊の花が並んでいる中に鶴がいるとする趣向。菊の露を浴びる葦鶴を詠み、不老長寿を祝う意をさらに強調している。参考欄参照。〇ちよをそふらん　千代を添ふら

む。千代を添えていくことだろうか。
【所載】夫木抄・五八九七／伊勢集Ⅰ・八七／伊勢集Ⅱ・八八／伊勢集Ⅲ・八六
【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。所載欄の文献によれば、陽成院の七十賀のための詠。また伊勢集Ⅰの詞書には「打乱箱に鶴亀菊などまじりたり」とあり、他本にも同様の説明が見える。
〔以上五首担当　原山〕

わかな

つらゆき

二三〇二一　わかなおふるのべてふのべは君がためよろづよしめてつまんとぞ思

【異同】よろつよしめて―よろつしめて（御）
【現代語訳】若菜の生えている野辺という野辺はすべて、あなたのため万代までも標を張って若菜を摘もうと思います。
【語句】◎わかな　若菜。早春の野辺に生えた食用の菜。若菜を摘む民俗が、平安時代に入って正月子の日の宮廷行事「供若菜」となったという。第一帖・四三番歌語句欄参照。第一帖歳事部「春」の大項目の下にも「若菜」の題があるが、第四帖では「祝」の大項目の下に「いはひ」「つる」「かざし」とともに見え、長寿を寿いで摘むものとして詠まれている。〇よろづよしめて　万代標めて。いつまでも、標（しめ）を張って占有して。「標む」とは、土地の占有や立ち入り禁止を示すために、縄を張るなどしてしるしとすること。〇つまんとぞ思　摘まむとぞ思ふ。摘もうと思う。「ぞ」は強意の係助詞。
【所載】新古今集・賀・七一一／貫之集Ⅰ・一八九
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集によると、延長四（九二六）年九月に京極の御息所（藤原時平女、褒子）が宇多法皇の六十賀を催した際の屏風歌。「よろづよしめてつまんとぞ思」に、宇多法皇の長寿を願う気持を込める。「春野（はるのの）に若菜ならねど君がため年の数をもつまんとぞ思ふ」（伊勢集・六二）、「若菜生ひん野を標め置かん君がため千歳の春も我ぞつむべき」（書陵部本中務集・二八）。

おなじ人

二三〇三　あさつゆにしとゞにそでをぬらしつゝきみがためとぞわかなつみつる

【異同】ナシ
【現代語訳】朝露にぐっしょりと袖を濡らしながら、あなたのためにと思えばこそ若菜を摘んだのです。
【語句】○しとゞに　ぐっしょりと。びっしょりと。「秋の野の花見にくれば白露にしとどにもわが濡れにけるかな」（躬恒集・二〇八）。○きみがためとぞわかなつみつる　君がためとぞ若菜摘みつる。あなたのためにと思えばこそ若菜を摘んだのです。「君がため衣の裾を濡らしつつ春の野に出でて摘める若菜ぞ」（大和物語・一七三段・二九三）。「つる」は、強意の係助詞「ぞ」の結びで、完了の助動詞「つ」の連体形。
【所載】ナシ
【参考】作者名「おなじ人」は、貫之を指すが、他の文献で確認できない。

二三〇四　かすがのにわかなつみつゝよろづよをいのるこゝろは神ぞしるらん

そせい二首

【異同】ナシ
【現代語訳】春日野で若菜を摘みながら万代までの長寿をお祈りする心は、神様こそがご存じでしょう。
【語句】○かすがの　春日野。大和国の歌枕。現在の奈良市街の東南部、春日山麓に展開する野。若菜が景物としてよく詠まれた。春日の地には藤原氏の氏神を祀る春日神社があり、藤原氏の賀を寿ぐのにふさわしい地名でもあった。第一帖・三番歌の語句欄参照。○よろづよを　万代を。長久の寿命を。○いのるこゝろは神ぞしるらん　祈る心は神様こそがご存じだろう。「ぞ」は強意の係助詞。「らん」は視界外の現在推量の助動詞「らむ」の連体形。「枝かはす春日の野辺の姫子松祈る心は神ぞ知るらむ」（実方集・三八）。
【所載】古今集・仮名序、賀・三五七／新撰和歌・一七五／素性集Ⅰ・四〇／素性集Ⅱ・三〇／素性集Ⅲ・四一／古来風体抄・二六二／八雲御抄・一〇／代集・一五
【参考】作者名「そせい　二首」とあるが、所載欄の文献によると、当該歌の作者は素性だが次の二三〇五番歌の作者は伊勢であって「そせい二首」ということにはなっていない。所載欄の文献等の資料によると、当該歌は、延喜五（九〇五）年二月に尚侍藤原満子が兄である右大将藤原定国の四十賀を催した時の屏風歌。

いせ$_{\text{ある本}}$

二三〇五　かすがのにわかなのかずはのこしてんちとせのはるはわれぞつむべきソセイイ（タネイ）（モキミイ）

【異同】ナシ　「ソセイイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】春日野に、若菜の数はどうか全部摘まずに残しておいてください。千年もの久しい時を積み重ねて春には、私が若菜を摘めるように。
【語句】○かすがの　春日野。二三〇四番歌の語句欄参照。○わかなのかずはのこしてん　若菜の数は残してむ。若菜摘みの際に、どうか全部摘まずに若菜の数を残しておいてください。「かずは」は、所載欄の伊勢集Ⅰには傍記と同様に「たねは」とあり、伊勢集Ⅱには本行と同じく「かずは」とある。傍記の「タネ」の方が意は通じやすい。○ちとせのはるはわれぞつむべき　千歳の春は我ぞ摘むべき。千年もの久しい時を積み重ねて春には私が若菜を摘めるように。「千歳の春」については二二八一番歌の語句欄参照。「春日野も今日の行幸をまつ原の千歳の春は君がまにまに」（躬恒集・三二五）などの例のように長久を寿ぐのに用いられる。「摘む」に千歳の春を積み重ねる意の「積む」を掛ける。「ぞ」は強意の係助詞。
【所載】伊勢集Ⅰ・二〇四／伊勢集Ⅱ・二〇八／伊勢集Ⅲ・二〇七
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。左傍記に「ソセイイ」とあるが、素性集には見えない。所載欄の伊勢集によると、賀の屏風歌で若菜を摘んでいる場面を詠んだもの。「君により千歳の春はつむべきを若菜のたねは野辺に残さむ」（伊勢集Ⅱ・四九三）と似た発想の歌。

二三〇六　ちはやぶる神たちよけよきみがためつむかすがのゝわかなゝりけり（マセ）（マケイ）　つらゆきぁる本

【異同】ナシ
【現代語訳】神様も(私が思う存分若菜を摘めるように)避けていてください。これはあの方のために摘む春日野の若菜なのですよ。
【語句】○ちはやぶる　「神」にかかる枕詞。○神たちよけよ　神立ち避けよ。神様も避けて下さい。「立ち」は動詞に冠してその意を強める。所載欄の貫之集には、右傍記と同じく「神たちませよ」とある。この方が意は通じやすい。古今六帖の本文によって解釈すると、私が思う存分若菜を摘めるよう、この春日野に鎮座ましまします神様(藤原氏の氏神である春日神社の神)でさえ今は避けていてくださいということになる。○君　貴人に対する

敬称。○かすがの　春日野。二三〇四番歌語句欄参照。
【所載】貫之集Ⅰ・三二〇
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。それによると、承平五(九三五)年九月に、醍醐天皇第四皇子重明親王が藤原基経女佳珠子の八十賀を催した時の屏風歌。佳珠子は清和天皇第七皇子貞辰親王の母である。

〔以上五首担当　長戸〕

みつね

二三〇七　はるのゝにころもかたしきたがためかころもかたしきわかなつむらん（ならはぬそでにわかなつむらん）

【異同】ころもかたしきわかなつむらん―ならはぬ袖に若菜つむらん（大）
【現代語訳】［第四句は傍記「ならはぬそでに」で現代語訳した］春の野に独り寝して、いったい誰のため、慣れない袖に若菜を摘んでいるのであろうか。
【語句】○はるのゝにころもかたしき　春の野に衣片敷き。春の野に衣を片方だけ敷いて(独り寝して)。若菜摘みのための野宿。二三一〇番歌参照。○たがためか　いったい誰のため……か。「か」は疑問の意の係助詞。○ころもかたしき　第二句と同じ語句が使われていて、表現として不審。傍記「ならはぬそでに」に拠る。若菜摘みなど慣れていないその袖に。なお、所載欄の文献では、「ならはぬさとに」「ならはぬくさに」「ならはぬひとに」「ならはぬくせに」など異同が多い。
【所載】夫木抄・二〇六／躬恒集Ⅰ・八六／躬恒集Ⅲ・一三四／躬恒集Ⅳ・三〇四、四七九／躬恒集Ⅴ・二三
【参考】作者名「みつね（躬恒）」は、所載欄の文献に一致する。躬恒集には屏風歌として見える。

二三〇八　かすがのゝわかなもわれをいのらなんたがためにつむものならなくに（きみ／ルラム／ハル／ニヤアルラシイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】［第二句は傍記に拠り、「わかなもきみを」として現代語訳する］春日野の若菜もあの方の長寿を祈って欲しい。若菜は他の誰のために摘むというものではなく、あの方の長寿を祈って摘むのであるから。
【語句】○かすがの　「春日野」は、現在の奈良市にある春日山の山麓に展開する野。二三〇四番歌語句欄参照。

○わかなもわれをいのらなん　若菜も我を祈らなむ。「われを」は、傍記や所載欄の貫之集Ⅰに拠り、「君を」で解す。若菜もあの方の長寿を祈ってほしい。○たがためにつむものならなくに　ほかの誰のために摘むものでもなく、あの方のために摘むのであるから。「なくに」は、いわゆるク語法で、ここは、……ものではないので、の意。
【所載】貫之集Ⅰ・一七三
【参考】作者名はないが、所載欄の貫之集によれば、「延長四年清貫の民部卿の六十賀」の貫之の歌。

二三〇九　はるのゝ（カスガ）のわかなゝらねどきみがためとし（いせ）のかずをもつまんとぞおもふ

【異同】わかなゝらねと―わかなゝみねと（御・大）
【現代語訳】春の野に摘む若菜、ではないけれど、あなた様のために（若菜を摘んで）、多くの年を積もうと思うことです。
【語句】○はるのゝわかならねどきみがため　春の野の若菜ならねど君がため。「君がため春の野に出でて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」（古今集・二一）の表現を踏まえる。○としのかずをもつまんとぞおもふ　多くの年を積もうと思うことです。あなた様の長寿を祈ろうと思います。「積まむ」は、「摘まむ」を掛ける。
【所載】拾遺抄（異本歌）・五八五／拾遺集・賀・二八五／伊勢集Ⅰ・六二／伊勢集Ⅱ・六四／伊勢集Ⅲ・六一
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。伊勢集では、尚侍藤原満子四十賀の屏風歌と見える。

二三一〇　しろたへのころもかたしきかすがのにわかなつみし（ム）もたがためにぞは

【異同】かすかのに―春日野の（大）
【現代語訳】衣を片方だけ敷いて独り寝して、春日野で若菜を摘んだのも、いったい誰のためであったのでしょうか。（他ならぬあなた様のために摘んだのです。）
【語句】○しろたへのころもかたしき　白妙の衣片敷き。「白妙の」は「衣」にかかる枕詞。「衣片敷き」は、独り寝の衣を片方だけ敷いて。二三〇七番語句欄参照。○わかなつみしも　若菜摘みしも。「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。○たがためにぞは　いったい誰のため（に摘んだの）か。他ならぬあなた様のためです。「ぞ

は」は、係助詞「ぞ」に係助詞「は」が接続した語で、疑問表現の文末に用い、強調・詠嘆の意を添える。……なのか。「群れたちてめもはるの野に引く松の千年の数はたがためにぞは」（兼盛集・一七二）。
【所載】ナシ

二三二一　はるのゝにこゝろをだにもやらぬ身はわかなはつまでとしをこそつめ　みつね

【異同】ナシ
【現代語訳】春の野に我が身もやれず、気分晴れないこの身は、春の野で若菜は摘むことなく、年ばかり積むことだなあ。
【語句】〇こゝろをだにもやらぬ身　春の野に人は行くのに我が身は行けない、という意味に、気分が晴れない、という意を掛けている。〇わかなはつまでとしをこそつめ　野に行かないので若菜は摘めず、年齢ばかり積み重ね老いることだなあ。「ゆく人はいざ野辺にとも誘はねど若菜も年も多くこそつめ」（大弐三位集・四八）。
【所載】後撰集・春上・九／躬恒集Ⅰ・一〇八、二四一／躬恒集Ⅱ・一九／躬恒集Ⅲ・二六五／躬恒集Ⅳ・三六五
【参考】作者名「みつね（躬恒）」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　加藤〕

二三三一二　はるたゝんすなはちごとにきみがためちとせ（ヨヲイ）つらゆき　つむべきわかなゝりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】春となるまさにその時そのたびに、あなたさまのため、千年の齢を積むようにといたす若菜摘みなのでしたよ。
【語句】〇はるたゝん　「春たつ」は春がくる、立春となる、の意。「ん」は推量の助動詞「む」。〇すなはちごとに　「すなはち」は、ある事が行われたまさにその時をいう。「ほととぎす鳴きし登時（すなはち）君が家に行けと追ひしはいたりけむかも（万葉集・一五〇九〈旧一五〇五〉）。当該歌の場合、名詞。まさにその時、

の意。「ごとに」は、そのたびに。〇ちとせつむ　千年を重ねる、の意で、千年を積む。「若菜」の縁語「摘む」をかける。〇わかな　春萌え出る食用の菜。正月の子の日に野辺に出て若菜を摘む行事があった。
【所載】貫之集Ⅰ・一八八
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。延長四年九月二十八日に行われた、宇多法皇の六十賀の屏風歌十一首のうちの一首。主催者は京極御息所。

二三一三　あしひきのやまをさかしみゆみつくるからきのえだをつゑ（ツケイ）にきりつゝ（コイ）イセイ

【異同】ナシ　「イセイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】山がけわしく、弓を作る長さに枯木の枝を切っては、杖にし、切っては杖にして登った。
【語句】◎つゑ　杖。歩行の助けに持つ細長い棒。山や坂を行くときに使用された。また、四十賀、五十賀、六十賀、七十賀、八十賀、九十賀などの算賀の行事に、屏風・装束・挿頭などの贈り物が用意されたが、その中に杖もあった。杖を入れる袋に歌を刺繍することもあった。年とっての歩行のために贈られる杖は、長寿を願う歌を付して贈られたのである。〇あしひきの　「山」を導く枕詞。〇やまをさかしみ　山がけわしいので。〇ゆみつくる　弓作る。「つゑ」は杖のほかに長さの単位でもあった。「丈」と書き、弓一張りの長さをいう。〇からきのえだ　枯木の枝。新撰字鏡に「枯木　加良木」とある。〇つゑにきりつゝ　杖にするために切ることを繰り返す。
【所載】続後撰集・神祇・五八一
【参考】作者名「イセ」は他本によった注記であるが、これを確かめることはできない。

二三一四　すつ（エ）かみのみやまのつゑはやま人のちとせいのり（ヲイノリ）にきれるつゑなり

【異同】ナシ
【現代語訳】このくにをお治めになる神の杖は、山のひとたちが千年の寿命を祈るために切った杖であるよ。
【語句】〇すつかみの　「つ」は誤写で、本来は「へ」であったろう。「すべかみ」はある地域を統（すべ）る神。「すめかみ」ともいう。〇やま人　山に住む人。山に働くきこりなど。山里の人。〇ちとせいのりに　千年

もの寿命を願い祈るために。
【所載】ナシ
【参考】「杖」が一首の中に二度出てくる。掛け合いなどで、上句と下句が同じ部分を繰り返すことはよくある。

二三一五　よゝをへてふりたるおきなつゑつきてはなのあたり（リカ）を見るよしもがなタイナフコム

【異同】ナシ　「タイナフコム」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】何代も代をへて年取った翁は、杖をついて美しい花の咲くあたりを見たいものです。
【語句】○よゝをへて　いくつもの代を経て。何代も代を重ねて。所載欄の文献では「みよをへて」とある。○ふりたるおきな　年をとった翁。「ふり」は古くなる、年を経て古くなる、の意の動詞「ふる（古る）」の連用形。○はなのあたりを　美しく咲く花のあたりを。「春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む」（古今集・八五）。
【所載】夫木抄・一六五四〇／平中物語・二一段・八一
【参考】所載欄の文献では作者は「国経の大納言」とあり、平中物語では次のようになっている。

おなじをとこのもとに、くにつねの大納言のみもとよりいささかなる事のたまへるに、かへり事きこゆとておもしろき菊にぞつけたりける。さりければ、いかなることをかかいたりけむ、たちかへり又のたまへる

みよをへてふりたるおきなつゑつきてはなのありかをみるよしもがな

とありければ、かへし

たまぼこにきみし来寄らばあさぢふにまじれる菊の香はまさりなむ

二三一六　ちはやふる神やきりけんつくからに千とせのさかもこえぬべらなり

【異同】ナシ
【現代語訳】これは神様のお切りになった杖だからでしょうか、突くやいなや、らくらくと千年の坂も越えてゆけるにちがいありません。
【語句】○ちはやふる　「神」にかかる枕詞。○つくからに　突くやいなや。突くとすぐ。○千とせのさかも

登り難い千年の坂も。〇こえぬべらなり　越えることができるにちがいない。「べらなり」は助動詞。二〇七七番歌の語句欄参照。「さかし」から「さかしらなり」、「うまし」から「うまらなり」が派生したように推量の助動詞「べし」から派生した語。「見立ての趣向の面白さを見いだす個性的な判断の陳述」という（蔵中スミ「歌語『べらなり』覚え書」『水門』一九八〇年一〇月）。「……のようだ」や「……らしい」などの現代語訳をあてることが多いが、適切ではない。現代語には対応する表現がない。推量や婉曲と混同しがちだが、そうではなく、ひとつの判断であること、また個性的な見立てに基づくときに用いること、男女とも用いることを指摘しておく。ここでは「千歳の坂を越える」という誇張した表現をひとつの断定として提示する。その根拠に「神や切りけむ」という見立ての趣向がある。

【所載】古今集・賀・三四八／遍昭集Ⅰ・二一／遍昭集Ⅱ・二一／奥儀抄・四八〇

【参考】作者記載はないが、所載欄の古今集に作者は「僧正遍照」とあり、詞書は次のようである。

仁和のみかどのみこにおはしましける時に、御をばの八十路（やそぢ）の賀に
銀（しろがね）を杖につくれりけるを見て、かの御をばにかはりてよみける

〔以上五首担当　平野〕

二三一七　ゆふかげのきみをためはし（すけて）みなしごに（コシニ）われらをなすなちよまつのつゑ

【異同】ちよまつのつゑ―千よまつの枝（大）

【現代語訳】夕暮れの薄暗い光のなかにいるあなたを支えて、みなしごに我らをしないで欲しい。千年を経たという松によって作られた杖よ。

【語句】〇ゆふかげの　夕暮れ時の薄暗い日の光。夕方の薄暗がりの中に見える姿。ここでは、「きみ」にかかる比喩的な措辞。〇ためはし　語義未詳。傍記の「たすけて」をとる。助けて、支えて。〇みなしご　両親のない幼児。「曰奈志児刀良売〈みなしごとらめ〉」（正倉院文書・大宝二年）、「孤子（美名之古　少無父母也〈みなしご　少くして父母無き也〉）」（倭名類聚抄〈十巻本〉）。和歌の例はほとんどみられないが、「……心もそらに　まどひそめ　みなしご草に　なりしより　……」（拾遺集・五七一・源順）と、「みなしご草」を詠んだものがある。「みなしご草」は、本草和名に、「白薇　一名白幕……和名美名之古久左（和名みなしごぐさ）」とあり、「白薇」という植物の異名。〇ちよまつのつゑ　千年を経たという松の木で作られた杖。「待つ」に「松」を掛ける。「茂岡に神さび立ちて栄えたる千代松の樹の歳の知らなく」（万葉集・九九五〈旧九九〇〉）。

【所載】ナシ
【参考】所載もなく、詠歌事情が不明のため歌意がとりにくいが、「ゆふかげ（草）」、「みなしご（草）」、「なずな」といった草の名を織り込んだ物名歌の趣向があるか。

二三二八　ひとつよ（モトニ）にちよをこめたるつゑなればつくともつきじきみがよはひは
きんもとよりもと或本

【異同】きみかよはひは―君○齢（か）も（大）
【現代語訳】一つの節（よ）ごとに、千の節（よ）すなわち千代の寿命をこめた杖ですから、どれほど突こうとも尽きることはありますまい、あなたの齢は。
【語句】○ひとつよにちよをこめたる　一つの節ごとに千節（ちよ）、千代の寿命を籠めている。「ひとつよ」は、竹の「一節（ひとよ）」のこと。「ちよ」は竹の「千節（ちよ）」に「千代」を掛ける。所載欄の文献は全て「ひとふしに」とあるが、本文通りに解す。○つくともつきじ　杖を突いても尽きることはあるまい。杖を「突く」に「尽く」を掛ける。
【所載】拾遺抄・賀・一七四／拾遺集・賀・二七六／頼基集・一〇／俊成三十六人歌合・五八／三十六人撰・八六／袋草紙・六二
【参考】作者名「きんもとよりもと或本」とあるが、所載欄の文献では頼基の作とあり、頼基集にみられる。拾遺集の詞書には「おなじ賀に、竹の杖つくりて侍りけるに」とあり、承平四（九三四）年三月二十六日、中宮穏子の五十賀の屏風歌。

かざし
つらゆき

二三二九　はるくれば（タテ）やどにまづさくむめのはなきみがちとせのかざしとぞ見る

【異同】ナシ
【現代語訳】春がやって来ると、わが家の庭に真っ先に咲く梅の花、それをあなたの千年の寿命のための挿頭と思って見ることです。

【語句】◎かざし　挿頭。草木の花や枝を髪や冠のかざりとして挿すもの。本来、植物の生命力を身につけるための呪術的な行為であった。宮中行事では、儀式、官位により、用い方が規定されていた。〇はるくれば　春がやってくると。〇ちとせのかざし　千年の挿頭。千年の齢のための挿頭にするとして、君の寿命を寿いだことば。
【所載】古今集・賀・三五二
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。古今集の詞書によれば本康親王の七十賀の屏風歌。

「春さればまづ咲くやどの梅の花一人見つつや春日暮らさむ」（万葉集・八二二〈旧八一八〉）をふまえた歌。

二三二〇　かすがのゝふぢはちりゆくなにをかもみかりの人のとりてかざゝん

【異同】なにをかも―なにをかは（大）　とりてかさゝん―おりてかさゝん（大）
【現代語訳】春日野の藤は次々に散ってゆく、いったい何の花を御狩人らは折り取って挿頭とするだろうか。
【語句】〇かすがのゝふぢ　春日野の藤。春日野は現在の奈良市春日野町、奈良市街の東にある奈良公園一帯の丘陵地。平安期には若菜、雪と取り合わされる早春の景が詠まれる場合が多いが、当該歌は、藤が取り合わされる。〇ちりゆく　散って行く。〇なにをかも　いったい何を。〇みかりのひと　御狩の官人たち。「みかり（御狩）」は、旧暦五月五日に行われる「薬狩」のこと。
【所載】新千載集・春下・一八〇／万葉集・一九七四（旧一九七四）春日野之　藤者散去而　何物鴨　御狩人之　折而将挿頭　カスガノノフヂハチリユキテナニヲカモミカリノヒトノヲリテカザサム　かすがののふぢはちりにてなにをかもみかりのひとのをりてかざさむ／夫木抄・二一六三／人麿集Ⅲ・八七／赤人集Ⅰ・二四九／赤人集Ⅱ・一二九／赤人集Ⅲ・一四二／家持集Ⅰ・八九／家持集Ⅱ・八一

二三二一　いもがてをとりてひきよせうちたをりわがかざすべきはなさけるかも　人丸

【異同】ニイ
【現代語訳】あの子の手をとって引き寄せるように引き寄せ、手で折り取って、私が挿頭とするには恰好の花

が咲いています。
【語句】〇いもがてをとりてひきよせ　妹が手を取りて引き寄せ。いとしいあの子の手を取って「引き寄せ」る意から、手折るための花を「引き寄せ」る意に転ずる。「いもがてをとりてひきよせ」は「うちたをり」の序。〇うちたをり　手で折り取って。「うち」は接頭語。
【所載】万葉集・一六八七（旧一六八三）妹手　取而引与治　球手折　吾刺可　花開鴨　イモガテヲトリテヒキヨヂウチタヲリワガカザスベキハナサケルカモ　いもがてをとりてひきよぢふさたをりわがかざすべくはなさけるかも
【参考】作者名「人丸」とあるが、万葉集では作者未詳。

〔以上五首担当　中野〕

二三二一　ヒキヨセテキミガゝザシニウチタオリワレオリカケンキミガゝザシニィ

【異同】ワレオリカケン―ワレオリヤラン（御・桂・大）　底本ホカ校合シタ三本トモ片仮名デ行間ニ小字補入。
【現代語訳】引き寄せて、あなたの髪飾りとして手折り、私が折ってかけてあげましょう、あなたの髪飾りとして。
【語句】〇ヒキヨセテ　引き寄せて、の意だが、対象は何か。「ウチタオリ」にかかると考えれば、飾りとなるものを引き寄せて、となり、「ワレオリカケン」にかかると考えれば、相手の女性？を引き寄せて、ということになろう。あるいは両方か。〇ウチタオリ　「ウチ」は接頭語。「タオリ」はいわゆる歴史的仮名遣いでは「タヲ（折）リ」。手折って。〇オリカケン　「ヲ（折）リカケン」。折って飾りとして掛けよう。
【所載】ナシ
【参考】前歌二三二一番歌との類似による補入歌か。

二三二二三　わたつうみのかざしにさしていはふもゝきみがためにはおしまざりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】海の神様が髪飾りにして大切に扱っていらっしゃる藻も、あなたのためには惜しんだりしなかった

のでした。
【語句】○わたつうみ　海。本来の形は「わたつみ」で、海の神の意。「海神（わたつみ）の持てる白玉見まくほり千たびぞ告（の）りしかづきするあま」（万葉集・一三〇六〈旧一三〇二〉）。○いはふもゝ　斎ふ藻も。「斎ふ」は、吉事を求めて神事を行うことが原義。身を浄めて祈る、潔斎する、慎み護る、ものごとを大切に扱う、将来の幸せを願ってめでたい言葉を述べる、祝う、などの意。「藻」は、水の中に生える植物の総称。○おしまざりけり　を(惜)しまざりけり。惜しまなかったことだ。
【所載】伊勢物語・八七段・一六一
【参考】伊勢物語によれば、津の国芦屋の里で、風が強く吹いた朝、め（女）の子たちが浮き海松（みる）を浜辺から拾ってきたのを、女が男にプレゼントした折の歌という。

二三二四　千よいのるきみがかざしともとむればかねのえだよりはるぞさきける（トセフ）（ヲ）（ナ）

【異同】はるそさきける―花そ咲ける（大）
【現代語訳】いつまでもいつまでも長生きしてほしいとあなたの髪飾りを求めたところ、金（かね）の枝から花が咲いたことでした。
【語句】○千よいのる　千年も長生きしてほしいと祈る。長寿を祈る。○かねのえだより　かざしは通常藤とか桜とか草木の小枝などを折って用いたが、たとえば倭訓栞に「大嘗祭の時、天子の挿頭は銀の桜花也とぞ」などとあるように、金属製の造花などもあったのであろう。○はるぞさきける　「咲きける」とあるので、傍記の「はなぞ」を採用した。花が咲いたことだ。
【所載】ナシ

二三二五　よろづよのもりとしげればはなおりてときはのかざしきみにまいらせん（キラム）

【異同】ナシ
【現代語訳】あたかも永遠の森のように茂るので、その花を折って、いつまでも変わらない髪飾りをあなたに差し上げようと思います。
【語句】○よろづよの　「よろづよ」は、いつまでもつづく年月。永遠。「の」は格助詞だが、「森」にかかる連

体格か、「茂れば」にかかる主格か、いずれにしても問題。永遠が森のように茂るというのはいかにも近代的な解のように思われるので、一応連体格で解した。〇もりとしげれば　森のように茂るので。「と」は、それを受ける用言の状態を、……のように、……というふうに、などと示す役割りを果たす。「駒並めていざ見に行かむふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ」（古今集・一一一）。〇はなおりて　「おりて」は「を（折）りて」。花を折って。〇ときは　常磐。永遠に変わらないこと。永久不変。また、樹木などの葉が一年中変わらないこと。

【所載】ナシ

二三二六　いにしへにありけん人もわがごとやみわのひばらにかざしおりけん

人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】遠い昔にいたであろう人も、私と同じように、この三輪の檜原で、髪飾りとするために檜の枝を折ったのであろうか。

【語句】〇みわのひばら　三輪の檜原。「三輪」は大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市。「檜原」は檜の茂ったところ。付近一帯は檜原として有名だったようで、万葉集には「泊瀬（はつせ）の檜原」「巻向（まきむく）の檜原の山」などの語が見える。「初瀬山夕越え暮れて宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ吹く」（新古今集・羇旅・九六六）。〇かざしおりけん　「おりけん」は「を（折）りけむ」。「わがごとや」と疑問の「や」を受け、連体形止め。髪飾りとして折ったのであろうか。

【所載】拾遺集・雑上・四九一／万葉集・一一二二（旧一一一八）古尓　有険人母　如吾等架　弥和乃檜原尓　挿頭折兼　イニシヘニアリケムヒトモワガゴトカミワノヒハラニカザシヲリケム　いにしへにありけむひともわがごとかみわのひはらにかざしをりけむ／夫木抄・一三九三四／人麿集Ⅰ・二一二／人麿集Ⅱ・二一二／人麿集Ⅲ・七〇五／和歌童蒙抄・七〇五

【参考】作者名「人まろ」は、所載欄の万葉集に「右二首柿本朝臣人麻呂之歌集出」とあるうちの一首であり、拾遺集にも「人まろ」とある。

二三二七　もゝしきのおほみや人はいとまあれやむめをかざしてこゝにつどへり（サクラ）（クラシツ）

〔以上五首担当　久保木〕

【異同】むめ(サクラ)をかさして―桜かさして（大）　こゝにつと(クラシツ)へり―爰につとへる（大）
【現代語訳】大宮人は暇があるからであろうか。梅の花を冠に挿してここに集まっている。
【語句】○もゝしきのおほみや人　「ももしきの」は「大宮」に掛かる枕詞。「大宮人」は宮中につとめる官人で男女ともにいうが、ここは男性であろう。○いとまあれや　暇があるからであろうか。「や」は疑問。結句が「つどへり」とあるので、「あれや」で切れる。○むめをかざして　梅の花を冠に挿して。「かざす」は、草木の花や枝を冠や女性の髪につけること。二三一九番歌「かざし」参照。○こゝにつどへり　ここに集まっている。助動詞「り」は存続の意、終止形。
【所載】新古今集・春下・一〇四／万葉集・一八八七（旧一八八三）百礒城之　大宮人者　暇有也　梅乎挿頭而　此間集有　モモシキノオホミヤヒトハイトマアレヤウメヲカザシテココニツドヘリ　ももしきのおほみやひとはいとまあれやうめをかざしてここにつどへる／和漢朗詠集・二五／赤人集Ⅰ・一七六／赤人集Ⅱ・五七／赤人集Ⅲ・六二／俊成三十六人歌合・一七／時代不同歌合・九／詠歌大概・一〇／桐火桶・一三七
【参考】所載欄の、新古今集、和漢朗詠集、赤人集Ⅱ、俊成三十六人歌合以下の文献には、下句が「桜かざして今日も暮らしつ」とあり、表現がだいぶ異なっている。

二三二八　わがやどゝたのむよしのにきみがゆ(ユカバ)かばおなじかざしをさしこそはせめ　いせ(イラバイ)

【異同】ナシ
【現代語訳】（つらいこの世を遁れて）私の住む宿と頼みにしている吉野山に、あなたが行かれるのならば、私も同類、吉野の花をかざしに挿すことにいたしましょう。
【語句】○わがやどゝたのむよしの　私が隠れ住む所として頼みにしている吉野。「吉野」は、奈良県南部の吉野山一帯を指す。「みよしのの山のあなたに宿もがな世の憂きときの隠れがにせむ」（古今集・九五〇・よみ人知らず）。○おなじかざしをさしこそはせめ　私も同様に（吉野の花）をかざしといたしましょう。
【所載】後撰集・恋四・八〇九／伊勢集Ⅰ・一三／伊勢集Ⅱ・一四／伊勢集Ⅲ・一三／奥儀抄・三〇六／古来風体抄・三二八／和歌色葉・三二八
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。

つらゆき

二三二九　かざすともはなさくやとはたのまれ(ル)ずみのなりいでん(ヅベキ)としのなけれ(キシ)ば

【異同】ナシ
【現代語訳】たとえ挿頭にさしても、花が咲くかとは期待できない。実がなり出す、私が立身出世する、そういう年がないのであるから。
【語句】〇かざすとも　たとえ挿頭にするとしても。〇みのなりいでん　実がなり出す意の「実のなり出でん」に、立身出世する意の「身のなりいでん」を掛ける。
【所載】貫之集Ⅰ・八二五
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

これひら

二三三〇　よろづよのともに(シモ)かれせぬ(ヌ)しらぎくはうしろ(を)やすくもかざしつるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】［第二句は「しもにかれせぬ」で現代語訳した］久しい間（きびしい）霜にも枯れない白菊の花は、さきざきも安心できると、頼もしく思ってかざしに挿したことだなあ。
【語句】〇よろづよのともにかれせぬ　「とも」では歌意がとおらないので、傍記や所載欄の後撰集「しも」で解す。限りなく久しい間、霜によっても枯れることのない。〇うしろやすくも　「うしろやすし」は、その様子・行動などから判断して、後々のことも心配ない、安心できる、の意。
【所載】後撰集・慶賀・一三六八
【参考】作者名「これひら」は、所載欄の後撰集に「藤原伊衡朝臣」とあり一致する。

二三三一　ひこぼしのかざしのたまはつまこ(マ)ふとみだれにけらしこのかはかぜに

【異同】このかはかせに―此川のかせに（大）

【現代語訳】彦星がかざしとしている玉は、妻を恋うるために乱れてしまったらしい。この川風によって。
【語句】〇かざしのたま　この「かざし」題では、草木の花か枝が詠まれているが、この「かざしのたま」は、二三二四番歌のように人工の簪を指すのであろう。「竜田姫かざしの玉の緒をよわみ乱れにけりと見ゆる白露」（千載集・秋上・二六五）。〇つまこふと　織女を恋うために。格助詞「と」は、……しようとして、……するために、の意。「妻恋ふと鹿なくときになりにけりわがひとりねを誰れに聞かせむ」（忠見集・五七）。〇みだれにけらし　乱れてしまったらしい。「けらし」は、過去または過去より現在までについて、根拠に基づいて推量する。……たにちがいない。〇このかはかぜに　この川風によって。所載欄の文献には、すべて「この川の瀬に」と見える。
【所載】新千載集・恋四・一五一四／万葉集・一六九〇（旧一六八六）孫星　頭刺玉之　嬬恋　乱祁良志　此川瀬尓　ヒコホシノカザシノタマノツマゴヒニミダレテケラシコノカハノセニ　ひこほしのかざしのたましつまごひにみだれにけらしこのかはのせに／夫木抄・四〇五一、一〇九〇〇

〔以上五首担当　加藤〕

きのとものり（ヒライ）

二三三二　つゆながらおりてかざゝんきくの花おいせぬあきのひさしかるべく

【異同】ひさしかるへく―ひさしかるへき（桂）
【現代語訳】寿命を延ばす力をもつ露が置いたまま、折って挿頭にしよう、菊の花を。衰えることのない秋が、そして命が、久しく続くように。
【語句】〇つゆながら　露が置いたまま。芸文類聚などに見られる菊水の故事により、菊の露には寿命を延ばす力があるとされていた。二二六七番歌参照。〇おりてかざさん　折（を）りてかざさん。折って挿頭にしよう。「かざす」は、草木の花や枝を髪あるいは冠に挿すことで、ここでは菊の寿命を延ばす力にあやかろうということ。「秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花より先と知らぬ我が身を」（古今集・二七六・つらゆき）。〇おいせぬあき　老いせぬ秋。「老いす」はサ変の複合動詞。不老の秋、年を取らない秋。「千秋（せんしゅう）」という言葉があるように、「秋」には年を表す意もあるため、長寿の表現ともなっている。〇ひさしかるべく　久しくあり得るように。「べく」は可能。「時ならぬ玉をぞぬける卯の花は五月をまたば久しかるべく」（古今六帖・八一）。
【所載】古今集・秋下・二七〇／新撰和歌・九六／友則集・二五／是貞親王家歌合・七一

【参考】作者名「きのとものり」は、所載欄の文献に一致する。

二条左大臣三条おほいまうちぎみ或本

二三三三　たがためとながきふゆまでにほふらん（カザスラム）とはゞちとせときみにこたへよ（タドルイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】いったい誰のために長い冬まで美しく咲いているのだろう、そう問うならば、「あなた様の千年の命のために」と、我が君に答えてくれ。

【語句】○たがためと　誰のためということで。誰のために。「誰がためとおもふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとどめめ」（篁集・二五）。○ながきふゆまでにほふらん　長き冬まで匂ふらん。長い冬に至るまで美しく咲いているのだろうか。所載欄の文献によれば菊の花を詠んだもの。元稹の「是れ花の中に偏に菊を愛するにはあらず。此花開けて後更に花の無ければなり。」（和漢朗詠集・二六七）のように、菊は秋の花の中でも最も遅く、初冬になるまで咲いている花である。「にほふ」は花が美しく咲き輝く意。「らん」は現在の原因推量。「何に菊色そめかへしにほふらん花もてはやす君もこなくに」（後撰集・四〇〇）。○ちとせ　芸文類聚などに見られる菊水の故事により、菊の露は千年の命をもたらすものとされる。「露とてもあだにやは見る長月の菊は千歳をすぐと思へば」（古今六帖・五八八）。

【所載】続後撰集・賀歌・一三四八／三条右大臣集・一二

【参考】作者名「二条左大臣」とあるが、所載欄の文献によれば、「三条右大臣」と称された藤原定方の歌。藤原定方は醍醐天皇の叔父にあたり、延喜十七（九一七）年閏十月五日の菊の宴において詠んだもので、三条右大臣集（一三）や新続古今集（六四四）には「色深く匂ふ菊かなあはれなるをりに折りける花にやあるらん」という醍醐天皇の返歌がみえる。

二三三四　わがゝざすやなぎがいとをふきみだるかぜにやいもがむめのちるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】私が挿頭にしている、柳の糸を吹き乱れさせる風によって、愛しいあの娘の家の梅が散っているだろうか。

【語句】○わがゝざすやなぎがいと　私が挿頭にする柳の糸。「柳が糸」は、柳の細くしなやかな枝を糸に喩えた表現で、「が」は体言と体言を関係づける連体助詞。「よる人もなき青柳の糸なれば吹きくる風にかつ乱れつつ」（貫之集・九八）。○ふきみだる　吹き乱る。「乱る」はラ行四段活用動詞の連体形。乱れさせる、の意。「ぬき乱る人もあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに」（古今集・九二三）。○かぜにやいもがむめのちるらん　風によって愛しいあの娘の梅が散っているだろうか。「らん」は現在推量。
【所載】万葉集・一八六〇（旧一八五六）我刺　柳糸乎　吹乱　風尓加妹之　梅乃散覧　ワガカザスヤナギノイトヲフキミダルカゼニカイモガウメノチルラム　わがかざすやなぎのいろをふきみだるかぜにかいもがうめのちるらむ／人麿集Ⅲ・二三／赤人集Ⅰ・一五二／赤人集Ⅱ・三四／赤人集Ⅲ・三八／家持集Ⅰ・二二／家持集Ⅱ・二二

二三三五　わかれをばみねのさくらにまかせてんとめんとめじははるのまに〳〵（な）

【異同】まかせてん―さかせてん（御）
【現代語訳】我々の別れというものは、峰の桜に任せてしまおう。引き留めようとか、引き留めまいとか、そういうことは、花の意向次第で。
【語句】◎わかれ　互いに離れて別々になること。別離。死別にも使われる語であるが、本項目では旅立ちに際し、見送る側から旅立つ者に思いを述べたり、待つ身のつらさを嘆いたりする歌を載せる。○まかせてん　任せてしまおう。「て」は強意（確述）の助動詞「つ」の連用形。「ん」は意志の助動詞「む」の終止形。○はるのまに〳〵　上句に「桜に任せてん」とあるため、傍記の「花のまにまに」で解した。なお、所載欄の文献も「花のまにまに」である。「まにまに」は、物事の成り行きに任せて、人や神の意志に従って、の意。「このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」（古今集・四二〇）。ここでは、花の意志に従って、花の意向次第で、ということ。
【所載】古今集・離別・三九三／新撰和歌・一九一
【参考】所載欄の古今集によれば、比叡の山から幽仙法師が帰る際に詠んだ歌。

二三三六　とをくゆく人（キミ）をおしむと人もみなほとゝぎすさへなきぬべらなり（キミ）

【異同】なきぬへらなり―なきぬへらなる（桂）
【現代語訳】遠くへ行く人を惜しんで、人ももちろんみな涙を流して泣き、ほととぎすまでも鳴いたようだ。
【語句】○とをくゆく　遠（とほ）く行く。遠くへ旅立つこと。「遠く行く人のためには我が袖の涙の玉も惜しからなくに」（貫之集・七二九）。○人をおしむと　人を惜（を）しむと。人を惜しむということで。○ほとゝぎすさへなきぬべらなり　ほととぎすまでも鳴いたようだ。「さへ」は添加の副助詞。「……だけでなく……までも」。ここでの「なく」は、人が「泣く」意と、ほととぎすが「鳴く」意を重ねる。「べらなり」については、二〇七七番歌参照。虚構の喩を現実にあり得る確かなこととして言い切るために用いられる例がある。当該歌も、鳥が別れを惜しんで鳴いているわけではないが、別れを惜しんで鳴くのが現実にあり得ることとして表現されている。
【所載】貫之集Ⅰ・七二〇
【参考】所載欄の貫之集によれば、藤原師尹が詠ませた歌。師尹は忠平五男。

〔以上五首担当　諸井〕

二三三七　おしむからこひしきものははるがすみたちわかれなばなに心ちせん　つらゆき十四（ヲシクモノ）

【異同】ナシ
【現代語訳】別れを惜しむことによって恋しいものは、実際にお別れしてしまったならばどんな心地がするでしょう。
【語句】○おしむから　惜（を）しむから。「から」は、基本的には、時間的、空間的、あるいは論理的に、ある起点を示す格助詞。「波の音の今朝からことに聞こゆるは春の調べや改まるらむ」（古今集・四五六）、「波の花沖から咲きて散り来めり水の春とは風やなるらむ」（古今集・四五九）、「何心なき空のけしきも、ただ見る人から、艶にもすごくも見ゆるなりけり」（源氏物語・帚木）。ここは一応論理的に、原因、理由を表すものとして解した。○こひしきものは　所載欄の古今集、貫之集Ⅰには、いずれも「こひしきものを」とあり、そのほうが一度そこで文が切れて、理解しやすい。○はるがすみ　春霞が立つ意から「たちわかれ」の「たち」を導く。「春霞たち出でむことも思ほえずあさみどりなる空のけしきに」（後拾遺集・九〇七）。なお所載欄の古今集等ではいずれも「白雲の」とする。○たちわかれなば　別れてしまったならば。「たち」は接頭語。「な」は完了の助動詞

「ぬ」の未然形。「ば」は順接仮定条件を表す接続助詞。
【所載】古今集・離別・三七一／貫之集Ⅰ・七〇一
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。ただし「十四」とあるのは何を意味するのか。以下の一四首すべてが貫之詠かと考えられるが、数が合わず、疑問。

二三三八　わかれてふことはいろにもあらなくにこゝろにしみてわびしかるらん（おしまるゝかな）

【異同】ナシ
【現代語訳】別れということは決して色でもないのに、どうして、色が染み入るように、別れの悲しさが心に染み込んでわびしく感じられるのだろうか。
【語句】〇わかれてふ　「わかれといふ」が変化した形。「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」（拾遺集・六二一）。〇いろにもあらなくに　色でもないのに。「あらなく」は「あらず」のいわゆるク語法。〇わびしかるらん　どうしてわびしいのだろうか。「らん」は、この場合、疑問の語とともに用いられてはいないが、現実に見聞きし、あるいは感じていることに対して、どうして……だろうか、という気持ちで用いられている。「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」（古今集・八四）。
【所載】古今集・離別・三八一／貫之集Ⅰ・七〇三
【参考】貫之集Ⅰには「人に別れけるに詠める」とある。

二三三九　おしみつゝわかるゝ人を見るときはわがなみださへとまらざりけり

【異同】ナシ
【現代語訳】名残り惜しく思いながら別れて行こうとしている人を見送る時は、旅立つ人だけではなく、私の涙までもとどまらないことだった。
【語句】〇おしみつゝ　をしみつつ。惜しみ惜しみして。〇わがなみださへ　別れて行く人だけではなく、私の涙までも。「さへ」は添加の副助詞。
【所載】続古今集・離別・八三二／貫之集Ⅰ・四二〇
【参考】貫之集Ⅰによると、当該歌は屏風歌で、「旅、出で立ちする所にある女ども、別れ惜しめる」とあり、

旅立つ人を見送る女の立場に立って詠んだ歌である。

二三四〇　おもふ人とゞめてとをくわかるればこゝろゆくともおもほえなくに　或本

【異同】おもほえなくに―おほえなくに（大）
【現代語訳】愛する人をこの地にとどめ、遠く別れて行くので、心が行く、満足して旅立って行くなんてとても思われませんのに。
【語句】〇おもふ人　妻か恋人か、愛する人。〇とをく　とほ（遠）く。〇こゝろゆくとも　心が旅立つ意に、心がせいせいする、満足する意の「心ゆく」を掛ける。〇おもほえなくに　思われないのに。「おもほえなく」は、「思ほえず」のいわゆるク語法。
【所載】貫之集Ⅰ・四二一
【参考】貫之集Ⅰでは、前歌二三三九番に対し、「出で立つ人の返し」とあって、旅立つ男の立場で詠まれた歌である。

二三四一　かねてよりわかれをおしとおもひせばいでたゝんとはおもはざらまし

【異同】ナシ
【現代語訳】別れというものを、前々から名残惜しいものだと思っていたら、決して旅に出ようなどとは思わなかったでしょう。
【語句】〇かねてより　以前から。前もって。「おもひせば」にかかる。〇わかれをおしと　わかれををしと。別れを惜しいものだと。〇おもひせば　思っていたなら。「せ」は過去の助動詞「き」の未然形（サ変動詞「す」の未然形とする説もある）。一般に「せば……まし」の形で現実に反することを仮定する意を表す。もし……だったら……だろう。和歌にのみ用いられる。
【所載】貫之集Ⅰ・四二二
【参考】貫之集Ⅰでは、前歌二三四〇番と同じく、「出で立つ人の返し」とある歌の一首である。三首が並んだ形になっている。古今和歌六帖が具体的に「貫之集」という文献から採歌したのではないかと考えられる興味ある箇所。

〔以上五首担当　久保木〕

二三四二　をとは山こだかくなきてほとゝぎすきみがわかれをおしむべらなり

【異同】ナシ
【現代語訳】音羽山の木高いところで、ほととぎすが声高に鳴いて、あなたとの別れを惜しんでいるようだね。
【語句】〇をとは山　音羽山。音羽山は、山城国と近江国の境、現在の京都市山科区にある山。逢坂関の南に位置する。〇こだかく　梢が「高い」意に、声「高く（鳴く）」を掛ける。〇おしむべらなり　惜しむべらなり。「べらなり」は、二二九二番歌参照。
【所載】古今集・離別・三八四／新撰和歌・一八三／貫之集Ⅰ・七〇四
【参考】作者については、二二三七番歌参照。作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する

二三四三　かつこえてわかれもゆくかあふさかは人だのめなるなにこそありけれ

【異同】人たのめなる―たのめなる（大）
【現代語訳】「逢坂」は、「逢ふ坂」という名の場所である一方で、別れて行く場所でもあるのか。「逢坂」というのは、人をあてにさせる名だったのだなあ。
【語句】〇かつこえてわかれもゆくかあふさかは　かつ越えて別れも行くか逢坂は。「逢坂」の名は、逢うことを期待させる名である一方で、別れの場所であるのか。「かつ」は、一つのことが行われていると同時に、他方で別のことが行われていることを表す。ここでは、「逢う」ことと、「別れる」ことが同時に起こっている。「逢坂」は、逢坂山や逢坂関のこと。〇人だのめなる　人頼めなる。人をあてにさせる、の意。「わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人頼めなる」（古今集・五六九）。
【所載】古今集・離別・三九〇／新撰和歌・一八七／貫之Ⅰ・七〇六
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

二三四四　たまもこそものへゆく人わがおしめなみだのかぎりきみになきつる
（また）　（オシマズ）　（ノコサズイ）

【異同】きみになきつる―君になきりつる（大）
【現代語訳】「初句は傍記「またもこそ」に拠り現代語訳をした。」また、どこか遠くへ行く人を私が惜しむようでは困る。涙を尽くしてあなたとの別れのために泣いたのだった。
【語句】〇たまもこそ　このままでは意が通らない。傍記「またもこそ」で現代語訳をした。「もこそ」は、……すると困る、の意。将来を危ぶむ気持ちを表す。「今宵こむ人にはあはじたなばたの久しき程に待ちもこそすれ」（古今集・一八一）。第三句「わがおしめ」に掛かる。〇ものへゆく人　ものへ行く人。「もの」は、出かけて行く先の場所。〇わがおしめ　我が惜しめ、か。私が惜しく思う。〇なみだのかぎり　涙の限り。涙を流し尽くして。
【所載】貫之集Ⅰ・七〇九
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

二三四五　きみをのみ(シム)なみだのおちそひこのかはのみぎはまさりてながるべらなり(ル)

【異同】ながるべらなり―なかるへらなる（大）
【現代語訳】あなたとの別れを惜しむ涙が加わって、この川の水際の水量が増して流れるようだ。
【語句】〇きみをのみ　このままでは意が通りづらい。傍記「シム」を採り「きみをシム（君惜しむ）」として現代語訳をした。あなた（との別れ）を惜しむ。〇みぎはまさりてながるべらなり　水際増さりて流るべらなり。水際の水量が増して流れるようだ。「水際」は、陸地の水に接する所、水のほとり。「流る」に「泣かる」を掛ける。
【所載】貫之集Ⅰ・七一一
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

二三四六　われにしもくさのまくらはこはなくにものへ(ワカレイ)ときけばおしくぞ有ける

【異同】ナシ
【現代語訳】私にとくに草の枕を請い求められたわけではないけれど、どこかへ行くと聞くと惜しく思われることです。

【語句】○くさのまくら　草の枕。草で結んだ枕、旅寝の枕。○こはなくに　請はなくに。「請ふ」は、相手に請い求めること。（枕を）下さい、と請い求められたわけではないが。旅立ちなどの別れの際に、扇や火打ち石など身近な物を贈った習慣がこの歌の背景にある。「公資が妻ともろともにきて、枕請へば、いだしたるに、返すとて書きつけて返したる／旅ごとにかるもうるさし草枕た枕ならば返さざらまし」（和泉式部集・五二二）。
【所載】貫之集Ⅰ・七一七／貫之集Ⅱ・六〇
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　吉田〕

二三四七　きみがゆくところときけばつき見つゝをばすて山ぞこひしかりける

【異同】ナシ
【現代語訳】（信濃国を）あなたがこれから行くところと聞くと、月を見るたび姨捨山が恋しく思われますよ。
【語句】○きみがゆくところときけば　君が行くところと聞けば。信濃国をあなたがこれから行く場所と聞いたので。所載欄の文献に拠ると、信濃へ行く人への餞別として当該歌は詠まれた。○つき見つゝをばすて山ぞこひしかりける　月見つつ姨捨山ぞ恋ひしかりける。月を見ては姨捨山が恋しく思われてならないですよ。「つつ」は反復・継続の意を表す接続助詞。「をばすて山」は信濃国の歌枕。現在の長野県千曲市と東築摩郡にまたがる冠着山（かむりきやま）とされる。「わが心なぐさめかねつ更級やをばすて山に照る月を見て」（古今集・八七八／大和物語・一五六段）の影響を受け、「月」「なぐさむ」といった語と詠む作が多い。
【所載】続後拾遺集・離別・五四七／新後拾遺集・離別・八五三／貫之集Ⅰ・七一八／貫之集Ⅱ・六一
【参考】作者名については、二三三七参照。作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。信濃へ行く人への餞別として藤原師氏に代作を依頼されて詠んだ二首のうちの一首。

二三四八　見てだにもあかぬこゝろをたまぼこのみちのくまでも人のゆくかな　つらゆきぁる本

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたとお逢いしていてさえも私の心は満たされることがないのに、あなたは遠い陸奥にまで行

ってしまうのだなあ。
【語句】〇たまぼこのみちのくまでも　玉鉾のみちのくまでも。「たまぼこの」は、「道」を導く枕詞だが、ここでは「みちのく」の「みち」を導く。「みちのく」は陸奥のことで、現在の青森、岩手、宮城、福島の諸県のこと。
【所載】新古今集・離別・八六一／貫之集Ⅰ・七二六／貫之集Ⅱ・四七
【参考】作者名については、二三三七参照。作者名「つらゆきあ本」は、所載欄の文献に一致する。所載欄の文献によると、紀貫之の作で陸奥に下る人への一首。貫之集Ⅰは、藤原師輔が藤原有時の餞別をした折の詠作とする。

二三四九　わかれゆく人をおしむとこよひよりとをきゆめにぞわれはまどはん

【異同】とをきゆめにそ―遠き夢路そ（大）
【現代語訳】別れて行く人を惜しんで、今宵から遠い夢路を私はさまよい歩くのだろう。
【語句】〇わかれゆく人をおしむと　別れゆく人を惜（を）しむと。別れて行く人を惜しんで。〇とをきゆめにぞわれはまどはん　遠（とほ）き夢にぞ我はまどはん。遠い夢路を私はさまよい歩くのだろう。「遠き」「まどはん」といった語から、「ゆめにぞ」より傍記や所載欄の貫之集の「ゆめぢに」の方が自然。「思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢ぢにあふ人のなき」（古今集・五二四）。
【所載】玉葉集・羇旅・一一二一／夫木抄・一七〇三八／貫之集Ⅰ・七三一
【参考】作者名については、二三三七参照。作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。所載欄の貫之集には、旅立つ人に幣とともに送った作とある。

つらゆき

二三五〇　いとによるものならなくにわかれぢの心ぼそくもおもほゆるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】糸として撚るものでもないのに、（あなたとお別れする）分かれ道は心細く思われるものだなあ。
【語句】〇いとによるものならなくに　糸に撚るものならなくに。「撚る」は、細長いものをねじり合わせて一

本にすること。「鶯の糸によるてふ玉柳ふきなみだりそ春の山かぜ」（後撰集・一三一）。「……なくに」は、打消の助動詞「ず」のク語法。……ないのに、という意。〇わかれぢの心ぼそくも　別れ路の心細くも。分かれ道は心細く。糸が「細く」なるのと同様、「心細く」なるということ。

【所載】古今集・羇旅・四一五／拾遺集・別・三三〇／貫之集Ⅰ・七四二

【参考】作者名については、二三三七参照。作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。徒然草の一四段も当該歌の「いとによるものならなくに」という二句をあげ、作者を貫之とする。

二三五一　まつはみなたけはをもこゝにとゞめをきてわかれていづるこゝろしらなん

【異同】ナシ

【現代語訳】松もみな竹もみな、ここにとどめおいて、別れて（この家を）出る私の心を知っていてほしい。

【語句】〇まつはみなたけはをも　このままだと意味不明なため、「たけはをも」は傍記と所載欄の文献の「たけをも」として解する。松も竹もみな、の意。〇とゞめをきて　とどめおきて。あとに残して。

【所載】貫之集Ⅰ・八七〇

【参考】作者名については、二三三七参照。作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。詞書には「久しう住みける家を住まじとてほかへ移るに、前に生ひたる松と竹とを残して」とあり、長らく住んだ家から転居する際に松と竹を前に詠んだ作である。

〔以上五首担当　山村〕

二三五二　きのふけふ見つきかよりとまもりつるまつとたけとをいまぞわかるゝ

【異同】見つきかよりと―見つきかきりと（桂）

【現代語訳】［第二句「見つきかよりと」は「見べきかぎりと」として解した。］昨日も今日も「見ることのできる最後」と見守ってきた松と竹とに、今こそ別れることだ。

【語句】〇見つきかよりと　意味不明。所載欄の貫之集により「見べきかぎりと」で解した。見べき限りと。「見ることのできる最後」と。毎日、「これで見納め」と思いながら松と竹を見守ってきたというのである。〇まもりつる　目守りつる。見守ってきた。「つる」は、完了の助動詞「つ」の連体形。

【所載】貫之集Ⅰ・八七一
【参考】作者については、二三三七番歌参照。二三三七番歌の「つらゆき十四」が当該歌にも及ぶならば、作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰの八七一番歌は、古今六帖二三五一番歌の所載歌（八七〇番歌）に続く。二三五一番歌参照。

二三五三　しばしわがとまるかはりにちよまでのきみがをくりにくすりをぞやる

【異同】ナシ
【現代語訳】しばらく留まる私の代わりに、千年までのあなたの見送りの供として薬を差し上げます。
【語句】〇とまるかはりに　留まる代はりに。「留まる」には、都に留まるの意に、この世に留まるの意を重ねる。傍記、貫之集Ⅰ、Ⅱでは「とまるばかりに」。〇ちよまでの　千代までの。「薬」によって相手は千年まで続く寿命を得られ、それを自分の代わりに「薬」が見届けるという趣向。〇きみがをくりに　君が送（おく）りに。あなたの見送りの供として。「送り」には、旅の供をする者の意に、千年の寿命を見届ける者の意を込める。〇くすりをぞやる　薬をぞ遣る。係助詞「ぞ」は強意。「遣る」には、餞別として進呈するの意に、見送りの供として派遣するの意を重ねる。傍記、貫之集Ⅰ、Ⅱでは「くすりこそせめ」。
【所載】貫之集Ⅰ・七二二／貫之集Ⅱ・四九
【参考】作者については、二三三七番歌参照。二三三七番歌の「つらゆき十四」が当該歌にも及ぶならば、作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致しない。所載欄の文献によれば、作者は橘敏貞か。貫之集Ⅰでは「あはのかみとしたゞのあそん」、貫之集Ⅱでは「あはのかみとしさだ」。貫之集Ⅰによれば、橘公頼（敏貞の父）が大宰権帥として筑紫へ下るときに、「としたゞ」が「継母の典侍」への贈り物に添えた歌。詞書に「くすり」とあり、薬が贈られたと思われる。

二三五四　とをく行きみをゝくるとおもひやるこゝろもともにたびねをぞせん

【異同】ナシ
【現代語訳】遠くへ旅立っていくあなたを送ると、思いを馳せる私の心もあなたと一緒に行って、共に旅寝をすることでありましょう。

【語句】○とをく行　遠（とほ）く行く。遠くへ旅立っていく。○きみをゝくると　君を送（おく）ると。あなたを送ると。○おもひやる　思ひ遣る（心）。思いを馳せる（心）。遠方の相手に思いを馳せると、心が身を離れて相手の元へ行くという詠み口。「思ひやる心にたぐふ身なりせば一日に千たび君は見てまし」（後撰集・六七八）。○こゝろもともにたびねをぞせん　心も共に旅寝をぞせむ。私の心もあなたと一緒に行って、共に旅寝をすることでありましょう。「旅寝」は、旅先で寝ること。係助詞「ぞ」は強意。助動詞「む」は推量。相手の旅に自分の心が同行するという発想。

【所載】風雅集・旅歌・八九九／貫之集Ⅰ・七二九／貫之集Ⅱ・四八

【参考】作者については、二三三七番歌参照。二三三七番歌の「つらゆき十四」が当該歌にも及ぶならば、作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰによれば、陸奥守「たいらのよりすけ」（平惟扶か）の下向の餞別に、「兵衛督」の依頼により詠んだ歌。

二三五五　いでゝゆくきみをいはふとねぎつればわれさへなくもなりにけるかな
（ヌ）　（モイ）　（モイ）　なりひら

【異同】ねきつれは―ぬきつれは（大）　われさへなくも―我さへもなく（大）

【現代語訳】出立するあなたの旅の無事を祈ろうと加護を求めたところ、私までも無くなってしまったことだよ。

【語句】○きみをいはふと　君を祝ふと。「祝ふ」は、吉事を期待して呪術行為を行うこと。ここでは、相手の旅の無事を祈る。○ねぎつれば　祈ぎつれば。加護を求めたところ。「祈ぐ」は、神仏などに祈り、その加護を求めること。「つれ」は完了の助動詞「つ」の已然形。接続助詞「ば」は順接確定条件。○われさへなくも　我さへ無くも。副助詞「さへ」、係助詞「も」は添加を意味する。大久保本や所載欄の文献の「我さへもなく」が本来の形と思われる。参考欄参照。

【所載】業平集Ⅰ・二九／業平集Ⅱ・九五／伊勢物語・八三

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。大久保本や所載欄の文献では、第三句「脱（ぬ）ぎつれば」と第四句「我（われ）さへもなく」。こちらのほうが歌意は通りやすく、「出立するあなたの旅の無事を祈ろうと装束を脱いだところ、私まで裳――喪（災いごと）が無くなってしまったことだよ。」となる。

二三五六　いとひてはたれかわかれのかたからんありしにまさるけさはかなしも

【異同】けさはかなしも―けふはかなしも（大）

【現代語訳】嫌になったのなら、誰が別れが難しいだろうか、いや難しくない。以前にもまさる今朝は悲しいことだ。

【語句】〇いとひては　厭ひては。嫌になったのなら。接続助詞「て」と係助詞「は」で、順接仮定条件を表す。〇たれかわかれのかたからん　誰か別れの難からむ。誰が別れが難しいだろうか、いや難しくない。係助詞「か」は反語。相手のことを嫌になったわけではないので、別れがつらい、というのである。〇ありしにまさる　在りしに増さる。以前にもまさる。意味の上では「別れた今朝の）悲しみ」にかかるか。「在りし」は、ラ変動詞「在り」連用形と過去の助動詞「き」の連体形から成る。「増さる」は、四段動詞「増さる」の連体形。「忘れなん今はと思ふ折にこそ在りしに増さるもの思ひはすれ」（一条摂政御集・二〇）。〇けさはかなしも　今朝は悲しも。今朝は悲しいことだ。終助詞「も」は詠嘆。

【所載】続後撰集・恋三・八四〇／万代集・三三一六／業平集Ⅰ・七四／業平集Ⅱ・三二／業平集Ⅳ・二二／伊勢物語・七七

〔以上五首担当　原山〕

二三五七　わかれてはいつかあひ見んとおもふともかぎりあるよのいのちともなく

【異同】ナシ

【現代語訳】いま別れてしまったら、いつまた逢うだろうかと思っても（それは期し難い）。いつまでと限りのわかっているこの世の命でもないものを。

【語句】〇いつかあひ見ん　いつまた逢うだろうか。「いつか」の「いつ」には「伊豆」が詠み隠されているか。参考欄参照。「か」は疑問の係助詞。「あひ見ん」は「逢ひ見ん」。再会しよう、ということ。〇かぎりあるよのいのちともなく　「かぎりある」は「いのち」に掛かる。「よのいのち」とはこの世の命のこと。いつまでと限りのわかっているこの世の命、ということもなくて。一首の末を連用形で言いさした形にして、事態に対する惻隠の情を言外にこめている。

【所載】後撰集・離別・一三一九／伊勢集Ⅰ・二一七／伊勢集Ⅱ・二二二／伊勢集Ⅲ・二一八
【参考】作者表示に「いせふたつ」とあるのは、当該歌と次の二三五八番歌の二首が「伊勢」の作であるということ。この作者表示は、所載欄の文献に一致する。すなわちこれは、宇多朝寛平八年（八九六）九月、東光寺座主であった善祐法師が、皇太后高子との密通にかかわって伊豆国へ講師として配流されたとき、当時中宮温子に仕える女房であった伊勢が、詠んだ歌である。

二三五八　ひとりゆくことこそうけれふるさとのならのならびて見し人をなみ（コノコロノ）（モク）

【異同】見し人をなみ（モク）―見しをなみ（大）
【現代語訳】こうしてひとり旅ゆくことこそつらいことだ。むかしなじみのこの奈良を、かつて並んでいっしょに見た人が今はもういなくて。
【語句】○ふるさとのなら　むかしなじみの地である奈良。○ならびて見し人をなみ　並んでいっしょに見た人が今はいなくて。「ならのならびて」と同音をくり返した。「人」はここでは作者伊勢の親のこと。参考欄参照。
【所載】後撰集・哀傷・一四〇三／伊勢集Ⅰ・一三二／伊勢集Ⅱ・一三二／伊勢集Ⅲ・一三〇
【参考】前歌（二三五七番）に「いせふたつ」とあり、この歌も伊勢の作であると表示されている。これは、所載欄の文献に一致する。伊勢の父継蔭は、宇多朝寛平年間に大和守として現地赴任していた。その時期に伊勢は仲平との恋に傷つき、大和の親の許にのがれた。大和滞在中に親（後撰集によれば母親）に伴われて初瀬長谷寺に詣でたようである。この歌はさらに後年、親が亡くなったのちにひとりで初瀬に詣でた伊勢が、いまはその親も世に亡いと、悲しんで詠んだ歌である。

二三五九　いのちだにこゝろにかなふものならばなにかわかれのかなしかるべき（ラマシ）

【異同】ナシ
【現代語訳】せめて命だけでもわが心のままになるものであったならば、どうして別れの悲しいことがありましょうか。ありはしませんのに。
【語句】○いのちだに　せめて命だけでも。○こゝろにかなふものならば　わが心の思うままになるものであったならば。「ば」は仮定の接続助詞。○なにかわかれのかなしからまし　なんで別れの悲しいことがあろうか、

悲しくなんかありはしないのに。「か」は疑問の係助詞、かつ反語。
【所載】古今集・離別・三八七／新撰和歌・一九九／金玉集・六九／和漢朗詠集・六四〇／深窓秘抄・九二／大鏡・七九／十訓抄・二〇二／大和物語・二三五

二三六〇　おもひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたくあ(イ)さりせんとは　たかむら

【異同】あさりせんとは―いさりせんとは（大）
【現代語訳】かつて思ったことがあったろうか、いや、思いもしなかった。このように都と別れた田舎住まいに衰えはてて、漁師が漁網の縄を手繰って漁をするような、こんな暮らしをしようとは。
【語句】○おもひきや　思ったろうか、いや思ったこともなかった。「や」は反語。この初句は倒置されていて、意味上は第五句の後につづく。○ひなのわかれ　鄙の別れ。都を去って田舎へ行くための別れ。○あまのなはたくあさりせんとは　「あま」はここでは漁師、「なはたく」は漁網の縄を手繰ること、「あさり」はここでは海でする漁のこと。まるで漁師のように漁網の縄を手繰って漁をするようなことになろうとは。遠島配流のわが身を、鄙の漁師にたとえて詠んだ。参考欄参照。
【所載】古今集・雑下・九六一／新撰和歌・二三五／時代不同歌合・二一／俊頼髄脳・三二八／和歌童蒙抄・三五〇／奥儀抄・五六七／袖中抄・六一四／古来風体抄・二九二／和歌色葉・三〇八
【参考】作者表示「たかむら」は小野篁のことで、所載欄の文献に一致する。古今集の詞書には「隠岐の国に流されて侍りける時に詠める」とある。篁は遣唐副使に任じられながら命令に従わなかったので、承和五年（八三八）隠岐に流罪となった。これはその時の歌。二年後の承和七年（八四〇）に召還されている。

二三六一　むかひゐて見るだにあかぬわぎもこがたちわかれなばたづ(ム)きしらずも　(に)

【異同】ナシ
【現代語訳】いつも向かい合って居て、見ていてさえ飽くことのないわが恋人が、もし別れ去ったとしたら、私はどうしていいかわからない。
【語句】○むかひゐて見るだにあかぬ　向かひ居て見るだに飽かぬ。いつも向き合って居て、見ていてさえ飽く

ことのない。〇わぎもこが　私の恋人が。第四句の「たちわかれ」に対する主語。傍記「に」に拠って「わぎもこに」とした方が歌意はわかりやすい。〇たちわかれなば　もし別れていったとしたとしたら。「たち」は接頭語、「ば」は仮定の接続助詞。〇たづきしらずも　どうすればいいかわからない。「たづき」は方法、手段、などの意。「も」は強意の終助詞。

【所載】古今六帖・第五帖「ふたりをり」二七二二／続後拾遺集・離別・五二九／万葉集・六六八（旧六六五）向座而　雖見不飽　吾妹子二　立離徃六　田付不知毛　ムカヒヰテミレドモアカヌワギモコニタチワカレユカムタヅキシラズモ　むかひゐてみれどもあかぬわぎもこにたちはなれゆかむたづきしらずも

【参考】古今六帖のここでは作者表示がないが、重出している第五帖二七二二番歌では、「あべのむしまろ」と作者表示がある。万葉集においても、作者は「安倍朝臣虫麿」となっている。

〔以上五首担当　山下〕

二三六二　しろたへのそでときそけて返覧月日かぞへてゆきて見ましや

【異同】返覧―通らん（大）

【現代語訳】（白妙の）袖を解き放って愛しい人と共寝をして、ここに戻って来られるであろう月日を数えて、行って逢って来たいものだがなあ。

【語句】〇しろたへの　白妙の。「袖」を導く措辞。〇そでときそけて　袖解き放けて。袖を解き放って。共寝をする意か。「ささら潟錦の紐を解きそけてあまたは寝ずみただ一夜のみ」（古今六帖・三三四〇）。所載欄の万葉集には「袖解きかへて」とあるが、当該歌の前の長歌に「紐解き放（さ）けず」と見えるので、「解き放（さ）く」と同じ意で「解きそく」という複合語を用いたと解しておく。「解きさく」は他にも「高麗錦紐解きさけて寝るが上にあどせろとかもあやにかなしき」（万葉集・三四八四〈旧三四六五〉）などと詠まれており、離す・取り除く意の「そく」も「赤見山草根刈りそけ逢はすがへ争ふ妹しあやにかなしも」（万葉集・三四九八〈旧三四七九〉）などの例がある。〇返覧月日　返るらむ月日。帰って来られるであろう月日。所載欄の万葉集では「こむ」とある箇所が古今六帖では「らむ」となっているので、ここに戻って来るのに必要であろう月日と解した。「らむ」は現在推量の助動詞。〇見ましや　逢って来たいものだがなあ。「まし」は、「……したいものだが」という、現実には実現不可能なことを仮想して希望する意を表す。「今ははや恋死なましを逢ひ見むと頼めしことぞ命なりける」（古今集・六一三）。「や」は、詠嘆の終助詞と解した。

【所載】万葉集・五一三（旧五一〇）白妙乃　袖解更而　還来武　月日乎数而　徃而来猿尾　シロタヘノソデトキカヘテカヘリコムホドヲカゾヘテユキテコマシヲ　しろたへのそでときかへてかへりこむつきひをよみてゆきてこましを
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の万葉集によると丹比真人笠麿が筑紫国に下る途次で詠んだ長歌の反歌。

二三六三　或本　わかるべきものとしりせばきのくにのいもせの山にあらましものを　きのらう女

【異同】ナシ
【現代語訳】別れることになると知っていたならば、紀伊国の妹背の山でありたかったものを。（そうしたらずっと一緒にいられたのに。）
【語句】〇わかるべきものとしりせば　別るべきものと知りせば。別れることになると知っていたならば。離ればなれになるとわかっていたならば。「……せば」は、結句の「まし」と呼応して反実仮想を表す。〇きのくにのいもせの山　紀伊国の妹背の山。紀伊国の歌枕。現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町にあり、紀ノ川を挟んで両岸に相対してある。一五六八番歌・一六一七番歌の語句欄参照。
【所載】ナシ
【参考】作者名「きのらう女」とあるが、他の文献で確認できない。万葉集に、神亀元(七二四)年十月聖武天皇紀伊国行幸の際に「娘子」の依頼で従駕の夫に贈るために笠金村が詠んだ歌の反歌として、「後れ居て恋ひつつあらずは紀伊国の妹背の山にあらましものを」（五四七〈旧五四四〉）という類歌がある。

二三六四　さゝのはゝみやまもよ（へそよ）そにわかるらん（ルトモ）われはいもに（ソヨニ）人まろ（みつ）をしわかれきぬれば

【異同】みやまもよ（へそよ）そに―み山もそよに（ソヨニ）（大）
【現代語訳】笹の葉は、それが生い茂っているみ山も自分とは関わりのないものとして別れていることだろうか。

私が妻と別れてきたので。
【語句】〇みやまもよそにわかるらん　み山もよそに別るらむ。み山も無縁のものとして別れていることだろうか。「み山」の「み」は接頭語。「よそに」は、自分とは無縁の関係ないものとして、の意。所載欄の万葉集では「ミヤマモサヤニミダレドモ」もしくは「みやまもさやにさやげども」とある。古今六帖の本文によって解すると、笹の葉が、その笹が生えているみ山さえも笹とは無縁のものとして風に吹かれて離れていると詠み、自身の妻との別れと重ねた歌か。笹の葉を擬人化した歌として解す。万葉集の本文の方が意味が通りやすい。
【所載】新古今集・羇旅・九〇〇／万葉集・一三三　小竹之葉者　三山毛清尓　乱友　吾者妹思　別来礼婆　ササノハハミヤマモサヤニミダレドモワレハイモオモフワカレキヌレバ　ささのははみやまもさやにさやげどもわれはいもおもふわかれきぬれば／　夫木抄・一三二七七／人麿集Ⅱ・二一六／人麿集Ⅲ・六四九／定家十体・一九／柿本人麻呂勘文・六三／桐火桶・一三三／心敬私語・一〇
【参考】作者名「人まろみつ」とある通り、当該歌は所載欄の万葉集によると作者は柿本人麻呂で、石見国から妻と別れて上京してくる時の長歌に対する反歌。二三六五番歌も作者は人麻呂だが、二三六六番歌は所載の文献により作者名が異なる（二三六六番歌参考欄参照）。

二三六五　あき山におつるもみぢばしばらくはいりなみだれそいもがあたりみん（チ）

【異同】ナシ
【現代語訳】秋山に散り落ちる黄葉よ、しばらくは入り乱れないでおくれ。妻がいる辺りを見たい。
【語句】〇いりなみだれそ　入りな乱れそ。入り乱れないでおくれ。「な……そ」は、禁止の意を柔らかく表す。黄葉が散って入り乱れると視界が妨げられるので、そうしないでくれと黄葉に頼む気持。「……下枝に残れる花はしましくは散りなまがひそ……」（万葉集・一七五一〈旧一七四七〉）。〇いもがあたりみん　妹が辺り見む。妻の家の辺りを見たい。「海の底沖つ白波竜田山いつか越えなむ妹が辺り見む」（万葉集・八三一〈旧八三一〉）。
【所載】万葉集・一三七　秋山尓　落黄葉　須臾者　勿散乱曽　妹之当将見〈一云、知里勿乱曽〉アキヤマニオツルモミチバシバラクハナチリミダレソイモガアタリミム（チリナミダレソ）　あきやまにちらふもみちばしましくはなちりまがひそいもがあたりみむ〈一云、ちりなまがひそ〉／人麿集Ⅰ・二／人麿集Ⅲ・六二七／柿本人麻呂勘文・六五
【参考】二三六四番歌に作者名「人まろみつ」とあるが、当該歌は所載欄の万葉集によると柿本人麻呂が石見国

から妻と別れて上京してくる時の長歌に対する反歌。

二三六六　おもふなといもはいへどもあはんときいつとしりてかわがこひざらむ（キミ）（フコトヲイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】そんなに思い悩むなと妻は言うけれども、逢えるであろう時は何時と知って私が恋しく思わないことはありましょうか。（逢えるのは何時かわからないので恋しく思わずにはいられない。）
【語句】〇いもはいへども　妹は言へども。妻は言うけれども。所載欄の万葉集には「君は言へども」とある。
【所載】拾遺集・恋二・七五六／万葉集・一四〇　勿念跡　君者雖言　相時　何時跡知而加　吾不恋有牟　オモフナトキミハイフトモアハムトキイツトシリテカワガコヒザラム　なおもひときみはいへどもあはむときいつとしりてかあがこひずあらむ／人麿集Ⅱ・二九八／人麿集Ⅲ・五七七／人麻呂勘文・六六
【参考】二三六四番歌に作者名「人まろみつ」とあるが、所載欄の万葉集では、当該歌は柿本人麻呂の妻、依羅娘子（よさみのをとめ）が人麻呂と別れた時の歌。ただし、古今六帖の本文では「いもはいへども」とあるので男性の歌になる。所載欄の拾遺集では、「君は言へども」の本文で作者は「人麻呂」とする。

〔以上五首担当　長戸〕

二三六七　しろたへのそでわかるべき日をちかみこゝろにむせてなきのみぞなく（ネヲ）

【異同】ナシ
【現代語訳】袖と袖を重ねていた二人の袖を離して別れなければならない日が近いので、胸がつかえてただもう泣いてばかりいます。
【語句】〇しろたへの　梶の木の繊維で織った白い布を「しろたへ」という。衣・袖・袂・紐・領布（ひれ）などにかかる枕詞。〇日をちかみ　日が近いので。「を……み」は原因・理由を表す。〇こゝろにむせて　「むせて」の「むせ」は終止形「むす」。下二段活用。現在の「むせぶ」意。涙や煙などに喉がふさがる。また、悲しみで涙を流す。「山深み立ちくる霧にむすればやなく鶯の声のまれなる」（千里集・一）。〇なきのみぞなく　涙が絶えない。泣いてばかりいる。「あしの屋のうなひをとめのおくつきを行きくと見ては泣きのみぞ泣く」（袖中抄・六〇二）。

【所載】玉葉集・旅歌・一一〇六／万葉集・六四八(旧六四五)　白妙之　袖可別　日乎近見　心尓咽飯　哭耳四所泣　シロタヘノソデワカルベキヒヲチカミココロニムセビネノミシナカル　しろたへのそでわかるべきひをちかみこころにむせびねのみしなかゆ／井蛙抄・一七四
【参考】万葉集巻四に「紀女郎の怨恨の歌三首」として掲載するうちの第三首である。

二三六八　わぎもこがわれにおそるとしろたへのそでひつまでになきしおもほゆ（或本）

【異同】われにおそると―われにおそるゝ（御）
【現代語訳】「第二句を「われにおくると」に拠って訳す」いとしいあの子が私を見送るとて、袖が涙でぐっしより濡れるほど泣いた姿が思い出される。
【語句】〇われにおそると　不詳。他に例がない。所載欄の万葉集の「われをおくると」に拠って訳す。我を送ると。〇しろたへの　前歌二三六七番歌の語釈参照。〇ひつまでに　動詞「漬（ひ）つ」は清音。びっしょり濡れる意。〇なきしおもほゆ　泣きし思ほゆ。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。「思ほゆ」の「ゆ」は自発の意の助動詞。ひとりでに思われてくる。
【所載】万葉集二五二三〈旧二五一八〉吾妹子之　吾呼送跡　白細布乃　袂漬左右二　哭四所念　ワギモコガワレヲオクルトシロタヘノソテヒツマデニナキシオモホユ　わぎもこがわれをおくるとしろたへのそでひつまでになきしおもほゆ／袋草紙・四九

二三六九　をくれゐてこひつゝあらばきのくにのいもせの山にあらましものを（ハズハ）

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたが出立し、私が後に残されたまま恋い慕い続けるのであったなら私たちはいつも向かい合っているあの紀の国の妹背山であったらいいのに。
【語句】〇をくれゐて　おくれ居て。「おくる」は立ち去った人に取り残されること。〇こひつゝあらば　恋ひつつあらば。恋しく求め続けるのであるなら。「住吉の津守の網のうけの緒のうかびかゆかむ恋ひつゝあらば」（和歌童蒙抄・四四六）。〇いもせの山　歌枕。ここは和歌山県伊都郡かつらぎ町を流れる紀ノ川をはさんで相対する妹山と背山。

【所載】万葉集・五四七（旧五四四）後居而　恋乍不有者　木国之　妹背乃山尓　有益者乎　オクレヰテコヒツツアラズハキノクニノイモセノヤマニアラマシモノヲ　おくれゐてこひつつあらずはきのくにのいもせのやまにあらましものを／夫木抄・八一三四
【参考】万葉集巻四の題詞によれば笠金村の作の長歌の反歌。聖武天皇の行幸に従う夫を送る娘子の依頼によって作る。

二三七〇　かくしつゝありなぐさめてたまほこのたえてわかれば(ノヲ)かなしかるべし(アハズハスベナカル)

【異同】ナシ
【現代語訳】このようにいつも共にいて心を慰めていますが、あなたに絶えて会えなくなって別れてしまったら、かなしくてならないでしょう。
【語句】〇かくしつゝありなぐさめて　このようにして共に居ることで心を慰め静めて。〇たまほこの　「道」にかかる枕詞。この歌では「絶えて」の部分にかかるが不審。傍記は万葉集の本文。「玉の緒の」。この方が「絶えて」への続き方として自然。
【所載】万葉集・二八三七（旧二八二六）如是為乍　有名草目手　玉緒之　絶而別者　為便可無　カクシツツアリナグサメテタマノヲノタエテワカレバスベナカルベシ　かくしつつありなぐさめてたまのをのたえてわかればすべなかるべし／人麿集Ⅳ・二六六

二三七一　たまほこのみちにいでたちゆくわれをきみがことをも思ゆかなん(テ)(ム)(てゆくらん)

【異同】きみかことをも―君かことをし（大）
【現代語訳】［第三句は万葉集の「ゆくわれは」という本文で訳す］旅に出立する私は、あなたのことを思って行こうと思います。
【語句】〇たまほこの　「道」にかかる枕詞。〇みちにいでたち　旅に出立し。〇きみがことをも思ゆかなん　あなたのことを思って行こう。
【所載】万葉集・四二七五〈旧四二五一〉玉桙之　道尓出立往吾者　公之事跡乎　負而之将去　タマホコノミチニイデタチユクワレハキミガコトトヲオヒテシユカム　たまほこのみちにいでたちゆくわれはきみがことと

をおひでしゆかむ／古来風体抄・二〇三
【参考】万葉集巻十九の題詞によれば、家持の上京する時官人たちが送りに来て、「内蔵伊美吉縄麿」が歌をものした、それに和した家持の歌。

〔以上五首担当　平野〕

二三七二　しらゆきのみぎはによするしらなみのゆきてはこねどわかれかなしも（クモ　キナ、ンイ　ツユイ）

【異同】わかれかなしも―別かなしき（大）
【現代語訳】（白雪のような）水際に寄せる白波が行って戻って来ぬように、あの人は行ったまま帰って来ないけれど別れは悲しいことよ。
【語句】○しらゆきの　白雪の。「みぎは」を導く枕詞的措辞とみるが、必ずしも「みぎは」を導く必然性はない。傍記の「しらくもの」「しらつゆの」としても同様なので、本文通りとする。○しらなみの　白波の。上句は「ゆきて」を導く序。○ゆきてはこねど　行って帰らないけれど。白波が行ったまま戻ってこない意に、相手が去って行ったまま戻らない意をこめる。「ど」を逆接の確定条件とみても、第五句の「わかれかなしも」に展開する心情の流れが理解しにくい。「ゆきてはこねば」とありたいところ。
【所載】ナシ

ふかやぶ
二三七三　くもゐにもふかきこゝろのをくれねばわかると人に見ゆばかりなり

【異同】ナシ
【現代語訳】雲のいるはるかかなたにも、私の深い心が後れることはないのだから、人目には、別れるかのように見えるだけのことです。
【語句】○くもゐにもふかきこゝろのをくれねば　雲居にも深き心の後（おく）れねば。「くもゐ」は雲居。雲の居る所の意から、大空、はるかに隔たった所。「私の深い心があなたについて行って、後れをとることはないのだから。」の意とみるが、初句「くもゐにも」との関わりがわかりにくい。所載欄の古今集、深養父集Ⅰでは

「かよふ心」とあり、「雲のいるはるかな所にも通うほどの私の心は、後れずあなたについていって」という意となってわかりやすいが、本文通りに解す。〇わかると人に見ゆばかりなり　人目には別れると見えるだけだ。心は離れないが、身だけは離れるので、他人には別れるように見える。「人」は一般的な人、他人のこと。「身」と「心」を分けるとする歌は、「思へども身をしわけねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる」（古今集・三七三）など、古今集の離別歌に多い。

【所載】古今集・離別・三七八／深養父集Ⅰ・二〇／深養父集Ⅲ・一二／後六々撰・七九

【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。

二三七四　いつのまにこひしきことのつもるらん（キヌイ）わかれてのちはほどもへなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】いつのまに恋しい思いがこんなに積もってしまっているのだろうか、別れて後、さほど時間もたっていないのに。

【語句】〇わかれてのちは　別れた後は。別れる時に涙で濡れた袖が乾く間ほど僅かな時間しかたっていないのに恋しくてたまらないという歌と似た発想。

【所載】ナシ

【参考】「いつの間に恋しかるらん唐衣濡れにし袖の干る間ばかりに」（後撰集・七二九）の初句・二句と、「別れつるほどもへなくに白浪の立返りても見まくほしきか」（後撰集・七三〇）の初句・二句を合わせて作られたかのごとき歌である。

二三七五　わかれゆくみちのくもゐになりぬればとまるこゝろもそらにこそなれ

【異同】そらにこそなれ―空にこそしれ（大）

【現代語訳】別れて行く道が雲居はるか遠く隔たってしまったので、留まっている私の心も魂が抜けたようにうわの空になっております。

【語句】〇みちのくもゐになりぬれば　道がはるかに隔たってしまったので。「くもゐ」は雲居。はるかに隔たっているところ。二三七三番歌参照。所載欄の後撰集の詞書には「みちのくへまかりける人に」とあり、第二

句「みちのく」を詠み隠す。〇心もそらに　心も魂の抜けたようなうつろな状態に。形容動詞「そらに」の「そら」は「くも」の縁語。
【所載】後撰集・離別・一三二四

二三七六　しらくもにとびかへるべき人をなみたゞあしたづになりにけるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】（白雲に向かって）飛んで帰るべき人がいないので、私は、ただ芦辺にいる（飛ばない）鶴になってしまったよ。
【語句】〇しらくもに　白雲に。「とび」を導く枕詞的な措辞。〇とびかへるべき人をなみ　飛んで帰るような人がいないので。「べき」は適当。〇あしたづ　葦辺にいる鶴。ここではただ葦辺にいるだけで、飛ばない鶴をいう。
【所載】ナシ
【参考】「天飛ぶや鳥にもがもや都まで送り申して飛び帰るもの」（万葉集・八八〇〈旧八七六〉）、空を翔る鳥であったら都までお送りして飛び帰りましょうものをという万葉歌を踏まえ、飛び帰るべき相手もいないので、飛ぶこともしない、単なる葦辺にいる鶴になってしまったとする誹諧的な歌。

〔以上五首担当　中野〕

二三七七　きみとわれいのちをのみぞしらなみのたちかへりくるほどのはるけさ

【異同】ほとのはるけさ―ほとのはるけき（大）
【現代語訳】あなたと私の、この命ばかりは知られない。いま別れたらいつ帰って来られるか、その時のなんとはるかに遠いことよ。
【語句】〇いのちをのみぞしらなみの　この先の命ばかりは知られない。「命を知ら（ぬ）」に「白波」を掛けた。ここの「白波の」は、第四句の「立ち」を導き出す措辞でもある。〇たちかへりくるほど　ふたたび帰って来る時。「たち」は接頭語、また「立ち」が掛かっていて「白波」を受ける。「ほど」は、ここでは時の流れの中のある一点をさすことば。〇はるけさ　遥けさ。遥かなことよ。

【所載】ナシ
【参考】別離の場で詠まれた惜別の歌。「立ち帰りくるほど」から推して、出立して去ってゆく側の人の歌であろうか。

二三七八　さくらばなけふちりくもれあかずしてわかるゝ人もたちとまるべく

【異同】ナシ
【現代語訳】さくら花よ。きょうこそ散り交い曇って道がわからないようにしてくれ。別れがたくして別れ去ってゆく人もとどまってくれるように。
【語句】○さくらばなけふちりくもれ　さくら花よ。きょうこそ散りまがって、あたりを曇らせてくれ。「さくら花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに」（古今集・三四九）。○あかずしてわかるゝ人も　別れたくないのに別れて行かねばならぬ人も。「あかずして別るる袖の白玉を君がかたみと包みてぞゆく」（古今集・四〇〇）。○たちとまるべく　とどまってくれるように。「たち」は接頭語。「とまる」は停まる。先へ進まずに、その地点に停止すること。「山風にさくらふきまき乱れなむ花のまぎれにたちとまるべく」（古今集・三九四）。
【所載】ナシ
【参考】語句欄にあげた古今集の三首の歌の、影響を受けた歌のように思われる。

二三七九　いたつけてなにかはなにもあつらふるたゞひとことのはにをとゞめよ（ルイ）（に）（いたづらにとも）

【異同】はにをとゝめよ―葉もとゝめてよ（大）
【現代語訳】「意味不明の語があるので、完全な訳が示せない。」意味もなく、どうして花にまで誂え求めるのか。ただひとことの言葉だけにとどめておきなさいよ。
【語句】○いたつけて　意味不明。左傍記の「いたづらに」に拠るとすれば、何の意味もなく空しく、ということ。○なにかはなにもあつらふる　何か花にも誂ふる。どうして花に対してまでも誂え求めるのか。「あつらふる」は誂ふる。注文をつけて求めること。○たゞひとことの　ただ一言の、か。○はにをとゞめよ　意味不明。右傍記に拠るとすれば「春をとどめよ」か。大久保本では「葉もとゞめてよ」となっている。ここは大久保本に

拠って仮に解しておく。この場合、「ひとことのはにを」には「ことのは」が掛けられているか。

【所載】ナシ

【参考】語句不完全な歌で意味がとりにくい。傍記や大久保本に拠り、仮に訳した。事情はよくわからないが、なにか別離の場で、去る人を見送る側の歌のようである。

二三八〇　わかるれどわかるとも見ずみつかけこそこもこゝ（ノイ）にも（ロイ）おなじみなれば

【異同】ナシ

【現代語訳】［意味不明の語があるので、完全な訳が示せない。］いま別れても、別れたとは思わない。心の底の本心も（そちらと）同じ身なのだから。

【語句】〇わかるれどわかるとも見ず　別れても、ほんとうに別れたのだとは思わない。〇みつかけこ　意味不明。御所本・桂宮本・大久保本ではみな「こ」の右に「ノ」と小字傍記あり。それに拠るとすれば「水かげの」であり、第四句の「そこ（底）」を導き出すための措辞か。〇そこもこゝにも　意味不明。傍記に拠り「そこのこゝろも」かと見て訳す。底の心も。心の底の本心も、か。

【所載】ナシ

【参考】語句に不審のある歌なので、傍記に拠り、仮に訳した。古今六帖第三帖「しま」の項には、「別るれど別れと思はずいではなるつるがの島のたえじと思へば」（一九〇八）という歌があり、初・二句が近似している。

二三八一　たもとなき身となりぬべしけふよりはなみだにくちてすてゝむものを（そせい）

【異同】ナシ

【現代語訳】きょうから私は、袂なき身となってしまうでしょう。この袂は涙によって朽ちて、捨ててしまいたいほどでありますものを。

【語句】〇たもとなき身　衣服に袂のない身。あるいは、出家の身、という意味をもこめて言っているか。〇なみだにくちて　涙によって朽ちてしまって。〇すてゝんものを　捨ててむものを。捨ててしまいたいものを。

【所載】ナシ

【参考】作者名「そせい」とあるが、この歌そのものを素性の作とする文献はない。ただし素性集Ⅰや新編国歌大観の素性集には、河内国への御幸に随行した素性が、途中でまかり帰ろうとして詠んだという「雨よりも袂なき身となりぬべし絶えぬ涙に朽ちぬべければ」という歌があり、ことばや歌意が近似している。また新撰万葉集五〇二番歌には、「袖もなき身とやなりなむ恋ひ経つつ涙に朽ちてすてつべければ」という作者名のない一首もある。

〔以上五首担当　山下〕

二三八二　からころもうへはなみだにそをちつゝしたひぬべくもおもほゆるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】衣の表面は涙に濡れながら、心の中ではただひたすらお慕い申しているように思われることです。
【語句】〇からころも　唐風の衣、舶来の衣。転じて、一般の衣服、着物の意。和歌にのみ用いられる語だが、「朝影にわが身はなりぬからころも裾のあはずて久しくなれば」（万葉集・二一六二六〈旧二六一九〉）などのように、「からころも」が詠まれた歌は少なくとも平安初期まではもっぱら逢えない人のことを嘆く気持ちが籠められているとする説（「王朝和歌における服飾表現―「からころも」をめぐって―」和田早苗「服飾美学」一九九八・九）もある。〇そをちつゝ　そほちつつ。のち「そぼちつつ」と濁音。「そほつ」は、雨や涙に濡れる。濡れながら。〇したひぬべくも　下干ぬべくも。「うへはなみだにそをちつゝ」と対になる表現。ただし「別れ」題の歌なので「慕ひぬべくも」を掛けており、むしろそのことをいうために、「上は涙に」「下干ぬべくも」という技巧を用いているのであろう。
【所載】ナシ

二三八三　わかれてはおほくの山をへだつともこひしよな〳〵ゆめにこそ見め

【異同】ナシ
【現代語訳】たとえ別れて多くの山を隔てたとしても、かつて恋い慕った夜々を夢に見ることでしょう。
【語句】〇おほくの山を　御所本など他本では「いもせの山を」と小字にて傍記する。その場合は明らかに男女の別れを詠んだことになり、わかりやすい。〇こひしよな〳〵　「こひし」は「よな〳〵」にかかると考えられ

るので形容詞ではなく、動詞「恋ふ」の連用形に過去の助動詞「き」の連体形が伴った形なのであろう。もっとも御所本など他本では「こひむよな〳〵」と小字にて傍記する。その場合は過去のことではなく、恋しく思うであろう夜々、とこれからのことを推量する形になる。「よな〳〵」は、毎晩、夜ごとの意。〇ゆめにこそ見め夢に見ることであろう。「見め」の「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「こそ」を受ける。

【所載】ナシ

二三八四　わたくしのわかれなりせばあきのよを心づくしにゆくなといはまし

かねずみ（かねすけ　ある本）

【異同】ナシ

【現代語訳】もし私的な別れでしたら、こんなすばらしい秋の夜をいろいろともの思いをするためにわざわざ行くようなことをするな、と言いたいところなのでしょうが。

【語句】〇わたくしの　「わたくし」は「おほやけ（公）」に対する語。内々の。私的な。個人的な。〇わかれなりせば　別れだったら。「せば」は多く「まし」と呼応していわゆる反実仮想を表す、和歌特有の表現。「せ」については、過去の助動詞「き」の未然形、サ変動詞「す」の未然形などの説がある。「世の中に絶えてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」（古今集・五三）。〇心づくし　さまざまに心を尽くすこと。さまざまにもの思いをすること。「木の間より洩り来る月の影見れば心づくしの秋は来にけり」（古今集・秋上・一八四）。あるいは「心づくし」に「筑紫」が掛けられており、筑紫赴任の人に対する惜別の歌か。行く先の国の名、行く人の名などを別れの歌の中に詠み込む例としては、「常陸へまかりける時に藤原公利に詠みてつかはしける／あさなけに見べき君とし頼まねば思ひたちぬる草枕なり」（古今集・三七六）などがある。〇ゆくなといはまし（私的な別れだったら）行くなと言うだろう、でも実際は私的ではないから、そうは言えない、という気持ち。

【所載】ナシ

【参考】作者名「かねずみ」あるいは「かねすけ」は他に所載文献がなく真偽未詳。もっとも「かねずみ」が歌人の源兼澄であるとすれば、その主たる活躍期は古今和歌六帖の成立以後と考えられ、可能性が少ない。

二三八五　てる月をまさきのつなによりかけてあかずわかるゝ人をつながん

かはらの大臣（きみ　とゞめん）

【異同】ナシ
【現代語訳】照る月をまさきの葛で縒った綱に掛けてとどめ、まだ別れたくないのに別れて行こうとする人をつなぎとめよう。
【語句】〇まさきのつな　まさき（柾木）の葛を縒って作った綱。まさきの葛は葛の一種。神事に用いられたという。「み山にはあられ降るらし外山なるまさきの葛色づきにけり」（古今集・一〇七七）。〇あかずわかるゝ　飽かず別るる。まだ不十分なのに、もっと一緒にいたいのに別れる。
【所載】後撰集・雑一・一〇八一／業平集Ⅱ・一一〇／俊頼髄脳・一五九／奥儀抄・三二二
【参考】作者名「かはらの大臣」は、所載欄の後撰集、業平集Ⅱでは「河原左大臣」、俊頼髄脳では「業平中将」とする。河原左大臣は嵯峨天皇の皇子、源融（八二二―八九五）。後撰集の詞書に「家に行平朝臣まうで来たりけるに、月のおもしろかりけるに、酒らなどたうべてまかりたたむとしけるほどに」とある。すばらしい月をもしひきとどめることができれば、その月にひかれて、早くも帰ろうとしている人をもう少しつなぎとどめることができるだろう、という。

返し　　ゆきひらの中納言

二三八六　かぎりなきおもひのつなのなくはこそまさにのつなをよりもなやまめ

【異同】よりもなやまめ―よりもあやまめ（大）
【現代語訳】限りなく思うという、思いの綱がもしなかったら、あなたのおっしゃるようにまさきの綱もきっと縒り悩むことになるのでしょう。でも、ないはずはないので、そんなに悩むことはないのではないですか。
【語句】〇おもひのつな　八代集抄には「思緒、愁緒、別緒、心緒などいふ事の心歟」とある。思う心を意味する漢語からの訓読語か。〇なくはこそ　もしなかったら。「よりもなやまめ」にかかる。「なくは」は仮定。〇よりもなやまめ　縒りも悩まめ。縒り悩むことだろう。縒るのに苦しむことだろう。「悩まめ」の「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「なくはこそ……め」の形で、もしなかったら……であろう、でも実際にはあるから、そうはならない、の意を表す。「水無瀬川ありて行く水なくはこそつひにわが身を絶えぬと思はめ」（古今集・七九三）。

【所載】後撰集・雑一・一〇八二／業平集Ⅱ・一一一／奥儀抄・三二三／和歌色葉・三三八
【参考】作者名「ゆきひらの中納言」は、後撰集では「行平朝臣」、業平集Ⅱでは業平の返歌とする。行平は、在原行平。平城天皇皇子阿保親王の子息で、業平の兄。古今六帖で「返し」とある例は少ない。
〔以上五首担当　久保木〕

二三八七　ぬさ　ちはやぶる神のやしろにわがゝけしみぬさ(テグラ)はたまへいもにあはなくに

【異同】ナシ
【現代語訳】神のお社に掛けて祈った私の幣をお返しください。祈り願ったあの娘に逢えないのだから。
【語句】◎ぬさ　神に祈りをささげる時の供え物。「ぬさ」は、麻、木綿(ゆう)、紙、絹などで作り、旅立つときに小さく切って持参する。また、餞別の贈り物にもなる。幣を供えて陸路や海路の安全を祈る。さらには、恋の成就を願って幣を捧げるなどの例も見える。自然の景物を幣に見立てて詠むときもある。〇ちはやぶる神のやしろ　「ちはやぶる」は「神」に掛かる枕詞。「やしろ」は神の来臨するところで、神を祀る場所をいう。神社。〇わがゝけしみぬさはたまへ　我が掛けし御幣は賜へ。「みぬさ」の「み」は尊敬の意の接頭語。祈り捧げた幣をお返し下さい。「我が掛けし幣やかへらんちはやぶる神に祈りし君にあはずは」（壬二集・一四二六）。
【所載】万葉集・五六一（旧五五八）千磐破　神之社尓　我掛師　幣者将賜　妹尓不相国　チハヤブルカミノヤシロニワガカケシヌサハタバラムイモニアハナクニ　ちはやぶるかみのやしろにわがかけしぬさはたばらむいもにあはなくに／夫木抄・一五四七二／童蒙抄・五三七

二三八八　すがるなく秋のはぎはらあさたちてたびゆく人(ヌ)のおしくもあるかな(ヲイツトカマタンイ)

【異同】ナシ
【現代語訳】鹿が鳴く秋の萩原を朝発って、幣に裁って、旅行く人を名残惜しく思うことだなあ。
【語句】〇すがるなく　鹿が鳴く。奥儀抄「物異名」に「鹿、すがる」とある。〇はぎはら　萩が咲いている原。〇あさたちて　「幣」題なので、「朝立ちて」（朝早く出立して）に、幣に「裁ちて」を掛けると解した。〇おしくもあるかな　惜(を)しくもあるかな。名残惜しいことだなあ。「惜し」は、旅ゆく人への愛惜の気持をあらわ

す。なお、所載欄の文献は、下句がすべて傍記と同じ「たびゆく人をいつとか待たむ」とある。
【所載】古今集・離別・三六六／俊頼髄脳・三〇九／綺語抄・六四一／和歌童蒙抄・八一七

人丸

二三八九　あつがみにぬさとりむけてわがころもゆきあふさかの山とほるかな
（スベ）　（エム　ミナイ）　（ヲハカルナ）　（セキイ）

【異同】ぬさとりむけて―ぬきとりむけて(大)
【現代語訳】「初句と第三句は、傍記「すべがみに」「わがこえむ」に拠って解した」この地域の神に幣をそなえて、私が越えようする逢坂山を、あの人とゆき逢って思いをとげようと祈って、通ることです。
【語句】○あつがみに　傍記や所載欄の夫木抄に拠り、「すべがみに」として解す。「すべがみ」は「すめかみ」の転で、一定の区域を支配する神のこと。○ぬさとりむけて　幣取り向けて。幣を神に供えて。なお、万葉集の長歌「……山科の　石田の社(もり)の　皇神(すめかみ)に　幣取り向けて　吾れは越えゆく　逢坂山を」(三二五〇〈旧三二三六〉)は、当該歌に似た表現を含んでいる。○わがころも　傍記と夫木抄に拠り、「わが越えむ」で解した。私が越えようとする。○ゆきあふさかの山　「行き逢ふ」と「逢坂の山」を掛ける。恋する人にゆき逢って、「逢坂の山」を越える、つまり思いをとげる意が込められていよう。「いづ方を眺めやらましたまさかにゆきあふ坂の関なかりせば」(後拾遺集・七二三・能宣)。
【所載】夫木抄・一五四六七
【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。ただし、他文献では確認できない。

つらゆき二首

二三九〇　わたつうみのちひろ(シ)の神にたむけするぬさのおひかぜやさず(ま)ふかなん

【異同】つらゆき二首―つらゆき(大)　ちひろ(シ)の神に―ちいろの神に(大)　やさすふかなん―やますふかなん(御・桂・大)
【現代語訳】海の神様にお供えする幣、その幣を吹きやる追風が絶えず吹いて(船を順調に進めて)ほしい。
【語句】○わたつみのちひろの神　海路の安全を守る神か。ただし、「ちひろ(千尋)の神」は、当該歌やそれを

引用した所載欄の新千載集や夫木抄にしか例がない。土佐日記に「ちふり(道触)の神」。〇たむけする　神に供物をそなえる。旅の安全を祈る。〇ぬさのおひかぜやさずふかなん　「やさず」は底本の誤写で、三本一致する「やまず」で解す。神は幣を捧げた祈りを聞き届けて、追風を吹かせて船が順調に進めるようにして欲しい。
【所載】新千載集・羇旅・七六二／夫木抄・一五四六八／袖中抄・九八五／土佐日記・三一
【参考】作者名「つらゆき」は、夫木抄を除く所載欄の文献に一致する。

二三九一　ふるゆきをそらにぬさとぞたむけたるはるのさかひにとしのこゆれば

【異同】はるのさかひに―はるのまかひに(御・大)
【現代語訳】降る雪を幣として空に手向けている。冬から春になる境にそこを年が越えるので。
【語句】〇ふるゆきをそらにぬさとぞたむけたる　降る雪を空に幣とぞ手向けたる。手向ける主体は下句の「年」。「年」を擬人化し、降る雪を幣として手向けたと表現。〇はるのさかひにとしのこゆれば　年というものが冬から春への境にそこを越えるので。「雲居寺結縁経の後宴に歌合し侍りけるに、九月尽の心を詠み侍りける　瞻西上人／唐錦幣に裁ちもて行く秋も今日や手向けの山路越ゆらん」(千載集・秋下・三八三)。
【所載】新勅撰集・冬・四四二／貫之集Ⅰ・八九
【参考】二三九〇番歌に「つらゆき二首」とあり、当該歌の作者名は所載欄の文献に一致する。
〔以上五首担当　加藤〕

二三九二　たちぬさのわが思ことばたまほこのみちのくごとにかみもつてなん

【異同】ナシ
【現代語訳】[第四句は「みちのべごとに」と解した。]裁った幣にこめた私の思いを、(たまほこの)道端で手向けるごとに、神も伝えてほしい。
【語句】〇たちぬさの　裁ち幣(ぬさ)の。「幣」は二三八七番歌参照。神に祈る時の供え物。旅に出るときは、木綿、麻、紙などを小さく四角に切って幣袋に入れ、道祖神の前に散らして手向けた。餞別の品として贈られることも多い。〇たまほこの　「道」にかかる枕詞。〇みちのくごとに　「陸奥ごとに」か。このままでは意が通じないため、「へ」と「く」の誤写とみて、「みちのべごとに」と解した。所載欄の貫之集はいずれも「みちのべ

ごとの」。「みちのべ」は、道のほとり、道端。「風にしもつけつる幣は道の辺の手向にあはぬ神なかれとぞ」（兼輔集・九七）。〇神もつてなん　神も伝えて欲しい。ここでの「神」は、路傍にあって道中の安全を守る道祖神のこと。「つて」は、タ行下二段活用動詞「伝（つ）つ」の未然形。「なん」は誂え望む意の終助詞。「ほととぎす君につてなんふるさとの花橘は今ぞ盛りと」（源氏物語・幻巻・五七六）。所載欄の貫之集Ⅱの本文「神ぞ知るらん」の方が意は通る。なお、貫之集Ⅰは「浪もしるらん」。

【所載】夫木抄・一五四七〇／貫之集Ⅰ・七三四／貫之集Ⅱ・四二

【参考】所載欄の貫之集によれば、尾張守藤原興方が下向するにあたり、貫之が幣や装束を贈った際の歌。興方が尾張守に赴任したのは天慶六（九四三）年（類聚符宣抄第八）。

二三九三　ゆくときもかへらんときもたまほこのみちよりかみをいのれとぞおもふ

（けふ）　（ちぎれる）　（チヨリノタイ）

【異同】ナシ

【現代語訳】行くときも帰ってくるときも、（たまほこの）道中から道祖神を祈ってください、そう思っています。

【語句】〇たまほこの　「道」にかかる枕詞。〇みちよりかみをいのれ　道中から神を祈れ。「道より」は、道中から。「道よりや添ふる心のかへりけむ知らぬ声なることも聞こえぬ」（伊勢集・三五二）。ここでの「神」は道中の安全を守る道祖神のこと。所載欄の貫之集では「ひきものかみをいのれ」とあり、「ひきものかみ」は道祖神のことかとされている。

【所載】夫木抄・一六八七四／貫之集Ⅰ・七一二／貫之集Ⅱ・六二／袖中抄・九八四

【参考】所載欄の貫之集によれば、知り合いの人に幣を乞われて詠んだ歌。

二三九四　いとまだき見ゆるもみぢはきみがためおもひそめてしぬさにぞありける

【異同】ナシ

【現代語訳】こんなに早くから（色づいて）見える紅葉は、あなたの無事を思って染めた幣なのでありました。

【語句】〇まだき　ある時点を想定して、それに達しない時期を表す語。早くも。早々に。ここでは通常紅葉が見られるよりも早い時期であることを表す。「いとまだき過ぎぬる秋の形見には枝に紅葉を散りさしにける」（伊

勢集・三一五）。○もみぢは　紅葉は。「は」は係助詞。結句に「にぞありける」がある場合、係助詞「は」が用いられることが多い。「見る人もなきわが宿のもみぢ葉は風だに知らぬものにぞありける」（相模集・一八四）。○おもひそめてし　思ひ染めてし。無事を念じて一生懸命染めたということ。○ぬさにぞありける　幣であったのだなあ。「幣（ぬさ）」は二三八七番歌参照。神に祈るときの供え物で、木綿・麻のほか、布や紙を用いることもあった。紅葉を幣とみなす例に「道知らば尋ねもゆかんもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり」（古今集・三一三）がある。

【所載】貫之集Ⅰ・七一五

【参考】所載欄の貫之集によれば、左中弁紀淑光がある人の餞別の宴をした際、幣に書くため貫之に詠ませた歌。

二三九五　そめたちていのれるぬさのおもひをばたむけのみちの神やしるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】染めて裁って無事を祈った、幣にこめた思いを、供える道中の神はわかってくれるでしょうか。

【語句】○そめたちて　染め裁ちて。布を染めて裁ち、幣にしたことを表す。○ぬさのおもひを　幣としてこめた思いを。幣は二三八七番歌参照。○たむけのみちの神　幣を供える道祖神のこと。「手向（たむ）け」は道中の安全を祈って神に供え物をすること。

【所載】夫木抄・一五四六九／貫之集（西本願寺本）・七五二

【参考】所載欄の貫之集によれば、旅人に幣を与える際に詠んだ歌。

二三九六　もみぢばをぬさとたむけにちらしつゝ秋とゝもにやゆかんとすらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】紅葉した葉を幣として供えるために散らしながら、秋が過ぎ去っていくのと一緒に、あなたも行ってしまおうというのですか。

【語句】○もみぢばをぬさとたむけに　もみぢ葉を幣と手向けに。「幣（ぬさ）」は二三八七番歌参照。「幣とは、幣として。紅葉した葉を幣とみなす例には「道しらば尋ねもゆかんもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり」（古今集・三一三）などがある。「手向（たむ）け」は道中の安全を祈って神に供え物をすること。○ちらしつ

ゝ　散らしつつ。紅葉した葉が散る様子を、幣を供えるさまに見立てた和歌に「竜田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉のぬさとちるらめ」（古今集・二九八）がある。
【所載】後撰集・離別・一三三八
【参考】所載欄の後撰集によれば、醍醐天皇皇女雅子内親王が斎宮として下向する際、その供として下る人に幣を贈るにあたり、女房歌人の大輔が詠んだ歌。

〔以上五首担当　諸井〕

たむけ

二三九七　もゝたらず（二）やそすみさかにたむけせばすぎゆく人にさしあはんかも

【異同】ナシ
【現代語訳】（ももたらず）何回も折れ曲がっている八十隅坂の神に供え物をすると、亡くなったあの人に行き会うことがあるだろうか。
【語句】◎たむけ　手向け。神仏に幣（ぬさ）などの供え物をすること。主として旅人などが道中の安全を祈るために行った。また、その供え物や供え場所、すなわち峠などのことも指す。〇もゝたらず　百に満たない数という意から、「五十（い）」「八十（やそ）」を導く枕詞。「ももたらず八十のちまたに夕占（ゆふけ）にもト（うら）にもぞとふ……」（万葉集・三八三三〈旧三八一一〉）。〇やそすみさか　八十隅坂。何回も折れ曲がっている、九十九折（つづらおり）の坂道のこと。所載欄の万葉集の新訓では「やそくまさか」。時代は下るが、永久百首に「百たえぬやそすみ坂の白つつじしらじな人は見にこぞるとも」（一〇一）という俊頼の歌があり、平安時代には「やそすみさか」という表現があったらしい。〇すぎゆく人　ここでは亡くなった人のことであろう。参考欄参照。所載欄の万葉集の新訓は「すぎにしひと」とする。「子等が手を巻向山は常にあれど過ぎ行く人に行きまかめやも」（人麿集Ⅲ・六〇三）も万葉集（一一七二〈旧一一六八〉）では「過ぎにし人」とする。〇さしあはんかも　行き会うだろうか。「さしあふ」は、出くわす、行き会う、の意。「道のあしきをよろぼひおはするほどに、前おひて、あまた火ともさせて、小路ぎりに辻にさしあひぬ。」（落窪物語）。「かも」は、疑問の係助詞「か」に強意の係助詞「も」が付いて一語化したもの。詠嘆を含んだ疑問を表す。
【所載】万葉集・四三〇（旧四二七）百不足　八十隅坂尓　手向為者　過去人尓　盖相牟鴨　モモタラズヤソスミサカニタムケセバスギユクヒトニケダシアハムカモ　ももたらずやそくまさかにたむけせばすぎにしひとにけ

だしあはむかも／和歌童蒙抄・五三八
【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集によれば、田口広麿（たのくちのひろまろ）が没した時に刑部垂麿（おさかべのたりまろ）が詠んだ歌。

二三九八　いまはとていほへぞまかるまかりぢにたむけのかみにぬさたまはらんツラユキィ

【異同】まかりちに―まかりちに（御・桂）　ぬさたまはらん―麻たまはらん（大）　「ツラユキィ」ハ和歌ノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】もうこれでお別れと我が家へ帰ります。その帰り道に手向の神にささげる、幣をいただきましょう。
【語句】○いまはとて　もうこれでお別れ。「今はとて別るる時は天河わたらぬさきに袖ぞひちぬる」（古今集・一八二）。○いほ　庵。草木で作った粗末な家を指すが、ここでは自分の家を謙遜した表現。「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり」（古今集・九八二）。○さがりぢに　下がり路（ぢ）か。帰り道の意に解した。○たむけのかみ　手向の神。旅人が幣などを手向けて道中の安全を祈る神。「浅からぬちぎり結べる心葉はたむけの神ぞしるべかりける」（拾遺集・四八五）。○ぬさたまはらん　幣をいただきましょう。「幣（ぬさ）」は二三八七番歌参照。神に祈る時の供え物。「たまはる」は、物や言葉をもらう意の謙譲語で「いただく」。傍記は「たてまつらん」で、「幣を奉りましょう」の意となる。
【所載】ナシ
【参考】作者名表記「ツラユキィ」とあるが、他文献には見えない。

二三九九　山しろのいはたのもりにこゝろそてたむけをしてぞいもにあひがたき

【異同】ナシ
【現代語訳】山城の石田の森に、いいかげんにお供えをしたことで、いとしいあの娘に会えないことだよ。［第三句は傍記「こゝろをそく」で解した。］
【語句】○山しろのいはたのもり　山城の石田の森。山城国の歌枕。京都市伏見区石田周辺。枕草子「森は」の段（一九四）にも挙げられている。「山城のいはたの森の柞原いはねど秋は色づきにけり」（古今六帖・一〇四八）。○こゝろそて　他に用例が見えない語。所載欄の諸文献では、傍記と同じ「こゝろをそく」であり、こちらで解

した。「心おそし」は、いいかげんであるさま、不熱心であるさま。〇いもにあひがたき　いとしいあの娘に会えないことだ。「をととしの先つ年より今年まで恋ふれどなぞも妹に逢ひ難き」（万葉集・七八五〈旧七八三〉）。
【所載】万葉集・二八六七（旧二八五六）山代　石田杜　心鈍　手向為在　妹相難　ヤマシロノイハタノモリニココロオソクタムケシタレバイモニアヒガタキ　やましろのいはたのもりにこころおそくたむけしたれやいもにあひかたき／夫木抄・九九八一／人麿集Ⅲ・三二三／古来風体抄・一四〇

二四〇〇　きみをおもふわが心をぞ見えぬべきたむけの神もいかにおもはん

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたを想う、私の心をぜひ見せましょう。手向の神もどう思うでしょうか。（きっと願いを聞き届けてくれるでしょう。）
【語句】〇みえぬべき　ぜひ見せよう。ここでの「見ゆ」は、他動詞のように用いて、意識して他から見られるようにする意。「はかなき花紅葉につけても心ざしを見えたてまつる。」（源氏物語・桐壺巻）。「ぬべし」は、強意（確述）の助動詞「ぬ」に、意志の助動詞「べし」のついたもので、強い意志を表す。ぜひ……しよう、きっと……しよう。〇たむけの神　二三九八番歌参照。
【所載】夫木抄・一六〇三三

二四〇一　このたびはぬさもとりあへずたむけ山もみぢのにしき神のまにまに

【異同】ナシ
【現代語訳】今回のこの旅は、幣も準備できておりません。ここはお供えをする手向山ですので、（幣の代わりに）紅葉の錦を神のお心のままにお受け取りください。
【語句】〇このたびは　「この旅」と「この度（たび）」の掛詞。〇幣もとりあへず　「幣（ぬさ）」は二三八七番歌参照。神に祈る時に供えた神や布のことだが、「道知らば尋ねもゆかんもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり」（古今集・三二三）など、紅葉を幣とみなす例も多い。〇とりあへず　準備できず。「笠もとりあへで、袖をかづきて帰るばかり、と笑ひたまふ。」（落窪物語）。「あへず」は、……しきれない、……できない、の意。〇たむけ山　手向山。本来は普通名詞で、旅の安全を祈って峠の神に幣を手向ける山をいう。所載欄の古今集によ

ると、この歌は昌泰元年（八九八）の宇多上皇宮滝御幸の際に詠まれた菅原道真の歌であるが、奈良には手向山八幡宮の裏手の山（若草山の西方の一部）や、奈良山（平城山）といった固有名詞化した「手向山」があり、詠まれた場所の特定はできない。〇まにまに　ままに。行動の決定を他に任せる様子を表す語。「別れをば山のさくらにまかせてむとめむとめじは花のまにまに」（古今集・三九三）。

【所載】古今集・羇旅・一九二／新撰和歌・一九二／和歌体十種・三四／百人秀歌・二三／百人一首・二四／定歌十体・六六／綺語抄・二七一／古来風体抄・二七〇／詠歌大概・七五／竹園抄・六二

〔以上五首担当　諸井〕

二四〇二一　玉ほこのたむけのかみもわがごとくわがおもふことをおもへとぞ思

【異同】ナシ

【現代語訳】道中の手向けの神も、私のように私が思うこと（道中の安全）をご配慮ください、と思うことです。

【語句】〇玉ほこのたむけのかみも　玉ほこの手向けの神も。道中の手向けの神も。「玉ほこの」は本来「道」を導く枕詞であるが、ここでは道そのものを表す。「たむけのかみ」は旅人が幣などを手向けて道中の安全を祈る神。〇わがおもふこと　我が思ふこと。私が願うこと。手向けの神に願うことなので、道中の安全を願っているのである。

【所載】夫木抄・一六八七六／貫之集Ⅰ・七一六

【参考】作者名無表記だが、所載欄の文献によると紀貫之の作。人の餞別の際に幣に書く歌を紀淑光に依頼されて詠んだ二首のうちの一首。

つらゆき二首

二四〇三　もみぢをもはなをもおれるこゝろをばたむけの山のかぜぞしるらし

【異同】ナシ

【現代語訳】紅葉も花も折って（お供えして）あなたの道中の安全を祈る私の心を、手向けの山の風は知ってくれるらしい。

【語句】〇もみぢをもはなをもおれるこゝろをば　紅葉をも花をも折（を）れる心をば。紅葉も花も折って（お

供えして）道中の安全を祈る心を。紅葉と花はしばしば幣に見立てられ、道中の安全を祈って神に供えられる。所載欄の貫之集には「あひ知りたる人のものへ行くに幣やるとて」という詞書があり、幣の代わりに紅葉と花を供えて、相手の道中を祈ったことがうかがえる。〇たむけの山のかぜぞしるらし　たむけの山の風ぞ知るらし。手向けの山の風は知ってくれるだろう。「たむけの山」は、旅の安全を祈って神に幣を手向ける山のこと。「かぜぞしるらし」は、風が知ってくれるだろうという意になるが、風が紅葉などを吹き散らして神への手向けとするという詠みぶりが一般的である。「秋風は誰がたむけとか紅葉ばを幣にきりつつ吹き散らすらん」（寛平御時后宮歌合・一〇七）。所載欄の文献で第五句は「神ぞ知るらし」となっており、そちらの方が自然だが、当該歌は紅葉や花をお供えしたことで風が吹き、紅葉を幣のように吹き散らしたということか。

【所載】続千載集・羇旅・七六〇／夫木抄・八三八八／貫之集Ⅰ・七一三／貫之集Ⅱ・六三

【参考】作者名「つらゆき二首」は、夫木抄以外の所載欄の文献に一致する。夫木抄ではよみ人知らずとなる。所載欄の貫之集によると、言い交わした人に幣をおくるために詠んだ作。

二四〇四　たむけするわかれする身のわびしきは人めをたびとおもふなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】（旅に出るわけではないので）神に手向けをしない別れをするこの身のつらさは、人の見る目（を憚って逢えないこと）を旅に出るようなものだと思うのでした。

【語句】〇たむけするわかれする身の　下の句に「人めをたびとおもふなりけり」とあるので、実際に旅に出ているわけではなく「たむけするわかれする身」では不自然。よって、傍記や所載欄の文献の「たむけせぬわかれする身」で解釈する。（旅に出るわけではないため）神に手向けをしない別れをするこの身が、という意味。女と逢えないでいることを旅に例えた詠みぶり。所載欄の文献の後撰集の詞書に拠ると、宮仕えしている相手となかなか逢えずにいた折の詠作。〇人めをたびとおもふなりけり　他人の見る目を旅と思うのでした。旅に出ると相手とは逢えなくなるが、自分は人の見る目を憚って相手と逢えなくなっている。そこで人の見る目を旅と例えている。

【所載】後撰集・恋・七〇四／貫之集Ⅰ・五五三

【参考】作者名「つらゆき二首」は、所載欄の文献に一致する。

二四〇五　いへはなれたびにしあればあきかぜのさむきゆふべにかりなきわたる

【異同】ナシ
【現代語訳】家を離れて旅にあると、秋風が寒く感じられる夕方に雁が鳴き渡っていく。
【語句】◎たび　住む所を離れて、一時、他の所にいること。また、住居から離れた所に移動すること。現在の「旅」とは異なり、一時的に住居以外の所に行くことをいう。一般的に旅の楽しさや喜びを歌う詠作は少なく、旅立つ不安や旅先での孤独感などを詠んだものが多い。ここでも旅の途上での詠作や旅に出る人へ贈る歌などがあげられ、恋しさや孤独感が詠まれているものが多い。○たびにしあれば　旅にしあれば。旅にあると。「し」は強意の副助詞。○あきかぜのさむきゆふべにかりなきわたる　秋風の寒き夕べに雁鳴きわたる。秋風が寒く感じられる夕方に雁が鳴き渡っていく。秋風の寒さが旅の孤独感のため強く意識されるということ。
【所載】万葉集・一一六五（旧一一六一）離家　旅西在者　秋風　寒暮丹　鴈喧渡　イヘザカリタビニシアレバアキカゼノサムキユフヘニカリナキワタル　いへざかりたびにしあればあきかぜのさむきゆふへにかりなきわたる／人麿集Ⅳ・一四

二四〇六　くさまくらたびゆくきみを思はしみそひてこまほしこがのはまべに

ミマシヲカノヤマベヲイ

【異同】ナシ
【現代語訳】草枕旅行くあなたが慕わしく思われたので、付き添って行きたいものです。こがの浜辺に。
【語句】○思はしみ　好ましく思うという意。○そひてこまほし　添ひて来まほし。付き添って行きたい。「こまほし」は、カ行変格活用の未然形「こ」に希望の助動詞「まほし」が接続した形。○こがのはまべに　所在地未詳。所載欄の文献では「志賀の浜辺」とする。現在の福岡県福岡市東区にある。
【所載】万葉集・五六九（旧五六六）草枕　羈行君乎　愛見　副而曽来四　鹿乃浜辺乎　クサマクラタビユクキミヲウツクシミタグヒテゾコシシカノハマヘヲ　くさまくらたびゆくきみをうるはしみたぐひてぞこししかのはまへを
【参考】作者名無表記だが、所載欄の文献によると大宰大監大伴宿祢百代の作。百代が病床に臥し、遺言を伝えるため駅使の大伴稲公と胡麻呂の派遣を依頼する。その後百代は快癒し、二人が都に戻るための餞別の宴で詠

まれた二首のうちの一首。

〔以上五首担当　山村〕

二四〇七　神風やいせのはまおぎおれふしてたびねやすらんあらきはまべに

【異同】おれふして―おりふせて（大）

【現代語訳】伊勢の浜荻が折れて倒れて、（あの人は）旅寝をしているだろうか。波風の荒い浜辺で。

【語句】○神風や　枕詞。「伊勢」にかかる。○いせのはまおぎ　伊勢の浜荻（をぎ）。伊勢の浜辺に生えている荻。○おれふして　折（を）れ伏して。折れて倒れて。四段動詞「折れ伏す」は自動詞で、主語は「伊勢の浜荻」。浜荻のように「折れ臥して」身を横たえた姿の比喩か。所載欄の万葉集には「をりふせて」。○たびねやすらん　旅寝やすらむ。旅寝をしているだろうか。「旅寝」は旅先で寝ること。係助詞「や」は疑問。「らむ」は推量（現在推量）の助動詞「らむ」の連体形。

【所載】新古今集・羇旅歌・九一一／万葉集・五〇三（旧五〇〇）神風之　伊勢乃浜荻　折伏　客宿也将為　荒浜辺尓　カミカゼノイセノハマヲギヲリフセテタビネヤスラムアラキハマヘニ　かむかぜのいせのはまをぎをりふせてたびねやすらむあらきはまへに／夫木抄・一六八七〇／人麿集Ⅱ・二一五／定家十体・二六八／俊頼髄脳・三〇〇／綺語抄・二五八／和歌童蒙抄・六三〇／奥儀抄・六一六／袖中抄・四八六／六百番陳状・一五八／和歌色葉・七九／三五記・一七〇／伊勢物語・二三七

二四〇八　いづこにかわれはやどらんたゝしまのかちのゝはらにこの日ひくらしつ

【異同】たゝしまの―たかしまや（大）　この日ひくらしつ―此日くらしつ（大）

【現代語訳】［第三句「たゝしまの」は「たかしまの」として解した。］どこに旅の宿りをとったらよいだろうか。高島の勝野の原にこの一日を過ごしてしまった。

【語句】○いづこにかわれはやどらん　何処にか我は宿らむ。どこに旅の宿りをとったらよいだろうか。係助詞「か」は疑問。「む」は推量の助動詞「む」の連体形。○たゝしまのかちのゝはらに　「たゝしま」は所載欄の万葉集により「たかしま」として解した。高島の勝野の原に。「高島」、「勝野の原」は近江国の歌枕。現在の滋賀県高島市勝野の辺りの平野。

【所載】新勅撰集・羇旅歌・四九九／万葉集・二七七（旧二七五）何処　吾将宿　高嶋乃　勝野原尓　此日暮去者　イヅコニカワガヤドリセムタカシマノカチノハラニコノヒクレナバ　いづくにかわがやどりせむたかしまのかつののはらにこのひくれなば／夫木抄・九六六六／和歌初学抄・二〇一

ゆげいのおほきみ或本

二四〇九　いへにありて見れどあかぬをくさまくらたびにもいもがあるがひさしさ

【異同】ナシ
【現代語訳】家に居て見ても飽きないのに、旅にも妻が同行している状態が長いことよ。
【語句】○見れどあかぬを　見ても飽きないのに。接続助詞「ど」は、逆接確定条件を示す。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。接続助詞「を」は逆接。○くさまくら　枕詞。「たび」にかかる。○たびにもいもがあるがひさしさ　旅にも妹があるが久しさ。旅にも妻が同行している状態が長いことよ。「旅にあり」は「旅に出ている」の意。当該歌では、妻が夫の旅に同行した。「妹」は男性が姉妹や妻、恋人を親しんで言う語。「ある」はラ変動詞「あり」の連体形。ここでは体言の性質を持ち、「……にある状態」の意。
【所載】万葉集・六三七（旧六三四）家二四手　雖見不飽乎　草枕　客毛妻与　有之乏左　イヘニシテミレドアカヌヲクサマクラタビニモツマトアルガ（アラス）トモシサ　いへにしてみれどあかぬをくさまくらたびにもつまとあるがともしさ
【参考】作者名「ゆげいのおほきみ」は、所載欄の万葉集では「娘子」。湯原王からの贈歌に答えたとされる。湯原王の旅に妻が同行しており、「娘子」が二人の仲を羨んだものと解される。古今六帖では作者は男性で、妻の同行を喜んだものと解した。

ありまのわうじ或本

二四一〇　いへにあればけにもるいゐをくさまくらたびにしあればしゐのはにもる

【異同】ナシ
【現代語訳】家に居れば器に盛る飯を、旅先なので椎の葉に盛る。
【語句】○けにもるいゐを　笥に盛る飯（いひ）を。器に盛る飯を。「笥」は物を盛ったり入れたりする器。「飯」

は米などを蒸したもの。〇くさまくら　枕詞。「たび」にかかる。〇たびにしあれば　旅先なので。副助詞「し」は強意。接続助詞「ば」は順接確定条件（原因・理由）。〇しゐのはにもる　椎（しひ）の葉に盛る。「椎」はブナ科の常緑高木で、葉は楕円形。

【所載】万葉集・一四二　家有者　笥尓盛飯乎　草枕　旅尓之有者　椎之葉尓盛　イヘニアレバケニモルイヒヲクサマクラタビニシアレバシヒノハニモル　いへなればけにもるいひをくさまくらたびにしあればしひのはにもる／俊頼髄脳・二二九／和歌童蒙抄・四二九／古来風体抄・三五／八雲御抄・一三二

【参考】作者名「ありまのわうじ」は所載欄の文献に一致する。万葉集には、前の歌の詞書に「有間皇子自傷結松枝歌二首」とある。有間皇子が謀反のかどで護送された際の詠とされる。

二四一一　ありて見るものにしあらねどくさまくらたびにしきけばかなしかりけり

【異同】かなしかりけり―かなしかりける（大）

【現代語訳】（家に）居て見るものではないけれど、旅先で聞くと、ぐっと来ることだなあ。

【語句】〇ありて見るものにしあらねど　（家に）居て見るものではないけれど。この「ありて」は、「家にありて」の意と解す。二四〇九番歌参照。副助詞「し」は強意。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。接続助詞「ど」は逆接確定条件。〇たびにしきけば　旅先で聞くと。副助詞「し」は強意。〇かなしかりけり　ぐっと来ることだなあ。「かなしかり」は形容詞「かなし」の連用形。詠者が旅先で聞いた内容は具体的には不明。「かなし」は、感情が強く迫って切ない気持ち。愛しさにも悲しさにも使う。「けり」は、過去の助動詞「けり」の終止形で詠嘆。

【所載】ナシ

〔以上五首担当　原山〕

二四一二　ほどゝをくながめもやらんあきゞりはたびゆくみちをへだてざらなん

【異同】なかめもやらん―詠もやらし（大）

【現代語訳】はるか遠くまで見渡しもしたいものだ。秋霧は、旅していく道のりを隠さないでほしい。

【語句】〇ほどゝをく　ほど遠（とほ）く。〇ながめもやらん　遠くまで見渡したりしたい。「ながめやる」は

遠くを見渡す意。「も」は係助詞。〇あきゞり　秋霧。春の霞と同じく、花紅葉ほか何かをたち隠すものという捉え方。「秋霧は今朝はな立ちそ佐保山のはその紅葉よそにても見む」（古今集・二六六）。〇へだてざらなん　隠さないでほしい。「隔つ」は、間に入り互いに見えないようにすること。「行く方をながめもやらむこの秋はあふさか山を霧なへだてそ」（源氏物語・一四二）。「なん」は他にあつらえ望む意の終助詞。

【所載】ナシ

二四一三　われならぬ人とねにけりくさまくらのちのためとはなにかとがめし

【異同】ナシ

【現代語訳】私以外の人と共寝をしたのですね。旅寝の間に。それでしたら、次の機会になどと、どうしてあてにさせたのですか。〔全体の詠歌状況がよく分からないため、詳細な現代語訳が施せない。〕

【語句】〇われならぬ人　私以外の人。「我ならぬ人もおきふす所にはちりのみゐるといふぞあやしき」（小大君集・一二七）。〇ねにけり　共寝をしたのですね。「けり」は気づきの意の助動詞　〇くさまくら　旅寝の間に。旅に出ている間に。〇のちのため　次の機会。傍記により「後の度（たび）」で解したが、詠歌事情が分からないため明確な意がとれない。〇なにかとがめし　どうしてあてにさせたのでしょうか。傍記「頼（たのめし」で解したが詳細は不明。「なにか」は「どうして……か」。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。

【所載】ナシ

二四一四　しぐれふるあらきはまべにくれ〳〵ととをくやゆかん日ごろつもりて

【異同】ナシ

【現代語訳】時雨が降っている波風の荒い浜辺に、暗い気持ちでとぼとぼと、これからも遠くへ行くのだろうか。何日もの日数を重ねて。

【語句】〇しぐれ　時雨。晩秋から初冬にかけて降ったりやんだりする雨。〇あらきはまべ　波風の荒い浜辺。二四〇七番歌参照。〇くれ〳〵と　暗い気持ちで。悪天候や今後の旅の不安から暗い心でとぼとぼと歩く様子。「常知らぬ道のながてをくれくれといかにか行かむかりてはなしに」（万葉集・八九二〈旧八八八〉）。〇とをく遠（とほ）く。〇日ごろ　何日もかけてということ。

【所載】ナシ

二四一五　たまきはるいのちにむかふ（モカフル）わがせこをいかにせよとかたびにゆくらん

【異同】ナシ
【現代語訳】（たまきはる）命にも等しいあの人を、私にいったいどうせよということで、あの人は旅に出てしまうのでしょうか。
【語句】○たまきはる　「いのち」に掛かる枕詞。○いのちにむかふ　命に等しい。二〇〇二番歌参照。○わがせこを　あの人を。「わがせこ」は、女性が、夫や恋人兄弟などの男性を親しみをこめて呼ぶ語。そのため、「を」では意味が解しにくい。所載欄の綺語抄には、「わがせこは」とあり解しやすい。○いかにせよとか　どうせよということで……か。「思うよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことになる」（古今集・七二五）。
【所載】綺語抄・三九二／和歌童蒙抄・三三二／袖中抄・四〇七

二四一六　あめつちの神もたむけよくさまくらたびゆくきみがいへにいる（タ）まで

【異同】いへにいるまで―家にいたる迄（大）
【現代語訳】天の神、地の神も、道中の安全を祈って幣を手向けてください。旅行くあなた様が無事に家に入るまで。
【語句】○あめつちの神　天の神と地の神、あらゆる神。「いかにして恋ひやむものぞ天地の神を祈れど我や思ひ増す」（万葉集・三三一〇〈旧三三〇六〉）。○たむけよ　幣を手向けてください。「手向く」は、道中の安全を祈って、峠の神や神仏に幣を手向け、供え物をすること。ここは、私と同様に天地の神も道々の神に手向けをせよ、という意。ただし、所載欄の万葉集では「助けよ」となっており、この方が解しやすい。○くさまくら　「旅」の枕詞。
【所載】万葉集・五五二（旧五四九）　天地之　神毛助与　草枕　羈行君之　至家左右　アメツチノカミモタスケヨクサマクラタビユクキミガイヘニイタルマデ　あめつちのかみもたすけよくさまくらたびゆくきみがいへにいたるまで
【参考】所載欄の万葉集によれば、太宰少弐石川足人が遷任する際、筑前国蘆城の駅家で行われた餞別の宴で

詠まれた歌三首のうちの一首である。

〔以上五首担当　河本〕

二四一七　人もみなとをみちゆけどくさまくらこのたびばかりおしきたびなし

【異同】ナシ
【現代語訳】他の人も皆、遠い旅路を行くけれど、この度のあなたの旅くらい名残惜しい旅はない。
【語句】〇とをみち　遠(とほ)道。遠い行程の道。遠い旅路。「玉ぼこの遠道もこそ人は行けなどか今の間見ぬは恋しき」（貫之集・七五一）。「道」は「旅」の縁語。〇くさまくら　草枕。次の句の「旅」を導く枕詞。〇このたびばかり　この度のあなたの旅くらい。「この度」の「度」に「旅」を掛ける。「このたびは幣もとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに」（古今集・四二〇）。〇おしきたびなし　惜(を)しき旅なし。名残惜しい旅はない。
【所載】貫之集Ⅰ・七三一
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の貫之集Ⅰには「おなじ人の馬のはなむけ、おほきおとゞのしらかは殿にてせさたまふに、かはらけとりて」という詞書がある。これによると、陸奥守平惟扶(これすけ)のための餞別の宴を藤原忠平が白河殿で催した時に、貫之が杯を取って詠んだ歌。

二四一八　しもがれのくさまくらにはきみこふるなみだのつゆぞおちまさりける（キソハ）

【異同】ナシ
【現代語訳】霜枯れの草を旅寝の枕としていると、それに、あなたを恋しく思う涙の露がますますひどく落ちることだよ。
【語句】〇くさまくら　草枕。草を結んで作った枕。旅寝の枕。〇なみだのつゆぞおちまさりける　涙の露ぞ落ちまさりける。涙の露がますます落ちることだよ。「木の葉散る嵐の風の吹く頃は涙さへこそ落ちまさりけれ」（相模集・五五四）。所載欄の貫之集Ⅰでは、五句「をきまさりける」。涙を露にたとえ、「露」は「草」の縁語。
【所載】貫之集Ⅰ・四四五
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の貫之集Ⅰによると、天慶二(九三九)年、宰相中将藤原敦忠の為の

屏風歌で、当該歌は「野やどりせる旅人」の気持ちを詠んだもの。

二四一九　よもすがらをくはつしもをはらひつゝくさのまくらにあまたゝびねぬ

【異同】ナシ
【現代語訳】夜通し、置く早霜を繰り返し払いのけては、旅の道中の草の枕に幾たびも寝たことだ。
【語句】〇よもすがら　夜もすがら。夜通し。一晩中。所載欄の文献では「夜を寒み」。〇はつしも　初霜。その年に初めて置いた霜とは限らず、当該歌では、その年の晩秋から初冬にかけての早い時期に置く早霜のこと。「霰（ハツシモ）　説文云霰早霜也……和名八豆之毛」（和名抄）。〇くさのまくら　草の枕。二四一八番歌の「草枕」と同じく、草を結んで作った枕。旅寝の枕。
【所載】古今集・羇旅・四一六／新撰和歌・一九六／躬恒集Ⅰ・二三〇、二八六／躬恒集Ⅱ・一六〇／躬恒集Ⅲ・三一〇／躬恒集Ⅴ・一一二
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の古今集・躬恒集によると、作者は躬恒で甲斐国へ行った時に道中で詠んだ歌。

二四二〇　まだかゝるたびしなければくさまくらつゆけからんとおもはざりしを

【異同】つゆけからんと―露けかるらんと(大)
【現代語訳】まだこのような旅はしたことがなかったので、旅の枕がこんなに涙の露に濡れるものであろうとは思わなかったものを。（今度の旅では、ひどく涙で濡れてしまいましたよ。）
【語句】〇まだかゝるたびしなければ　まだこのような旅はしたことがなかったので。「かゝる」は、「かくある」の意と露が掛かる意の掛詞。「掛かる」は「露」の縁語。「し」は強意の副助詞。〇くさまくら　草枕。二四一八番歌と同じく、草を結んで作った枕。旅寝の枕。「草」は「露」の縁語。〇つゆけからんと　露けからむと。こんなに涙の露に濡れるものであろうとは。「露」は、涙の比喩。
【所載】玉葉集・旅・一一七七／伊勢集Ⅰ・三四二／伊勢集Ⅱ・三四四
【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の伊勢集Ⅱ・玉葉集によると、ある所へ行っていた人が帰ってきてから伊勢に贈った歌。伊勢集Ⅰによると、伊勢が人に贈った歌。

二四二一　くさまくらたびゆくそこの山のうへ（ラ）にしらくもならぬ身もやどりけり（いせ）

【異同】ナシ
【現代語訳】旅をして行く道中のそこにある山の上に、白雲でもない我が身も宿るのだった。
【語句】〇くさまくら　草枕。「旅」を導く枕詞。〇たびゆくそこの山のうへに　旅行くそこの山の上に。旅をして行く道中の其処にある山の上に。所載欄の文献とは本文が異なり、伊勢集Ⅰでは「たびとなりなば山のべに」とある。古今六帖の本文によって訳した。〇しらくもならぬ身もやどりけり　白雲ではない我が身も宿るのだった。山の上に宿るのは白雲だが、白雲でもない我が身も山の上に宿るのだったという感慨。「白雲の絶えずたなびく峰にだに住めば住みぬる世にこそありけれ」（古今集・九四五）。
【所載】後撰集・羇旅・一三五八／伊勢集Ⅰ・一三三／伊勢集Ⅱ・一三三／伊勢集Ⅲ・一三一
【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰは、一三二番歌の詞書に「山と（大和）に昔おやありける人の、おや亡くなりて初瀬に参るとて」とあり、一三三番歌は「山みねにて／草枕旅ゆく道の山辺にも白雲ならぬ身も宿りけり」となっている。

〔以上五首担当　長戸〕

二四二二　いはのうへにたびねをすればいとさむしこけのみころもしばしかさねよ（コロモヲワレニカサナム）（こまち）（ころもをわれにかさなん）

【異同】しはしかさねよ―しはし重ねに（大）　底本ハ右傍ニ片仮名ノ注記ガアリ、左ニモ注記ヲ書ク。左ノ注記ハ文字ヲ本行ノ大キサデ書ク。御所本ハ全ク同ジ。
【現代語訳】お籠りで石の上に寝るので、寒くてなりません。お坊様でいらっしゃるあなたの衣を、しばし私の衣に重ねて下さいませ。
【語句】〇いはのうへに　野外の野宿であれば岩の上。所載欄の文献の大和物語には石上寺（いそのかみでら）に参籠した折とする。とすれば、寺の名前を詠み込んだともいえる。〇こけのみころも　苔の御衣。「苔ころも」

は一面に苔の生えた状態を衣にたとえた語。また僧侶・隠者の衣をいう。〇しばしかさねよ　しばらくの間（衣を）重ねて下さい。衣を重ねるとは共寝する意。
【所載】後撰集・雑三・一一九五／新撰朗詠集・五五一／小町集Ⅰ・三四／小町集Ⅱ・五四／遍照集Ⅰ・一七／遍照集Ⅱ・一七／大和物語一六九段・二八二
【参考】作者名「こまち」は所載欄の文献に一致する。

二四二三　あしたつのふぢえのうらにあさりするあまとか見らんたびゆくまろを（ラ）（イ）（ワレ）

【異同】あまとか見らん―あまとか見えん（御・桂）、海人と見えん（大）
【現代語訳】［初句は誤写とみて第二句から訳す］藤江の浦に魚や貝を採る海人と、人は見るだろうか、旅行く私を。
【語句】〇あしたつの　所載欄の万葉集では「あらたへの」であったと推定される。藤を導く枕詞として「荒栲（あらたへ）の」の誤写と考える。〇たびゆくまろを　旅行く私を。「まろ」は自分を指す言葉。「あやふしとみゆる途絶えのまろはしのまろなどかかるもの思ふらん」（後拾遺集・七八九）。
【参考】所載欄の既出歌は、初句「あらいその」、三句「すゞきつる」、五句「たびゆくわれを」。
【所載】古今六帖・第三帖「すずき」一五二〇番既出

二四二四　まくらとてくさむすびてしこともおし秋のよとだにたのまれなくに（コ）（アタノコ）

【異同】くさむすひてし―草引結ひ（大）　こともおし―てしことも（大）
【現代語訳】草を結んで枕として旅寝したことも惜しい今夜です。長い秋の夜とさえ頼みにできないのに。
【語句】〇まくらとてくさむすびてし　枕とて草結びてし。昔、旅寝するときに草を結んで枕とした。〇こともおし　こともをし。ことも惜し。所載欄の文献では「こともせじ」。〇秋のよとだに　長い秋の夜とさえ。〇たのまれなくに　たのみにすることが出来ないのに。
【所載】古今六帖・第五帖「まくら」三二三四／新勅撰集・羇旅・五三八／業平集Ⅰ・三一／業平集Ⅱ・五六／伊勢物語八三段・一五一
【参考】所載欄の文献によれば、気に入りの業平を、惟喬親王が家に返さない場面で、業平が詠んだことが知

られる。そのような事情と考えて訳した。

二四二五　はをおし(ツカ)みくさのまくらはせばくともおもはんどちのたびはへぬべし

【異同】ナシ
【現代語訳】葉をたっぷり使うのではなく少しにしたから、草枕は狭くて寝にくいでしょうが、たとえ狭くても心を許した友達同士の旅はこれでなんとか行けるでしょう。
【語句】〇はをおしみ　葉を惜しみ。〇せばくとも　狭くとも。袖・袂・莚などに「せばくとも」と使うが、ここは枕についていう。「いとけなき衣の袖はせばくともこふの上をばなでつくしてん」（後拾遺集・四三四）。〇おもはんどちの　思いあう者同士の。〇たびはへぬべし　旅は経ぬべし。旅の間は過ごすことができるだろう。
【所載】ナシ

二四二六　人(ひま)もなきたひ(こ)にやならん(ア)くさまくらたびなるきみがゆめに見えつる

【異同】ナシ
【現代語訳】［初句と第二句に誤写があるらしく意味不明。所載欄の万葉集の「ヒマモナクコフルニカアラム」（西本願寺本訓読）によって訳した。］ひっきりなしに家を恋しく思っておいでなのでしょう、旅に出たあなたがしきりに私の夢にあらわれます。
【語句】〇人もなきたひにやならん　意不通。「ひまもなくこふるにかあらむ」によって解釈する。「ひまもなく」は絶え間なく、の意。ひっきりなしに家のことを恋しく思っていらっしゃるからか。〇くさまくら　「旅」を導く枕詞。〇たびなるきみ　家を離れ旅をするあなた。〇ゆめに見えつる　夢に見えた。人を思うと其の人の夢に現れる。自分の夢に夫が現れるのは、ずっと自分を恋しく思っているからなのだ。
【所載】万葉集・六二四（旧六二一）無間　恋尓可有牟　草枕　客有公之　夢尓之所見　ヒマモナクコフルニカアラムクサマクラタビナルキミガユメニシミユル　あひだなくこふれにかあらむくさまくらたびなるきみがいめにしみゆる

〔以上五首担当　平野〕

二四二七　きのふきてこよひばかりをたびごろもいくかをへぬとそでひちつ（ヌ）らん

【異同】ナシ
【現代語訳】昨日やって来て今宵を過ごしただけの旅に着た衣、（そんな短い旅なのに）どうして何日もたったかのように袖が濡れてしまうのだろう。
【語句】○きのふきて　昨日着て。「着て」に「来て」を掛ける。○たびごろも　旅行中に着る衣服。○いくかをへぬとそでひちつらん　どうして何日も過ごしてしまったかのように袖が濡れてしまうのだろう。「と」は比喩の格助詞、「ひつ」は「濡れる」の意の自動詞。「らむ」は、現在の事実について疑問をもって推量する。「春霞何隠すらむ桜花散る間をだにも見るべきものを」（古今集・七九）。一晩程度の短い旅であるにもかかわらず、何日も過ぎてしまったかのようにつらく感じ、袖が濡れてしまったという意。「き（着）」、「そで（袖）」は「衣」の縁語。
【所載】ナシ

二四二八　むめのはなちらすはるさめ（カゼ）おほくふるたびなるきみはいほりせ（ヲサ）るらん

【異同】いほりせ（ヲサ）るらん―いほりさせるらん（大）
【現代語訳】梅の花を散らす春雨がひどく降っている。旅にあるあなたは、今頃粗末な仮屋を造って泊まっているのでしょうか。
【語句】○おほくふる　多く降る。雨がおびただしく降っている様子をいう。所載欄の万葉集の本文「多零」をそのまま訓読した形。○いほりせるらん　今頃は粗末な小屋を造って旅寝しているのだろうか。「いほりす」は、「いほり（庵）」にサ変動詞「す」がついて動詞化した語。語構成はサ変動詞の未然形「いほりせ」＋存続の助動詞「り」の連体形「る」＋現在推量の助動詞「らん」。粗末な仮小屋を造って宿る意。どしゃぶりの雨の中で、十分雨避けもないような仮屋に泊まっているであろう夫のことを気遣う。
【所載】万葉集・一九二二（旧一九一八）梅花　令散春雨　多零　客尓也君之　廬入西留良武　ウメノハナチラスハルサメサハニフルタビニヤキミガイホリセルラム　うめのはなちらすはるさめいたくふるたびにやきみがいほりせるらむ／赤人集Ⅰ・二〇一／赤人集Ⅱ・八二／赤人集Ⅲ・八九

二四二九　秋風のふきぬとおもへばいでゝこしいゑぢのかたぞこひしかりける

【異同】ナシ
【現代語訳】秋風が吹くようになったと思うと、出立してきた我が家へ向かう路の方角が、恋しく思われることだ。
【語句】○秋風のふきぬ　秋風が吹くようになった。「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形。○いゑぢのかたぞ　家路（いへぢ）の方ぞ。わが家へ向かう路の方角こそ。「家路」はわが家へ帰る路。
【所載】躬恒集Ⅳ・一五三

かなしび（ミ）

二四三〇　あすかゞはをときこえつゝゆくみづのやむときもなくおもほゆるかな（ミナ）
ミナアハキエツヽイ

【異同】やむときもなく―やむもなく（大）
【現代語訳】飛鳥川が音を響かせながら流れてゆく水の止む時もなく、絶え間なく思われてならないことだ。
【語句】◎かなしび　悲しみ。また悲しい気持ち。動詞「かなしぶ（上代は上二段活用、平安時代は四段活用）の連用形が名詞化したもので、平安時代に「かなしみ」に転じた。万葉仮名に「可奈之備麻世婆（カナシビマセバ）」（四四三二〈旧四四〇八〉）、また「父母見已りて憂悲（カナシビ）を抱きて、倶に山林の捨身の処に往でましき」（西大寺本金光明最勝王経平安初期点）という古訓の例がある。死別の悲しみをいう題であるが、万葉集の挽歌、勅撰集の哀傷とは異なる命名であることが注目される。○あすかゞは　飛鳥川。奈良県高市郡の高取山に源を発し、明日香地方の中央部を流れ、大和川に注ぐ。流れが変わりやすく、淵瀬の定まらぬ川として無常の喩えとなるのは平安時代からで、当該歌では、ゆく水が止む時がない比喩として用いられている。○をときこえつゝゆくみづの　音が聞こえ続けながら流れる水の。「をときこえつゝ」は他に例のない表現。所載欄の日本書紀に「みなぎらひつつ（水が満ち溢れさせながら）」とあるのが本来の形であろう。上句は「やむときもなく」にかかる序。
【所載】日本書紀・一一八　阿須箇我播　瀰儞蟻羅毘都都　喩矩瀰都能　阿比娜謨儞倶母　於母保喩屡柯母　あすかがはみなぎらひつつゆくみづのあひだもなくもおもほゆるかも
【参考】日本書紀によれば、皇孫建王（中大兄皇子と遠智娘子の間の子）が八歳で薨じ、今城谷に殯を起てて

納めた時、斉明天皇が深く哀傷慟哭された時に歌ったとある。

二四三一　うつせみのよはつねなしとしるものを秋風さむくなりにけるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】この世は定めなく無常なものとわかっているものの、秋風が寒々と身にしみるようになったことよ。
【語句】○うつせみの　「うつせみの」は「世」にかかる枕詞。○よはつねなしとしるものを　この世は無常であると知っているけれど。世は無常だという仏教思想に拠る。「ものを」は逆接の確定条件を表す接続助詞。○秋風さむくなりにけるかな　秋風が寒くなってきたことだなあ。所載欄の万葉集には「秋風寒み偲びつるかも」とあり、上句からの繋がりが理解しやすいが(参考欄参照)、当該歌では、世が無常だと知っているという上句と、秋風が寒く吹くようになったという下句との意味上の連関は必ずしも明らかではない。
【所載】玉葉集・雑四・二四二四／万葉集・四六八（旧四六五）虚蝉之　代者無常跡　知物乎　秋風寒　思努妣都流可聞　ウツセミノヨハツネナシトシルモノヲアキカゼサムミシノヒツルカモ　うつせみのよはつねなしとしるものをあきかぜさむみしのひつるかも／綺語抄・一〇三
【参考】万葉集では、大伴家持が亡妾を悲傷して作った十三首の歌群のなかの一首。七月朔日に入り、秋風が吹きはじめたことを悲嘆して作る歌という詞書がある。

〔以上五首担当　中野〕

二四三二　いもとゐてふたりつくりしわがやどのこだかくしげくなりにけるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】かつて、いとしい妻といっしょにいて、二人して作った我が家は、(妻が亡くなったいま)すっかり木々が高くなり、繁り深くなっていることだなあ。
【語句】○いも　男性が親しい女性をさして言う語。ここでは、生活を共にしてきた妻のことである。○ふたりつくりし　二人して力を合わせて作った。○こだかくしげくなりにけるかな　木が丈高くなり、繁り合ったさまになっていることだなあ。
【所載】万葉集・四五五（旧四五二）与妹為而　二作之　吾山斎者　木高繁　成家留鴨　イモトシテフタリツク

リシワガヤマハコダカクシゲクナリニケルカモ　いもとしてふたりつくりしわがしまはこだかくしげくなりにけるかも

【参考】所載欄の万葉集によれば、天平二年（七三〇）大宰帥の任を終えて帰京した大伴旅人が、わが家に帰着したときに詠んだ三首の中の一首。旅人は大宰府在任中に妻を喪っている。

二四三三　いまよりはあきかぜさむくふきなゝんいかでか人もながきよをねん（ケフイ／ナリ／ナンヲ／ヒトリ）

【異同】ナシ

【現代語訳】これからは、秋風が寒く吹いてほしい。どうしてひとりで（もう妻のいない）この長い夜を寝られようか、寝られはしない。

【語句】〇ふきなゝん　吹きななん。吹いてほしい。「ふき」は動詞「吹く」の連用形、「な」は助動詞「ぬ」の未然形、「ゝ（な）ん」は他へ誂え望む意の助詞。ただし、「吹きななん」では、歌意の上で下句と整合しない。所載欄の万葉集では第三句「吹きなむを」であって、その方が本来の形であったろう。〇いかでか人も　「人も」では意が通じにくい。傍記「ヒトリ」に拠って解す。どうしてひとりで。「か」は反語。〇ながきよをねん　長き夜を寝む。長い夜を寝られようか、寝られない。

【所載】新古今集・秋下・四五七／万葉集・四六五（旧四六二）従今者　秋風寒　将吹焉　如何独　長夜乎将宿

イマヨリハアキカゼサムクフキナムヲイカデカヒトリナガキヨヲネム　いまよりはあきかぜさむくふきなむをいかにかひとりながきよをねむ／夫木抄・五五三二／家持集Ⅰ・一四八／家持集Ⅱ・一八一

【参考】万葉集巻三挽歌には、天平十一年（七三九）夏六月に、大伴家持が亡き妻を追慕して詠んだ歌群があり、当該歌はその歌群中最初の歌である。二四三六番歌参照。

二四三四　さほやまにたなびくかすみ見るたびにいもをおもひてなかぬひはなし（ゴト）

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山にかかってたなびいている霞を見るたびに、亡くなった妻のことを思って、泣かぬ日はない。

【語句】〇さほやま　佐保山。佐保の地にある山。現在の奈良市、平城宮址北方にあって東西に長く連なる丘陵。〇いもをおもひて　「いも」は二四三二番歌参照。妻のことを思って。所載欄の万葉集では「妹乎思出」であり

「いもをおもひいで」と訓じているが、ここでは底本本文の「いもをおもひて」のままで解しておく。
【所載】万葉集・四七六（旧四七三）佐保山尓　多奈引霞　毎見　妹乎思出　不泣日者無　サホヤマニタナビクカスミミルゴトニイモヲオモヒイデテナカヌヒハナシ　さほやまにたなびくかすみみるごとにいもをおもひいでなかぬひはなし／家持集Ⅰ・六三／家持集Ⅱ・一八六
【参考】所載欄の万葉集によれば、前歌（二四三三番歌）と同歌群の中にある家持の亡妻追慕の歌である。

二四三五　きのふこそいもはありしかおもはずにはまゝつのはにくものたなびく

【異同】はまゝつのはに―濱松の枝に（大）
【現代語訳】きのうこそ妻はこの世にいたのだ。それが思いもよらぬことに亡くなって、浜松の枝にはかなく雲がたなびいている。
【語句】〇いも　二四三二番歌参照。なお、傍記には「キミ」とある。所載欄の万葉集の原歌で見れば、ここは「いも」であるよりも「キミ」であった方が、詠まれた時の状況には適合するが、ここでは底本本文のままで解しておく。参考欄参照。〇おもはずに　思いもかけなかったことに。〇はまゝつのはに　浜松の葉に。「浜松」は浜辺の松のこと。ただしここは、傍記に拠り「浜松の枝（え）に」として解した。〇くものたなびく　雲がたなびいている。あの雲が亡き人のおもかげなのだ、という心情がこもっている。
【所載】万葉集・四四七（旧四四四）昨日社　公者在然　不思尓　浜松之於　雲棚引　キノフコソキミハアリシカオモハズニハマツノウヘニクモトタナビク　きのふこそきみはありしかおもはぬにはまつのうへにくもにたなびく／家持集Ⅱ・一九一
【参考】所載欄の万葉集によれば、天平元年（七二九）に摂津国の史生丈部竜麿が自経死したとき、上司であった判官大伴三中が、挽歌として長歌と反歌二首を詠んだ。その反歌の二首目の歌がこれである。従って、万葉集では第二句は「君はありしか」と詠まれている。

二四三六　ながきよにひとりやねんといもがいへばすぎにし人のおもほゆるかな

【異同】ながきよに―長き夜を（大）
【現代語訳】この長い夜にひとり寝をするのかと妻が言うので、亡くなった人のことが思われることだ。

【語句】〇ながきよにひとりやねん　長き夜にひとりや寝む。この長い夜にひとり寝をするのか。共寝する相手がいないことを嘆いたことば。〇いもがいへば　「いも」は二四三二番歌参照。妻が言えば。所載欄の万葉集では「君が言へば」となっており、その方が詠まれた時の状況にはよく適合する。参考欄参照。
【所載】万葉集・四六六（旧四六三）長夜乎　独哉将宿跡　君之云者　過去人之　所念久尓　ナガキヨヲヒトリヤネムトキミガイヘバスギニシヒトノオモホユラクニ　ながきよをひとりやねむときみがいへばすぎにしひとのおもほゆらくに／夫木抄・五五三一
【参考】所載欄の万葉集によれば、古今六帖二四三三番歌と対をなす贈答歌である。すなわち、妻を喪った大伴家持が二四三三番歌を読んで悲傷したとき、弟の大伴書持がこの歌を詠んで兄の悲しみに和したもの。従って、古今六帖の第三句「妹が言へば」では状況に適合せず、万葉集の「君が言へば」の方が、本来の形である
〔以上五首担当　山下〕

二四三七　いつしかとまつらんいもにたまほづさのことだにつてゞいにしきみかも

【異同】ナシ
【現代語訳】いつかいつかと今も帰りを待ち望んでいるであろう最愛の人に、あなたは言伝てのひとつも言わずにあの世に逝ってしまったのですね。
【語句】〇いつしかと　いつか、早くと。待ち望む気持ちを表す。〇まつらんいもに　待っているであろういとしい人に。「らん」は現在推量の助動詞、連体形。〇たまづさの　通常は「使ひ」を導く枕詞。ここは「こと（言）」を導く。〇ことだにつてゞ　言葉さえも伝えないで。「だに」は、せめて言伝てでもすればいいのに、という気持ち。「つてゞ」は「伝てで」で、下二段活用の動詞「伝（つ）つ」の未然形＋打消の接続助詞「で」。〇いにしきみかも　往にし君かも。往ってしまったあなたですね。
【所載】万葉集・四四八（旧四四五）何時然跡　待牟妹尓　玉梓乃　事太尓不告　徃公鴨　イツシカトマツラムイモニタマヅサノコトダニツゲズイヌルキミカモ　いつしかとまつらむいもにたまづさのことだにつげずいにしきみかも
【参考】当該歌は、万葉集によれば二四三五番歌と同じ折の詠。すなわち、天平元（七二九）年、丈部（はせつかべ）竜麿という人物が自死した際、大伴宿祢三中が詠んだ三首の挽歌（長歌一首と反歌二首）のうちの一首である。

二四三八　マガコトノアラサカシトカクラクノトマセノカマニイホリストイフ

【異同】アラサカシト―アラサカシトヤ（御）、あらさかしとか（桂）、あをさかしとや（大）　トマセノカマニ―とませの山に（大）　イホリストイフ―庵さすといふ（大）　底本ナラビニ御所本ハ片仮名ニテ末尾ニ小字補入。

【現代語訳】不吉な、人を惑わすそら言なのか。泊瀬の山の庵りに（あの人は）籠もっているという。

【語句】○マガコトノ　「マガコト」は、禍言。悪い言葉、不吉な言葉、の意。○アラサカシト　意味不明。所載欄の万葉集には「逆言哉」とあり、「サカサマゴトカ」、あるいは「およづれことか」と訓じ、信じられない、人を惑わすそら言、の意に解する。現代語訳も一応万葉集本文によった。○カクラクノトマセノカマニ　同じく万葉集には「隠口乃泊瀬山尓」とあり、「カクラクノトマセ」ではなく、「コモリクノハツセ」と訓じている。「コモリクノ」は「泊瀬」の枕詞。「泊瀬」は大和国の歌枕。なお「カマニ」は「ヤマ（山）に」の誤写であろう。八六一番歌参照。○イホリストイフ　庵りすといふ。「かなしび」歌群に属し、万葉集でも挽歌群中の歌なので墓に入っていることを言っているのであろう。主語は明らかではないが、万葉集では直前の一四一一（旧一四〇七）番歌に「こもりくの泊瀬の山に霞立ちたなびく雲は妹かもあらむ」とあり、内容的にもそれにつづくと思われるので、「妹」すなわち妻か恋人かであろう。

【所載】万葉集・一四一二（旧一四〇八）狂語香　逆言哉　隠口乃　泊瀬山尓　廬為云　マガコトカサカサマゴトカコモリクノハツセノヤマニイホリストイフ　たはことかおよづれことかこもりくのはつせのやまにいほりせりといふ／夫木抄・一四三六一

二四三九　あきされば見つゝ思といもがいひしまへのなでしこさきにけるかも

【異同】ナシ

【現代語訳】秋になると、花を見つつ私を思って欲しいと妻が言った、その、庭先のなでしこの花が咲いたことだなあ。

【語句】○あきされば　秋になると。「去る」は、移り動く意。行く意にも来る意にも、あるいは色があせる意などにも用いられる。ここは来る意。「冬こもり春去り来れば鳴かずありし鳥も来鳴きぬ咲かずありし花も咲け

れど……」（万葉集・一六）。〇見つゝ思と　通常の書写様式からすれば、たとえば「思」のように漢字で記された動詞に送り仮名が付されず、格助詞の「と」が受けた場合、「思ふ」と終止形で詠みたいところだが、歌の内容からすればここは「思へ」と命令形で読むべきか。思って欲しい、の意であろう。〇まへのなでしこ　所載欄に示した万葉集によれば「屋前乃石竹」とあり、「やどのなでしこ」と訓じている。

【所載】万葉集・四六七（旧四六四）秋去者　見乍思跡　妹之殖之　屋前乃石竹　開家流香聞　アキサラバミツツオモヘトイモガウヱシヤドノナデシコサキニケルカモ　あきさらばみつつしのへといもがうゑしやどのなでしこさきにけるかも

【参考】作者名は記されていないが、万葉集によれば、天平十一（七三九）年六月、大伴家持が亡き妻を悲しみ、なでしこの花を見て詠んだ歌。

二四四〇　さゝらなみおほ山もりはたがためか山にしめゆふ（或本ウツ）きみもあらなくに

【異同】たかためか―たか為に（大）

【現代語訳】ささなみの大山守りは、いったい誰のために山にしめ縄を張り巡らすのか。もう大君もこの世にはいらっしゃらないのに。

【語句】〇さゝらなみ　さざ波。小さな波。「ささら波寄する汀にすむ鶴は君が経む世のしるべなりけり」（古今六帖・いはひ・二二九六）。ただし所載欄の万葉集には「神楽浪乃」とあり、「ささなみの」と訓じて琵琶湖西南岸地方の地名、あるいは近江国の古名とする。「山守り」をうたった歌なので「さゝらなみ」よりは地名のほうが納得しやすいか。現代語訳は万葉集本文によった。〇おほ山もり　「山守り」は山の番人。「大山守り」は天皇の領有地である山の番人。〇しめゆふ　「しめ」は動詞「し（占）む」の名詞形で、特定の領有地や立ち入り禁止区域などを示す標識。「しめゆふ」はそれを作り、張りめぐらすこと。〇きみもあらなくに　君もいないことなのに。「君」は万葉集の記述から「天智天皇」と判断される。「あらなく」は「あらず」のク語法。

【所載】万葉集・一五四　神楽浪乃　大山守者　為誰　山尓標結　君毛不有国　ササナミノオホヤマモリハタガタメカヤマニシメユフキミモマサナクニ　ささなみのおほやまもりはたがためかやまにしめゆふきみもあらなくに／夫木抄・八七九五／和歌童蒙抄・一八二／袖中抄・四七七

二四四一　しほけたちあらいそにあれどゆく水のすぎにしいもがゝたみとぞ見る（オモフイ）

【異同】あらいそにあれと―あらいそにあれとこ（御）
【現代語訳】潮の香が立ちこめ、荒磯ではあるが、流れて行く水のようにこの世を去ってしまった妻の形見として、私はこの地を見ることだ。
【語句】○しほけたち　潮気立ち。潮の気配がすること。潮の香が立ちこめること。○あらいそ　波の荒い海辺。あるいは荒涼とした海岸。○ゆく水の　「過ぐ」を導く。
【所載】万葉集・一八〇一（旧一七九七）塩気立　荒礒丹者雖在　徃水之　過去妹之　方見等曽来　シホケタツアラソニハアレドユクミヅノスギユクイモガカタミトゾクル　しほけたつありそにはあれどゆくみづのすぎにしいもがかたみとぞこし
【参考】当該歌は、万葉集に「右の五首は、柿本朝臣人麻呂が歌集に出づ」として載る挽歌群中の一首である。
〔以上五首担当　久保木〕

二四四二　こもまくらあひまきしらん（こも）あらばこそ（キミ）よのふく○しもわがをしみせめ（ラ）

【異同】ナシ
【現代語訳】［第二句は傍記や所載欄の「あひまきしこも」に拠った］薦枕をともにして寝た妻も生きているのであったならばこそ、夜が更けていくのも、私は惜しく思うのであろうけれど（もう亡くなっているのであるから）。
【語句】○こもまくら　まこも草で作った枕。○あひまきしらん　「らん」では意味が通じないので、傍記や所載欄の「こも」で解す。（薦）枕を一緒にして寝たあの娘（こ）も。「あひまく」は、「あひ」は接頭語、「まく」は枕にして寝る意の動詞。「道の後（しり）古波陀嬢子（こはだをとめ）を雷（かみ）のごと聞こえしかども相枕まく」（古事記・四五）。「あひまきし」の「し」は、過去の助動詞「き」の連体形。○あらばこそ　もし（生きて）いるのだったなら。「ばこそ」は、接続助詞「ば」に係助詞「こそ」が付いて、仮定の条件を強調する。所載欄の万葉集は「挽歌」中の歌。○よのふくらしも　夜の更くらしも。夜が更けてゆくらしいのも。○わがをしみせめ　我が惜しみせめ。「をしみせ」は「惜しみす」の未然形。「め」は推量の助動詞「む」の已然形で、「こそ」の係り結びで、ここは逆接の意。私は惜しく思うのであろうけれど、妻は亡くなっているので夜が長く感じられる、ということ。

【所載】万葉集・一四一八（旧一四一四）　鷰枕　相巻之児毛　在者社　夜乃深良久毛　吾惜責　コモマクラアヒマキシコモアラバコソヨノフクラクモワガヲシミセメ　こもまくらあひまきしこもあらばこそよのふくらくもわがをしみせめ／綺語抄・五五二

二四四三　あかねさす日はてりながらむばたまのよわたる月のかくらくもなし

【異同】かくらくもなし―かへらくもなし（大）

【現代語訳】［結句を傍記「かくらくをしも」に拠った］日は照っているものの、夜空をわたる月が隠れることは惜しいなあ。

【語句】○あかねさす　茜さす。ここは、「日」にかかる枕詞。○ひはてりながら　日は照っているけれど。接続助詞「ながら」は逆接の意、……ものの。○むばたまの　「ぬばたまの」の変化したかたち。「ぬばたま」が黒いところから、ここは、「よ（夜）」にかかる枕詞。「あかねさす昼はものもひぬばたまの夜はすがらに音（ね）のみし泣かゆ」（万葉集・三七五四・〈旧三七三二〉）。○よわたる月　夜空を渡る月。○かくらくもなし　「かくらく」は、四段動詞「隠る」のク語法。隠れること「もなし」では「かなしび」題にそぐわないので、傍記や所載欄の万葉集「をしも」を生かした。隠れるのが惜しいなあ。「旅にあれば夜中をさして照る月の高嶋山にかくらくをしも」（万葉集・一六九五〈旧一六九一〉）。なお、所載欄の万葉集によれば、「月のかくらく」は、日並皇子の死の比喩。

【所載】万葉集・一六九　茜刺　日者雖照有　烏玉之　夜渡月之　隠良久惜毛　アカネサスヒハテラセレドヌバタマノヨワタルツキノカクラクヲシモ　あかねさすひはてらせれどぬばたまのよわたるつきのかくらくをしも／人麿集Ⅰ・四一／和歌童蒙抄・六／柿本人麻呂勘文・七

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集によれば、「日並皇子尊の殯宮（あらきのみや）の時」に柿本人麻呂が作った長歌の、反歌二首のうちの一首。

二四四四　こぞ見てし秋の月よはてらせどもあひ見しいもはいやとをざかる

【異同】ナシ

【現代語訳】昨年に妻と見た秋の月は今も照らしているが、ともに月を見た妻はますます遠く離れていくことだ。

【語句】○こぞみてし　去年見てし。昨年は見た。「てし」の語構成は、完了の助動詞「つ」の連用形「て」＋過去の助動詞「き」の連体形「し」。「(複合時制の)テキ形は過去の時点における完成相」を表す(小田勝『古典文法綜覧』和泉書院、二〇一五年)。○いやとをざかる　いや遠(とほ)ざかる。ますます遠くなっていく。
【所載】拾遺集・哀傷・一二八七／万葉集・二一一　去年見而之　秋乃月夜者　雖照　相見之妹者　弥年放　コゾミテシアキノツキヨハテラセドモアヒミシイモハイヤトシサカル　こぞみてしあきのつくよはてらせどもあひみしいもはいやとしさかる／万葉集・二一四　去年見而之　秋月夜者　雖度　相見之妹者　益年離　コゾミテシアキノツキヨハワタレドモアヒミシイモハイヤトシサカル　こぞみてしあきのつくよはわたれどもあひみしいもはいやとしさかる／人麿集Ⅰ・五〇／人麿集Ⅱ・二六三／家持集Ⅰ・一五〇／家持集Ⅱ・一八三／和歌一字抄・一〇四八／三十人撰・九／袋草紙・七〇一
【参考】作者名はないが、所載欄の拾遺集や万葉集では柿本人麻呂の作。

二四四五　なにはがたしほのありそにしづみにしいもがすがたを見るよしもがな
（コ　シノビミシイ　マククルラム　ミネバコヒシモイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】難波潟の潮が寄せる荒磯に沈んでしまったあの娘の姿を、見る手だてがほしい。
【語句】○なにはがた　難波潟。大阪湾で旧淀川河口付近の海をさす。○しほのありそにしづみにしいも　潮の荒磯に沈みにし妹。「ありそ(荒磯)」は「あらいそ」の縮約したかたち。岩石のある海岸。「潮のありそ」と続く他例はないが、海水が寄せたり引いたりする荒磯に沈んでしまったあの娘、と解す。○見るよしもがな　「よし」は、手段、方法。沈んでしまったが、その姿を見る手立てが欲しい。
【所載】万葉集・二二九　難波方　塩干勿有曽祢　沈之　妹之光儀乎　見巻苦流思母　ナニハガタシホヒナアリソネシヅミニシイモガスガタヲミマククルシモ　なにはがたしほひなありそねしづみにしいもがすがたをみまくくるしも
【参考】所載欄の万葉集の歌には、「和銅四年歳次辛亥、河辺宮人の、姫嶋の松原に嬢子(をとめ)の屍(かばね)を見て、悲嘆して作りし歌二首」と詳しい題詞があり、歌は、引き潮になって女性の屍が現れてしまったのを悲しんで、潮が引いてくれるなと詠んだもので、当該歌とだいぶ異っている。

人丸

二四四六　おきつなみよるあらいそをしきたへのまくらにまきてふせるいもかな（きみはも／キミカモ）

【異同】ナシ
【現代語訳】沖の波がうち寄せる海辺の岩を枕にして、死に横たわっているいとしい人よ。
【語句】○おきつなみ　沖に立つ波。○あらいそ　荒磯。「ありそ」とも。二四四五番歌参照。○しきたへの「枕」にかかる枕詞。○まくらにまきて　（荒磯を）枕にして。所載欄の万葉集は「枕とまきて」。「まく」は、二四四二番歌参照。「家人の待つらむものをつれもなき荒磯をまきて臥せる君かも」（万葉集・三三五五〈旧三三四一〉）。○ふせる　臥せる。「る」は完了・存続の助動詞「り」の連体形。（亡くなって）横たわっている。○いもかな　「妹」は男性が妻や恋人を親しんでいう語。
【所載】拾遺集・哀傷・一三一六／万葉集・二二二　奥波　来依荒礒乎　色妙乃　枕等巻而　奈世流君香聞　オキツナミキヨルアライソヲシキタヘノマクラトマキテナセルキミカモ　おきつなみきよるありそをしきたへのまくらとまきてなせるきみかも／人丸集（新編国歌大観）・六一
【参考】作者名「人丸」は、所載欄の文献に一致する。万葉集題詞によれば、「讃岐の狭岑嶋（さみねのしま）に、石の中に死人（しにひと）を視（み）て」、柿本人麻呂が作った長歌・反歌二首のうちの一首。

〔以上五首担当　加藤〕

二四四七　かみ山のいはねしまけるわれをかもしらずていもがまちつゝをらん（タネヲ）

【異同】ナシ
【現代語訳】神が鎮座する山の大きな岩を枕にして臥している私のことを、そうであるとも知らずに愛しい妻が待っているだろうか。
【語句】○かみ山　神山。ここでは、神が鎮座する山、神社の境域の山を指す語として解した。上賀茂神社の後方の山を指す例もあり、夫木抄では「山城、近江又備中、丹波」とするが、場所の特定は難しい。なお、所載欄の万葉集では石見国の「鴨山」、拾遺集一三一二番歌では「いも山」。○いはねしまける　岩根を枕にして臥している。「いはね」はどっしりとした大きな岩。「まける」は枕にする意の四段活用動詞「まく」に存続の助動詞「り」の連体形がついたもの。「かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを」（万葉集・八六）。○われをかも　私を……であるか。「かも」は、疑問の係助詞「か」に強意の係助詞「も」がついた形で、いず

れも結句にかかる。〇しらずて　知らないで。「色色の花に心やうつるらん深山がくれの松も知らずて」（和泉式部続集・四一五）。

【所載】拾遺集・哀傷・一三二一、異本歌・一三五五／万葉集・二二三　鴨山之　磐根之巻有　吾乎鴨　不知等妹之　待乍将有　カモヤマノイハネシマケルワレヲカモシラズトイモガマチツツアラム　かもやまのいはねしまけるわれをかもしらにといもがまちつつあるらむ／人麿集Ⅰ・六二、六三／人麿集Ⅱ・二六七、二六八／人麿集Ⅲ・六三五、六八五／袋草紙・二七／万葉集時代難事・五〇／柿本人麻呂勘文・一六、六八

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば柿本人麻呂が石見国で自らの死に際して詠んだ歌で、妻への思いがこめられている。

二四四八　ふすまぢをひきでの山にいもをゝきて山べ（ヂ）を見ればいけりともなし

【異同】ナシ

【現代語訳】（ふすまぢを）引手の山に愛しい妻を置いて（帰って来て）、その山辺を見ると、生きた心地もしないことだ。

【語句】〇ふすまぢをひきでの山に　衾道を引手の山に。「ふすまぢを」は、「引手」にかかる枕詞として解したが、地名「ふすまぢ」に間投助詞「を」がついたものとする説もある。「引手の山」は、奈良県天理市にある竜王山の別称とされる。近くに手白香（たしろか）皇女の墓として衾田陵があり、衾道もこの周辺を指すものとされている。〇いもをゝきて　妹を置（お）きて。古代には遺体を山に遺棄する習慣があった。〇いけりともなし　生きているとはいえない。生きた心地もしない。「いけり」は、カ行四段活用動詞「生く」已然形に存続の助動詞「り」の終止形が接続したもの。「とも」は、引用を表す格助詞の「と」に係助詞の「も」がついたもの。「空蝉の人目を繁み逢はずして年の経ぬれば生けりともなし」（万葉集・三一二一〈旧三一〇七〉）。

【所載】万葉集・二一二　衾道乎　引手乃山尓　妹乎置而　山徑徃者　生跡毛無　フスマヂヲヒキデノヤマニイモヲオキテヤマヂヲユケバイケリトモナシ　ふすまぢをひきでのやまにいもをおきてやまぢをゆけばいけりともなし、二一五　衾路　引手山　妹置　山路念迩　生刀毛無　フスマヂヲヒキデノヤマニイモヲオキテヤマヂオモフニイケリトモナシ　ふすまぢをひきでのやまにいもをおきてやまぢおもふにいけるともなし／夫木抄・八九三

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば、柿本人麻呂のいわゆる「泣血愛慟歌」の一首。

二四四九　たまほこのいとはたまにもあし引のこの山かげにさけばちりぬる

【異同】さけはちりぬる―まけはちりぬる（桂・大）

【現代語訳】［第二句「いと」は「いも」、第五句「さけば」は「まけば」として解した。］（たまほこの）いとしいあの人は玉であるようだ。（あしひきの）この山陰に蒔くと散ってしまった。

【語句】○たまほこの　道にかかる枕詞。そこから転じて「たまほこ」で道を表すようになった。当該歌ではどのような意味で用いられているか不明。所載欄の万葉集では「玉梓（たまづさ）の」で妹にかかる枕詞。○いとはたまにもあし引の　「いと」は「糸」か。御所本・桂宮本は「いとは」の「と」と「は」の間に傍記「モ」がある。「糸が咲く」「糸が散る」と詠む例は他になく、このままでは意が通じないので、御所本・桂宮本の傍記及び所載欄の文献により「いも」として解した。「あし引の」の「あ」に、「玉にもある」の「あ」の音を重ねた。「さまも名もかはらで波はあじろぎの同じうぢなる魚にぞあるべき」（賀茂保憲女集・一八五）。○さけばちりぬる　咲けば散りぬる。所載欄の万葉集はいずれも「まけばちりぬる」。万葉集一四二〇（旧一四一六）の方は第二句が「妹は花かも」とあり、「咲けば」と合うか。ただし、底本の「さ（左）」は「ま（万）」と字体がよく似ており、桂宮本・大久保本では「まけばちりぬる」とあることから、こちらで解した。ここでは、玉のように白い、お骨を撒いたということであろう。

【所載】万葉集・一四一九（旧一四一五）玉梓能　妹者玉氈　足氷木乃　清山辺　蒔散漆　タマヅサノイモハタマカモアシヒキノキヨキヤマヘニマケバチリヌル　たまづさのいもはたまかもあしひきのきよきやまへにまけばちりぬる、一四二〇（旧一四一六）玉梓之　妹者花可毛　足日木乃　此山影尓　麻気者失留　タマヅサノイモハハナカモアシヒキノコノヤマカゲニマケバチリヌル　たまづさのいもははなかもあしひきのこのやまかげにまけばうせぬる

二四五〇　なにせんにこけふのたねをまきつらんおなじかたちにおぼえんものか

【異同】ナシ
【現代語訳】どうして「こけふのたね」を蒔いたのだろうか（蒔かなくてもよかったのに）。同じ形に思われるものだろうか、いやそのようなことはない。
【語句】〇なにせんに　どうして……なのか、……しなくていいのに。過去の自分の行為を後悔する表現。「なにせんに人ををかしとおもひけん恋する袖のやすからなくに」（兼盛集・二一）。〇こけふのたね　「苔生の種」か。「松の種」「仏の種」「菩提の種」などの語はあるが、「苔生の種」は他に用例がなく、意を解せない。〇おなじかたちに　「同じ形に」か。何と何が「同じ形」なのか不明。〇おぼえんものか　思われるだろうか、いやそのようなことはない。「ものか」は名詞「もの」に係助詞「か」がついたもの。反語を表す。「はじめより長く言ひつつためずはかかる思ひにあはましものか」（万葉集・六二三〈旧六二〇〉）。
【所載】ナシ
【参考】意味の不明な語があるため、正確な訳を示しがたい。ただし、亡くなった人が墓に入ることを「苔の下」と表現することがあり、たとえば娘の小式部内侍を亡くした翌年に詠んだ「もろともに苔の下には朽ちずしてうづまれぬ名を見るぞ悲しき」（和泉式部集・五三六）という和泉式部の歌などがある。当該歌もそのような表現からきたものかと考えられるが、詠歌事情は不明である。

二四五一　ちのなみだおちてぞたぎつしらかはゝきみがよまでのなにこそ有けれ
（ナガレ　ウク　シラカハヽ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（あなたが亡くなられた悲しみのために）この川には血の涙が落ちて激しく流れる。「白川」という名は、あなたがご健在であられた時までのものであったのだなあ。（今は血の涙によって赤く染まってしまっていて、「白」川ではないから。）
【語句】〇ちのなみだ　強い悲しみや憤りによって流れる涙。血涙。〇たぎつ　水がわきあがる。水があふれるように激しく流れる。ここでは悲しみのあまり涙が激しく流れる様子を表したもの。〇しらかは　白川。現在の京都市左京区を流れる川。比叡山と如意ヶ岳に源を発し、北白川から岡崎を流れて、祇園付近で鴨川と合流する。「血の涙」の赤と対比される表現。〇きみがよ　ここでは、高貴な人の生きている時、栄えている時期を表す。「君が世を何にたとへんさざれ石のいはほとならんほどもあかねば」（拾遺集・二七七・元輔）。

【所載】古今集・哀傷・八三〇／新撰和歌・一六四／素性集Ⅰ・四二／素性集Ⅱ・二九／素性集Ⅲ・一七／和歌体十種・九／俊頼髄脳・二七七／和歌童蒙抄・三二六／奥儀抄・五五〇／古来風体抄・二八二

【参考】作者名はないが、所載欄の文献によれば素性の歌。古今集や素性集Ⅱは白河殿と称された藤原良房が、素性集Ⅰでは清和天皇が没した際に詠んだものとする。

〔以上五首担当　諸井〕

二四五二　或本人丸　あすかゞはしがらみかけてせかませばながるゝみづものどけからまし

【異同】しからみかけて―しからかけて（桂）　「或本人丸」ハ和歌二行書キノ上ニ小字補入。

【現代語訳】あすか川にしがらみを掛けわたしてせき止めたならば、流れる水もゆったりとしていただろうに。

【語句】〇あすかゞは　飛鳥川。奈良県高市郡に発して飛鳥地方を流れる川。飛鳥川の流れの速さについては万葉集から詠まれる。「あすか川行く瀬をはやみはやけむと待つらむ妹をこの日暮らしつ」（万葉集・二七二二〈旧二七一三〉）。〇しがらみ　柵。流れを堰き止めるため、杭を打ち渡して木の枝や竹などをからませたもの。〇せかませば　もしせき止めたとしたならば（……だったろうに）。動詞「堰く」に、反実仮想「ませば……（まし）」が付く。

【所載】拾遺集・雑上・四九六／万葉集・一九七　明日香川　四我良美渡之　塞益者　進留水母　能杼尓賀有万思　アスカガハシガラミワタシセカマセバナガルルミヅモノドニカアラマシ　あすかがはしがらみわたしせかませばすすめるみづものどにかあらまし／人麿集Ⅰ・四四／人麿集Ⅱ・二六四／人麿集Ⅲ・六四一／柿本人麻呂勘文・九

【参考】作者名「人丸」は所載欄の文献に一致する。所載欄の文献によれば、天智天皇皇女、明日香皇女が没した折の挽歌。しがらみを渡して流れを止められたならという反実仮想によって皇女の命を留めたかった意を詠む。

二四五三　つらゆき十四首　かすみたつ山べをきみによそへつゝはるのみや人なをやたのまん

【異同】ナシ

【現代語訳】霞のたなびく山辺を宮様によそえながら、春宮御所の人々は変わることなく頼みにしているので

しょうか。

【語句】○きみに　君に。宮様に。四句目「はるのみや人」や所載欄の文献により、「君」は亡くなった春宮を指すとみられる。○よそへつゝ　よそえながら。「よそふ」は、なぞらえること。○はるのみや人　春宮坊の官人。「春宮坊」に季節の「春」を響かせる。「さみだれに春の宮人来るときはほとゝぎすをや鶯にせん」（後撰集・一六六）。○なを　なほ（猶）。依然として。

【所載】貫之集Ⅰ・七五七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。所載欄の貫之集の詞書「東宮かくれ給へるころ、よめる」によれば、醍醐天皇皇太子、保明親王が没した折の歌。

当該歌には「つらゆき十四首」との記載がある。ただし実際は、これ以降十二首目の二四六四番歌までが貫之歌となっている。また、十一首目の二四六三番歌の末尾には「已上ツラユキ」との小字補入がある。

二四五四　きみまさぬはるのみやまはさくらばななみだのあめにぬれつゝめふる（コニ　コニイ　ムメノハナイ　ぞ）

【異同】ナシ

【現代語訳】宮様がいらっしゃらない春の深山には、桜の花が涙の雨に濡れながら散っていますよ。（悲しみにくれて日を過ごしております。）

【語句】○はるのみやまは　春の深山には。「みやま」は、深い山、神仙の領する山などを表す。ここは、所載欄の文献や傍記から「春の宮」が掛けられている。その場合「春宮御所には」の意にもなる。○なみだのあめ　悲しみの涙のたとえ。○ぬれつゝぞふる　濡れながら散っています。悲しみの涙にくれて日を過ごしています。この場合の「ふる」は「経る」で、「降る」を掛ける。「降る」は、花の「ふる」（散る）に雨の「降る」を掛けている。

【所載】貫之集Ⅰ・七五八

【参考】作者名については二四五三番歌参照。所載欄の貫之集でも、当該歌は前歌二四五三番の次に置かれ、前歌と同様、春宮保明親王が没した折の歌となっている。

二四五五　こふるまにとしのくれなばなき人のわかれやいとゞとをくなりなん

【異同】ナシ
【現代語訳】恋い慕ううちに年が暮れてしまったならば、亡くなられた方との別れが一層遠くなってしまうことでしょう。
【語句】○なき人のわかれ　亡くなった人との別れ。○いとゞとをくなりなん　「とをく」は「遠（とほ）く」。一層遠くなってしまうことでしょう。「なん」は、強意の助動詞「ぬ」の未然形に推量の助動詞「む」の連体形がついた形。年が改まることによって故人との距離が益々遠のくように感じられてしまうのではないかと、その悲しみに弔意を示して詠まれたもの。
【所載】古今六帖・第四帖「かなしび」二四六八／後撰集・哀傷・一四二五／拾遺抄・恋下・三七二／拾遺集・哀傷・一三〇九／貫之集Ⅰ・七五四／貫之集Ⅱ・二二／六百番陳状・五〇／讃岐典侍日記・一七
【参考】作者名については二四五三番歌参照。所載欄の後撰集、拾遺抄、拾遺集・貫之集によれば、当該歌は、貫之が、妻を亡くした兼輔の悲しみを思いやって詠み贈った歌である。なお、古今六帖の二四六八番歌は、作者を兼輔とし、初句も異なっている。

二四五六　ふぢごろもおりけるいとはふち（水）なれやぬれはまされどかはく時なき（シイ）

【異同】おりけるいとは―おちけるいとは（桂）
【現代語訳】喪に服してまとう藤衣を織った糸はふち（淵）なのでしょうか。濡れは増しても乾く時はないことです。涙で絶えず濡れています。
【語句】○ふぢごろも　藤衣。喪の時に着る衣服のこと。藤や葛などの繊維で織った粗末な衣を用いていたことからくる。○ふちなれや　ふちなのでしょうか。「ふち」に「藤」と「淵」を掛ける。「淵」は川などの深いところ。「なれや」は「なのだろうか」という疑問の言い方で、下句で謎解きをする。○ぬれはまされどかはく時なき　濡れることは増しても乾く時はない。「淵」の縁から「濡る」としたもの。喪の悲しみの涙で衣が常に濡れている意。
【所載】新拾遺集・哀傷・八四七／貫之集Ⅰ・七五六
【参考】作者名については二四五三番歌参照。その作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　河本〕

二四五七　ゆめとこそいふべかりけれよのなかをうつゝあるものとおもひけるかな

【異同】ナシ
【現代語訳】（今になって思えば）夢と言うべき（はかないもの）であったよ。（それなのに）この世の中を現実という確たるものと思っていたよ。
【語句】〇ゆめとこそいふべかりけれ　夢とこそ言ふべかりけれ。夢と言うべき（はかないもの）であったよ。夢ははかないものとされた。「寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」（古今集・六四四）。〇うつゝあるものとおもひけるかな　この世の中を現実という確たるものと思っていたことですよ。「寝るがうちに見るをのみやは夢と言はむはかなき世をもうつつとは見ず」（古今集・八三五）。
【所載】古今集・哀傷・八三四／拾遺集・哀傷・一三一八／貫之集Ⅰ・七四三
【参考】二四五三番歌からの「つらゆき十四首」の一首。作者名は、所載欄の文献に一致する。所載欄の文献に拠ると、よく知っている人が亡くなった時の詠作。

二四五八　てにむすぶ水にうつれる月かげのあるかなきかのよにこそ有けれ

【異同】ナシ
【現代語訳】手に掬った水に映っている月影のように、あるともないとも言えないはかない世の中であったのでした。
【語句】〇てにむすぶ水にうつれる月かげの　手に掬った水に映っている月影のように。水面に映る月は漢籍や仏典でも見られる。「水の面に照る月なみを数ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける」（拾遺集・一七一）。〇あるかなきかのよ　あるともないとも言えないほどはかない世の中。「世の中と思ひしものをかげろふのあるかなきかの世にこそ有りけれ」（古今六帖・八二〇）。
【所載】拾遺抄・雑下・五七五／拾遺集・哀傷・一三二二／和漢朗詠集・七九七／貫之集Ⅰ・八七八／沙石集・一〇／宝物集・九六／袋草紙・一二二／保元物語・八
【参考】二四五三番歌からの「つらゆき十四首」の一首。作者名は所載欄の文献に一致する。所載欄の文献に拠ると、貫之が病になり、余命の乏しさを感じて源公忠に送った詠作。左注にはその後まもなく死亡したとある。

二四五九　たちかへりかなしくもあるかなわかれてはしるもしらぬもけぶりとおもへば

【異同】ナシ
【現代語訳】繰り返しては悲しく思われることであるよ。死に別れると、知っている人も知らない人も燃えて煙になると思うので。
【語句】○たちかへり　幾度も繰り返して。同じことを幾度も繰り返すさまをいう。○わかれてはしるもしらぬも　別れると、知っている人も知らない人も。「つくばねの峰の紅葉ば落ちつもり知るも知らぬもなべて悲しも」（古今集・一〇九六）、「これやこのゆくも帰るも別れつつ知るも知らぬもあふさかの関」（後撰集・一〇八九）を踏まえる。○けぶりとおもへば　煙と思うので。火葬の煙はその死を悼む表現として用いられることが多い。「けぶりとも雲とも今はなりぬべしつれなき人はよそにこそ見め」（元真集・二二六）。初句の「たち」は煙の縁語。
【所載】新後拾遺集・雑下・一四四〇／貫之集Ⅰ・七五五
【参考】二四五三番歌からの「つらゆき十四首」の一首。作者名は所載欄の文献に一致する。

二四六〇　をくつゆをわかれし人と見るごとにあさな〳〵ぞこひしかりける

【異同】ナシ
【現代語訳】置く露を死に別れたあの人と見るたびに、毎朝毎朝恋しく思われることですよ。
【語句】○をくつゆをわかれし人と見るごとに　置（お）く露を別れし人と見るごとに。置く露を別れたあの人と見るたびに。「つゆ」ははかなく消えるもの。転じて、人の命に喩えられる。
【所載】古今六帖・第一帖「つゆ」五四八番既出
【参考】二四五三番歌からの「つらゆき十四首」の一首。所載欄の五四八番歌は、第二・三句が「わかれし君と思ひつつ」となる。

二四六一　あすしらぬいのちなれどもくれぬまのけふは人こそこひしかりけれ

【異同】ナシ
【現代語訳】明日生きているかどうかわからない命であるけれど、まだ日が暮れない今日は（亡くなってしまった）あの人が恋しく思われることですよ。
【語句】○あすしらぬいのちなれども　明日生きているかどうかわからない命であるけれど。無常の世の中は明日生きているかどうかすら、わからないということ。「ともかくも今日こそ聞かめのちはいかが明日をも知らぬ身をば頼まむ」（躬恒集・二二二）。
【所載】古今集・哀傷・八三八／拾遺集・哀傷・一三一七／新撰和歌・一七〇／貫之集Ⅰ・七四四
【参考】二四五三番歌からの「つらゆき十四首」の一首で、所載欄の古今集・拾遺集・貫之集に一致する。所載欄の文献に拠ると、当該歌は紀友則が亡くなった時の詠作。

〔以上五首担当　山村〕

二四六二　君ましゝむかしはつゆかふるさとのはな見るごとにそでのぬるらん

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたがいらっしゃった昔は露なのでしょうか。それで、あなたが住んでいらっしゃった家の花を見るたびに私の袖が濡れているのでしょう。
【語句】○そでのぬるらん　袖の濡るらむ。それで、私の袖が濡れているのでしょう。助動詞「らむ」は原因推量。袖が濡れている原因を、昔が露となったため、また昔を思う涙のためと推測した。所載欄の古今六帖五四九番歌では「そでのひつらん」。
【所載】古今六帖・第一帖「つゆ」五四九番既出
【参考】古今六帖二四五三番の「つらゆき十四首」によれば、作者は紀貫之。五四九番の所載欄の文献に一致する。

二四六三　昨日まであひ見し人のけさなきは山のくもとぞたなびきにける已上　ツラユキ

【異同】あひ見し人の―あひみし人は（大）　けさなきは―けさなれは（大）　「已上　ツラユキ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。

【現代語訳】昨日まで顔を合わせていた人が今朝いないのは、山の雲となってたなびいているのだなあ。
【語句】〇あひ見し人のけさなきは　相見し人の今朝無きは。顔を合わせていた人が今朝いないのは。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。格助詞「の」は主格。〇山のくもとぞたなびきにける　山の雲とぞたな引きにける。山の雲となってたなびいているのだなあ。係助詞「ぞ」は強意。「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形。「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形で、「ぞ」の結び。雲は、死者の霊魂や火葬の煙に見なされる。類歌に「昨日こそ君はありしか思はぬに浜松の上に雲にたなびく」（万葉集・四四七〈旧四四四〉・大伴三中）がある。
【所載】新勅撰集・雑三・一二二七／貫之集Ⅰ・七五二
【参考】「已上ツラユキ」と古今六帖二四五三番の「つらゆき十四首」によれば、作者は紀貫之。所載欄の文献に一致する。

二四六四　うけれどもいけるはさてもあるものをしぬるのみこそかなしかりけれ

【異同】ナシ
【現代語訳】（生きるのは）辛いことであるけれども、生きていればそのような状態でもやっていけるのに、死んでしまうのだけは悲しいことだなあ。
【語句】〇うけれども　憂けれども。（生きるのは）辛いことであるけれども。「うけれ」は形容詞「憂し」の已然形。接続助詞「ども」は逆接確定条件。〇いけるはさてもあるものを　生きていればそのような状態でもやっていけるのに。「いける」は四段動詞「生く」の已然形と存続の助動詞「り」の連体形。副詞「さて」は、「そのような状態で」「そのままで」の意。直前の「うけれども」を承ける。接続助詞「ものを」は逆接確定条件。〇しぬるのみこそ　死ぬるのみこそ。死んでしまうのだけは。「死ぬる」はナ変動詞「死ぬ」の連体形。副助詞「のみ」は限定。係助詞「こそ」は強意。この結びは第五句の「けれ」で、詠嘆の助動詞「けり」の已然形。
【所載】続古今集・哀傷・一四八一／貫之集Ⅰ・七五一
【参考】古今六帖二四五三番の「つらゆき十四首」によれば、作者は紀貫之。所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰの詞書は「世の中はかなき事を見て」。続古今集は、「世のはかなきを思ひて詠める」。

二四六五　ふく風にまかせて見れどさくらばな人のよゝりはひさしかりけり
かねすけ（ある本ミジカヽ）

【異同】ひさしかりけり―久しかりけれ（大）
【現代語訳】吹く風に任せて見るけれど、桜の花（の命）は人間の一生よりは長かったのだなあ。
【語句】〇ふく風にまかせて見れど　吹く風に任せて見るけれど。接続助詞「ど」は逆接確定条件。桜の花が散らずにいる時間はとても短く、風の吹くままにしていれば更に短くなる、という前提がある。〇人のよゝりは　人の世よりは。人間の一生よりは。「世」は「寿命」や「一生」。格助詞「より」は比較。ここでは、「人の世」と「さくらばな」の命を比較する。人間の寿命より桜の花が散るまでの時間のほうが長いとし、人の命のはかなさを詠んだ。
【所載】新勅撰集・雑三・一二二五／兼輔集Ⅰ・一〇一／兼輔集Ⅱ・五〇、一七一／兼輔集Ⅲ・八一／兼輔集Ⅳ・九一／兼輔集Ⅴ・三〇／三条右大臣集・三四／大和物語・一〇三
【参考】作者名「かねすけ」は、兼輔集Ⅱ・五〇番歌と兼輔集Ⅴ・三〇番歌を除き、所載欄の文献に一致する。兼輔集Ⅱ・五〇番歌と兼輔集Ⅴ・三〇番歌には作者は「三条おとゞ」とあり、藤原定方。古今六帖二四五三番の「つらゆき十四首」は所載欄の文献に一致しない。この歌は、敦慶親王の薨去の折の詠と見られる。

二四六六　ひとつだにきればかなしきふぢごろもかさぬるあきをおもひやらなん

【異同】ナシ
【現代語訳】一度ですら着れば悲しい喪の服、服喪を重ねている秋を思いやってください。
【語句】〇ひとつだにきればかなしき　一つだに着れば悲しき。一度ですら着れば悲しい（喪の服）。副助詞「だに」は類推。一人の喪のために着る一度の喪の服でさえ、の意。初句、所載欄の文献では多く「ひとへだに」。〇ふぢごろも　藤衣。喪の服。〇かさぬるあきを　重ぬる秋を。（服喪を）重ねている秋を。「重ぬ」は「衣」の縁語。〇おもひやらなん　思ひやらなむ。思いやってください。あつらえの終助詞「なむ」は、「……してほしい」の意。服喪が重なってしまった私の辛い思いを察してほしい、ということ。
【所載】続後撰集・雑下・一二五四／万代集・三四七七／兼輔集Ⅰ・一二〇／兼輔集Ⅱ・一〇二／兼輔集Ⅴ・一〇七／貫之集Ⅰ・七五九／貫之集Ⅲ・一四
【参考】古今六帖二四五三番の「つらゆき十四首」によれば作者は紀貫之だが、所載欄の文献に一致しない。所載欄の文献では、貫之集Ⅲ・一四番以外は藤原兼輔の作。貫之集Ⅲ・一四番は、「かの中納言の御むすめの御息

所」の作。これは兼輔女で醍醐天皇更衣の藤原桑子か。この歌は、延長八（九三〇）年の醍醐天皇の諒闇に、兼輔の母の喪が重なったとき、兼輔から貫之に贈った歌と考えられる。

〔以上五首担当　原山〕

返し

二四六七　ふぢごろもかさぬるおもひ思ひやるこゝろはけふもやまずざりける　つらゆきある本

【異同】ナシ
【現代語訳】服喪を重ねたあなたの辛い思いをお察しする私の気持ちは、今日もおさまらないことです。
【語句】〇ふぢごろもかさぬるおもひ　藤衣重ぬる思ひ。服喪が重なってしまったあなたの辛い思い。前歌二四六六番を受けた表現。「着て憂しと思ふ限りぞ藤衣かさねて色も思はざりける」（敦忠集・六〇）。〇思ひやる　察する。所載欄の文献によれば、貫之が土佐守にて在国中に、都の兼輔に詠み送った歌であり、遠くへ思いを馳せる意もあるか。〇こゝろ　相手を思いやる自分の気持ち。〇やまずざりける　「やまずぞありける」の略。おさまらないことです。「やむ」は気持ちなどがおさまる意。「いつまでの命もしらぬ世の中につらき歎きのやまずもあるかな」（新古今集・一一一三）。
【所載】貫之集Ⅰ・七六〇／貫之集Ⅲ・一五
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。当該歌の詞書や所載欄の文献によれば、前歌二四六六番への返歌。

二四六八　なげくまにとしのくれなばなき人のわかれやいとゞとをくなりなん　ある本かねすけ

【異同】ナシ　「ある本かねすけ」ハ和歌二行書キノ上ニ小字補入。
【現代語訳】悲しんでいる間に年が暮れてしまったならば、亡くなった人との別れが一層遠くなってしまうことでしょう。
【語句】〇なげくまに　亡き人のことを歎き悲しんでいる間に。

【所載】古今六帖・第四帖「かなしび」二四五五番既出／後撰集・哀傷・一四二五／拾遺抄・恋下・三七二／拾遺集・哀傷・一三〇九／貫之集Ⅰ・七五四／貫之集Ⅱ・二二／六百番陳状・五〇／讃岐典侍日記・一七

【参考】当該歌は、作者名を、傍記で「ある本かねすけ」とするが、所載欄の文献は一致して作者を貫之とし、相手記載がある場合（後撰集、拾遺抄、拾遺集・貫之集）は、贈った相手を兼輔（かねすけ）としている。それらによれば、当該歌は、兼輔の妻が亡くなった年の師走に、貫之から兼輔に詠みおくった歌である。ただし、初句は、六帖の重出歌（二四五五番）含めいずれも「恋ふるまに」となっている。以下は後撰集（一四二四・一四二五）の記載。

妻のみまかりての年の師走のつごもりの日、ふること言ひ侍りけるに　兼輔朝臣

亡き人の共にし帰る年ならば暮れゆく今日はうれしからまし

返し　つらゆき

恋ふるまに年の暮れなば亡き人の別れやいとど遠くなりなん

二四六九　なき人のとしとゝもにしかへりなばゆくをおしとはおもはざらなん（ましかへしみつね）

【異同】ナシ　「かへし　みつね」ハ、前ノ二四六八番歌ノ末尾ニ小字補入。

【現代語訳】亡くなった人が年と共にでもかえってくるならば、年が暮れていくのを惜しいとは思わないでしょうに。

【語句】〇としとゝもにしかへりなば　年と共にしかへりなば。年が一巡して返ってくるように、亡き人も帰ってくるのであれば。年が「かへる」（改まる）ことに、亡き人が「帰る」を掛ける。「ともにし」の「し」は強意の副助詞。「なば」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に接続助詞の「ば」が付き、仮定条件を表す。上句で、事実としてはあり得ない仮定をしている。〇ゆくをおしとは　行くを惜し（をし）とは。年がたつのが惜しいとは。〇おもはざらなん　末尾は傍記により「ざらまし」で解した。思わないでしょうに。上句を受け、反実仮想「……ば……まし」となる。

【所載】ナシ

【参考】作者名「みつね」の傍証は他に見当たらない。当該歌は詞書に「かへし」とあり、前歌二四六八番への返歌となっている。類似した贈答歌が後撰集に載っているものの、作者名などは異なっている。二四六八番

歌参考欄参照。

二四七〇　ねても見るねでも見えけりおほかたはうつせみのよぞ夢にはありける
（エ）
とものり

【異同】ナシ
【現代語訳】亡き人のお姿が、寝ても夢に見え、また寝なくても面影のうちに見えてまいります。もっとも総じて考えますと、はかないこの現世こそが夢であったのです。
【語句】〇ねても見る　亡き人の姿が寝ても夢に見え。傍記により「寝ても見え」で解した。〇おほかたは　総じて。一般的に。二一六六番歌参照。〇うつせみのよ　はかない現世。「うつせみの」は「世」にかかる枕詞。二四三一番歌参照。〇夢にはありける　夢であったのだ。「ける」は、気づきを表す「けり」の、係結びによる連体形。この世を夢とみるのは仏教的思想の表れとされる。
【所載】古今集・哀傷・八三三／新撰和歌・一六八／友則集・六三／綺語抄・一〇五／藤川五百首・四七六
【参考】作者名「とものり」は、所載欄の文献と一致する。所載欄の古今集、友則集によれば、藤原敏行が亡くなった後に遺族に詠みおくった歌である。

二四七一　いでゝいなばこゝろかろしといひやせんよのありさまを人はしらずて
（カギリナルベシトモシ）　なりひら或本　（ヲレカナヌカトナクコヱヲキケイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】私がここを出て行ったら、軽薄だと人は言うだろうか。私達の仲の様子を世間の人は知らないで。
【語句】〇いでていなば　私がここを出て行ったら。一九八三番歌参照。〇こゝろかろし　心軽し。軽率だ。「ひるまなく涙の河に沈むかな心軽しとおもひ知る知る」（恵慶集・二六七）。〇よのありさま　私たちの仲の様子。「世」は、ここは男女の仲。所載欄の伊勢物語・二一段・三六に、夫婦の一方が「世の中を憂しと思ひて出でていなむと思ひて」当該歌を詠んだとあり、夫婦関係の思わしくない様子を言う。〇人はしらずて　世間の人は知らないで。
【所載】曽我物語真名本・八五／曽我物語仮名本・七・三八／伊勢物語・題二十一段・三六

【参考】作者名「なりひら」については確認できない。伊勢物語に所載はあるものの、当該歌を詠んだのは女とする説が主である。また、古今和歌六帖標注は、当該歌が「かなしび」にあるのは不審とする契沖の言を引く。伊勢物語の別段（三十九段）の「いでていなばなごりなるべみともしけち年経ぬるかとなく声をきけ」と初句が同じであるため書き間違えたかとする。こちらは皇女の葬送の折の歌で「かなしび」に合う。底本の傍記もこの歌に拠ったものか語句が類似している。

〔以上五首担当　河本〕

二四七二　いそのかみふるくすみこしきみなくて山のかすみはたちゐまつらん　つらゆき（ラ）

【異同】ナシ
【現代語訳】この石上の布留の地に古くから住んで来られたあなたがいらっしゃらなくなって、山の霞は、さぞかし立っていてあなたを待つことでしょう。
【語句】〇いそのかみ　大和国の歌枕。現天理市、石上神宮のあたりの大地名。その中に「布留」という小地名がある。この布留の地には、かつて僧正遍昭が別業を営んで住み、のちにその子素性も石上寺を営んで住んだ。参考欄参照。〇ふるくすみこし　古く住み来し。古くから住んできた。地名の「布留」に「古く」の「古」を掛けた。〇きみなくて　君なくて。「君」は亡くなった素性をさす。あなたがいらっしゃらなくなって。亡くなった素性に対して、直接に言いかけているような気持で言われたことば。〇山のかすみはたちゐまつらん　山の霞は立ち居待つらむ。山の霞は立っていて待つことであろう。「霞が立つ」に「立ち居」を掛けた。霞を擬人化して「立ち居待つ」と詠んだ。「立ち居待つ」とは、その位置に立っていて待つこと。所載欄の貫之集Ⅰでは、「立ちゐわぶらむ」となっており、その方が歌意は無理なく通る。
【所載】貫之集Ⅰ・七四八
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。布留の地で素性が亡くなったときに詠まれた、貫之の哀傷歌である。貫之集Ⅰによれば、「素性うせぬと聞きて躬恒がもとに送る」との詞書がついており、この歌に対して躬恒は次歌（二四七三番歌）で対応し、さらにそれに対して貫之より次々歌（二四七四番歌）が返されている。二人の間で詠み交わされた三首の追慕哀傷の歌。これら三首は、貫之・躬恒間でやりとりされたものだが、二人とも故人素性を「君」と呼んでいて、心情的には故人素性に直接詠みかけた歌、という形をとっている。

貫之と躬恒が、素性の死をいたく悼んだようすが窺われる。

返し　　みつね

二四七三　君なくてふるのやまべのはるがすみいたづらにこそたちわたるらめ（ラ）

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたがいらっしゃらなくなって、布留の山辺の春霞はただ空しく立ちわたることでしょう。
【語句】〇君なくて　前歌参照。〇ふるのやまべ　布留の山辺。前歌参照。〇いたづらにこそたちわたるらめ　なんのかいもなく、ただ空しく立ちわたるばかりであろう。「いたづらに」は、そのかいもなく空しく、ということ。「たちわたる」は、いちめんに霞の立っているさまを表わす。
【所載】続後撰集・雑下・一二五二／躬恒集Ⅱ・二五一／躬恒集Ⅳ・二五二／貫之集Ⅰ・七四九
【参考】作者名「みつね」は、所載欄の文献に一致する。前歌（二四七二番歌）に対する躬恒の対応歌。所載欄の躬恒集Ⅳには、「素性におくれて」との詞書がある。前歌参照。

二四七四　うせにきと身こそきこゆれいそのかみふるきなうせぬ君にぞありける　つらゆき（ハルガス）

【異同】ナシ
【現代語訳】その身こそ亡くなられたと聞きますけれども、石上の布留の地に長く住まわれたその名は、失せることのないあなたでありますよ。
【語句】〇いそのかみふるきなうせぬ君　石上古き名失せぬ君。「いそのかみふるき」は前々歌（二四七二番歌）参照。「布留」に「古き」を掛けている。「古き名失せぬ」は、その布留の地に古くから住んだあなたのことは、たれもが忘れることはない、ということ。「君」は亡くなった素性をさす。
【所載】貫之集Ⅰ・七五〇
【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。前歌（二四七三番歌）に対する貫之の対応歌。前歌および前々歌（二四七二番歌）参照。

二四七五　ふぢごろもはつるゝいとはわび人のなみだのたまのをとぞなりける　たゞみね五首

【異同】ナシ
【現代語訳】喪に服してまとっているこの衣のほつれる糸は、悲しみにくれている私の、とめどなく流れ落ちる涙の珠を、つなぐ緒となりました。
【語句】〇ふぢごろも　藤衣。藤や葛などの繊維で織った粗末な衣。転じて喪のときに着る衣服のこと。〇はつるゝいと　ほつれる糸。悲しみによって心乱れているさまを比喩的に言いこめたことば。〇わび人　つらい思いをしている人。作者自身をさす。〇なみだのたまのをとぞなりける　涙の珠の緒とぞなりける。涙を珠と形容し、その涙の珠を「はつるゝいと」の緒でもってつなぐ、として詠んだ。
【所載】古今集・哀傷・八四一／忠岑集Ⅱ・一一二／忠岑集Ⅳ・六／貫之集Ⅰ・七六四
【参考】作者名「たゞみね」は、所載欄の文献に一致する。古今集では「父がおもひにてよめる」と詞書がある。拾遺集巻二十哀傷の部には、「藤衣はつるる糸は君恋ふる涙の珠の緒とやなるらん」（一二九二）という類似した「よみ人知らず」歌がある。なお、当該歌には「たゞみね五首」とあるが底本および校合本三本とも、この部分には四首（底本では二四七五番歌～二四七八番歌）しか収載されていない。

二四七六　ぬるうちに見るをのみやはゆめといふはかなきよをもうつゝとは見ず

【異同】ぬるうちに―ぬるかうちに（御・大）　見るをのみやは―みるをのみや（大）
【現代語訳】寝ているうちに見るものだけを「夢」というのだろうか。いや、そうではない。あなたがはかなく亡くなってしまったこの世だって、現実とは思われず、まるで夢のようだ。
【語句】〇ぬるがうちに　寝るがうちに。寝ているあいだに。眠っているうちに。〇見るをのみやはゆめといふ　見るものだけを夢と言うのだろうか、いやそうではない。「やは」は反語。〇はかなき世　所載欄古今集における当該歌には、「あひ知れりける人のみまかりにけるときによめる」との詞書がある。あなたが亡くなってしまったはかないこの世、ということ。〇うつゝとは見ず　現実とは見えない。まるで夢のようだ。
【所載】古今集・哀傷・八三五／忠岑集Ⅰ・二三／忠岑集Ⅱ・四五／忠岑集Ⅲ・七七／忠岑集Ⅳ・六三／宝物集

・一〇三

【参考】前歌（二四七五番歌）に「たゞみね五首」とあるが、この作者名は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当　山下〕

二四七七　すみぞめのきみがたもとはくもなれやたえずなみだのあめとのみふる

【異同】ナシ

【現代語訳】墨染を着ているあなたの喪服の袂は雲なのかしら。私までも雨が降るかとばかりに涙が絶えず降っている。

【語句】〇すみぞめのきみがたもと　墨染の君が袂。喪服を着ているあなたの袖。〇くもなれや　雲なのであろうか。「……なれや」はここで切れる。係助詞「や」は疑問。〇あめとのみふる　雨とのみ降る。雨が降るかとばかりに涙が降る。格助詞「と」は「……というかのように」の意。副助詞「のみ」は強調を表し、「ひたすら……ばかりする」の意。

【所載】古今集・哀傷・八四三／忠岑集Ⅳ・一六二

【参考】二四七五番作者欄に「たゞみね五首」とある三首目の歌で、作者名「忠岑」は所載欄の文献に一致する。所載欄の歌集詞書には、服喪の人を弔問に行き詠んだ歌とある。

なお、類歌として、拾遺集・哀傷の部に、「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえずふるらん」（一二九七・よみ人知らず）がある。

二四七八　ときしまれ(もあ)あきやは人(キミガ)にわかるべきさるはよさむ(アルヲミルダニコヒシキモノヲイこ)になるこゝろしも

【異同】なるこゝろしも―なるころしも（桂）

【現代語訳】［第五句は「なれるころしも」で解した］季節もあろうに、秋の季節に人と死に別れてよいものであろうか。それというのも夜寒くなっていく頃よりによって。

【語句】〇ときしまれ　「時しもあれ」が約まった表現。時もあろうによりによって。副助詞「しも」はその事柄をとり立てて記す。〇あきやは人にわかるべき　秋という季節に人に死に別れてよいものか。「やは」は反語。人恋しい季節なのに死別の悲しみが加わるなど、あってはならぬという。〇さるはよさむになるこゝろしも　「さ

るは夜寒になれるころしも」の本文で解した。「さるは」は、それというのも実は、の意。参考欄参照。

【所載】ナシ

【参考】二四七五番作者欄に「たゞみね五首」とある四首目の歌である。当該歌の傍記表現の和歌ならば、古今集・哀傷の部に、紀友則が亡くなったときに詠んだ忠岑の歌、「時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋ひしきものを」（八三九）がある。忠岑集Ⅰ・四三、忠岑集Ⅱ・七三、忠岑集Ⅳ・一六一、他にも確認できる。

しかし、新編国歌大観『源氏釈』「葵」巻に引歌として、「時しもあれ秋やは人に別るべきよるは夜さむになれるころしも」が見える。冷泉家本『源氏釈』は、下句「いとゝよさむになれるころしも」の、「とゝ」を見セ消チにし、「さる」と傍記し、また、大橋家本『奥入』にも引歌の指摘があり、それには、下句が、「さるは夜さむになれるころしも」とある（中野幸一他編『源氏釈・奥入・光源氏物語抄』源氏物語古注釈叢刊第一巻、武蔵野書院、二〇〇九年）。よって、傍記を採らず、本行本文を生かした。

なお、『古今和歌六帖標注』は、「上の句下の句ひとつに書あやまれるなるべし」とある。「たゞみね五首」とある四首目の上句と欠脱した五首目の下句が一首に合成されたと推測したものらしい。その可能性は確かにあろうが、下句が一致するような和歌は他に見出せなかった。

二四七九　かなしさぞまさりにまさる人の身にいかにおほかるなみだなりけり
いせ或本

【異同】なみたなりけり―涙なるらん（大）

【現代語訳】悲しみがまさりにまさるばかりだ。人の身にはどれほど多くの涙があったことだろう。

【語句】○かなしさぞまさりにまさる　悲しみがまさりにまさっている。悲しみが極限に達しようとしている。「まさる」の動詞を重ね、また「ぞ」の係り結びで、強調する。二句切れの歌。○人の身　人の体、肉体。○いかにおほかるなみだなりけり　どれほど多くの涙があったことか。副詞「いかに」は、程度がはなはだしいさまを表し、どんなにか、どれほど、の意。「なりけり」は、今はじめて知った、の意。

【所載】伊勢集Ⅰ・一七六／伊勢集Ⅱ・一八〇／伊勢集Ⅲ・一七九

【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。なお、伊勢集の詞書によれば、式部卿宮敦慶親王の四十九日が果てて、人々が別れて家に帰るときの歌とある。敦慶親王は、宇多天皇皇子で、中宮温子の皇女均子内親王（異母妹）と結婚。内親王が亡くなって後、伊勢との間に中務が誕生している。

二四八〇　よりあはせてなくなるこゑをいとにしてわがなみだをばたまとぬかせん（いせ三首・ニ・な）

【異同】ナシ
【現代語訳】声をあわせて泣いていると聞こえる皆の声を、縒りあわせて糸にして、私のあふれる涙を玉として貫かせよう。
【語句】〇よりあはせてなくなるこゑ　声をあわせて泣いていると聞こえる声。「寄りあはせ」は、「糸」の縁語「縒りあはせ」を掛ける。「糸ならぬ声よりあはせてほととぎすもの思ふわれと音をぞなくらし」（躬恒集・三七五）。「なくなる」は、「泣くなる」。「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。〇いとにして　（皆の泣き声を）縒りあわせて糸にして。〇わがなみだをばたまとぬかせん　自分のたくさんの涙を玉にして、それらを縒った糸で貫かせよう。「ぬかせん」の「ぬ（貫）く」は、「糸」の縁語。なお、所載欄の伊勢集はすべて、「たまにぬかなん」。
【所載】伊勢集Ⅰ・四八三／伊勢集Ⅱ・三三／伊勢集Ⅲ・三二
【参考】「いせ　三首」とある一首目の歌で、作者名は所載欄の文献に一致する。伊勢集の詞書により、中宮温子が亡くなり、女房たちが御座近くで法事の準備をして組紐をつくっていたときに、自分の曹司にいた伊勢との、雨の日のやりとりと知られる。

二四八一　ふしまろびまどふかたみを見よとてやわかれしきぬはすてゝをきけん（ヲ・ヲクレ・タヾミネイ）

【異同】ナシ　「タヾミネイ」ハ、カタカナ小字デ記ス。
【現代語訳】悲しみで転げまわるほどになる形見を見なさいと思ってか、別れたとき着ていた衣をそのままにして置かれたのでしょうか。お別れしたまま、亡くなってしまわれて。
【語句】〇ふしまろびまどふかたみ　悲しみのあまり我が身を投げ出し転げまわるほどの、人の形見。「まどふ」は惑乱する。〇見よとてや　見なさいと思ってか。〇わかれしきぬ　別れし衣。別れたときに来ていた衣。〇すてゝをきけん　捨てて置（お）きけん。そのままに捨ておいたのでしょうか。「けん」は、第三句の係助詞「や」と呼応して、疑問の意を持つ連体形止めになる。

【所載】伊勢集Ⅰ・二二〇／伊勢集Ⅱ・二二五／伊勢集Ⅲ・二二二
【参考】二四八〇番歌に「いせ　三首」とあった二首目の歌で、所載欄の文献に一致する。「タベミネイ」とある書き入れは、その根拠を見出せなかった。
　なお、所載欄の伊勢集は諸本により歌のかたちは異なるが、すべて除服の後に川に流される喪服を詠んでいる。服喪期間が終わって除服するときには、一般には河原に出むいて祓えをする（本人が出かけられない場合には、代理の人が衣服等を持参して河原で祓する）が、着ていた喪服等は、川に流すが、ときには従者などに下げ与えることもあったという（竹鼻績『拾遺抄注釈』〈笠間書院、二〇一四年〉五五七番歌補説）。作者名「伊勢」とあることや当該歌の表現と小さい差であるので、所載欄に入れたが、詠まれた内容は大きく異なっている。
〔以上五首担当　加藤〕

二四八二　さだめなきよをきくころのなみだこそそでのうへなるふちせなりけれイセイ（トコ）

【異同】ナシ　「イセイ」ハ、カタカナ小字デ記ス。
【現代語訳】人間の命ははかないもの、この世は無常と聞く頃の涙こそ流れる川、袖の上にある淵あり瀬ありの川であった。
【語句】〇さだめなきよ　定めなき世を聞く頃。人の命がはかないものだと聞くころ。疫病の流行など、またそうでなくとも人の死を体験した時にいう。〇そでのうへなるふちせ　袖の上にある淵瀬。川の水の深いところを「淵」、浅いところを「瀬」といい、あわせて「淵瀬」という。悲しみのときの涙が袖をぬらして川となり、袖の上に「渕瀬」ができる、とした表現が人々に共有されていた。
【所載】続後撰集・雑下・一二三〇／万代集・三五〇三／伊勢集Ⅰ・二二一／伊勢集Ⅱ・二二六／伊勢集Ⅲ・二二三
【参考】三首前の二四八〇に「いせ三首」とある三首めの歌。所載欄の文献に一致する。

二四八三　山のみなうつりてけふにあふことははるのわかれをとふとなりけり　なりひら

【異同】ナシ
【現代語訳】山という山がみな動いてここに参会すること、これは、亡くなった方との春の別れを弔おうとしてなのだなあ。
【語句】〇山のみなうつりて　山という山が皆動いて。所載欄の伊勢物語によると、亡くなった文徳天皇の女御多賀幾子（たかきこ）の四十九日の法要に、捧げられた木の枝に付けた供物の多さを、山が動いたかのようであると言っていることがわかる。釈迦入滅の折の「大地諸山大海、皆悉震動」（大般涅槃経）をふまえる。〇けふにあふことは　今日に会ふことは。今日の法要に参会することは。〇はるのわかれ　亡くなった人との春の別れ。春の法要。〇とふとなりけり　「とふ」は「亡き人を弔う」。所載欄の文献には「とふとなるべし」とある。
【所載】続後撰集・雑下・一二六一／業平集Ⅰ・四四／奥儀抄・四一四／平家物語（延慶本）・一／伊勢物語七七段・一四〇
【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。伊勢物語・七七段によれば、四十九日の法要が終わった時、女御の兄人藤原常行が「今日のみわざを題にて、春の心ばえある歌」を人々に求め、それに応じた中で優れた歌という。

二四八四　きみまさ（或本）であれたるやどのいた（ハヒサカタノ）まより月のもるにもそでは（ゾヌレケルイ）ぬれけり

【異同】ナシ
【現代語訳】わが君がなくなられて、破れ毀れているお邸の板の隙間より、（雨ではなく）月光の漏れるにも、私の袖は濡れるのであった。
【語句】〇きみまさで　あなた様がいらっしゃらなくて。「まさで」は尊敬語の「いまさで」に同じ。〇あれたるやどのいたま　荒れた宿の板の間。〇月のもるにも　月光のさしこむことを「漏る」という。「にも」は「月光の漏る」のを「雨の漏る」のに対比する心。
【所載】和漢朗詠集・五三七／落書露顕・五二
【参考】亡き人をしのぶ涙で袖が濡れると詠んだ歌。

二四八五　おほぞらはくもらずながらながめつゝとしのふるにもそではぬれけり

【異同】ナシ
【現代語訳】大空は曇っていないのだけれど、もの思いし続けて年ふる私の袖は涙にも濡れるのであった。
【語句】〇くもらずながら　曇らないままで。曇らないけれど。「ながら」は「春ながら雪ぞふりつつ」など二つのことが同時に進行する時にいう。〇ながめつゝ　「長雨」に「眺め」を掛ける。所載欄の大和物語では「かんなづき」とする。〇としのふるにも　年の経るにも。年が経過するの意味の「経（ふ）る」に、雨の「降る」を掛ける。
【所載】大和物語・百十段・一七三
【参考】下句「としのふるにもそではぬれけり」は愛用された語句らしく、「時雨にも雨にもあらで君恋ふる」という上句を付し、拾遺集・六八八にある。

二四八六　なくなみだあめとふらなんわたりがはみづまさりなばかへりくるがに

【異同】ナシ
【現代語訳】私の泣く涙、雨となって降ってくれ。三途の川の水かさが増さったなら、死んだあの人が渡れないでこちらに帰ってくるように。
【語句】〇なくなみだ　泣いて流れる涙。〇あめとふらなん　雨と降ってほしい。「雨と降る」は人が雨と見るほど降る、の意。この「と」は、「雪と人の見るまで梅の花散る」などと同じ働きの「と」。「なん」は他へ誂え望む終助詞。〇わたりがは　死後、人が渡るという川。ここに緩急三つの瀬があり、生前の業によって渡るのに三途があるとされる三途の川（さんづのかは）のこと。　川のほとりに奪衣婆（だつえば）と懸衣翁がいて、死者の衣服を奪って衣領樹（えりょうじゅ）にかけると、生前の罪の軽重によって枝の垂れ方が異なるという。〇かへりくるがに　帰って来るように。「……がに」は活用語の連体形に付く場合、二つの文のうち前の文の願望・禁止・意志などを承け、その理由・目的を表す。「……するように」「……であろうから」「……するために」。「桜花散りかひ曇れ老いらくの来むといふなる道まがふがに」（古今集・三四九）。
【所載】古今集・哀傷・八二九／新撰和歌・一六二／奥儀抄・五四八／袖中抄・八四一／六百番陳状・一一一／和歌色葉・二七七
【参考】作者名はないが、古今集では小野篁の作。

〔以上五首担当　平野〕

二四八七　ふかくさのやまべのさくらも心あらばことしばかりはすみぞめにさけかんゐん或本

【異同】やまへのさくらも―山の桜も（大）　「かんゐん或本」ハ小字補入。
【現代語訳】深草の山辺の桜も心があるならば、せめて今年だけは墨染めの色に咲いておくれ。
【語句】○ふかくさのやまべのさくらも　深草の山辺の桜も。「深草」は山城国の歌枕。京都市伏見区深草に今もその名が残る。参考欄参照。なお、所載欄の古今集には「深草の野辺の桜し」とあるが、本文通りとした。○心あらば　心があるならば。春の花を代表する桜を擬人化する。○すみぞめにさけ　墨染めの色に咲いておくれ。「墨染め」は墨の色で染めること。喪服や僧衣の色にいう。
【所載】古今集・哀傷・八三二／六百番陳状・四〇／大鏡・一二／今昔物語集・六一（巻二二―六）／宝物集・五五七
【参考】作者名「かんゐん或本」とあるが、所載欄の文献（六百番陳状は作者名なし）では上野岑雄の作。古今集には堀川太政大臣（基経）が薨去した時に、亡骸を深草の山に葬った後に詠んだ歌という詞書がある。基経の邸の一つに閑院があったため、「かんゐん」としたか。

二四八八　はなよりも人こそあだになりにけれいづれをさきにこひんとか見し

【異同】ナシ
【現代語訳】散りやすい花よりも人の方が先にはかなく亡くなってしまった。花と人と、どちらを先に恋い慕うことになるだろうと思って見ていたか、見てはいなかった。
【語句】○あだになりにけれ　空しく亡くなってしまったことだ。○いづれをさきにこひんとか見し　どちらを先に恋い慕うことになるだろうかなどと思って見ていたか、見ていなかった。「か」は反語。散った花を恋しく思うだろうと見てはいたが、花が散るのと争うように亡くなった人を恋い慕うことになろうとは思ってもみなかった、の意。
【所載】古今集・哀傷・八五〇／新撰和歌・一七二／清少納言集Ⅱ・四〇／宝物集・一二〇／伊勢物語・百九段・一八八
【参考】作者名はないが、所載欄の古今集では、紀茂行の歌である。

二四八九　秋やまにもみぢひろひにいりしいもはここ（ある本）（ニ）（ハコニヤイ）にやみたぬまてど見えこず

【異同】ナシ
【現代語訳】［語義不詳の語があるため完全な訳が示せない。］秋山に紅葉を拾いに入っていった愛しい妻は、（ここにやみたぬ）いくら待っても現れないのだ。
【語句】○いりしいもは　入っていった妹は。「妹」は男性からいとしい女性を呼ぶ語、妻・恋人、姉妹。第三句まで、妹の死についての婉曲表現。○ここにやみたぬ　語義不詳。所載欄の夫木抄には「ここにやみたず」とあるが、これも語義不詳。所載欄の万葉集歌の第四句の現代訓は「いりにしいもは」とあり、当該歌の第三句と同じであり、何らかの誤写があると考えられる。○までど見えこず　待っても現れない。「見えこず」は「見え来ず」で、現れない、やってこない。「柔田津に舟乗りせむと聞きしなへ何そも君が見え来ざるらむ」（万葉集・三二一六〈旧三二〇二〉）。いくら待っても戻らぬ妻の帰りを待ちわびる心の表現か。
【所載】万葉集・一四一三（旧一四〇九）秋山黄葉何怜　浦触而　入西妹者　待不来　アキヤマニモミチアハレトウラブレテイホリニシイモハマテドキマサズ　あきやまのもみちあはれとうらぶれていりにしいもはまてどきまさず／夫木抄・六二七六
【参考】所載欄の万葉集では、亡き妻を偲ぶ夫の歌五首が並ぶ歌群のなかにある。万葉集の時代には、人の死後、その霊魂が山中に迷い入るという思想が一般的で、妻の死を、紅葉を求めて秋山に分け入ると表現した「秋山の黄葉を茂み迷ぬる妹を求めむ山道しらずも」（万葉集・二〇八）という、当該歌と似た発想の人麻呂歌がある。

二四九〇　見るごと（から）にそでぞひちぬるなきはるのかたみに見よとうへしはなかは

【異同】ナシ
【現代語訳】見るたびに袖が濡れてしまう。（あの人が）自分が亡くなってしまった後の春の形見として見なさいといって植えた花だろうか、そうではないのに。
【語句】○そでぞひちぬる　袖が涙で濡れてしまうことだ。○なきはるのかたみに　自分が亡くなった後の春の形見として。「形見」は過去を思い出す縁となるもの、ここでは、亡き人を思い出すよすが。○うへしはなか

は　植ゑし花かは。植えた花だろうか、いやそうではない。「かは」は　反語。亡き人が自分の形見にと思って植えた花ではないのだが、結果的にその後亡くなったため、形見となってしまったという意。
【所載】ナシ

二四九一　或本　としごとにはるはさくらにあひくれどうへけん人のかげぞこひしき

【異同】ナシ
【現代語訳】毎年春には桜に出会ってきたけれど、この花を植えたであろう人の面影こそが恋しい。
【語句】〇としごとに　来る年ごとに。毎年毎年。〇うへけん人の　植ゑけん人の。植えたであろう人の。「けむ」は過去の動作、状態を推量する助動詞。〇かげぞこひしき　面影こそが恋しいことだ。桜よりも、それを植えた、今はここにいない人にこそ会いたいという意を込める。
【所載】ナシ
【参考】古今集・哀傷・八五一、貫之集Ⅰ・七四六には「色も香も昔の濃さににほへども植ゑけむ人の影ぞ恋しき」という歌があり、当該歌と下句が一致し、歌の趣もよく似ている。当該歌と貫之集は桜だが、古今集の詞書には、「あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる」と、梅の花を見てよんだ歌とある。
〔以上五首担当　中野〕

二四九二　すく〳〵と見しもきゝしもなくなるにいつならんとぞわれもかなしき（リヌ）

【異同】ナシ
【現代語訳】見知った人も噂で聞いた人もどんどん亡くなっていくので、私自身もそれがいつだろうかと悲しい気持ちになることだよ。
【語句】〇すく〳〵と　滞りなく進むさま。どんどん。「すくすくと過ぐる月日の惜しきかな君がありへし方ぞと思ふに」（「月日のはかなう過ぐるを思ふに」和泉式部集・七一）。〇見しもきゝしも　見た人も聞いた人も。過去の助動詞「き」の連体形「し」の後に「人」を補う。見知った人も、噂などで聞き知った人もという意味。「空ゆく雲のはてもなく、見しも聞きしもなくなりゆけば、……」（好忠集・三六九）。〇いつならん　いつだろうか。ここは、自分の死期のことを言う。

【所載】ナシ

二四九三　おもふともなき人かけていふなゆめいとゞわびたる人のきかくに

【異同】ナシ
【現代語訳】（心の中で）思っても、決して亡き人のことを口に出してはいけない。さらに悲しみを深める人が聞きますので。
【語句】〇なき人かけて　亡き人のことを。〇いふなゆめ　決して口にしてはいけない。禁止の「な」と「ゆめ」の呼応により、決して……するなという意味。〇いとゞわびたる人のきかくに　一層悲しみの増す人が聞きますので。亡き人のことを耳にすることで、より嘆き悲しむ人がいることを言う。「心あらば三たび二たび鳴く声をいとどわびたる人に聞かすな」（躬恒集・二二五）。「きかく」は動詞「聞く」のク語法。「それをだに思ふこととてわが宿を見きとないひそ人のきかくに」（古今集・八一一）。
【所載】ナシ

二四九四　かず〳〵にわれをわすれぬものならば山のかすみをあはれとは見よ

【異同】ナシ
【現代語訳】様々に私を忘れず思い出してくださるならば、あの山の霞を（私と思い）あわれと思ってご覧ください。
【語句】〇かず〳〵に　数々に。様々に。あれこれと。「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨は降りぞまされる」（古今集・七〇五）。ここは、何かにつけて故人を思い出すことを言う。〇山のかすみ　山の霞。火葬の煙のなりかわり。「佐保山にたなびく霞見るごとに妹を思ひ出で泣かぬ日はなし」（万葉集・四七六〈旧四七三〉）。
【所載】古今集・哀傷・八五七／新撰和歌・一七六／綺語抄・三七〇
【参考】所載欄の古今集によれば、閑院五皇女が亡くなった後に、思い人の式部卿親王によって見出されたのが当該歌という。死を予期した皇女の辞世の歌とされる。

二四九五　うつせみのよのことなればよそに見しやまをやいまはよするとおもはん（カ）

【異同】ナシ
【現代語訳】（人が亡くなることは）はかない世の常のことなので、これまで関わりのないものと見ていた山を、今は、亡き人を偲ぶ拠りどころと思って見ることになろうか。
【語句】○うつせみの　「よ（世）」の枕詞。二四三一番歌参照。ここは儚いの意を含む。○よのことなれば　世の常のことなので。○よそに見しやま　関わりのないものと見ていた山。「昔こそよそにも見しか我妹子が奥つ城と思へば愛（は）しき佐保山」（万葉集・四七七〈旧四七四〉）。○よする　傍記により「よすが」で解した。上代は「よすか」と清音。気持ちを寄せる所。拠りどころ。「志賀の山いたくな伐りそ荒雄らがよすかの山と見つつしのはむ」（万葉集・三八八四〈旧三八六二〉）。ここは、亡き人を葬った山として偲ぶ気持ちを寄せる所ということ。
【所載】万葉集・四八五（旧四八二）打背見乃　世之事尓在者　外尓見之　山矣耶今者　因香跡思波牟　ウツセミノヨノコトニアレバヨソニミシヤマヲヤイマハヨスカトオモハム　うつせみのよのことにあればよそにみしやまをやいまはよすかとおもはむ
【参考】所載欄の万葉集によれば、当該歌は、高橋朝臣（伝未詳）の「死にし妻を悲傷して作る歌一首」とした長歌に合わせた反歌である。

二四九六　たもとよりおなじかたみにむまれめどみじかくすまばかなしかりけり（カタチ）

【異同】ナシ
【現代語訳】袂より同じ容貌に生まれ変わってくるだろうが、一緒にいるのがまた短い間のことならば悲しいことだよ。［語義不明の語があるため確実な訳が示せない。］
【語句】○たもとより　「袂より」としたが、意味を解せない。○おなじかたみにむまれめど　同じ容貌に生まれるだろうが。「かたみ」は、傍記により「かたち」で解し、容貌とした。亡くなった人が同じ容貌で生まれ変わることでもあるか。○みじかくすまば　短く住まば　一緒に暮らすのが短い間ならばとしたが解しにくい。初句「袂」と縁ある表現か。
【所載】ナシ

〔以上五首担当　河本〕

二四九七　こゑをだにきかでわかるゝ（ズ）われ（レム）よりもなきとこにねん人ぞかなしき（キミ）

【異同】ナシ
【現代語訳】いま、あなたの声をさえ聞くことなくて死んでゆく私は、つらく、悲しい。しかしその私よりも、のちの日に帰ってきて私のいない床にひとり寝するであろうあなたのことの方が、ずっとつらく、悲しいのです。
【語句】〇こゑをだにきかでわかるゝわれ　声をだに聞かで別るる我。あなたに逢えないどころか、あなたの声をさえ聞かずに死に別れてゆかねばならぬ私。参考欄参照。〇なきとこにねん人　亡き床に寝む人。私がいなくなった床にひとり寝するであろうあなた。この「人」は相手をさす第二人称。細字傍記に「キミ」とあり、それに従った方が歌意はわかりやすい。
【所載】古今集・哀傷・八五八
【参考】所載欄古今集における詞書には、「男の、人の国にまかれりけるまに、女、にはかに病ひをして、いと弱くなりにけるとき、詠みおきてみまかりにける」とある。これは、死に瀕したひとりの女性が、いまわの際に、他国にいる夫のために詠み遺した最期の歌である。

二四九八　君なくてけぶりたえにしゝほがまのうらさびしくも見えわたるかな（マサイ）

【異同】ナシ
【現代語訳】あなたが亡くなられて、塩焼く煙の絶えてしまったこの塩釜の浦は、まことに寂しく見えわたることですね。
【語句】〇君なくてけぶりたえにしゝほがま　あなたが亡くなられて、塩焼く煙の立たなくなったこの塩釜。「君」は、所載欄の古今集によれば、河原左大臣源融をさす。融は嵯峨天皇の皇子で、臣籍に下り従一位左大臣に到った人。左京六条に河原院という邸宅を営み、みちのくの塩釜の景を模して作庭したことで知られる。「しほがま」は製塩のために海水を煮るかまどのことだが、この歌の「しほがま」は、河原院の庭に融によって造られた塩釜のこと。〇うらさびしくも　塩釜の「浦」に「うら寂し」を掛けた。「うら寂し」は、こころの内が索莫として寂しいこと。〇見えわたるかな　広く遠くまでずっと見えることだなあ。

【所載】古今集・哀傷・八五二／和漢朗詠集・五三八／貫之集Ⅰ・七四七／三十人撰・二〇／三十六人撰・一九／綺語抄・三八七／袖中抄・二四〇／今昔物語集・一二九／古本説話集・五七

二四九九　ゆふされバねになく(ゆ)むし(とり)のひとりしてつまこひすなるこゑのかなしさ　こんゐんの左大臣(ある本)

【異同】ナシ
【現代語訳】夕方になると、声を立てて鳴く虫が、ひとりでいて、妻恋をしている声の、なんと悲しいことよ。
【語句】〇ゆふされば　夕されば。夕方になると。〇ねになくむし　音に鳴く虫。声を立てて鳴く虫。所載欄の後撰集では「ねになくをし」。〇つまこひすなるこゑ　妻恋ひすなる声。配偶を求めて鳴く声。
【所載】後撰集・哀傷・一四〇〇
【参考】作者名に「こんゐんの左大臣」とあるが、その人物を特定できない。宇多朝末期に右大臣となった文徳天皇皇子の源能有が「近院右大臣」と呼ばれているが、この人の極位は「右大臣」であって「左大臣」ではない。また、所載欄後撰集によれば、当該歌の作者名は「閑院左大臣」となっており、この「閑院左大臣」は藤原冬嗣である。すなわち後撰集によれば、当該歌の作者は、藤原冬嗣。

〔以上三首担当　山下〕

ながうた七首

みかのはらにみかどのみゆきし給時(女イ)めをはなれてよめる

二五〇〇　みかのはら　たびのやどりに　たまほこの　かさのかなむら　みちゆきあひに　あまくもの　よその　みして　ことのは(コト、ハムイ)ゝ　よしのなければ　こゝろのみ　むせつゝあるに　あめつちの　神ことよせて　しきたへの　ころもでか(かへて)へし　わがつまと　たのめるこよひ　あきのよの　もゝよの中に(ながくことのはに)　とはんねむ(ねぬるも)かも

【異同】ナシ
【現代語訳】瓶原の旅先で宿泊した折に、（玉桙の）道での出会いでめぐり会って、（天雲の）疎遠な関係でいるばかりで、言葉をやり取りするのは方法が無いので、心は悲しみで塞がり息苦しいばかりであるのに、天と地の神が言葉で加護して、（しきたへの）袖を交わして寝た、我が妻と頼みにしている今夜、秋の百夜の間に、訪問したい、共寝したいものだ。
【語句】◎ながうた七首　長歌七首。「長歌」は、五・七の音節を三回以上繰り返し、終わりに更に七を添えて結ぶ和歌の形式。参考欄参照。〇みかのはら　瓶原。甕原。山城国の歌枕。今の京都府木津川市加茂町のあたり。元明・聖武天皇の離宮があった。また天平十二（七四〇）年から約三年、聖武天皇の恭仁宮が置かれた。〇みかどのみゆきし給時　帝の行幸したまひし時。天皇が行幸なさった時。「行幸」は天皇のお出まし。〇めをはなれて　女（め）を離れて。女と疎遠になって。「女」は、妻や恋人をいう。参考欄参照。〇たびのやどりに　旅の宿りに。「宿り」は、旅先で宿泊すること、またその宿泊地。〇たまほこの　玉桙の。「道」などにかかる枕詞。〇みちゆきあひに　道行き合ひに。「行き合ひ」は、出会い。〇あまくもの　天雲の。「よそ」などにかかる枕詞。〇よそにのみして　疎遠な関係でいるばかりで。「よそ」は、疎遠な関係。副助詞「のみ」は限定。〇ことのはゝ　言の葉は。言葉をやり取りするのは。「言の葉」は、ここでは愛の言葉や約束。「思はむと我を頼めし言の葉は忘草とぞ今はなるらし」（後撰集・九二一）などの例がある。当該歌では、愛の言葉を記した手紙など、「女」との意思疎通の意と解しておく。〇よしのなければ　由の無ければ。方法が無いので。「無けれ」は形容詞「無し」の已然形。接続助詞「ば」は順接確定条件。「由無し」は、方法や手掛かりが無い。〇むせつゝあるに　咽（む）せつつあるに。「咽せ」は下二段動詞「咽す」の連用形で、喉や胸が詰まってむせる意。ここでは、悲しみで胸が塞がり息苦しく感じること。接続助詞「つつ」は継続。〇あめつちの　天地（あめつち）の。天と地の。〇神ことよせて　神言寄せて。神が言葉で加護して。「言寄す」は、言葉を寄せる。当該歌では、神が作者と「女」の仲を取り持つこと。似た例に、「……とこしへに　かくしもあらめや　天地の　神言寄せて　春花の　盛りもあらむと……」（万葉集・四一三〇〈旧四一〇六〉）がある。〇しきたへの　繁栲の。敷妙の。「衣手」などにかかる枕詞。〇ころもでかへし　衣手交へし。袖を交わして寝た。「衣手」は袖。「交へ」は、下二段動詞「交ふ」の連用形。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。「衣手交ふ」は、男女が互いの袖を交わして共寝する意で、「袖交ふ」と同義。〇わがつまとたのめるこよひ　我が妻と頼める今宵。我が妻と頼みにしている今夜。「我が妻と頼む」とは、自分の妻としてある人物を認識し、頼みにする意。「頼め」は、四段動詞「頼む」の已然形。「る」

は、存続の助動詞「り」連体形。〇あきのよのもゝよの中に　秋の夜の百夜の中に。秋の百夜の間に。「秋の百夜」とは、長い秋の夜を百も重ねたような非常に長い夜をいう。〇とはんねむかも　問はむ寝むかも。訪問したい、共寝したいものだ。「問は」は、四段動詞「問ふ」の未然形で、訪問する意。「寝（ね）」は下二段動詞「寝（ぬ）」の未然形で、ここでは共寝する意。二つの「む」は、意志の助動詞「む」の連体形。終助詞「かも」は詠嘆。

【所載】新千載集・雑下・二一三三／万葉集・五四九（旧五四六）三香之原　客之屋取尓　珠桙乃　道能去相尓　天雲之　外耳見管　言将問　縁乃無者　情耳　咽乍有尓　天地　神祇辞因而　敷細乃　衣手易而　自妻跡　憑有今夜　秋夜之　百夜乃長　有与宿鴨　ミカノハラ　タビノヤドリニ　タマホコノ　ミチノユキアヒニ　アマクモノ　ヨソノミミツツ　コトトハム　ヨシノナケレバ　ココロノミ　ムセツツアルニ　アメツチノ　カミコトヨセテ　シキタヘノ　コロモデカヘテ　ワガツマト　タノメルコヨヒ　アキノヨノ　モモヨノナガサ　アルヨイモカモ（アルヨネムカモ）／みかのはら　たびのやどりに　たまほこの　みちのゆきあひに　あまくもの　よそのみみつつ　こととはむ　よしのなければ　こころのみ　むせつつあるに　あめつちの　かみことよせて　しきたへの　ころもでかへて　おのづまと　たのめるこよひ　あきのよの　ももよのながさ　ありこせぬかも

【参考】「ながうた」は、第四帖冒頭の目次にはあるが歌集冒頭の総目次には見えない。また「七首」とあるが、長歌は「こながうた」一首と「ふるきながうた」一首を含めると全部で九首ある。作者名「かさのかなむら」は、所載欄の文献に一致する。所載欄の万葉集には、「二年乙丑春三月幸三香原離宮之時得娘子笠朝臣金村作歌」とある。神亀二（七二五）年三月、瓶原の離宮への行幸の時に、笠金村が当地の女性を得て作った歌ということになる。古今六帖の当該歌の詞書は「女を離れて」であり、ある女性と疎遠になって詠んだ歌としている。この「女」は、金村が瓶原行幸前に関係を結んでいた、都に住む女性ということになろう。

〔以上一首担当　原山〕

ふじの山を見て　　山のべのあか人

二五〇一　あめつちの　わかれしよゝり（ヨシヲ ひより）　かみさびて　たかくかしこき　するがなる　ふじの

たかねは　あまのはら　ふりあけ見れば　わたかひの　かげもかくれて　てる月の
ひかりも見えず　しらくもの　いさりはかりと　きゝしこそ　ゆきはふりける
かたりつぎ　いひはきゆかん　ふじのたかねは

【異同】わたかひの―わたる日の（大）

【現代語訳】太古の天と地がそれぞれわかれ生じた時から、神々しく天にそびえそりたつ駿河の富士の高き嶺は、広い空を見るというと、空わたる日の光も遮られ、照る月の光も見えず、白雲が行く手を阻まれ、冬ではないのに雪がふるという、はかりしれない山なのだ、のちの世にも語り続け、言い伝えて行こう。富士の高嶺は。

【語句】〇あめつちのわかれしよゝり　天地の分かれし世より。天地開闢の時から。天地はもと混沌として一つであったのが分離したという古代中国の考えを背景としている。〇かみさびて　「神さぶ」は神らしくふるまう、神々しくある、の意の動詞。〇たかくかしこき　高くそびえ、おそれおおい。「かしこし」は海、山、風、雷など自然の霊威に対して異怖を感じる古代人の気持ちをいう。〇するがなる　駿河の国にある。するがなる富士、するがなるうつの山、など。〇ふじのたかねは　富士山の天に高くそびえる嶺は。〇あまのはら　大空。ひろびろとした空。〇ふりあけ見れば　用例はなく「ふりさけみれば」の誤写とみる。はるか遠くを見れば。見晴らせば。「……あまのはらふりさけみれば照る月も満ち欠けしけり……」（万葉集・四一八四〈旧四一六〇〉）〇わたかひの　「わたかひ」は意味不明。「留」と「可」の仮名書きは似るので、「わたるひの」の誤写とみる。東から西へ移動する太陽。〇かげもかくれて　「かげ」は光のこと。太陽の光も遮られて。太陽の光を「かげ」という例は「わたる日のかげにきほひて」（万葉集・四四九三〈旧四四六九〉）。〇てる月のひかりも見えず　これより前の二句と対。すなわち、空渡る太陽と照る月。日の光も隠れ、月の光も見えず。〇いさりはかり　所載欄の万葉集の「去」は現在の訓は「ユキ」と読むが、「サル」と読んだ可能性がある。また、「はかり」は、踊り字を落とした誤写と判断する。「いゆきはばかり」の本文とみて現代語訳した。「い」は接頭語。「はばかる」は、障害があって進めない、の意。白雲も高い富士の峰に遮られて行くことが難しい。〇きゝしこそ　意味不通。「ときじくそ」の誤写とみる。所載欄の万葉集では「時自久曽」とある。「ときじ」は時が定まっていない、季節はずれである、の意の形容詞。「そ」は係助詞。〇かたりつぎ　「語り継ぐ」は、絶えないように語り続けること。〇いひはきゆかん　「いひつぎゆかん」の誤写とみる。「言ひつぎ」の例は「鶏が鳴く東の国に　高山

はさはにあれども　ふたかみの貴き山の　並み立ちの見が欲し山と　神代より人の言ひ継ぎ　国見するつくばの山を……」（万葉集・三三五〈旧三八二〉）。

【所載】新拾遺集・雑・一八七九／万葉集・三二〇（旧三一七）天地之　分時従　神左備手　高貴寸　駿河有　布士能高嶺乎　天原　振放見者　度日之　陰毛隠比　照月乃　光毛不見　白雲母　伊去波伐加利　時自久曽　雪者落家留　語告　言継将徃　不盡能高嶺者　アメツチノワカレシトキユ　カミサビテタカクタフトキ　スルガナル　フジノタカネヲ　アマノハラフルサケミレバ　ワタルヒノカゲモカクロヒ　テルツキノヒカリモミエズ　シラクモイユキハバカリ　トキジクソユキハフリケル　カタリツギイヒツギユカム　フジノタカネハ　あめつちのわかれしときゆ　かむさびてたかくたふとき　するがなるふじのたかねを　あまのはらふりさけみれば　わたるひのかげもかくらひ　てるつきのひかりもみえず　しらくももいゆきはばかり　ときじくぞゆきはふりける　かたりつぎいひつぎゆかむ　ふじのたかねは

【参考】作者名「山のべのあか人」は所載欄の文献に一致する。ただ、反歌を持たない点が異なる。

〔以上一首担当　平野〕

ふるきみやこにてよめる　　あか人

二五〇二　みむろきの　神なびやまに　もゝえさし（時）　しげくおひたる　つきのよの（ツ、ナム）　いやつぎ〳〵の（ニ）　たまかづら　たゆることなく（ヤ）　ありつゝも　やまずかよはん　あすかのゝ　ふるき宮こは　山たかみ　やまとをしくて（ヤハト、ホクシテイ）（ミイ）　はるのひは　やまよもに見え（モヨニミハ）　秋のよは　かはにもきよし（よ）　あさぐもに（ヨルミユイ）　なつはみだれて（タ）（タテイ）　ゆふぎりに　かはべにさはぎ（ツイ）　見るごとに　なきのみぞなく（モイ）　むかしおもへば

【異同】あさくもに―あまくもに（御・大）

【現代語訳】神の天降る木のある神なび山にたくさんの枝をさし伸ばし、生い茂って生えている槻の木、そのようにいよいよつぎつぎに、（玉蔓）絶えることなくあり続けて、休むことなく通い続けたいと思う明日香野に

ある古い都は、山が高いので、川も雄大である、春の日は、山が四方に見え、秋の夜は川さえも清らかである、朝の雲に鶴は飛び乱れ、夕霧に蛙は騒ぐ。（このような光景を）見るたびに涙が溢れてとまらない、都があった昔を思うと。

【語句】〇ふるきみやこにてよめる　旧都で詠んだ。旧都については参考欄参照。所載欄の万葉集では「神岳に登りて山部宿祢赤人が作る歌一首」とある。「神岳」は、雷丘説、明日香のミハ山〈橘寺東南の山〉説などがある。〇みむろきの神なびやま　神の来臨する木のある神聖な山。「みむろきの」は「神なび山」にかかる措辞。「みむろきの神なび山のもゝえよりしげきおもひぞ色に出ぬる」（土御門院御集・八八／万代集・一九〇五／夫木抄・八三五九）という用例が一例だけあるが、当該歌から影響を受けた可能性が高い後代の作。所載欄の万葉集では「みもろの神なび山」とある。「みむろ」「みもろ」は同義で、神の天降る所を意味するから、「みむろき」は神の来臨する木と解せるが、本来は「き」の入らない「みむろ」であったと考えられる。〇もゝえさし　百枝さし。沢山の枝が伸び広がって。「さし」は枝が伸び出ている様子。「いかといかと　ある我がやどに百枝さし　生ふる橘　玉に貫く……」（万葉集・一五一一〈旧一五〇七〉）。所載欄の万葉集では「いほえさし（五百枝さし）」となっている。〇しげくおひたる　枝葉が茂り重なって生えている。所載欄の万葉集では「しじにおひたる」。〇つきのよの　「月の夜の」とみると前後の句と円滑に繋がらないので、「よ」を「き」の誤写とみて、「つきのき（槻の木）の」として解す。槻は欅の古名。冒頭からここまでが序詞で、類音の「つぎつぎ」を起こす。ただし「つきの木のいやつぎつぎの末までも代にあふがるる影とならなん」（続後拾遺集・六〇五）という後代の例はあるが、万葉集には「……槻の木のこちごちの枝に……」（二一〇）と「こちごち」を起こす例はあるが、「つぎつぎ」を起こす例はない。所載欄の万葉集の現代訓にある「つがのきの」がもとの形であったと考えられるが、本文を生かして「つきのきの」とみた。〇いやつぎ〳〵の　いよいよ次々に生えてくるところの。傍記には「つぎつぎに」、所載欄の万葉集「いやつぎつぎに」とあるが、本文通りとする。〇たまかづら　玉蔓。つる草の美称。「たゆることなく」を導く枕詞。〇ありつゝも　このままあり続けて。「あり」はそのままの状態である。「つつ」は反復、継続を表す接続助詞。〇あすかのゝふるき宮こは　明日香の野にある旧都は。「あすかの」は用例がなく、所載欄の万葉集には「あすかのふるきみやこは」とあって、「の」は衍字の可能性もあるが、本文通りに「明日香の野」として解す。〇やまとをしくて　語義不詳。所載欄の万葉集に拠り「かはとほしろし」として解す。「とほしろし」は、雄大である、川が雄大である、の意。〇やまよもに見え山が四方に見えて。所載欄の万葉集の現代訓では「やまし見が欲し（山が見事である）」。〇かはにもきよし川さえも清らかである。所載欄の万葉集の現代訓では「かはしさやけし」。〇なつはみだれて　前句とつなが

らぬため、傍記及び所載欄の万葉集に拠り「たづはみだれて」として解す。鶴は乱れて飛び。〇かはべにさわぎ　前後の句との整合性を考え、傍記及び所載欄の万葉集に拠り「かはづはさわぎ」として解す。蛙は騒いでいる、の意。〇見るごとになきのみぞなく　見るたびに涙が溢れて止まらない。「なきのみぞなく」は涙が絶えない、泣いてばかりいる、の意。所載欄の万葉集の現代訓では「ねのみしなかゆ」とあるが、「なきのみぞなく」も、平安時代には万葉集の一つの訓読の形としてあったか。「あしの屋のうなひをとめの奥城をゆきくとみては泣きのみぞ泣く」（袖中抄・六〇二）、「白妙の袖わかるべき日を近み心にむせて泣きのみぞ泣く」（古今六帖・二三六七）。〇むかしおもへば　昔を思うと。所載欄の万葉集の現代訓では「いにしへおもへば」だが、西本願寺本の訓読には「ムカシオモヘバ」とある。

【所載】続千載集・雑体・七〇九／万葉集・三二七（旧三二四）三諸乃　神名備山尓　五百枝刺　繁生有　都賀乃樹乃　弥継嗣尓　玉葛　絶事無　在管裳　不止将通　明日香能　旧京師者　山高三　河登保志呂之　春日者　山四見容之　秋夜者　河四清之　旦雲二　多頭羽乱　夕霧丹　河津者驟　毎見　哭耳所泣　古思者　ミモロノ　カミナビヤマニ　イホエサシ　シジニオヒタル　トガノキノ　イヤツギツギニ　タマカヅラ　タユルコトナク　アリツツモ　ヤマズカヨハム　アスカノ　フルキミヤコハ　ヤマタカミ　カハトホシロシ　ハルノヒハ　ヤマシミガホシ　アキノヨハ　カハシサヤケシ　アサクモニ　タヅハミダレテ　ユフギリニ　カハヅハサワク　ミルゴトニ　ネニノミナカル　ムカシオモヘバ　みもろの　かむなびやまに　いほえさし　しじにおひたる　つがのきの　いやつぎつぎに　たまかづら　たゆることなく　ありつつも　やまずかよはむ　あすかの　ふるきみやこは　やまたかみ　かはとほしろし　はるのひは　やましみがほし　あきのよは　かはしさやけし　あさくもに　たづはみだる　ゆふぎりに　かはづはさわく　みるごとに　ねのみしなかゆ　いにしへおもへば

【参考】作者名「あか人」は所載欄の文献に一致する。「ふるきみやこ」は天武天皇の飛鳥浄御原宮を指し、赤人の時代には、旧都となっていた。

この赤人歌は、人麻呂の近江荒都歌（万葉集・二九）の影響があるとされるが、近江荒都歌が不在の旧都を歌いあげて嘆くのに対し、変わらぬ自然の美しさと賑わいを歌い上げることに主眼がある。ところが、末尾の三句になって唐突に懐旧の情が歌われるところにやや違和感があり、その齟齬の理由を考えた論に、赤人の長歌は、儀礼歌としての性格が強く、対句によって、属目の景ではなく一種の理想の景を歌い上げているとする説（大畑幸恵「赤人の対句」『稲岡耕二先生還暦記念　日本上代文学論集』塙書房　一九九〇年）、赤人の仕えた聖武天皇の曾祖父、天武天皇が築いた聖地である旧都飛鳥宮は荒廃した場所として造形し得なかったのでは

ないかとする説（上野誠『古代日本の文芸空間』雄山閣出版　一九九七年）などがある。

〔以上一首担当　中野〕

こながうた

二五〇三　しきしまの　やまとのくにゝ　人はおほく　みちてあれども　ふぢなみの　おもひまつはれ　わか草の　おもひなれにし　きみがめを　こひやあかさん　このながきよを（ナガキコノヨヲ）

【異同】ナシ

【現代語訳】（しきしまの）この大和の国に、人はたくさん満ちているけれども、（それは私にとって、なんのかかわりもないことだ。）（ふぢなみの）いつもいつも、わがこころから離れることなく（わか草の）思いつづけてきたあなたの姿を、恋い明かすことであろうか。この長い夜を。

【語句】〇こながうた　小長歌であろう。五音七音を繰り返して最後は七七で終わるのが長歌形式であるが、この一首は、句数が普通の長歌ほど多くないので、小さい長歌という意味で「小長歌」としたものか。ただし「小長歌」という部立や分類は、勅撰集にも他の歌集にも見られない。〇しきしまの　「大和」に掛かる枕詞。〇ふぢなみの　「まつはる」に掛かる枕詞。〇おもひまつはれ　気持がそれのみに囚われて離れない。「まつはれ」は、からみつく、の意。〇わか草の　若草の。「きみ」を導く措辞か。〇おもひなれにし　思ひ馴れにし。それを思うことに馴れてきた、の意。いつもいつも思ってきた、ということ。〇きみがめ　君が目。「め」は、目が見ること、目が見るもの、の意であるが、ここでは相手の顔、あるいは相手の姿のこと。あなたの顔、あなたの姿ということ。〇こひやあかさん　恋ひや明かさむ。一晩中恋うて夜を明かすことであろうか。「や」は疑問の係助詞。

【所載】万葉集・三二六二（旧三二四八）式嶋之　山跡之土丹　人多　満而雖有　藤浪之　思纏　若草乃　思就　西　君自二　恋八将明　長此夜乎　シキシマノ　ヤマトノクニニ　ヒトサハニ　イハミテアレド　フヂナミノ　オモヒマトヒシ　ワカクサノ　オモヒツキニシ　キミヨリニ　コヒヤアカサム　ナガキコノヨヲ　しきしまの　やまとのくにに　ひとさはに　みちてあれども　ふぢなみの　おもひまつはり　わかくさの　おもひつきにし　きみがめに　こひやあかさむ　ながきこのよを

【参考】「こながうた」「ふるきながうた」は第四帖冒頭の目次に見えるが、「ながうた」などとともに歌集冒頭

のいわゆる総目次には見えない。「ながうた」「せどうか」がなぜ総目次にないのかは不可解だが、「こながうた」「ふるきながうた」はいわゆる分類題としては解しがたいので、詞書として扱った。

〔以上一首担当　山下〕

ふるきながうた

よみ人しらず

二五〇四　あふことの　まれなるいろに　おもひそめ　わが身はつねに　あまぐもの　はるゝ時なく　ふじのねの　もえつゝとはに　おもふとも　あふことかたし　なにしかも　人わろくみん（ヲウラミムイ）　わたつうみの　おきをふかめて　思ひし（テ）を　おもひはいまに（ノイ・ハイ）　いたづらに　なりぬべらなり　ゆく水の　たゆる時なく　かくなはの（タ・ヘトモイ・ニイ）　思みだれて　ふるゆきの　けなば（キエイ）けぬべく　おもへども　えぶの身なれば　猶やまず（ヤホ）　思はふかし　あし引の　山した水の　こがくれて　たきの心を（ツイ）　たれにかも　あひかたらはん　いろにいでば　人しりぬべみ　すみぞめの　ゆふべになれば　ひとりゐて　あはれ〳〵と　なげきあまり　せんすべなみに　ほにいで（イロ・ニハニイ）ゝ　たちやすらへば　しろたへの　衣のそでに　をくつゆの　けなばけぬべく　おもへども　猶なげかれぬ　はるがすみ　よそにも人に（ナルイ）　あはんとおもへば（ゾオモフイ）

【異同】おもふとも―おもへとも（大）　なにしかも―なにゝかも（桂）　わたつうみの―わたつみの（大）　思ひしを―おもひてし（大）　おもひはいまに―おもひはいまは（大）　いたつらに―つらに（御）　たきの心を―たきつ心を（大）　ほにいてゝ―にはに出て（大）

【現代語訳】逢うことがめったにないあの人に思いを寄せ初めてから、私の身はいつもいつも空に雲がかかっているように晴れる時がなく、あたかも永遠に噴煙をあげている富士山のように、身は燃えながら思いつづけたとしても、やはり逢うことはむずかしい。だからといって、どうしてあの人のことを悪く思ったりはするでしょう。大海の沖が深いように、深く深く思っているこの私の思いは、今まさにむなしくなってしまいそうです。流れて行く水のように、絶える時がなく、「かくなわ」という菓子のように、乱れて、降る雪のように、消えてしまうなら消えてしまってもいいとは思うけれども、煩悩の多いこの人間世界に生きている身なので、悩みはやはり尽きず、思いは深い。また、山の麓を、木陰に隠れるようにして激しく流れる滝のような、この秘めた激しい思いを一体誰に語ろうか。もし顔色にでも出してしまったら、人が知ってしまうだろうから、ほの暗い夕暮れになると、独り坐っていて、あわれあわれと嘆いても嘆ききれず、どうしようもないので、とうとう態度にあらわしてうろうろしていると、衣の袖におく露のように、私なんか消えてしまうなら消えてしまってもいいとは思うけれども、やはり嘆かれてしまうのだ。よそながらでも、あの人に逢おうと思うので。

【語句】○ふるきながうた　「ふるき」がどういうことを意味するか不明。作者が「よみ人しらず」であることと関係するか。参考欄参照。○まれなるいろ　めったにない色。逢うことがめったにない人の意をこめる。○おもひそめ　「思ひ染め」に「思ひ初め」を掛ける。「染め」は「色」の縁語。○あまぐもの　天雲の。「晴るる時なく」を導く。○ふじのねの　「燃えつつ」を導く。○もえつゝとはにおもふとも　思いこがれこがれしてずっとあの人のことを思ったとしても。「とも」は逆接の仮定条件をあらわす。所載欄に掲げた古今集では「思へども」とある。○なにしかも人わろくみん　どうしてあの人のことを悪く思うだろうか。すべて自分のせいだから仕方がないという気持ち。「なにしかも」は疑問の「なに」と「か」に強めの助詞「し」ならびに「も」が添えられた形。「たきつ瀬のはやき心をなにしかも人目つつみの堰きとどむらむ」（古今集・六六〇）。○わたつうみのおきをふかめて　「わたつうみのおき」は、海の沖の意。沖は深いことから、「深めて」を導く。○いたづらに　何の甲斐もない状態をいう。無駄に。無益に。むなしく。○ゆく水の　「絶ゆる時なく」を導く。○かくなはの　「かくなは」は、和名抄・飯餅類の項に「結果　形如結緒、此間亦有之、今案加久乃阿和」とあり、緒を結んだような形の餅菓子の類という。その形から「乱れ」を導くとする。○ふるゆきの　「け（消え）」を導く。○けなばけぬべく　消えてしまうなら消えてしまってもいい。○えぶの身なれば　「えぶ」は仏教語で、「閻浮提（えんぶだい）」の略。煩悩の多い人間世界のこと。○あし引の山した水のこがくれて　「あし引の」は「山」の枕詞。「あし引の山した水の」は「木隠れて」を導く。「足引の山下水の木隠れてたぎつ心をせきぞかねつる」（古今集・四九一）。○たきの心を　「木隠れて」を受けて、人知れず沸き返るような心、

秘やかで激しい胸の思い。○たれにかもあひかたらはん　誰に語ろうか、とても語ることは出来ない。「たれにかも」は反語。○いろにいでば人しりぬべみ　この胸の思いをおもてに出したら、人が知ってしまうだろうから。「いでば」の「ば」は、未然形接続で、順接仮定条件を表す。「しりぬべみ」の「べみ」は、推量の助動詞「べし」の語幹に、「山高み」「瀬を早み」などと同じく、原因、理由を表す接尾語の「み」が伴った形。「嘆きせば人知りぬべみ山川のたぎつ心を塞かへてあるかも」（万葉集・一三八七〈旧一三八三〉）。○すみぞめの　墨染め色の暗い感じから、「夕べ」「たそがれ」「くらま山」などを導く。○なげきあまり　嘆いても嘆いても嘆ききれない。「嘆きあまり遂に色にぞ出でぬべき言はぬを人の知らばこそあらめ」（拾遺集・六二五）。○せんすべなみに　しようと思ってもする方法がないので。「すべ」は、打消や反語表現とともに用いられ、方法、手段（がない）、を意味する。「君に恋ひわが泣く涙白妙の袖さへひちてせむすべもなし」（万葉集・二九六五〈旧二九五三〉）。「なみ」は、形容詞「なし」の語幹に、原因、理由を示す接尾語の「み」が伴った形。ないので。○ほにいでゝ　穂に出でて。薄などの穂が出ること。そこから、あらわになる、表に現れる、人目につく、公然と、などの意を表す。「花薄我こそ下に思ひしか穂に出でて人に結ばれにけり」（古今集・七四八）。なお所載欄の古今集には具体的な形で「庭に出でて」とある。○たちやすらへば　「たち」は接頭語。「やすらふ」は行動を停止すること。じっとしている。たたずむ。とどまっている。ぐずぐずしている。○しろたへの衣のそでにをくつゆの　「しろたへの」は「衣」の枕詞。「衣のそでにをくつゆの」は「け（消え）」を導く。○猶なげかれぬ　やはり嘆かれてしまう。「れ」は自発の助動詞「る」の連用形。「ぬ」は完了の助動詞、終止形。○はるがすみ　「よそ」の枕詞、春霞が立つと、直接その景が見えないことからという。

【所載】古今集・雑体・一〇〇一／秘蔵抄・八二／袖中抄・八〇

【参考】「ふるきながうた」は、「こながうた」と同様に詞書として扱った。

〔以上一首担当　久保木〕

ふるうたたてまつるときのもくろくのぞのながうた
つらゆき

二五〇五　ちはやぶる　神のみよゝり　くれたけの　よゝにもたえず　あさ山ひこの　をとはの山の　はるがすみ　思ひみだれて　さみだれの　そらもとゞろに　さよふけて　山ほと

ゝぎす　なくごとに　たれもねざめて　からにしき　たつたの山の　もみぢばを　見てのみしのぶ（ハシノブノイ）　神な月　しぐれしぐれて　冬のよの（ニイ）　にはもはだらに（レイ）　ふるゆきの　猶きえかへり（ごとに）　とし○　ときにつけつゝ　あはれてふ（イヒツ、キミヲノミイ）　ことをいひつゝ　〽君をのみ（とせとイ）　ちよともいはふ　よの人の　おもひするがの　ふじのねの　もゆるおもひも　あかずして　ながるゝなみだ　ふぢごろも　をれる衣も（ハイ）　やちくさの　ことのはごとに　すべらぎの　おほせかしこみ　なゝまきの　なかにつくすと　いせの海の　うらのしほがひ　ひろひあつめ　とれりとすれど　たまのをの　みじかき心　思ひあへず　猶あらたまの　としをへて　おほ宮の内に（ニノミトシヲヘテイ）　ひさかたの（ウバタマノ）　よるひるわかず　つかふとて　かへり見もせぬ　わがやどの　しのぶ草おふる　いたまあらみ　ふるはるさめの　もりやしぬらん

【異同】よゝにもたえす―よゝにもたえつ（御）　あさひこの（山）―あまひこの（御・桂・大）　にはもはたらに（レイ）―にはもはたれに（大）　とし○（ことに）―とし（御・桂）　ちよともいはふ（トセトイ）―ちよにといはふ（大）　なかるゝなみた―わかるゝ涙（大）　なゝまきの―なくさきの（御）、なゝさきの（桂）、まき〳〵の（大）　おほ宮の内に―大宮にのみ（大）　よるひるわかす―よるひわかす（御）、ひるよるわかす（大）　ふるはるさめの―ふるさめの（御）

【現代語訳】神世の時代から今の御世に至るまで、絶えることなく歌は詠まれてきました。音羽山に春霞がたちこめると花を思い心乱れる折、五月雨が音をとどろかせて降る空に、夜ふけてほととぎすが鳴くたびに、皆ねざめてその声を待つ折、立田山の紅葉を見て賞美する折、十月、時雨が降り続き、冬の夜の庭にうっすらと雪が積もり、心も消え入るようになる折、毎年、それぞれの時節に、「あわれ」と言いつつ歌を詠んできました。わが君の千年の長寿をひたすら祈念して、世の人誰れしもが、燃えるような恋をして、また満ち足りることなく別れに際して、涙流れ、また喪服の藤衣を織っている心など、さまざまな折につけて、さらにたくさんの歌が詠まれて来ました。帝の仰せをかしこんで承り、それらの和歌を分類して束ねて、七巻にことごとく入れようと、伊勢

の海の浦の潮貝のように、歌を拾い集めて採ったと思います。が、浅才ゆえに考えがいたらず、長い年月がかかってしまいました。長年、宮中に昼夜の別なく出仕して、自分の家を顧みることもなく、忍草が生えた家の屋根は隙間が多く、降る春雨が漏っているのではないかと心配です。漏れた歌があることを恐れます。

【語句】〇ふるうたたてまつるときのもくろくのぞのながうた　古歌を献上したときの目録の序の長歌。「古歌奉る」とは、古今集仮名序に、醍醐天皇が撰者たち四人に、「万葉集に入らぬ古き歌、自らのをも、奉らしめ給ひてなむ」と命じられたとあり、真名序にも、「献二家集幷古来旧歌一」と見えるが、その「古き歌」「古来ノ旧歌」を献上したことをいう。「もくろくのそのなかうた」については、所載欄の古今集歌に関する注釈書では、「古歌を奉ったときの目録の序の長歌」とする説と、「古歌を奉った時の目録として添えた長歌」とする説とに分かれている。前者に従って解した。なお、当該歌には、春、夏、秋、冬、賀、恋、離別、哀傷、雑などの部類が詠み込まれている。〇ちはやぶる神のみよゝりくれたけのよゝにもたえず　神世の時代から今の御世まで、和歌は絶えることなく続いて来て。「ちはやぶる」は、「神」にかかる枕詞。「くれたけ(呉竹)の」は、「節(よ)」(節と節とのあいだ)に掛かる枕詞で、掛詞「世」を導く。なお、仮名序に、「この歌、天地の開け始まりけるときより出で来にけり」と見える。〇あさひこのをとはの山の　「あさひこ」は朝日のこと。ここは、他本の「あまびこの」により解す。あまびこの音羽(おとは)の山の。「天彦(あまびこ)」は「山彦」に同じ。「あまびこの」は「音」にかかる枕詞で、「音羽の山」を導く。「音羽山」は、京都市山科区と滋賀県大津市の境にあり、逢坂の関の南にある。なお、「あまびこの」から「思ひみだれて」までの四句が「春」を詠む。〇はるがすみおもひみだれて　「思ひ乱れて」は、「春霞」に隠れる桜花を思い心が乱れる、意。なお、「思ひみだれて」は、同音の「さみだれの」と響き合う。〇さみだれのそらもとゞろにさよふけて山ほとゝぎすなくごとに　五月雨が激しく降る空に、夜も更けて山ほととぎすが鳴く、そのたびにたれもねざめて。「とどろに」は、轟き響くさまだが、五月雨の降るさまをいう。「五月雨の空もとどろに郭公なにを憂しとか夜ただなくらむ」(古今集・一六〇・貫之)。なお、「さみだれの」から「たれもねざめて」までの六句で「夏」を詠む。〇からにしきたつたの山　唐錦竜田の山。「唐錦」を裁つと、「竜田山」(大和の国の歌枕)のたつ、を掛ける。「唐錦たつたの山も今よりは紅葉ながらにときはならなん」(後撰集・三八五・貫之)。「竜田山」は、紅葉の名所。「からにしき」から「見てのみしのぶ」の四句で、「秋」を表現する。「春」と同じ句数。〇もみぢばを見てのみしのぶ　もみぢ葉を見てのみ偲ぶ。竜田山の美しい紅葉をながめては賞美する。〇神な月しぐれしぐれて　十月になって時雨が降ってはまた降り。「神無月」から「猶きえかへり」までの六句は、「冬」を詠む。「夏」の句数と同じ。〇にはもはだらにふるゆきの猶きえかへり　庭に雪がうっすらと降り積もって、それもやはりすっかり消えて。「はだら」は、「はだれ」に同じ。「夜

を寒み朝戸をあけて出でぬれば庭もはだらに雪ふりにけり」（人麿集・一六〇）。なお、「消えかへり」は、「雪が消える」意と「心も消え入りそう（なほどに）」とを掛けて、後の「あはれてふ」に続かせる。〇年ごとに時につけつつあはれてふことをいひつゝ　毎年それぞれの時節ごとに、心も消え入るほどに、「あわれ」と言っては歌を詠んで。今までの四季折々をまとめたような表現。〇君をのみちよともいはふ　天子の長寿をひたすらに祝い祈念する。「賀」を詠む。〇よの人のおもひするがのふじのねのもゆるおもひも　「恋」を詠む。「世の人の」は、前句から「……いはふ世の人」のように続き、また「世の人の思ひするがの」に続く。動詞「思ひする」に「駿河の」を掛け、次の「富士の嶺」を導く。また、「火」に「思ひ」を掛ける。「人しれず思ひするがの富士のねはわがごとかくや山も燃ゆらん」（伊勢集・三八七）。〇あかずしてながるゝなみだ　名残を惜しんで別れなければならない涙。所載欄の古今集の「飽かずして別るる涙」の本文をとった。「飽かずして流るる（涙）」という表現が他に一首も見出せないのに対して、古今集の離別歌に、「飽かず別るる」（三七四番歌）、「飽かずして別るる」（四〇〇番歌）が見え、「涙」に続く歌としては、「飽かずして別るる涙滝にそふ水まさるとやしもは見るらむ」（三九六）とあるのに拠る。この二句では、「離別」を詠んだことになる。〇ふぢごろもをれる衣も　藤衣織（お）れる衣も。「藤衣」は、フジの繊維などで織った粗末な衣服で、ここは喪服。離別の「涙」から、喪中の「涙」に転じる。この二句で「哀傷」を詠む。〇やちくさのことのはごとに　数多くの種類の和歌に。「やちくさ（八千種）」は、非常に多くの種類の意。「くさ（草）」の縁語で、「言の葉」（和歌）を導く。「八千種の言の葉」とは、「雑歌」をいう。古今集仮名序に、「……或は、春、夏、秋、冬にも入らぬ種々（くさぐさ）の歌をなむ、撰ばせ給ひける。続べて、千歌、二十巻、名付けて……」に付合する。〇すべらぎのおほせかしこみ　帝の仰せをかしこくも承って。「すべらぎ」（天皇）に、上からの続きで「統べ」を掛ける。「統ぶ」（下二段）は、多くのものを束ね集める、意。さまざまな折の歌を分類して一首ずつ束ねて、と下につなげていく。〇なゝまきのなかにつくすと　七巻のなかにありったけ入れるとして。春、夏、秋、冬、賀、恋、離別、哀傷、雑などに、悉くの和歌を入れたという。「七巻」の箇所、所載欄の古今集に「まきまきの」とある。〇いせの海のうらのしほがひひろひあつめ　催馬楽「伊勢海」の、「伊勢の海の　きよき渚に　潮間（しほがひ）に　なのりそや　摘まむ　貝や拾はむ　玉や拾はむや」による表現。「貝をひろひ集め」に、歌を拾って集めたことをいう。当該歌の「しほがひ」は、「潮間（しほがひ）」に「貝」を掛ける。また、催馬楽の「玉や拾はむ」から、次の「玉の緒」を導く。〇たまのをのみじかき心思ひあへず　「玉の緒」は玉と玉とを繋ぐ間の紐が短いことから、「短き」を導く。「短き心」とは、才能が足りないことで、「思ひあへず」は、それゆえに十分に考えておすことができない、の意。我が身を謙遜した表現。〇猶あらたまのとしをへて　「あらたまの」は「年」の枕詞。古歌を集めるのに、やは

り長い年月を経て。この句は、下の「つかふとて」にも続く。〇おほ宮の内にひさかたのよるひるわかずつかふとて（長い年月を）大宮の内にばかり昼夜もわからぬほど、仕えるといって。ここで、自己の働きをアピールする、申文的な表現が以下に続く。なお、「ひさかたの」が「よるひる」と続くのは不審。所載欄の古今集に、「ひさかたのひるよるわかず」とあり、こちらの続きが自然。〇かへり見もせぬわがやどのしのぶ草おふるいたまあらみ（宮中にばかり仕えていて）顧みもしない我が家は、忍草がはえた屋根板の隙間が多いので。「忍草」は、軒忍の古名、シダ類の一種で木や岩などに生える。忍草が生えるとは、家の荒れた状態をいう。〇ふるはるさめのもりやしぬらん　荒れた我が家は降る春雨の雨漏りがしているだろうか。「漏りやしぬらん」には、大切な歌が脱け落ちてしまったであろうか、の意を掛ける。

【所載】古今集・雑体・一〇〇二

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。なお、当該歌には、語釈欄で示したように、春、夏、秋、冬、賀、恋、離別、哀傷、雑などの部類が詠み込まれていて、古歌を献上したときに、すでに部類分けしてあったと知られる。また、この長歌の各句はみごとに対応し響き合い、構成の緻密さが指摘されている。

〔以上一首担当　加藤〕

おなじだい

二五〇六　くれたけの　よゝのふること　なかりせば　みぶのたゞみね　いかにして　おもふ心を　のばえまし　あはれむかしへ　ありきてふ　人丸こそは　うれしけれ　身はしもながら　ことのはを　あまつそらまで　きこえあげ　するのよまでの　あとゝなし　いまもおほせの　くだれるは　ちりにつげとや（ても）　ちりの身に　つもれることを　とはるらん　これをおもへば　或本〳〵く□いなんに　くすりけつ（が）せる　けだものゝ　くもにほえけん　こゝちして　ちゞのなさけも　おもほえず　ひとつ心ぞ　をこらしき（ほ）　かくはをこれど（あれども）　てるひかり　ちかきさもりの　身なりしを　たれかは秋の　くるか

たに　あざむきやりて　みつきもり（カ）　おさ〳〵しくも（モノエモルミノ）　おもほえず　こゝのかさねの
（イデシミカキヨリトノヘモル身ノミカキモリイ）
なかにては（ウチニシテ）　あらしのかぜも　きかざりき（フイ）　いまはの山し　ちかければ（カシ）　はるはかす
みにたなびかれ　夏はうつせみ　なきくらし　秋はしぐれに　袖をなす　冬はしもに
ぞせめらるゝ　かゝるわびしき　みながらに　つもれるとしを　しるせれば（ヤヨケレバ）　いつゝ
のむつに　なりにけり　これにそはれる　わたくしの　おいのなみさへ（カズサヘ）　せめくれば
身のいやしくて　としたかき　ことのくるしさ　かくしつゝ　ながらのはしの　なが
らへて　なにはの浦に　たつなみの　なみのしたにや　おほえれん　さすがにいのち
おしければ　こしのくになる　しら山の　かしらはしろく　なりぬとも　をとはの瀧
の　をとにきく　おいずしなずの　くすりもが　君がちとせを（ヤチヨイ）　わか見つゝみん（サカヘエ）

【異同】ちりにつけとや（ても）―ちりにつけてや（大）　（或本）へく□いなんに―くわいなんに（御）、くりいなんに（桂・大）　かくはをこれと（あれとも）―かくはあれとも（大）　ちかきさもりの―ちかきまもりの（御・桂・大）　あさむきやりて―あさむき出て（大）　みつきもり（か）―みかきよりとの゙もる身のみかきもり（大）　こゝのかさねの―こゝのかたねの（桂）　袖をなす（カシ）―袖をかし（大）　いつゝのむつに―いつゝのむへに（桂）　おいのなみさへ（カスサヘ）―おいのかすさへ（大）　せめくれは（ヤヨケレヘ）―やよけれは（大）　身のいやしくて―身はいやしくて（大）　なみのしたにや―したにや（桂）、なみのしはにや（大）　おほえれん―おほゝれん（御・桂・大）　君かちとせを（ヤチヨイ）―君かやちよを（大）

【現代語訳】（呉竹の）代々詠まれている古歌がなかったとしたら、どのようにして自分の心情を十分に述べることができただろう。ああ、昔いたという柿本人麻呂こそ嬉しい人だ。身分は低いけれども言葉を天空、すなわち帝にまで奏上し、末代までの範として、今も（和歌献上の）仰せが下ったのは、その偉業に続けということで、取るに足らぬ塵のような我が身に、積もりたまった和歌を問われたのであろうか。これを思うと（く□いなんに）

仙薬を口にしたけだものが天に昇って雲で吠えたような心地がして、様々な感情をもつことはできず、ただ一途に誇らしいばかりだ。このように得意な気持ちになるが、照る光、すなわち帝から近い近衛府に勤める身だったのに、誰が秋の来る方、すなわち西の右衛門の職にだまして送り出したのか、いや、だまされたわけではないが、御門を護る衛門の職はしっかり勤まるとも思えない。宮中では、嵐の風も聞かなかった。今は野山が近いので、春は霞にたなびかれて心が晴れず、夏は蝉が鳴くように泣き暮らし、秋は袖を涙で時雨のように濡らす。冬は霜に苦しめられる。こんなつらい勤めの身ではありながら、積もった年を数えあげてみると、五つの六倍、すなわち三十年になってしまった。これに付け加わる、私の老いの波までも責め寄せてくるので、身分は低くて年齢は高いことの苦しさよ。このようにしながら、（長柄の橋の）生きながらえて、難波の浦に立つ波、その波の下に溺れてしまうだろうか。そうはいうものの、やはり命が惜しいので、越の国にある白山のように、頭が白くなろうとも、（音羽の滝の）評判の高い、不老不死の薬がほしいことだ。そうして、あなた様の千年の長寿を、何度も若返って見よう。

【語句】〇おなじだい　前歌の詞書「ふるうたたてまつるときのもくろくのぞのながうた」に対応。古今集撰進のために古歌を献上した際の目録の序にあたる長歌。〇くれたけの　呉竹の。「呉竹」は「淡竹（はちく）」の異名。「呉竹の」は、呉竹の節（よ）の意味で、「節（よ）」と同音の「世」にかかる枕詞。〇よゝのふること　代々の古言。「古言」は古歌。「手習などするにも、おのづから、古言も、もの思はしき筋のみ書かるるを」（源氏物語・若菜上）。〇いかほのぬまのいかにして　伊香保の沼のいかにして。「伊香保の沼の」は、同音で「いかにして」の「いか」を導く枕詞。伊香保の沼は現在の榛名湖。「かくれなくあはずなりなば陸奥の伊香保の沼のわれいかにせん」（古今六帖・一六八五）。〇おもふ心をのばえまし　思う心を述ばへまし。自分の心情を十分に表現することができよう。「述ばふ」は、「述ぶ」の未然形「述ば」に継続・反復を表す助動詞「ふ」のついたもの。時代は下るが、藤原為相の歌に「世に沈む言の葉ばかりのばへても伊香保の沼のみがくれぞうき」（夫木抄・一七三六八）という例がある。ここでは、歌という形式があったからこそ心情を十分に述べることができた、という意味。〇あはれむかしへありきてふ人丸こそはうれしけれ　ああ、昔いたという人麻呂こそ嬉しい人だ。「あはれ」は感動詞。「むかしへ」の「へ」は「方」の意で、「いにしへ」の「へ」と同じ。「人丸」は柿本人麻呂。古今集仮名序に「柿本人麻呂なむ歌の聖なりける、これは君も人も身を合はせたりといふなるべし」、真名序に「嗟乎、人麻呂既に没したれども、和歌斯にあらずや」と述べるように、柿本人麻呂は古今集の撰者たちにとって和歌における理想的な人物とされていた。〇身はしもながら　（人麻呂は）身分が低いけれども。〇あまつそらまできこえあげ　帝にまで奏上し。「あまつそら」は天空をいうが、ここでは宮中あるいは天皇の比喩表

現として用いられている。〇おほせ　貴人の命令。ここでは和歌献上の命が下ったことをいう。〇ちりにつげとや　塵に継げとや。「塵に継ぐ」は先人の偉業に続くこと。古今集真名序に「大津皇子の初めて詩賦を作りしより、詞人才子、風（ふう）を慕ひ塵（ぢん）を継ぐ」とある。〇ちりの身に　塵のような取るに足らない我が身に。「風の上にありか定めぬちりの身は行方も知らずなりぬべらなり」（古今集・九八九）。〇く□いなんに　二字目は「も」の上に「わ」を重ね書きしたように見える。意味不通。所載欄の忠岑集Ⅰ・Ⅲは「いにしへに」とある。庵点が付されている理由は不明。〇くすりけがせるけだものゝくもにほえけんこゝちして　薬けがせる獣の雲に吠えけん心地して。神仙伝に見える劉安の故事による。劉安が世を去るに臨み、丹薬の残った容器を置いたままにしたところ、鶏や犬がこれを舐めて悉く昇天し、鶏は天上に鳴き、犬は雲中に吠えたという。この故事によって、内裏に召されて応製詩を賦したことを「我昔仙階に纔（わずか）に器を舐（ねぶ）りき。知るべし細（つらつら）白雲の中に吠ゆることを」（菅家文草・一二七）と表現する例があり、当該歌も和歌を献上する勅命を得たことを表す。「けがす」は、「噣　ケカス　アチハフ」（名義抄）とあり、口にして味わう意。〇ひとつ心ぞをこらしき　一途に誇らしい気持ちだ。「ひとつ心」は、混じりけのない、ただ一つの思い。「思へどもえぞうち出でぬ鳴る鈴のひとつ心にこめてこそふれ」（長能集・四一）。「をこらしき」とあるが、「をこらし」という語はなく、意味不通。傍記の「ほこらしき」で解釈した。〇かくはをこれど　「斯（か）くは驕（おご）れど」か。このように得意な気持ちになるが、の意と解した。〇てるひかり　「照る光」は帝の比喩であろう。仁明天皇の一周忌の際に詠んだ「草ふかき霞の谷に影かくし照る日の暮れし今日にやはあらぬ」（古今集・八四六・文屋康秀）のように、天下を照らす存在である帝を「照る日」と表現する例がある。〇ちかきさもりの身なりしを　「ちかきさもり」では意が通らない。他本の「ちかきまもり」で解する。「近き守り」は近衛府のこと。近衛府に勤務する身であったのを。忠岑は左近衛番長から右衛門府生に転任している。〇たれかは　誰かは。ここでは反語。誰が……したのか、いやそうではないが、の意。〇秋のくるかたに　秋の来る方に。「同じ枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ」（古今集・二五五）のように、秋は西からやってくるものとされていた。忠岑が左近衛番長から転任した右衛門府は、大内裏の藻壁門の外、内裏から西の方角にあるため、このような表現をした。〇みつきもりおさ〳〵しくもおもほえず　「みつきもり」では意が通じないため、傍記の「みかきもり」で解した。衛門の職がしっかり勤まるとは思われない。御垣守は宮中の諸門を警護する衛士。「をさをさし」は、すぐれている、しっかりしている、の意。「宮仕へもをさをさしくだに、しなしたまへらば、などか、あしからむ」（源氏物語・葵巻）。〇こゝのかさねのなかにては　宮中においては。「こゝのかさね」は「九重」、すなわち宮中。〇いまはの山しちかければ　今は野山が近いので。「し」は強意の副助詞。左近衛府は大内

裏の中にあるが、転任した右衛門府は大内裏の外にあるため、このような誇張表現をしたものであろう。〇はるはかすみにたなびかれ　春は霞にたなびかれ。「たなびく」は雲や霞が薄く層をなして横に長く引くことであるが、ここでは自分の心が、霞にたなびかれるように鬱々としていることを表す。〇しぐれに袖をなす　涙で袖が時雨に濡れたようになること。〇つもれるとしをしるせればいつゝのむつになりにけり　「しるす」は目に見える形にすることで、ここでは積もった年を指を使って形に表すこと。「五つの六つ」は、五×六で、任官後三十年経ったということ。〇これにそはれる　「そはれる」は、四段活用の自動詞「添はる」の已然形に、存続の助動詞「り」の連体形がついたもの。これに付け加わる。〇おいのなみ　老いの波。繰りかえし年齢を重ねて老いに至ることを、波に喩えた表現。「よさのうみにおいの浪数かぞへくるあまのしわざと人も見よとぞ」（好忠集・二）。〇身のいやしくてとしたかき　身分が低いことと年齢が高いことを対比的に述べた表現。〇かくしつゝながらのはしのながらへて　このようにして生きながらえて。「かくしつつ」は、このように、の意。「かくしつつとにもかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな」（古今集・三四七）。「長柄の橋の」は同音で「ながらへ」を導く措辞。「あふ事を長柄の橋のながらへて恋ひわたるまに年ぞ経にける」（古今集・八二六）。〇おほえれん　「おほえれん」では意が通じない。他本は全て「おぼゝれん」であり、「え（衣）」と「ゝ」の誤写とみて「おぼゝれん」で解した。「おぼほる」は、溺れる、の意。「漂、溺　オホホル」（名義抄）。「今、何の報いにか、ここら横さまなる波風におぼほれたまはむ」（源氏物語・明石巻）。〇こしのくになるしら山のかしらはしろくなりぬとも　越の国なる白山の頭は白くなりぬとも。越の国にある白山のように頭が白くなろうとも。「白山」は越前国の歌枕で、現在の石川・富山・福井・岐阜にまたがる山。年を越しても雪が消えない山として有名であった。「きえはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」（古今集・四一四）。「越の国なる白山の」は「白く」を導く序詞。〇をとはの瀧のをとにきくおいずしなずのくすりもが　音羽の滝の音に聞く老いず死なずの薬もが。評判の高い不老不死の薬がほしいものだ。「音羽の滝」は山城国の歌枕。「音羽の滝の」は同音で「音」を導く措辞。「音に聞く」は、評判に聞いている、の意。「もが」は、係助詞「も」に終助詞「が」のついたもので、願望を表す。「心がへする物にもが片恋は苦しき物と人に知らせむ」（古今集・五四〇）。〇わかえつゝみん　若えつつ見ん。若返って見よう。「若ゆ」は若返ること。

【所載】古今集・雑体・一〇〇三／忠岑集Ⅰ・一／忠岑集Ⅱ・八〇／忠岑集Ⅳ・八一

【参考】作者名「みぶのたゞみね」は所載欄の文献に一致する。

冬のなが歌

二五〇七　ちはやぶる　神な月とや　けふよりは（サ）　くもりもあへず　はつしぐれ　もみぢとゝもに　ふるさとの　よしのゝ山の　山かぜも（ハ）（アラシ）　さむく日ごとに　なりゆけば　玉のをとけて　こきちらし　あられみだれて　霜こほり（オロシモイ）　いやかたまれる　庭のおもに　むら〳〵見ゆる　ふゆ草の　うへにふりしく　しらゆきの　つもり〳〵て　あらたまの　としをもあまた　すぐしつるかな

【異同】けふよりは―けさよりは（大）　はつしくれ―打時雨（大）　ふるさとの―ふか里の（大）　山かせも―山あらし（大）　いやかたまれる―いやかたされる（桂）　としをもあまた―としをあまたも（大）

【現代語訳】（ちはやぶる）神無月になったということなのか、今日からは、どんより曇ってしまうでもなく、初時雨が紅葉とともに降る、古里である吉野の山の山風も、日ごとに寒くなっていくので、玉の緒が自然にほどけて玉を扱き散らしたように、霰が降り乱れ、霜が凍りつき、いよいよ固まった庭の表面に、まだらに見える冬草の上に降りしきる、白雪のように積もり積もって、（あらたまの）年を多く過ごしてきたことだ。

【語句】〇ちはやぶる　「神な月（神無月）」の「神」にかかる枕詞。「ちはやぶる神な月こそかなしけれ我が身時雨にふりぬと思へば」（後撰集・四六九）。〇くもりもあへず　曇りきることもなく。雲の流れが速く、ずっと曇っているのではないという、時雨の特徴を捉えた表現。「あへず」は「……しきれない」「……できない」の意。「山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」（古今集・三〇三）。〇ふるさとのよしのゝ山　古里の吉野の山。「ふる」は、初時雨が「降る」意と「ふるさと」の掛詞。ここでの「ふるさと」はかつて都があった奈良。「吉野の山」は大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡一帯を指す。平安期から雪の名所として詠まれるようになり、「ならの京にまかれりける時に宿れりける所にてよめる／み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり」（古今集・三二五）の例のように、奈良に近い地としても詠まれる。〇やまかぜ　山風。山から吹き下ろす風。山おろし。「山風の吹きのまにまにもみぢ葉はこのもかのもに散りぬべらなり」（後撰集・四〇六）。〇玉のをとけてこきちらし　「玉の緒とく」とは、玉を貫いていた糸が自然と解けること。「こきちらす」は、糸から玉をしごいて落とし散らすこと。「こきちらす滝の白玉拾ひおきて世のうき時の涙にぞかる」（古今集・九二二）。〇霜こほりいやかたまれる　霜が凍りつき、いよいよ固まった。「いや」は、事柄がだんだん甚だし

くなるさまを表す語。〇むらむらみゆるふゆ草　まだらに生え残っている冬草。「むらむら」は、まだらに見える様子。「秋山に霧たちこめぬ唐錦むらむらにこそ見えわたりけれ」（能宣集・三八三）。〇あらたまの　「年」にかかる枕詞。

【所載】古今集・雑体・一〇〇五／躬恒集Ⅰ・一／躬恒集Ⅱ・一七九／躬恒集Ⅲ・一七九／躬恒集Ⅴ・一二二／和歌童蒙抄・八五〇／八雲御抄・一三

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。神無月のはじめから冬が次第に深まる様子を述べ、年末にいたって多く年を重ねたことの感慨までを詠んだ長歌。

〔以上二首担当　諸井〕

七条のきさきうせ給ひてのちよめる
（ケレバ）（ヘルノチニイ）

二五〇八　おきつなみ　あれのみまさる　みやのうちに　としへてすみし　いせのあまも　ふねながしたる　心ちして　よらむかたなく　かなしきを（に）　なみだのいろの　くれなゐは　われらがなかの　しぐれにて　あきのもみぢと　ひと〴〵は　をのがちり〴〵　わかれなば　たのむかた（ケ）なく　なりはてゝ　とまるものとは　はなすゝき　君なきにはに　むれたちて　そらをまねかば　はつかりの　なきわたりつつ　よそにこそ見め

【異同】みやのうちに―みやの内は（大）　かなしきを―かなしきに（大）　たのむかた（ケ）なく―たのむかけなく（大）　むれたちて―むれたち（大）

【現代語訳】沖の波同然に日に日に荒れていくこの宮の中では、長年にわたって住んだ伊勢の海人のように数ならぬ身の私も、舟を流したような気持ちで寄る辺なく悲しみに暮れている。こぼれた涙の色が紅なのは、私たちの中に降る時雨であって、秋の紅葉のように（宮の）人々はそれぞれ散り散りに別れてしまったら、頼りにするものもなくなってしまって、宮に残るものはただ花薄だけで、主人のいない庭に群がって立ち、その花薄が

むなしく空を招いたら、初雁は鳴き渡ってゆき、自分には関係ない、と思って見ることでしょう。（私も泣きながら、この宮を無縁のものと遠くから見るのでしょう。）

【語句】〇おきつなみあれのみまさるみやのうちに　沖つ波荒れのみまさる宮のうちに。沖に立つ波のように、日に日に荒れていくこの宮の中には。「沖つ波」は、沖に立つ波の意で、荒々しいことから「荒れ」を導く。「宮」は、皇族が住む御殿のことで、伊勢が仕えた藤原温子の在所を指す。〇いせのあまもふねながしたる心ちして　伊勢の海人も舟流したる心地して。伊勢の海人のような数ならぬ身の私も舟を漂わせたような気持ちで。「伊勢の海人」は作者である伊勢のこと。父親である藤原継蔭が伊勢守を勤めたことから「伊勢」と呼ばれたことを踏まえる。「舟流したる心ち」は、舟を漂わせる状態にすることで、寄る辺なく心細い気持ちを表す。「白浪に秋の木の葉を浮かべるを海人の流せる舟かとぞ見る」（古今六帖・一八二五）。「あま」「ふね」は「おきつなみ」の縁語。〇なみだのいろのくれなゐは　涙の色が紅であるのは。悲しみのあまり涙が血の紅色になったとする。〇われらがなかのしぐれにて　私たちの中に降る時雨であって。「時雨」は晩秋から初冬にかけて降る通り雨のこと。草木を紅葉させ、散らすものとされた。〇あきのもみぢとひと〴〵はをのがちり〴〵わかれなば　秋の紅葉と人々はおのが散り散り別れなば。秋の紅葉のように（宮の）人々はそれぞれ散り散りに別れてしまったら。時雨によって葉が紅葉し散る様を、后に死に別れた人々の、涙を流し散り散りに別れていく様に喩えた。「ともに我帰る山路のもみぢ葉のおのが散り散り別るべらなり」（躬恒集・六七）。〇とまるものとはなすゝき君なきにはにむれたちてそらをまねかば　宮にとどまるものは花薄だけであり、主人を失った庭に群がって立ち、空を招いたら。「花薄」はイネ科の多年草で、秋の七草の一つ。秋、黄褐色または紫褐色の穂を出す。薄の穂が風に揺れているさまを手招きの動作に見立てて、しばしば「招く」と共に詠まれることが多い。「空を招く」は、中空にある温子の魂を招こうとしていると解する説とむなしく空を招くという説があるが、ここでは後者を取った。「いづかたにありと聞かばか花薄はかなき空を招きたてらむ」（伊勢集・四六）。〇はつかりのなきわたりつつよそにこそ見め　初雁が鳴き渡っていきながら、自分には関係ない、と見ることでしょう。「初雁」は、ガンカモ科の渡り鳥で、秋に北方から飛来し、春に帰って行く。死者の国との往来が可能とされる面もあり、哀傷の長歌にふさわしい鳥である。「常世出でて旅の空なる雁がねも列に遅れぬほどぞなぐさむ」（源氏物語・須磨巻）。「よそにこそ見め」は、自分に関係ないこととして見るのだろうという意。花薄が招くように揺れても、空にいる雁は自分とは関係ないこととして見ているだけなのである。雁の姿に自分を重ね合わせ、作者もこの宮を遠くから無縁のものと泣きながら見るのだろう、という意を含ませている。

【所載】古今集・雑体・一〇〇六／伊勢集Ⅰ・四六二／伊勢集Ⅱ・三四／伊勢集Ⅲ・四九七／俊頼髄脳・一五

／撰集抄・四

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。詞書の「七条のきさき」は、伊勢が女房として仕えた宇多天皇皇后藤原温子のこと。藤原基経女で、均子内親王母。宇多天皇退位により東七条宮（亭子院）に移った。崩御は延喜七（九〇七）年六月八日。当該歌に秋の景物が多く詠み込まれていることから、四十九日の法要が明け、人々が退出し、別れ別れになる際に、嘆き悲しんで詠まれた哀傷歌であると考えられる。

〔以上一首担当　山村〕

せんどう歌　十七首

二五〇九　かきごしに　いぬよびこして（ヨセイ）　とがりするきみ　あを○山の（山ノチカキ山ベニムマヤスメキミイむまのはつき山べにむまやすめきみ）　はしらに山べに　人ますきみ

【異同】ナシ

【現代語訳】（意味不明の語があるので、完全な訳が示せない。）垣越しに犬を呼んで越えさせて、鷹狩りする君よ。青山の「はしら」に、山のほとりに「人ます」君よ。

【語句】◎せんどう歌　旋頭歌。せどうか。五七七・五七七の六句形式を基本型とする歌体。上句と下句の唱和、あるいは問答の体で詠まれたものが、比較的多い。記紀・万葉のころに詠まれ、平安時代以降はあまり詠まれなくなった。古事記に二首、日本書紀に二首、万葉集には六十二首収載。勅撰集では、古今集に四首、拾遺集に四首、千載集に三首撰入。○かきごしに　垣越しに。「垣」は屋敷や庭などの占有地を区切るための囲い。○よびこして　呼び越して。呼んで、越えさせて。○とがり　鳥狩り。鷹を使って鳥を捕る猟のこと。鷹狩。○あを山のはしらに　「あを山」は「青山」か。「はしらに」は、この歌の中での意味が取れない。○山べに人ますきみ　「山べ」は「山辺」か。「人ますきみ」は、この歌の中での意味が取れない。

【所載】万葉集・一二九三（旧一二八九）垣越　犬召越　鳥猟為公　青山　葉茂山辺　馬安君　カキゴシニイヌヨビコシテトガリスルキミアオヤマノハシゲキヤマヘニウマヤスメヨキミ　かきごしにいぬよびこしてとがりするきみあをやまのしげきやまへにうまやすめきみ／人麿集Ⅲ・七六二／夫木抄・七三八七

【参考】下句が不完全で、歌意が読み取れない。所載欄の万葉集で見れば、下句は「青山の葉繁き山辺に馬休め君」であって、「とがり」する「君」に対して、青山の葉繁き山辺に馬を休めよ、とすすめた歌である。なお、夫木抄七三八八番歌・九六七九番歌には、「春日野に犬呼び具してとがりする君あを山の葉濃き山辺に馬休め君」という類歌がある。

二五一〇　うちわたす　をちかた人に　ものまうすわれ　そもそこ(ソノイ)に　しろくさけるは　なにのはなぞも

【異同】そもそこに―そのそこに(大)
【現代語訳】ずっと向こうにいらっしゃる遠くの方に、私がおたずねいたします。そもそも、そこに白く咲いているのは、なんの花ですかね。
【語句】○うちわたす　ずっと遠くまで見わたしたさま。○をちかた人　遠方人。遠い向こうにいる人。「をちかた」は「遠方」ということ。○ものまうすわれ　「我もの申す」の倒置と見る。「もの申す」は「もの言ふ」の謙譲語。ここでは「ものを尋ねる」の意。○なにのはなぞも　何の花ですかね。「ぞ」は強調の係助詞、「も」は詠嘆の終助詞。
【所載】古今集・雑体・一〇〇七／新撰髄脳・一五／俊頼髄脳・七／八雲御抄・一四／三五記・二六〇／和歌大綱・九／悦目抄・五三／躬恒集Ⅰ・七七／躬恒集Ⅲ・二一二／躬恒集Ⅴ・一一七

〔以上二首担当　山下〕

返し

二五一一　はるされば　のべにまづさく　見れどあかぬはな　まひなしに　たゞなのる(ニシ)べき　はなのなゝれや

【異同】ナシ
【現代語訳】返し／春になると野辺に真っ先に咲く、どんなに見ても飽きない花です。お礼なしに名前を明らかにできるような花の名でしょうか、そうではありません。
【語句】○はるされば　春去れば。春になると。「去る」は季節が巡ってくる意。接続助詞「ば」は順接確定条

件。○まひなしに　幣（まひ）無しに。お礼なしに。「幣」は謝礼のために捧げる物。「幣」を贈る例には、「玉梓の道の神たち幣はせむ我が思ふ君を懐かしみせよ」（万葉集・四〇三三〈旧四〇〇九〉）がある。○はなのなゝれや　花の名なれや。花の名でしょうか、そうではありません。「なれ」は、断定の助動詞「なり」已然形。終助詞「や」は反語。

【所載】古今集・雑体・一〇〇八／奥儀抄・五七六／袖中抄・一一一

【参考】古今六帖二五一〇番歌の返歌。所載欄の古今集でも同じ部の贈答歌となっている。

二五一二　かすがなる　みかさの山に　月もいでぬかも　さかやまに　さけるさくらの　はなも見るべく

【異同】はなも見るへく―花も見るへき（大）

【現代語訳】春日にある御蓋山に月が出ないものかなあ。さか山に咲いている桜の花が見えるように。

【語句】○かすがなる　春日なる。春日にある。「春日」は大和国の歌枕で、奈良の平城京東方にある丘陵地帯。「なる」は、存在の助動詞「なり」連体形。○みかさの山に　三笠の山に。御蓋山に。「三笠の山」は大和国の歌枕で、平城京東方の御蓋山のこと。○月もいでぬかも　月も出でぬかも。月が出ないものかなあ。「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形。終助詞「かも」は詠嘆。「ぬかも」で希求、願望を表す。同様の「ぬかも」の例は、「みな人の命も我もみ吉野の滝の常磐の常ならぬかも」（万葉集・九二七〈旧九二二〉）。○さかやまに　さか山に。「さかやま」は未詳。所載欄の万葉集、和歌初学抄では「佐紀山（さきやま）」。「佐紀山」は平城京北西にある丘陵地。赤人集Ⅰは「せきやま」、赤人集Ⅱは「せきにさける」、赤人集Ⅲは「かけ山」。○はなも見るべく　花も見るべく。花が見えるように。「べく」は、可能の助動詞「べし」連用形。

【所載】万葉集・一八九一（旧一八八七）春日在　三笠乃山尓　月母出奴可母　佐紀山尓　開有桜之　花乃可見　カスガナル　ミカサノヤマニ　ツキモイデヌカモ　サキヤマニ　サケルサクラノ　ハナノミユベク　かすがにある　みかさのやまに　つきもいでぬかも　さきやまに　さけるさくらの　はなのみゆべく／赤人集Ⅰ・一七八／赤人集Ⅱ・五九／赤人集Ⅲ・六六／和歌初学抄・一五四

【参考】新千載集の春歌上に、「柿本人麻呂」詠として次の歌が入集している。「春日なる三笠の山に月は出でぬ咲ける桜の色も見ゆらむ」（新千載集・八四）。

二五一三　みよしのゝ　よしのゝたきも　としごろに（ドロニ）　おつるしらなみ　とまりにし（ア）　いもを　見まく○（ノ）　ほしきしらなみ

【異同】とまりにし―とまり（桂）

【現代語訳】み吉野の吉野の滝は数年来に（わたって）落ちる白波。家に留まった妻に逢いたい白波。

【語句】○みよしのゝ　み吉野の。「み吉野」は大和国の歌枕で、奈良の吉野川流域。「み」は美称の接頭語。○としごろに　数年来に。「年ごろ」は多年、年来。和歌に詠まれた「年ごろ」の例は少ないが、「年ごろを住みし所の名にし負へば来寄る波をもあはれとぞ見る」（土佐日記・三七）がある。ここでは、吉野の滝が数年来にわたって落ち続けていることと解釈した。○とまりにし　泊まりにし。家に留まった。「泊まる」は、ここでは同行せず後に残る意。「に」は完了の助動詞「ぬ」連用形。「し」は過去の助動詞「き」連体形。○いもを見まくのほしきしらなみ　妹を見まくの欲しき白波。妻に逢いたい白波。「まく」は、推量の助動詞「む」のク語法で「……すること」。「ほしき」は形容詞「欲し」連体形。「まくの欲し」は「……することが望ましい」や「……したい」の意。所載欄の万葉集の新訓では「妹に見せまく欲しき白波」で、「白波を妻に見せたい」の意である。

【所載】万葉集・三二四七（旧三二三三）三芳野　滝動動　落白浪　留西　妹見巻　欲白浪　ミヨシノノ　タキモトドロニ　オツルシラナミ　トマリニシ　イモヲミマクノ　ホシキシラナミ　みよしのの　たきもとどろに　おつるしらなみ　とまりにし　いもにみせまく　ほしきしらなみ

二五一四　きりぐ〳〵す　わがゆかのうへに　なきつゝあやな　おきねつゝ　君をこふるに（ニ）　いもねかねぬに

【異同】ナシ

【現代語訳】「いもねかねぬに」は「いもねかねぬるに」として解した。」コオロギが私の床の上で鳴き続けて、訳がわからないなあ。起きていてあなたを恋しく思うことで、眠ることもできなかったのに。

【語句】○きりぐ〳〵す　蟋蟀。現在のコオロギ。○なきつゝあやな　鳴きつつ文無（あやな）。鳴き続けて、訳がわからないなあ。接続助詞「つつ」は継続。「文無」は形容詞「文無し」の語幹で、「訳がわからない」や「筋が通らない」の意。「文無」には、「人目もる我かはあやな花薄などかほに出でて恋ひずしもあらむ」（古今集・

五四九）の例がある。○おきゐつゝ　起き居つつ。起きていて。接続助詞「つつ」は並行。「起き居る」と「君を恋ふ」が同時に行われた。○いもねかねぬに　「寝（い）も寝かねぬに」か。接続助詞「に」は連体形に接続するので、「寝も寝かねぬるに」で解釈した。眠ることもできなかったのに。「寝（い）」は睡眠。「寝（い）を寝（ぬ）」で眠る意。「かね」は接尾語「かぬ」の連用形で、「……することができない」。「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」終止形で不審。接続助詞「に」は逆接確定条件。

【所載】万葉集・二三一四（旧二三一〇）蟋蟀之　吾床隔尓　鳴乍本名　起居管　君尓恋尓　宿不勝尓　キリギリス　ワカユカノヘニ　ナキツツモトナ　オキキツツ　キミニコフルニ　イノネラレヌニ　こほろぎの　あがとこのへに　なきつつもとな　おきゐつつ　きみにこふるに　いねかてなくに

二五一五　しのすゝき　ほにいでぬ君を　われはするも　かげろふの　ためとめのみし　ひとゆへに

（こひもわれはするかなモイ）（かげろふのたゞひとめのみ見てしこゆへに）

【異同】ナシ

【現代語訳】［意味不明の部分があるため完全な訳が示せない。］篠薄の穂、表に気持ちを出さないあなたを、「われはするもかげろふのためとめの」見た人が原因で。

【語句】○しのすゝき　篠薄。篠やススキ、まだ穂を出さないススキ。ススキの穂から「ほ」を導く。○ほにいでぬ君を　ほに出でぬ君を。表に気持ちを出さないあなたを。「穂」に「秀（ほ）」を掛ける。「秀」は突出している部分。「秀に出づ」とは、思いが表情や態度に表れ目立つこと、恋愛関係などを公表すること。ススキと「秀」の例には、「吾妹子に逢坂山のはだすすきほには咲き出ず恋ひわたるかも」（万葉集・二二八七〈旧二二八三〉）などがある。○われはするも　意味不明。「我はするも」か。○かげろふのためとめのみし　意味不明。「陽炎（かげろふ）の為と目の見し」か。所載欄の文献では「陽炎のただ一目のみ見し」などとする。○ひとゆへに　人故（ゆゑ）に。（見た）人が原因で。「故」は原因、理由。

【所載】万葉集・二三一五（旧二三一一）皮為酢寸　穂庭開不出　恋乎吾為　玉蜻　直一目耳　視之人故尓　シノススキ　ホニハサキイデズ　コヒヲワガスル　カゲロフノ　タダヒトメノミ　ミシヒトユエニ　はだすすき　ほにはさきでぬ　こひをぞあがする　たまかぎる　ただひとめのみ　みしひとゆゑに／袋草紙・七九〇／袖中抄・九二

【参考】所載欄の文献では、ただ一目だけ会った人に、気持ちを表に出さずに恋をしていると詠んでいる。
〔以上五首担当　原山〕

二五一六　君がさす　みかさの山の　へもみぢばのいろ　神な月　しぐれのあめに（ノイ）　そめるなりけり

つらゆき

【異同】君かさす―君かなす（大）　しくれのあめに（ノイ）―時雨の（大）
【現代語訳】あなた様がさしている御笠、三笠の山のもみじ葉の色、神無月の時雨の雨によって染まってしまったのですね。
【語句】〇君がさす　あなた様がさしている。「さす」は、手で物を上にあげる意で、「みかさ」の枕詞。〇みかさの山　「御笠」と地名「三笠（の山）」を掛ける。三笠山は奈良市東部にある山で、春日大社の東に接する神域。「大君の三笠の山のもみぢ葉は今日の時雨に散りか過ぎなむ」（万葉集・一五五八〈旧一五五四〉）。〇神な月　神無月。陰暦十月のこと。〇しぐれのあめにそめるなりけり　時雨の雨によって染まってしまったのだった。「時雨」は、晩秋から初冬にかけて、降ったり止んだりする小雨で、木々の紅葉を促すものとされる。「時雨の雨間無くし降れば三笠山木末あまねく色づきにけり」（万葉集・一五五七〈旧五五二〉）。「そめるなりけり」の「そめる」は自動詞「染む」の已然形に完了の助動詞「り」の連体形「る」がついたもの。
【所載】古今集・雑体・一〇一〇／躬恒集Ⅰ・七八／躬恒集Ⅲ・二一三／躬恒集Ⅴ・一一八／秘蔵抄・八三／八雲御抄・一八
【参考】作者名「つらゆき」は、古今集の作者記載に一致する。貫之集にはみられず、躬恒集にある。
『新釈古今和歌集』（松田武夫　風間書房　一九七五年）は、雨を防ぐ笠の名を持つ三笠山の紅葉が、通念どおり、時雨によって染まってしまっているという矛盾を突いた趣向に面白さがあるとし、また形式的には、上三句で句切れの形となる旋頭歌本来の形式を踏襲しつつも、意味的には、上三句と下三句が主語、述語の関係となって続く、いわば短歌的方法をとる新しい旋頭歌であるとする。

二五一七　ますかゞみ　そこなるかげに　むかひゐて　みるときにこそ（みつね）　しらぬおきなに　あふ

心ちすれ

【異同】ナシ
【現代語訳】澄み切った鏡の底、そこにある姿に向かい合ってじっと見つめる時には、見知らぬ老人に出会った心持がすることだ。
【語句】〇ますかゞみ　真澄鏡。磨かれてよく澄んだ、はっきり映る鏡。「まそみかがみ」から転じた。〇そこなるかげ　そこにある影。「其処」に「底」を掛ける。「ふたみ山ともに越えねどます鏡そこなる影をたぐへてぞやる」（後撰集・一三〇七）。鏡や水に映る影は底にあると考えるのが通念。「梅の花まだ散らねども行く水の底にうつれる影ぞ見えける」（拾遺集・二五）。〇しらぬおきな　見知らぬ老人。鏡に映った我が身の姿が、あまりに老い衰えているため、別人かと思ったというのである。平素は自覚していなかった老いに気づいた誹諧歌的発想。
【所載】拾遺集・雑・五六五／和漢朗詠集・七三二／躬恒集Ⅰ・七六／躬恒集Ⅲ・二一一／躬恒集Ⅴ・一一六／新撰髄脳・一七／和歌髄脳・六／俊頼髄脳・五／八雲御抄・一七／和歌肝要・三／和歌大綱・八／悦目抄・五一
【参考】作者名「みつね」とあるが、拾遺集・歌学書類には作者名がなく、躬恒集にみられる。五・七・五・七・七・七の形をとる、いわゆる仏足石歌体。俊頼髄脳には、旋頭歌とは、短歌に一句（五・七いずれでもよい）を足したもので、句を入れる箇所は、初句の次以外は任意と定義されている。

二五一八　草木みな　はなにはなべて　あふさかの関に　はるもあるを　わが身といへば（シ）　ことのかる（シゲ）けん

【異同】ナシ
【現代語訳】草木がみな、花に総じてあう、逢坂の関には春もあるけれど、我が身といえば、言葉が軽いからだろうか（うまく逢うこともできない）。
【語句】〇なべて　一面に。おしなべて。全て。「草木みな」からここまでが「あふ」にかかる序。〇あふさかの関　逢坂の関の「あふ」に、「逢ふ」を掛ける。「逢坂の関」は近江国の歌枕。現在の京都府と滋賀県との境

に位置する関で、畿内から東国へ向かう交通の要地。〇ことのかるけん　言の軽けん、言葉が軽くてうまく逢うことができない、という意か。他に用例がなく、解しにくいが、『古今和歌六帖』（上）（和歌文学大系　室城秀之校注　明治書院　二〇一八年）に、「かるけ」は形容詞「軽し」の未然形の古形とする説に従う。

【所載】ナシ

【参考】躬恒集Ⅰ（七九）「くさきすくなるにはなへてあふさかのせきいるもあるをひとりとしいへはことのかたけん」、躬恒集Ⅲ（二一四）に「クサキスラハルニナヘテアフサカノセキニイロ60 62アル人トシイヘハトノカタケン」、躬恒集Ⅴ（二一九）に「草木すら春にはなへて相坂の関に色々あるをは人もしいはんことのかたさよ」という類歌がある。なお、この「草木すら」の歌が収められる躬恒集Ⅴ（歌仙家集本）の「かうべをめぐらす歌」という歌群の一一八番歌は古今六帖の二五一六番歌、一一六番歌は二五一七番歌、一二〇番歌は二五一九番歌に収載されており、古今六帖における旋頭歌編集と何らかの関わりがあるか。

二五一九　はつせがは　ふるかはのべに　ふたもとあるすぎ　としをへて　またもあひみん　ふたもとあるすぎ

【異同】ナシ

【現代語訳】初瀬川と布留川が合流するあたりに二本立っている杉よ。年月を経てからまた会いましょう、二本立っている杉よ。

【語句】〇はつせがは　初瀬川。大和国の歌枕。奈良県桜井市旧上野郷村に発し、初瀬町、大三輪町を経て、佐保川と合流して大和川に注ぐ。〇ふるかはのべに　布留川のあたりに。布留川は、天理市の布留を流れる川で、東方山中に発し、西流して初瀬川に合流する。〇ふたもとあるすぎ　二本並んで立っている杉。〇またもあひみん　再び会おう。杉に対する呼びかけ。

【所載】古今集・雑体・一〇〇九／躬恒集Ⅲ・二一五／躬恒集Ⅴ・一二〇／三五記・二五九

【参考】作者記載はないが、古今集ではよみ人しらず、躬恒集にある。本来は、この土地を離れ行く人が二本杉に呼びかけた歌であったが、二本杉が連理の枝の如き仲の良い男女を連想させること、「としをへてまたもあひみん」という五、六句により、離ればなれになる男女が再会を誓う歌へと転用されるようになっていったとみられる。

二五二〇　しらゆきの　つねにしくふゆは　すぎにけらしも　はるがすみ　たなびくのべに　うぐひすのなくも（―イ）

【異同】ナシ
【現代語訳】白雪が常に降り積もっている冬は過ぎてしまったらしいなあ。春霞がたなびいている野辺に鶯が鳴いているよ。
【語句】○つねにしくふゆは　常に降り積もっている冬は。「つねに」は変わらずに。「しく」は一面に行きわたる。所載欄の万葉集「常敷冬者」の新訓は「つねしくふゆは」とある。○うぐひすのなくも　鶯が鳴いているよ。所載欄の万葉集「鶯鳴焉」の新訓は「うぐひすなくも」とあり、「の」は衍字か。「も」は詠嘆の終助詞。
【所載】続千載集・雑体・七一三／万葉集・一八九二（旧一八八八）白雪之　常敷冬者　過去家良霜　春霞　田菜引野辺之　鶯鳴焉　シラユキノ　トコシクフユハ　スギニケラシモ　ハルカスミ　タナビクノヘノ　ウグヒスナクモ　しらゆきの　つねしくふゆは　すぎにけらしも　はるかすみ　たなびくのべの　うぐひすなくも／人麿集Ⅲ・七四三／赤人集Ⅲ・六七

〔以上五首担当　中野〕

二五二一　あづさ弓　ひきつりにある　なのりそのはな　とるましに　あはずあらめや（テイ）　なのりそのはな（ニトルマテニイ）

【異同】とるましに―とめましに（大）　「ニトルマテニイ」ハ和歌二行書キノ末尾ニ小字補入。
【現代語訳】［第二句は「ひきつへにある」として、第四句は「とるまてに」として訳した。］引津の海辺にある、なのりその花、花採るまで、長い間会わないでいるなんて出来ましょうか。なのりその花。
【語句】○あづさ弓　梓で作った弓。ここは「引き」を導く枕詞。○ひきつりにある　意味不明。所載欄の万葉集には「ひきつのへなる」。人麿集（素寂本）には「ヒキツヘニアル」。底本の誤写と見て、もとは「ひきつへにある」であったと解した。「ひきつ」は福岡県糸島郡船越の古名、引津か（大日本地名辞書）。可也山の西にあった入海。当該歌の上句は古今六帖第三の一八四四に酷似している。○なのりそ　海藻のホンダワラ。「な告りそ」を掛ける。名を言ってはいけない。「な……そ」は禁止表現。「告（の）る」は、みだりに口にすべきではない事柄（自分の名など）を明かし言うこと。既出一八四四番歌の語句欄参照。○とるましに　「し」は

「て」の誤写で「とるまでに」と解した。所載欄の万葉集には「つむまでに」とある。なのりその花が咲いて採るまで。長い時間を表す。

【所載】万葉集・一二八三（旧一二七九）梓弓　引津邊在　莫謂花　及採　不相有目八方　勿謂花　アヅサユミ　ヒキツノヘナル　ナノリソノハナ　ツムマデハ　アハザラメヤハ　ナノリソノハナ　あづさゆみ　ひきつのへなる　なのりそのはな　さくまでに　あはずあらめやも、一九三四（旧一九三〇）梓弓　引津邊有　莫告藻之　花咲及二　不會君毳　アヅサユミヒキツノヘナルナノリソガハナサクマデニアハヌキミカモ　あづさゆみひきつのへなるなのりそのはなさくまでにあはぬきみかも／人麿集Ⅲ・七五二／猿丸集・一四／歌経標式・二二／綺語抄・六八六／奥儀抄・四〇

【参考】当該歌の上句とほぼ同じ歌が、古今六帖第三の一八四四にあるが、下句は「いづれのうらのあまかかるらん」とまったく異なる。

二五二二　もゝしきの　おほ宮人の　ふむあとこゝろ（アト、心）　おきつなみ　よらずありせば（オキツシラナミヨセザラマセバイ）　うせずあらましを（ザラマシヲイ）

【異同】ふむあとこゝろ―ふむあとゝこゝろ（アトゝ心）（御・大）

【現代語訳】大宮人たちのやってきた足跡です、沖の波が寄せて来なかったら、失せることはなかったでしょうに。

【語句】〇ふむあとこゝろ　所載欄の万葉集（西本願寺本）では「フムアトヽコロ」と訓を付している。「こゝろ」は誤写であろう。「ふむあとところ」として訳した。踏む跡所。かつてやってきた跡。〇おきつなみよらずありせば　沖の波が寄らずにいたら。「せば」は「まし」と呼応して、反実仮想を表す。……だったら……であったろう。〇うせずあらまし　跡が消えずにいたであろう。

【所載】万葉集・一二七一（旧一二六七）百師木乃　大宮人之　踏跡所　奥浪　来不依有勢婆　不失有麻思乎　モモシキノ　オホミヤヒトノ　フムアトトコロ　オキツナミ　キアラザリセバ　ウセザラマシヲ　ももしきの　おほみやひとの　ふみしあとところ　おきつなみ　きよせずありせば　うせずあらましを

二五二三　たちのこり（シイ）　さとのいなのに　かへらくるわぎもこ　まそでもち（カイ）　つゞけんとかむ（モイ）

しらざりき

【異同】かへらくるわきもこ―かつらくるわきもこ（桂・大）
【現代語訳】［上句は誤写のため所載欄の万葉集の本文「たちのしりさやにいるのにくずひくわぎも」として訳す］入野で葛を引いている私のいとしい子よ、両方の袖を持って……［第五句との関係が不明なため訳せない。］
【語句】○たちのこりさとのいなのに　意味不明。所載欄の万葉集には「たちのしりさやにいるのに」とある。「いるの」という地名を引き出す序。「太刀の入る鞘」が誤写されたと見る。すなわち「太刀の後（しり）鞘（さや）にいるの」と解す。「いるの」は「入野」。所載欄の万葉集では「納野（いりの）」とあり、川を遡って開拓していった最も先に入り込んだ野。各地の地名として残る。○かへらくる　「へ」は誤写で「つ」であろう。「かつらくる」は葛（かづら）を手で引くこと。手繰り寄せる。強い蔓状のものを編んで衣を作る。○まそでもち　真袖持ち。片方の袖でなく、両袖を持って。○つぐけんとかむしらざりき　意味不明。
【所載】万葉集・一二七六（旧一二七二）　釧後　鞘納野◀　葛引吾妹　真袖以　著点等鴨　夏草苅母　タチノシリ　サヤニイルノニ　クズヒクワギモ　マソデモテ　キテムトテカモ　ナツクズカルモ　たちのしり　さやにいりのに　くずひくわぎも　まそでに　きせてむとかも　なつくさかるも

二五二四　みなとなる　あしのわかばを　たれかおりて　わがせこが　ふる袖をみんとて　われぞたをりし

【異同】あしのわかはを―あしのわかはは（桂・大）　わかせこか―わかせこ（大）
【現代語訳】河口にある葦の若葉を誰が折ったの。いとしいあの人が振る袖を見ようと私が折ったの。
【語句】○みなとなる　「みなと」は水門。入江の口。「なる」は「にある」。葦が茂るところである。「みなとの葦が中なる玉小菅刈りこわがせことこのへだしに」（万葉集・三四六四〈旧三四四五〉）。○あしのうらば　「うらば」は植物の生長する先端の葉。伸びる葦の葉の先の方。○たれかおりて　誤写があるらしい。「たれかたをりし」（誰か手折りし）とあったものと見る。第六句のかたちと呼応するはずであるから。○わがせこが　女性から親しい男性を呼ぶ場合「せ」「せこ」「わがせこ」などと使う。
【所載】万葉集・一二九二（旧一二八八）　水門　葦末葉　誰手折　吾背子　振手見　我手折　ミナトナル　アシノスエハヲ　タレカタヲリシ　ワガセコガ　フルテヲミムト　ワレゾタヲリシ　みなとの　あしのうらばを

たれかたをりし　わがせこが　ふるてをみむと　われぞたをりし／人麿集Ⅲ・七六一

二五二五　すみよしの　いでみのはまに　しばなかりそね　をとめごが　あかもたれひき（ライ）　ぬれてゆかん（イイ）見ん

【異同】ナシ

【現代語訳】住吉の出見の浜で草を刈らないで下さい。若い娘たちが浜に、赤裳の裾引き濡らし行くのを見たいから。

【語句】○すみよしのいでみのはまに　住吉の出見の浜に。「出見の浜」は住吉神社の西方の海浜。「献火高燈籠あり、海上標識の用をなす」（大日本地名辞書）。○しばなかりそね　芝な刈りそね。「な……そね」は禁止を表す。芝は、様々な生える草をいう。草々を刈らないで。○あかもたれひき　「赤裳」は女性が身につける。「垂れ引き」は長い裾を垂らし引いて。優雅に裾を引き歩く姿や浜辺の波打ち際などで、裳裾を濡らすという表現は万葉集に多い。「あごの浦に舟乗りすらむをとめらが赤裳の裾に潮満つらむか」（万葉集・三六三二〈旧三六一〇〉）。○ぬれてゆかん見ん　乙女たちが赤裳の裾を引いて行く時濡らすであろう、その姿を見よう。

【所載】万葉集・一二七八（旧一二七四）住吉　出見浜　柴莫刈曽尼　未通女等　赤裳下　閏将往見　スミノエノ　イデミノハマノ　シバナカリソネ　ヲトメラガ　アカモノスソノ　ヌレテユカムミム　すみのえの　いでみのはまの　しばなかりそね　をとめらが　あかものすその　ぬれてゆかむみむ／夫木抄・一一七三五／人麿集Ⅲ・七六四／和歌初学抄・一九八

〔以上五首担当　平野〕

本云
嘉禄三年三月廿日借請民部卿
御本以所々本書写了。能々校
合了。本々僻事於当書定事
也。仍不能正直。撰者或説六条宮
又貫之女子等云々。
前和歌所開闔源朝臣在判

五百五十首

【異同】本云―ナシ（大）　書写了―書写畢（大）　校合了―校合畢（大）　本々―本之（大）　五百五十首―ナシ（大）　御所本・桂宮本ハ末尾ニ「一校了」ト記ス。